日本語定義集

青空学園

二〇一六年一二月五日

目次

序論 5
意味を掴む 5
構造の言葉 7
定義の方法 9
あ行 12
あいだ 12
あう 12
あき（秋） 13
あく 14
あそぶ 15
あめ 16
あや 17
あやしい 17
あらた 18
あらたまる 18
ある 19
あわれ 20
いう 21
いき 22
いきおい 23
いく・ゆく 23
いず（出ず） 24
いつ 25
いのち 25
いま 26
いる（居る） 26
いる（入る） 27
うち 28
うつ（全） 29
うつ（打つ） 30
うつる 32
うつつ 32
うむ 33
うら 33
おしえる 34
おしい 34
おどろく 35
おもう 36
おもかげ 37
おもて 38
か行 38
が［辞］ 38
かお 39
かがやく 40

かく（掛く）……40
かく（掻く）……45
かく（欠く）……46
かげ……47
かしこい……49
かしら……50
かぞえる……50
かた（型）……52
かた（方）……53
かた（片）……54
かたい……54
かたる……55
かなし……56
かみ……57
から……58
から［辞］……60
から（殻）……61
かわ（川）……62
かんがえ……62
きく……63
くに……64
け……65
こころ……66
こと……67
ことば……70
ことわり……71
こもる……73
さ行……74
さいわい……74
さき……74
さく……75
さす……76
さと……76
しま……77
しめす……78
しる……78
しるす……79
すむ……79
する……79
さち……81
た行……81
た……81
たがやす……82
たから……82
たくみ……83
たつ（立つ）……83
たつ（断つ）……85
たね……85
たま……86
つき……86

つげる……87
つくる……87
つち……88
て……88
と〔辞〕……90
とき……91
ところ……92
とし……94
とる……94
な行……95
なる……95
に〔辞〕……96
ね……97
の〔辞〕……97
の（野）……98
のぶ……98
のり……99
は行……100
は〔辞〕……100
はかる……100
はじめる……102
はたけ……103
はたらく……103
はつ……103
はなす……104
はらう……104
はる（晴る）……105
はる（墾る）……106
はる（春）……106
はる（張る）……107
はるか……108
ひ（日）……109
ひ（霊）……109
ひ（火）……109
ひと……110
ひらく……111
ふゆ（冬）……112
ふる（振）……112
ほ（穂）……113
ほど……114
ま行……115
ま（真）……115
ま（間）……115
まこと……116
まつる……117
まなぶ……117
み（身）……118
み（実）……118
みる……119
むすぶ……120

むら 121
も〔辞〕 121
もうす 122
もと 123
もとめる 124
もの 124
や行 126
やま 126
よ 127
よむ 128
より〔辞〕 129
ら行 130
る〔辞〕 130
わ行 130
わける 130
わざ 132
わる 133
を〔辞〕 135
参考文献 **136**

序論

05.03.07 1.0 版／05.03.17 1.2 版／07.01.08 1.3 版／
09.12.22～ 第 2 版／
11.12.07～ 第 3 版／12.08.08～ 第 3.2 版／16.05.08～ 第 3.3 版

意味を掴む

考える力の衰退

私はながく高校生に数学を教えてきた。そして「わかって、にっこり」が授業の原点であると生徒たちから教えられた。人は「ああ、そうか」とわかればにっこりし、その人自身が変わる。そこに喜びがある。この経験を得る場こそ授業の場である。

教育とは、その子のうちにある力を引き出し、人そのものを育てることである。一人一人の人間を開花させる。そうして現れた人間のさまざまな力は，けっして個人の私有物ではない。どんな力も、多くの人々に囲まれ育まれてはじめて開花する。育まれた自らの力は、育ててくれたこの世間に返さなければならない。こうして人を育て，人に支えられる世でなければならない。

この立場で高校生に接し痛感するのは、言葉の力の衰えである。言葉とは、存在を分節してつかむことであり、同時に、考えることそのものであり、それをまとめ、話し書いてゆくことである。この力がおしなべて弱い。何度も何度もこの事実に出会ってきた。

考える力の衰退という現実に出会うことで、自分自身が高校時代、現代日本語への違和感を強くもってきたことに改めて気づいた。その頃読んだ哲学の本の中に「思考する」という言葉が何度も出てきた。しかし高校生の自分には「思考する」とはどのように頭を働かせることなのか分からなかった。「思う」は分かる。「考える」も分かる。だが「思考する」は分からなかった。高校生の私は「思う」と「考える」は別の言葉だと考えていた。

私のことをほんとうに思っているの。
そうだよ。
なら、もっとしっかり考えてよ。

この対話は、思うことがただちに考えることではないことと、本当に思うのなら考えるはずだ、ということを意味している。別の言葉だからこそ、この使い分けができる。

ところが近代日本語は、これをそのまま繋いで「思考する」という言葉を作った。これは英語の「think」等の翻訳に用いるための漢字造語であって、それまで用いてきた日本語に根ざした言葉ではない。

かつてドイツに留学した日本の哲学徒の部屋の掃除に来たメードが、窓をあけるときに「aufheben」と言った。「aufheben」はヘーゲル哲学の基礎概念で「止揚する」と訳している。それで「ドイツではメードまでこんな哲学語を使うのか」と感心したという話がある。しかしこれは逆で「aufheben」は誰もが使う日常語なのだ。それを抽象して基幹の言葉に育てたのがヘーゲルなのだ。

ドイツに学ぶのなら、何よりこのような日常語と哲学語の関係をこそ学ぶべきであった。だが、近代日本は、西洋の知の肝心なところは学ばず、結果のみを漢字語を作って移入した。ここに近代日本語の基本問題がある。

このような近代日本語のあり方にこそ、高校生の考える力が弱い根源がある。ここを何とかしていかなければ、高校生の言葉の力が衰える一方である。それどころか、日本語の世界は次の時代には人間の言葉としての役割を果たせないのではないか。このこ

とに思い至った。

ならばこの問題をほりさげて考えねばならない。これは言葉の専門家や教育にかかわるものだけの問題ではない。言葉の意味を自覚して問い、そして言葉をいつくしむことが、一人一人の日常の営みとして根づかなければならない。そういう文化でなければならない。そうなら、言葉の素人が言葉に向きあうことには意味がある。これが私が言葉にかかわる根拠であった。

人間と言葉

人間は音節のある言葉をもつ。そして言葉によって協働して命をつなぐ生命である。人をして人としている言葉、それをその人の「固有の言葉」と言おう。ここで言う「言葉」は、「日本語」というように全体を示すときも、個々のいわゆる単語や文などを示すときもある。あえて同じ「言葉」という言葉で表す。それは、言葉の立ち現れる場を大切にし、現れるものを言葉と表すからである。

ではこの日本語を、もういちど人間の言葉として甦らせるための基礎作業は何か。

第一は、基本的な言葉の再定義である。これを経なければ立ちかえるべき根拠から考えることができなくなってゆくからである。言葉は、言葉の構造を支える根のある言葉から、必要な言葉を定義してゆかなければならない。しかし近代日本語はそのようにはなされなかった。その結果、いわゆることわりの言葉が高校生にとって内からの言葉となりがたく、納得した論証を構築することができない。

第二は、一万五千年以上前にさかのぼる縄文文明、三千年前にはじまる弥生文明、その混成語として形成されてきた日本語は、言葉としての構造と、その構造によって支えられるものの見方考え方をもっている。再定義を通してそれを自覚的に取り出してゆく。

時代は近代日本語の見直しを求めている

日本語をもういちど定義し、大転換の時代をに日本語とその言葉で生きる人々が甦る。それが、近代の果てにおいて、いま歴史が求めることである。とりわけ次の二つの事実がそれを鮮明にしている。

第一は、二〇一一年三月の東京電力福島原子力発電所核惨事である。これは近代日本の結末として起こった惨事であり、今後ますます惨事であることが明確となることであった。この核惨事は、日本語のことわりと断絶した近代漢字造語に支えられた日本国の官僚制を中心とする無責任体制が生みだしたものであった。これをのりこえるためには、近代日本語をこの核惨事という経験を通して再点検し再構成することが不可欠だからである。

第二に、同じ二〇一一年十月『古典基礎語辞典』が発刊された。編集者の故大野晋先生は、弥生時代の日本語は、タミル語が縄文時代の言葉と出会って形成されたものであることを明らかにされた。日本語と日本列島弧や琉球列島弧の文明が、いかに深くタミル語とそれとともにもたらされた水田耕作稲作技術に依拠しているかという事実は、歴史的真理である。『古典基礎語辞典』がこの東電核惨事の後に世に出たことは、偶然とはいえ、そこに大きな歴史的必然性を見出すことが出来る。

以上である。かくして、東電核惨事にいたる近代の経験を、『古典基礎語辞典』に照らしあわせ、それによって日本語を再定義することが課題となった。　言葉を定義するというのは、人生の経験として学んだ言葉の意味や意義を、辞書を通して古人の用法と

照らしあわせたうえで、もういちど自分の言葉で書き直すことである。これを、言葉を拓き耕すことと言おう。一つ一つの言葉を味わい、相互にその意味を書き定めてゆく。そして、どんなことも、みずから納得できるまでその根拠を問う。これが、言葉を拓き耕す営みである。

構造の言葉

日本語の構造を定める言葉

まず「構造」の意味を定めなければならない。

「構」とは「かまえ」であり、「造」とは「つくり」である。すなわち、そのものの現れかた（型）と、そのもののつくられかた（方）である。いずれの「かた」も「こと」であり、「もの」の二つの側面としての「こと」が、構造の意味である。

日本語の構造というとき、まず日本語としてとらえた言葉の全体がある。そして言葉の構造とは、その言葉のかまえとつくりとして、考えられる。

日本語は「てにをは」に集約されるいわゆる「辞」と、ものに対応してそれを分節する言葉としての「詞」からできている。「辞」は文の構造を定める言葉であり、「詞」はそれぞれ意味をもち、「辞」と合わせて文の意味を定める。「辞」も「詞」も「ことば」と訓じる。日本語の構造は「辞」と「詞」によって定まる。

それは、世界をどのような枠組みでとらえるかに関する言葉であり、同時に、その言葉の構造を規定する言葉である。それらの言葉を構造の言葉という。構造の言葉が世界をどのような仕組みのものとしてつかむのかを定め、世界を分節して切り取るうえで基本となる言葉である。

ひとつひとつの言葉や言いまわしは、言葉の構造のなかに位置をもつ。言葉の構造は切り取られた世界の構造であり、それが言葉の構造でもある。その位置と人間の経験が意味を規定する。それによって意味が形成される。

構造の言葉が言葉の土台である。この土台に長い歴史のなかで積みあげられてきた人間の智慧が蓄えられている。人間は、日常の言葉を抽象し洗練し結晶させて新たな言葉を生み出し思想を組み立てる。そうでなければ、つまり構造語からくみ上げられた思想でなければ、言葉の力はない。

構造と無縁に翻訳のためにつくられたり、外国語をそのまま音で写した単語や言い回しはその位置を構造の中にもつことはできない。つまりはその意味を定めることができない。すべての新たな単語や言い回しは、構造によって規定されている基本的な言葉から定義され、新たな位置を持ち意味が定められなければ、明確な言葉とはなりえない。

近代日本語は言葉を内部から定めなかった。翻訳のために漢字語を作り出し、最終的な意味の定義は外国語に求めて終わりにし、それも面倒になればカタカナや横文字を中にはめ込んで済ますことで、固有の言葉を育てなかった。

漢字には、長い漢字文明の歴史がある。日本語は、縄文の時代も弥生の時代も、ながく文字をもたず、漢字文明とは離れて熟成してきた。だからまた、日本語にとっては音読みした漢字語もまた内在のものではない。そのままでは異物である。

同じ異物なら音訳の洋語のほうが簡明だし見栄えがする、それが今の流れである。学術から思想、政治、そして日常の言葉まで、この風潮が一般的になっている。

やまとことば

日本語の「構造の言葉」はいわゆる「やまとことば」と重なる部分がある。「やまとことば」と言われる言葉を含む。ではなぜ「やまとことば」と言わないのか。理由は二つある。

第一、「やまとことば」という言葉には、「日本の古来の言葉」「本来の日本語」という考え方がある。しかしそのような言葉の存在は仮説でしかない。「本来の日本語」があるわけではない。現在の日本語総体のなかでの相互関係においてより基本的かどうかということのみがある。「やまとことば」という考え方からは自由に、世界の構造を切りとる言葉であり、日本語の構造を定める言葉という意味で「構造日本語」という考え方をする。従来やまとことばとしてとらえられてきた語群を含む基本語を、構造日本語としてとらえ直し再定義する。

第二、構造日本語は生きたものである。日本語を固有の言葉とするものが現代日本語と向きあい吟味し日本語のなかでの構造的な位置づけを確定していくことによって、その言葉は新たに構造日本語に加わる。「やまとことば」は固定されている。経験によって言葉を再定義し、骨格となる言葉を広げ深めていく。そのような運動過程によって変化していく基本語、これが構造日本語である。

定義は言葉のいのち

日本語の構造を定め、また構造から定義される基本語、つまり構造語について、構造から定義されるそのことを、基本語相互の関係としてつかみなおす。それを言葉の内在的定義という。

言葉の意味を「本来の日本語」とかあるいは「農業協同体の言葉」とか現代日本語の外に帰結させない。外在的説明は必要に応じて述べるが、定義を文明論に置き換えることはできない。語源もまた本質的ではない。また、縄文語やあるいはタミル語に由来するかどうかも本質的ではない。それらはあくまで再定義の営みにおける参考資料である。この資料は重視するが、本質ではない。

言葉は生きている。言葉の意味を深く構造から再定義してゆくこと自体が言葉のはたらきである。構造語の定義は現在の日本語に対してなされる。現在の日本語をその構造と意味において問うことによって構造と意味を吟味し再定義する。固有の言葉によって固有の言葉を対象化してゆく営みそのものである。

世界は固有の文化がともに輝く深い普遍の場をめざす。その場こそ文明の新しい段階である。西洋に端を発する近代文明は自らを乗り越え、新しい世界文明にならなければならない。多極化を経て、そのうえで極を超えて、新しい人類的な場としての文明に至らざるを得ない。

この一大転換期、これが現代である。しかしこの転換は言うは易く為すは難いことこのうえなく、すべては未だ可能性に過ぎない。にもかかわらずこの転換は必然である。固有の言葉の再訓はこの転換の時代に不可欠である。

日本語の来歴

これを考える前提として、そもそもこの日本語はどのような歴史の言葉なのか。ここでそれを再確認したい。

一万五千年前にはじまる縄文時代は、モンゴロイド系を基礎に各地に三内丸山遺跡のように文明が成立していた。そして、黒曜石の分布に見られるように交易もまた盛んであり、東アジアの大陸沿岸沿いに、遠くインド大陸におよんでいた。

紀元前一千年頃のアーリア人のインド大陸進出によってドラビダ人が拡散し日本列島にも至った。水田耕作と鉄器がタミル人によってもたらされた。多くの今に連なる言葉もまたもたらされた。

こうして弥生の文明が始まった。

この言葉が縄文語と混成する。その過程のなかに、秦・漢によって中国にといつ国家の生まれる前、紀元前の数百年にわたる春秋戦国の動乱期に、揚子江沿岸部の呉や越から、日本列島へ幾重にも海の民の移住がおこなわれ、小国家を形成した。そして、秦・漢の時代に列島弧では混成語としての日本語が熟成した。

このうえにさらに一～六世紀にかけて、漢の後の中国大陸の動乱にあわせて遼東半島や朝鮮半島から新たな支配者、天皇家の祖先に連なる人々、あるいは邪馬台国のようにまた別の系統の人々が移住した。彼らは黄河文明とのつながりをもつ大陸文明の人であった。彼らによって漢字文字がもたらされる。そしてそれをもとに日本語の記述のためにいわゆるカナが生みだされた。

縄文の言葉と弥生の言葉が出会い熟成して一つの混成語を生みだすのに千年以上のときが必要だった。平安の時代から再び千年の時をへて江戸末から明治期の西洋との出会いである。そこで近代日本語の試行錯誤と苦しみがはじまる。近代日本語の前提として、このような混成と熟成のときがあったことをおさえておかねばならない。

近代の漢字造語によって、このような歴史ある言葉の生きた力が覆い隠されてしまった。その果てに東大話法といわれる官僚言葉がある。そしてついに東電核惨事に至った。であるから、ここからの活路を求めるものは、塗り込められ封じ込められた日本語のいのちを解きはなち，現代に甦らせることを基礎にしなければならない。この観点から、いくつかの言葉を吟味したい。

日本列島や琉球列島の歴史を踏まえ、今日ここに住むものの生き方を考えてゆくためには、ながくこの列島弧に住み、その風土とともに育んできたものの見方、考え方を、もういちど取り出し、時代に応じてそれを深めなければならない。そのようなわれわれの人生観やものの見方、考え方を「里のことわり」と言おう。その骨格をなす言葉を，ここで取りあげよう。

定義の方法

一、見出し語

定義集で定義するのは、現代日本語である。とりわけ、現代日本語における構造語である。ただし、重要な言葉については、古典日本語もとりあげる。

見出し語はかなで表す。同音別語は区別のために（　）内に漢字を一つつける。また「辞」である言葉は〔辞〕を見出し語につける。ついていない言葉は「詞」である。

二、定義の構成

はじめに、あらためてかな表記を掲げる。意味が分岐し、今日では漢字を書き分けているときは、その漢字表記を列記する。そのうえで、後に述べる［座標軸］を、ローマ字で表す。

○において、構造語による内的定義ができる場合、これをおこなう。

他の基本的な詞と辞によってその詞を定義する。ことば相互の関係を明らかにし、それらの言葉によってその言葉を明確に位置づける。辞は、○において、その言葉のはたらきを、他の基本的な詞と辞によって定義する。

日本語はいわゆる母音の転換で意味を発展させる。そこで必要に応じてローマ字表記も併せ、構造語の相互連関を述べる。

構造語をこえて意味を補足するときはそれを◇内に述べる。◇内のことは◆でくりかえされることもある。

※は補注を意味する。

他の詞との違いなどの考察。注意、備考、等の補注。またタミル語に由来をもつ言葉はそれを明記する。必要なところに随時置く。

現在のタミル語は独自の文字をもつ。それは紀元4～5世紀に北インドで用いられたブラーフミー文字をその源とする。したがって、タミル語が日本列島に至った紀元前十世紀には文字はなかった。古代タミル語はローマ字にアクセント類を付加した方法で表記されることもある。本定義集では、タミル語起源を明示するときにそのローマ字表記を＜＞内に記すが、それはアクセント類、その他の記号を除いたものとする。したがって正確にタミル語を表すものではない。

上代特殊仮名遣いの母音の甲類と乙類の問題について。次の点を踏まえる。

古代において別の語であるとされていたことを確認する。同時に、後にこの区別がなくなったということは、一定の関連を古代においても認めていたことを意味する。よって、関連する別語、意味を区別しようとしてなされた使い分けであるとし、使い分けの意味を考える。

◆において根幹的な定義をおこなう。

必要ならば近代語も用いて、意味の定義に向かう。言葉を定義する根拠は人間の経験である。近代語を含めた言葉で構造語を定義しようとすることは逆に近代造語もまた再定義することになる。ここにおいては、日本語世界の経験が根拠となる。それを述べる。

構造語においては、構造語の諸関係を明示することが、定義のはじまりである。そのうえで、定義する人の経験をもとに、根幹的な意味を定義する。この両面からの定義が、土台である。そしてこれは、つねに更新され展開され深められる。

言葉は定義を求める。定義は新たな世の経験を踏まえて更新される。定義と更新の永続運動、それが定義集である。

三、意味の分化と用例

▲で、自動詞、他動詞などの区分を示す。

▼で、以上の定義を踏まえて、分化した言葉の意味を述べる。

他の言葉との違いもここで述べる。▽はさらに分化した諸々の意味である。

◇は用例である。古典からの用例、現代日本語の用例。

―【】は派生語である。

四、［五十音図の座標軸］について

ことばには必要に応じてローマ字による表記をつける。ローマ字表記の意味を定めておく。

用いるのはいわゆる五十音図である。五十音図とは何か。五十音図は二つの座標軸をもっている。「あいうえお」の段と、「あかさたな…」の行である。日本語は、二つの座標軸でかな文字が決まる構造をもっている。それはそのようにとらえられた音の構造でもある。平安時代にこの事実が発見された。五十音図の発見には悉曇学が寄与した。発見された音の組織は日本語固有のものであった。語を分析するのに五十音図の座標を活用する。

それぞれの段と行を指示する記号として、アルファベットを借用する。a行のみは、段を指示する座標軸であるとともに、それ自身文字であるという二重の性格を持っている。a行は正しくは「ゼロ行」なのであるが、慣用にしたがって「a行」とする。われわれの立場は、西洋語の音素による日本語の解析ではない。あくまで座標の記号として用いる。

	a段	i段	u段	e段	o段
a行	あ	い	う	え	お
k行	か	き	く	け	こ
s行	さ	し	す	せ	そ
t行	た	ち	つ	て	と
n行	な	に	ぬ	ね	の
h行	は	ひ	ふ	へ	ほ
m行	ま	み	む	め	も
y行	や		ゆ		よ
r行	ら	り	る	れ	ろ
w行	わ	ゐ		ゑ	を

これが基本である。たとえば「ち」音はt行i段にあり、座標は（t，i）である。座標表示を簡略して［ti］と書く。ただし、a行のみはゼロ行であったので、行表示はない。例えば「い」の座標は（，i）であり、簡略した表示は［i］とする。［ ］はそれが座標の指示であることを意味する。かな文字言葉はいくつかの座標で指示されたかなの連続である。

このように現在の日本語における座標を基本とする。そのうえで古代日本語が現在より多くの音をもっており、当時別の座標として認識されていた場合には、必要なときにそれを区別する。たとえば「はる（晴る）」は現代日本語では［haru］であるが、古代には［faru］であった。

ここで重要なことは、この簡略表示はあくまで日本語の構造から定まる座標表示であって外から持ち込まれた音素の分析ではない、ということである。そもそもわれわれは、音素、つまりこれ以上分解できない音の単位が、どの言葉にも適用できるような普遍的なものとして存在するかどうか問わない。

次に、副次的な音図がある。これは、濁音と拗音の系列である。これらは、「どんどん進む」や「にゃんにゃんと鳴く」のような擬声語および擬態語で古くから発達してきた。それが漢字の音読みに生かされ今日に至っている。

濁音：

	a段	i段	u段	e段	o段
g行	が	ぎ	ぐ	げ	ご
z行	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
d行	だ	ぢ		で	ど
b行	ば	び	ぶ	べ	ぼ
p行	ぱ	ぴ	ぷ	ぺ	ぽ

拗音：

もともと拗音とは中世悉曇学の用語で、カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワなどの音のことをいった。現代日本語では、ア・ヤ・ワ行以外の各行清濁音のすべてにあって、行座標が指示する音と段座標が指示する音の間にa行の［i］とy段が挟まれたうえで詰めて［i］を落として発音されると考えられているヤ行拗音と、k行とg行でw段が挟まれると考えられているワ行拗音がある。

母音「あ」にはさらに「や」と「わ」があるとすることで、拗音を別扱いしないこともできるが、それは今後の研究課題とする。

「きゃ」は［ka］に［iy］が挟まり詰められたもので座標は（ky，a）である。これは［kya］のように指示する。ア・ヤ・ワ行以外の各行をx行とすれば、ヤ行に対応して「xya」、「xyu」、「xyo」のすべてがある。

昔はたとえばf行が区別されていた。今日はh行にまとまっているが、例えば「端」は［fa］であった。今日では「言う」は［iu］であるが、かつては［ifu］であった。また「神」も「上」もいまは［kami］であるが、万葉集の時代には二つの［i］は区別されて

いた。これは万葉仮名の研究から明らかになったが、このように語源を考えるときには、かつてあった段や行を掘り起こさなければならない。これを明示するときは、↑で示す。

あ行

あいだ

あいだ（間）[aida] ↑ [afida]

○二つのものが「あう（合う）[afi]」ことでできる場、所（だ）[ta] は場、所を表す）。二つのものにはさまれた状態で存在する場。

※「あう（合う）[afi]」は「あう」[afu]、「合い間」、「あい対する」などの「あい」と同じ。タミル語の＜ opp-u ＞（【合う】参照）に、[ta] がついた。

◆対になった二つのものにはさまれた何もない場所、これが「あいだ（間）」である。時間にも用いる。時間では何らかの動作が途絶え次の動作が起こるまでの時間。ここからさらに一定の限りのある時間や期間をいうようになった。

※「ま（間）」は一対になった同質のものとものの「隔たり」そのものを意味する。したがって同じものが動いてできる始めと終わりの場を「ま」という。これ対して「あいだ（間）」はその二つのものが同質であるかどうかは問わない。連続せず途絶えることが「あいだ」である。

「ま（間）」が短い時間、「あいだ（間）」が長い時間を表すことになる場合が多いが、時間の長短を問えば、結果としてそのようになるということであって、長短がこの二語の違いの本質ではない。

◇話のま（間）が空く。一連の話すという行為が中断すること。◇朝起きて夜寝るまでの間（間）。「起きる」と「寝る」のように別の行為が行われるまでの時間。◇蝉は夏のあいだ（間）鳴き続ける。春と秋の間の夏という期間。◇夏のま（間）だけの蝉の命。夏にはじまり夏に終わるという意味。

▼二つの「もの」にはさまれて、何もない部分。空間のへだたり。◇『万葉集』二四四八「白玉の間（あひだ）開（あ）けつつ貫（ぬ）ける緒も」◇『万葉集』三五七一「己妻（おのづま）をひとの里に置きおほほしく見つつそ来ぬる此の道の安比太（アヒダ）」◇「本州と北海道の間が津軽海峡だ」

▽「こと」にも用いる。ことがとだえる時。とだえるに重点のあるときも、時に重点のあるときもある。◇『万葉集』三七八五「ほととぎすあひだしまし置け」◇『万葉集』七九四「心ゆも思はぬ阿比往（アヒダ）にうち靡き」

▽（平安時代以降）こととことの関係。人と人の関係。間柄。仲。◇『源氏物語』賢木「宮のあひだの事、おぼつかなくなり侍りにければ」◇「二人のあいだ」「夫婦のあいだ」◇「人々の間ではやっている」◇「都市と農村のあいだにはまだ大きな経済的格差がある」◇「大学生のあいだ経済的援助を受けた」

あう

あう（合う・会う・逢う・遭う）[au] ↑ [afu]

○外の世界からきた（端 [fa] からもたらす [fu]）ものとものが互いにひかれ一つのことになる。

※タミル語＜ opp-u ＞（o〜a、pp〜f 対応）。タミル語の原義は、動詞が「同意する」「応じる」。名詞が「適合するもの」「類似」「調

和」など。音の対応で［af-u］となり、それが熟成する中で、［a-fu］の意味に深まった。

◆異なるものが一つのことになる。

▼ものとの、人と人があうこと。物と物とが一つに重なる。また、物と物とがつり合うこと。

◇『古事記』下・歌謡「吾が愛（は）し妻にい及（し）き阿波（アハ）むかも」◇『万葉集』三三〇三「うらぶれて夫（つま）は会（あひき）と」◇『万葉集』三四八二「からころも裾のうち交（か）へ安波（アハ）ねども異（け）しき心をあが思わなくに」◇『源氏物語』若菜「この夢あふまで又人にまねぶなとの給ひて◇『枕草子』一四二「声あはせて舞ふほどもいとをかしきに、水の流るる音、笛の声などあひたるは」◇『蜻蛉日記』上「よる、目もあわぬままに、なげきあかしつつ」

▽男女が関係を結ぶ。結婚する。◇『竹取物語』「此世の人は男は女にあふ事をす。女は男にあふ事をす」▽相手に立ち向かう。戦い争う。◇『平家物語』四「鬼にも神にもあはうどいふ一人当千のつはもの也」

▼ことがあうこと。状態や程度が互いによくつり合う。◇『万葉集』三六七五「沖つ波高く立つ日に安敝（アヘ）りきと都の人は聞きてけむかも」◇『土左日記』「人のほどにあはねば、とがむるなり」◇『蜻蛉日記』上「こがれたる朽葉にあひたる心ちもいとおかしうおぼゆ」◇『今昔物語』二九・一九「会ふ敵无き者にてぞ有ける」◇『枕草子』一〇六「すこし春あるここちこそすれとあるは、げにけふのけしきにいとようあひたるも」◇『徒然草』一七五「かくからき目にあひたらん人」

▼補助動詞として用い、二つ以上のものが同じ動作をすることを表わす。◇「うわさしあう」「奪いあう」「愛しあう」「語りあう」◇『万葉集』四一〇六「紐の緒のいつがり安比（アヒ）てにほ鳥のふたりならびゐ」◇『徒然草』一一五「心行くばかりつらぬきあひて、共に死ににけり」

あき（秋）

あき（秋）［aki］

○［aki］の［a］は「あ（吾・我）」であり主体を表し、［k］は「く［ku］う（食う）」行為を表す。したがって［ak］は人が食うことに関するさまざまの言葉の根幹をなす。［i］は「いる」、あるいはその状態になることを意味する。

※［ak］は、赤、明け、空き、商い、などに共通する。赤は何より秋の色であり、長い耕作の時期が「あける」時としての秋であり、収穫物のやりとりとしての「商い」なのである。

◆人が食うとき、糧を収穫するとき。人に食うことをもたらすとき、つまり収穫の秋である。したがってまた、「秋」と書いて、「ふさわしい時期。時宜。ちょうどその時。また、そうしなくてはならない時期、時間」を表す。

▼四季の一つ。旧暦ではほぼ七月から九月、今日ではほぼ九月から一一月まで、天文学的には秋分から冬至まで、二四節気では立秋から立冬までをいう。太陽が次第に南下するため、昼は短く、夜は長くなる。

五穀がみのり、大気が澄む季節。草木の紅葉、落葉などで、物の哀れの身にしむ季節と感じるのは、貴族の感傷が定着した。万葉集には秋を悲しい季節と歌う歌はない。古今集以降の宮廷和歌からである。◇『万葉集』一九七二「野辺みれば撫子の花咲きにけりわが待つ秋は近づくらしも」◇『万葉集』三六一九「またもあひ見む秋加多麻気弖（カタマケテ）」「秋かたまけて」は「秋が

近づいて。また、秋になるのを待ち受けて」の意。◇『古今集』二一五「鳴く鹿の声聞くときぞ秋はかなしき」」

▽収穫、みのり◇浄瑠璃『烏帽子折』道行「諸国のあきをつみのせて」

-【秋津島】（古くは「あきづしま」）

■［akitu］は［aki］つまり収穫を［tu］つまり作る島。島は一定のかぎられたところ。海でかぎられたところ。

◆実り豊かな所。

※「あきづ」は古くは大和国葛上郡室村（奈良県御所市室）あたりの地名で、それが次第に広い地域を示すようになり、やがて日本全体をさすようになったともいわれる。「あきづ」という地名は奈良県吉野郡吉野町宮滝付近一帯の上代、吉野離宮のあった所にもあり、「実り豊かなところ」という普通名詞がもとである。

▼大和の国、また、広く日本の国の古称。あきつしまね。あきつくに。やしま。「日本書紀」に神武天皇が国見のとき「蜻蛉のとなめせるがごと」といったことに由来するといわれている。しかし、「蜻蛉（あきつ）」つまりトンボの古称自体が「秋の虫」からきているので日本書紀の地名説話は「あきづ」を説明することにはならない。

あく

あく（明く・開く・空く）［aku］

○ふさいでいたものがはなれ、うちがそとに繋がる。

※「あか（赤、明）［aka］」と同語源。［ak］が不変部分。［ak］は、赤、明け、空き、商い、などに共通する。耕すときを経て物が成り，こうして食べ物が手に入り（［ak-eru］）、仕事が「あける」こと。

※タミル語＜akal＞に起源。

◆閉じられた状態にあるものが、明るみに出ること。またそのものを明るみに出すこと。人が携わらねばならないあることが終わり，その仕事から放たれること。また，次の新しい状態になること。

▲あく（自動詞）

▼ときがあける。一定の状態の時が終わる。▽夜が終わって朝になる。明るくなる。◇『日本書紀』―継体七年・歌謡「愛（は）しけくも、いまだ言わずて阿開（アけ）にけり和妹（わぎも）」

▽時が経過して、年月日や季節があらたになる。次の年になる。◇『宇津保物語』―俊蔭「あくる年の春より」

▽ある一定の期間が終わりになる。満期になる。◇忌（年季）があける。◇『蜻蛉物語』―中「ものいみも、けふぞあくらんと思ふ日なれば」

▼へだてや、おおいなどが除かれ、閉じていたものが開く。◇『竹取物語』「たてこめたるところの戸、すなはちただあきにあきぬ」▽そこを占めていたものがなくなり、間が広がったりして空間ができる。◇『更級日記』「穴のあきたる中より」▽官職、地位などに欠員ができる。◇『源氏物語』行幸「ないしのかみあかば、なにがしこそ望まんと思ふを」

▽ある一定の期間が終わりになる。◇『蜻蛉物語』中「ものいみも、けふぞあくらんと思ふ日なれば」

▽使わないでいる。仕事をしないでいられる時間ができる。◇「時間があく」◇「仕事があける」◇「手があいたら手伝うよ」◇「あいた道具をかたづける」

▲あける（他動詞）

▼ところをあける。ふさいでいるものをのぞく。

▽ふさいであるものをのぞく。閉じてあるものを開く。◇「門

（扉・窓・ふた）をあける」◇『竹取物語』「たてこめたるところの戸、すなはちただあきにあきぬ」

▽そこを占めているものを取り除く。中に入っているものや人を外に出す。◇『源氏物語』―蜻蛉「心なし、道あけ侍りなんよ」◇「鍋（皿・盃）をあける」◇「部屋をあける」◇「一日中家をあける」

▽使わない状態のままにする。◇「手をあけて待っている」◇「あいた道具をかたづける」◇「今日一日あけてある」

▽（入り口が開く意から）人が出入りできるようになる。多く、商店などが営業を始める、また、営業していることにいう。商売、芝居などを始める。◇店（小屋）をあける。

※新規に店舗を建て終わり、あるいは準備が整って、実際に営業し始めるのは「始める」である。「あける」はすでにある店が営業時間になって営業を始めることである。「ひらく」は店の建設から準備して営業を始めることである（現在は「はじめる」とほぼ同意）。◇このたび書店をはじめました。◇この書店は10時に開く。◇ここで新たに書店をひらこうと思う。

―【あき（明き、空き）[aki]】「あく[aku]」の名詞化

▼物がつまっていないで、空間のできているところ。すきま。空白。◇あきのない紙面。◇『菊池君』（石川啄木）「僕は実に大一郎君の死去が伯父の心（むね）にあけた其の欠陥（アキ）を満たすことができない」

▼（中に入っていたものがなくなることから）使っていないこと。また、そのもの。多く容器や家、部屋、席などにいう。「徳利（席）のあき」

▼使う予定のない時間。ひま。◇『坊っちゃん』（夏目漱石）「君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支へるからな」

あそぶ

あそぶ（遊ぶ）[asobu]←[asofu]←[asuafu]

○あ（吾[a]）が、日頃の生業から離れて、人の中で（[afu]）ともにする（[su]）。

◆日常の業から離れた場で、人が集いともに身心動かし、楽しむ。奏楽や歌舞などがよく行われるあそびである。

※タミル語＜atu＞由来。

▼興のおもむくままに行動して楽しむ。奏楽、歌舞、宴会、行楽、船遊びなど、多岐にわたる。子どもが遊戯する、おとなが運動、行楽、遊興などすることをいう。

▽神楽を行う。◇『神楽歌』一五「瑞垣の　神の御代より　篠の葉を　手（た）ぶさに取りて　遊びけらしも」

▽思うことをして心を慰める。詩歌、管弦、舞などを楽しむ。遊楽をする。◇『竹取物語』「この子いと大きくなりぬれば、名を…なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日うちあげあそぶ」

▽行楽、舟遊びなどをする。◇『万葉集』一八八〇「春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶこの日は忘らえめやも」◇『万葉集』三九九一「思ふどちかくし安蘇婆（アソバ）む」

▽狩猟をする。また、気楽に歩きまわって楽しむ。◇『徒然草』二一「山沢にあそびて」

▽（鳥獣、魚などが）楽しそうに動きまわる。◇『古事記』下・歌謡一〇八「潮瀬の　波折りを見れば　阿蘇毘（アソビ）来る鮪（しび）が鰭手（はたで）に　妻立てり見ゆ」

▽遊戯やゲームをして楽しむ。特に、子どもの動きについていう。「よく遊び、よく学べ」

▼仕事、勉強、働きなどをしていない状態にある。▽人が仕事をしないでいる。◇『狂言記』緡し縄「いや、あそんでさへをれ

ば、なをりまする」

▽金、道具、場所などが使われないでいる。◇「遊んでいる金（手）を使う」◇「機械が遊ぶ」

▽本来の仕事や義務から離れて、気を別のところに置く。◇「遊び心が大切だよ」

あめ

あめ（天）［ame］

○「あま［ama］」が「あめ」の古い形でその音韻交替形。［a］は「あ（吾・我）」であり、［ma］は「ま（間）」の基礎となる古い言葉である。「あ（吾・我）」と「ま（間）」をなすところ。

※タミル語＜amar＞、サンスクリット語＜amara＞に起源。サンスクリット語からタミル語に入ったと考えられ、「不死の人」「天国の人」が原義。この語が入ったときすでにあった「あ」「ま」でこれを受けとめ熟成したと考えられる。

◆「あ（吾・我）」との間にあり、「あ（吾・我）」の根拠となる場、これが「天」でる。人間の住む世界の上にある神の世界のこと。「そら（空）」が何もないことを意味するのに対している。この意味で「あめ（あま）」の対語は「くに」である。「あめ（あま）」が「空」の意味を強めるにつれ、「つち（地）」の対語と考えられるようになる。人間界を中にして、その上にある神の世界を「あま」といい、その反対の方向にある死後の世界を「ねのかたすくに（根の方すクニ）、根のクニ」という。

あめ（天）には水が満ちており、そこから降るものが「あめ（雨）」であり、その雨をたたえたところが「あま（海）」と考えられていた。

▼人間の住む世界の上にある神の世界。◇『古事記』上・歌謡「阿米（アメ）なるやおとたなばたのうながせるたまのみすまる」

―【あまつ（天つ）】〔連語〕（「つ」は、「の」の意の連体助詞）「天つ」は「天の」より古い。名辞にかかる。

◇天つ風、天つ雁、天つ国、天つ罪、天つ祝詞◇『伊勢風土記逸文（釈日本紀所載）』「天津の方に国有り」◇『日本書紀』神代下（水戸本訓）「吾は則ち天津神籬（ひもろき）及び天津盤境（あまツイハサカ）を起し樹てて」。「天つ盤境（いわさか・いわくら）」は天つ神がいる神聖な場所。また、天つ神を祭る岩石の壇。

◇天つ神（かみ）［＝御神（みかみ）］。高天原の神。また、高天原に属する神。およびその子孫、つまり、三、四世紀に日本列島を支配したものとその権力を分けあいまた受け継いだもの。それに対して「国つ神」はそれ以前からの土着勢力であり、新しい支配者に従属したものをいう。

◇『万葉集』二四〇「ひさかたの天ゆく月を網に刺しわが大王はきぬがさにせり（柿本人麻呂）」

▼地上に対する「空」としての「天」。◇『古事記』歌謡「雲雀はあめにかける」

―【あまの（天の）】〔連語〕「天つ」より新しい語。平安時代以降に記紀を訓じるときに使われることが多い。したがって「あめの」とよむ場合もある。

【天の下】

▽原義は、天に対する地の国、つまり地上世界全体を意味する。◇『万葉集』三九二三「天の下すでにおほひて降る雪の」

▽漢語「天下」「国家」の訳語に転用された。◇『源氏物語』玉鬘「天の下を御心にかけ給へる大臣」

あや

あや（文・紋・綾・絢）[aya]

◆縦糸、横糸の折り筋の変化によって、斜めに線の模様を織りだした絹の布地。また、一般にものの面に現われたさまざまな筋や線のつくる形や模様。さらにまたものの固い筋目をも意味し、何かのことの筋目も意味する。『名義抄』には「理　あや」とある。

▼縦糸に横糸を斜めにかけて模様を織りだした絹の布地。◇『万葉集』一八〇七「錦綾の　中につつめる　斎児も　妹に如かめや」◇『蜻蛉日記』下「匂ふばかりの桜襲の綾、文はこぼれぬばかりして」

▼ものの面に現れた形や模様。◇『後撰集』二「水の面にあや吹き乱る春風や池の氷をけふはとくらむ」◇『土左日記』「さざれ波よするあやをば」

▼物事の筋目。条理。理由。◇『平中物語』二七「などて寝られざらむ。もし、あややある」

▽美しい色どりや文章、言葉のいいまわし。◇「ことばのあや」◇『十善法語』五「あやあることば、正しからぬことばを綺語と名づく」

▽音楽のふしまわし。◇『俳諧・鷹筑波』二「声のあやあくめもなひぞねり雲雀」

▽木や草のかたい筋。葉脈や木目。◇『妙法蓮華経玄賛平安中期点』六「薪を折るに、其の木の理（アヤ）に随ふときには」

あやしい

あやしい（怪しい）[ayasii] ← [ayasi]

○「誤る」「過ち」の [aya] と同根。[aya] はなぜそうなるのかわからないこと。そのようなことに直面したとき、そのことを「あやしい」と言う。

◆古くは人知のおよばないことに対して、素直に感嘆する気持ちで霊妙や神秘の意味で用いられた。それを解明したいという感情も含んでいた。そこからさらに、ことわりを逸脱しているという否定の感情をも意味する。さらに中古以降は，理解しがたいと見下す感情も表すようになる。

※タミル語＜ayy-am＞由来。疑い、不確実、あやふや、懐疑。

▼何かわからないが、神秘的で心ひかれる。▽人の知恵ではかれないような不思議さである。神秘的、霊妙である◇『万葉集』四〇〇三「（立山は）巌の神さび　たまきわる　幾代経にけむ　立ちて居て　見れども安夜之（アヤシ）」◇『古今集』仮名序「又山の辺の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり」

▼いぶかしい。▽正体のはっきりしないことに対して持つ奇異な感情。物の正体、物事の真相、原因、理由などがわからなくていぶかしい。◇「あやしい飛行物体」◇『万葉集』一七四〇「墨吉に　還り来りて　家見れど　あやしと　そこに思はく」◇『枕草子』二六八「いと清げなる人を捨てて、にくげなる人を持たるもあやしかし」

▽通常と異なっている。尋常でない。◇『伊勢物語』「なさけあるひとにて、瓶に花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸はかりなむありける」

▽道理や礼儀にはずれていて不都合である。けしからん。よくない。乱雑だったり、粗末だったりして見苦しい。◇『枕草子』二八「遣戸をあらくたてあくるもいとあやし」◇『土左日記』「酔ひあきて、いとあやしく潮海のほとりにてあざれあへり」

▽身分が低い。素姓がはっきりしない。いやしい。◇『枕草子』

四一「まかでてきけば、あやしき家の、見どころもなき梅の木などには、かしがましきまでぞ鳴く」◇『徒然草』一〇九「あやしき下　なれども、聖人のいましめにかなへり」

▽十分信頼できない状態である。疑わしい。おぼつかない。◇「できるかどうかあやしい」◇「あの男が怪しい」◇「天気があやしくなる」

あらた

あらた（新た、革）[arata]

○[ar]は「生る[aru]」「現われ[araware]」の[ar]などと同じ。何もなかったところに、現れることをいう。[ta]は「た（田）[ta]」である。「開墾され出現した田」が原義。

※[ar]はタミル語＜alar＞起源。「た（田）[ta]」はタミル語＜tampal＞起源。これが混成語として熟し、[ta]は人の手が入り耕された何かの状態を表す言葉となり、「あらた」が「それまでなかったものが現れ出ること」を意味するようになった。

◆混乱し混沌としたところが、はじめて人の働く場になること。それまでなかったものが現れ、その状態になること。

▼ものが今までと違って新しい。◇『万葉集』一八八四「冬過ぎて春の来たれば年月は新たなれども人は古りゆく」◇『万葉集』四二九九「年月は安良多安良多爾（アラタアラタニ）相見れど」◇『奥の細道』「金（こがね）の柱霜雪に朽ちて、既（すでに）退廃虚空の叢（くさむら）と成るべきを、四面新に囲て、甍（いらか）を覆いて風雨を凌ぐ」◇『航魯紀行』森有礼「暫時の慰みを取りておのが身をよく新たにし、后の日のもの学びにこころをそそぐぞこの国のならひなり」

▼何かのことを改めて行なうさま。◇『謡曲・金札』「四海を治めし、おん姿、あらたに見よや」

▼心に残るほど新しいこと。見た目にはっきりとわかるさま。鮮やか。

◇『大鏡』「すべらぎの跡もつぎつぎ隠れなくあらたに見ゆる鏡かも」◇『類従本千里集』「雲もなく谷は山さへはれ行けば水の色こそあらた成けれ」

▽効果、結果などが著しいさま。特に神仏の霊験についていう。あらたか。◇『今昔物語』「昔は此様（かくよう）に下　の医師共の中にも、新たに此（かく）病を治し癒す者共なむ有りける」◇『源氏物語』玉鬘「初瀬なむ、日の本のうちにはあらたなるしるしあらはし給ふ」◇『奥の細道』「かかる道の果て塵土の境まで、神霊あらたにましますこそ、吾国風俗なれ」

あらたまる

あらたまる[aratamaru]

○かな表記した「あらたまる」は現代では一つの言葉であるが、由来は二系統ある。

一つは「あらた（新た）」から派生したもの。「まる」は云々の状態になることを意味するので、荒れ地が開墾され田の状態になることが原義。そこから、ものが新しくなることを意味する。

一つは、[ara]-[tama]-[ru]である。つまり、「新魂る」であり、新たに魂がこめられる、の意味である。冬の籠もりのときに新たな魂がこもり春に芽を吹く。新しい春、新たな春になる。

この二つの異なる言葉が、田を耕し稲を育てる営みのなかで互いの意味を混成し、新しい生命、生命力がこもって、刷新されることを意味する言葉として育った。

◆ものに命がこもり生まれ変わる。ものがちからを得て、何かのことが新たにおこなわれる。

▼物事が新しくなる。古いものが新しいものに替わる。入れ替わる。変化する。

◇『万葉集』一八八五「物は皆あらたまる吉しただしくも人は古りゆくよろしかるべし」◇『古今集』二八「ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく」◇『源氏物語』浮舟「年あらたまりてなにごとかさふらう」◇『方丈記』「人の心みなあらたまりて、ただ馬、鞍をのみ重くす」◇『徒然草』「花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変わらぬ住家は人あらたまりぬ」

▽物事が改善される。前よりもずっとよくなる。面目が一新される。◇『枕草子』四九「職の御曹司の西面の『あらたまらざるものは心なり』とのたまへば」

▽ことさらに態度を整えてきちんとする。堅苦しい他人行儀の態度やことばつきになる。◇『浮雲』「改まって外出をする時を除くの外は」◇『吾輩は猫である』「『少々先生に御願があって参ったので』と改まる」

▼「年」や「月」また「春」等にかかる。これは「新魂」由来であろう。

◇『記歌謡二八』「あらたまの年が来（き）経（ふ）れば　あらたまの月は来経ゆく」◇『万葉集』三六九一「波の上ゆ　なずさひ来にて　あらたまの　月日も来経ぬ」

ある

ある（有る、在る、生る）[aru]

○ある [aru] は、ものが現れ（現はる [arafaru]）、また生まれ（生る [aru]）ること。さらにそれぞれの現れをなりたたせていることが、そこで起こっていることをも意味する。また、ものが一定の性質をもつことも、その状態にあるとしてつかむ。

現れたことを認めた話者が、現れたことを「ある」という。人がものを見つけたとき人は「ものがある」と述べる。あるの基本は現れていることの発見である。発見は見いだされるものの側から言えば出現であり、あるは「生れ出る」や「現れ出る」を意味としてはじめから内にもつ。

※ [ar] はタミル語＜alar＞起源である。[ar] は「この世界のなかで無かったものが現れる」を意味し、「アレ（生）」や「アラハレ（現）」の [ar] と共通の不変部である。また神の出現を [are] というのとも共通。

◆「ある」というとき、まず第一に、この世界のなかでそれまではなかったものが現れ、「現れた」あるいは「あった、あった」と発見されることを意味する。つねに発見者に対して「ある」。現れた結果としての状態も意味する。「山がある」のは山からいえば山の発現であり、人からいえば山の発見である。

あるはさらにその根拠も意味する。「ある」と発見されることが可能にある根拠としての「ある」。なぜ見つけて『ある』と述べることができるのか。さまざまの段階をへて最終的には、発見の可能性の根拠は「それがあるからだ」ということになる。「『ある』と発見できるのはそれが『ある』からだ」というとき、この第二の『ある』は最初の「ある」とは違う。つまり個別の話者を離れて一般的に「ある」ことを意味している。この最終的な発見の可能性の根拠としての「ある」ことを「存在する」といい、この「ある」の根拠としての「あること」を「存在」という。

▼「もの」がある。

◇『古事記』上・歌謡「賢し女を阿理（アリ）と聞かして」◇『万葉集』三五九四「潮待つと安里（アリ）ける船を」（住む、暮らす）◇『竹取物語』「翁のあらん限は」（この世に生きている。生き長らえる。）◇『竹取物語』「心たばかりある人にて」（すぐれている）◇『竹取物語』「三日ばかりありて」（間に時がある、から時間の経過）◇『源氏物語』夕顔「ある人々もしのびてうち泣くさまなど」（居合わせる）◇『源氏物語』桐壺「南殿にてありし儀式」（儀式）◇『古今集』「わが思ふ人はありやなしやと」（無事でいる）◇『平家物語』一〇「このごろは世にある人こそ多けれ」（はなやかに暮らす）◇「林のなかに祠がある」◇「なんだ、机の上にあった」◇「宇治は京都の南東にある」◇「彼には子がある」◇「ありし日の面影を偲ぶ」

▼「こと」がある。

▽言葉がある。◇『古今集』六一「郭公まつ歌よめとありければ」（との言葉があった）◇「宣伝のためとあって安く売っていた」

▽発見が「こと」なら、「そのことを発見しました」ということを表す陳述の補助語になる。

○出現した結果、或いは出現したはずの結果。◇『古事記』中・歌謡「一つ松人に阿里（アリ）せば太刀佩（は）けましを」◇『万葉集』三四三「なかなかに人と有（あら）ずは酒壺になりにてしかも」◇「もしこれが当たりであればよかったのだが」

○出現した状態にある。◇『古事記』上・歌謡「君が装したふとく阿理（アリ）けり」◇『古事記』下・歌謡「み山隠りて見えずかも阿良（アラ）む」◇『枕草子』六七「秋の野のおしなべたるをかしさは、薄（すすき）こそあれ」◇『我輩は猫である』夏目漱石「そんなことあるはずがない」

○動作、作用、状態の進行、継続や、完了した作用の結果◇『万葉集』三六八六「旅なれば思ひ絶えても安里（アリ）つれど」◇『万葉集』一五二〇「かくのみや恋ひつつ安良（アラ）む」◇『平家物語』一「正月五日、主上御元服あって」◇『太平記』三「少し御まどろみ有ける御夢に」

あわれ

あわれ（あはれ）[aware]

○ものが人にはたらきかけておこす深くいかんともしがたいこころのさま（[af]）、その状態にある[are]こと。[afare]から変化。

※タミル語＜avalam＞起源。原義は、自分のことについての苦悩、心の痛み。また、人への共感から生まれる不憫の情。

◆人のちからで変えられないものに人がとらえられ、いかんともしがたい感情のうちにあること。惹きつける力が強いとき、そこに起こる感情。「かなし」はまず話者の側の行いが先行する。それに対して「あわれ」はものの方から人に働きかけて起こる感情である。

※「もののあわれ」が紀貫之の『土佐日記』ある。ものによっておこる感情とそれを起こしたものとを一まとまりにつかむ言葉である。「もの」は何か具体的なことそのものではなく、どうしようもない運命や出来事、人のちからをこえた「もの」である。人がそういう大きな力の下で生きていることをしることを、「もののあわれをしる」という。「もののあわれをしらない」と組んで用いられる例が源氏物語に多い。「もののあわれをしる」人であることがその人の熟成を示すことであった。

▼ものに共感する気持ち。◇正倉院文書落書「春雨の安波礼（アハレ）」

▽囃子ことば◇『催馬楽』我が駒「いで我が駒早く行きこせ待乳山安波礼（アハレ）」◇『万葉集』一〇五〇「あなあはれ布当（ふ

たぎ）の原、あな尊（たふと）大宮どころ」◇『万葉集』四〇八九「めづらしく鳴くほととぎす聞くごとに、心つごきてうち嘆き安波礼（アハレ）の鳥と云はぬ時なし」◇『源氏物語』桐壺「御子もいとあはれなる句を作り給えるを、限りなう愛でたてまつりて」◇『枕草子』一「からすの寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり」◇『栄花物語』鳥辺野「よろづにあはれなるたびの御祈をせさせ給へば」◇『枕草子』二〇八「霊山は釈迦仏の御住家（すみか）なるがあはれなるなり」◇『源氏物語』橋姫「俗聖とか、この若き人々のつけたなる。あはれなることなり」

▼ものを見る者がものにひきこまれてもつ、悲嘆、悲哀、かわいそう、気の毒といった感情。

◇『古事記』中・歌謡「やつめさす出雲建が佩ける太刀　黒葛（つづら）さは巻きさ身無しに阿波礼（アハレ）」◇『万葉集』四一五「家ならば妹が手まかむ草枕旅にこやせるこの旅人あわれ」◇『竹取物語』「見れば、世間心細く、哀に侍る」◇『源氏物語』帚木「あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし」◇『源氏物語』帚木「人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、あはれとも、うちひとりごたるに」◇『源氏物語』桐壺「まだ大殿籠らせ給はざりけると、あはれに見たてまつる」◇『土佐日記』「昔しばしありしところのなくひにぞあなる。あはれといひて」

◇『吾輩は猫である』夏目漱石「憐れな声が糸のように浮いてくる」

いう

いう（言う）[iu] ← [ifu]

○ことをことばとして声に出すこと。「こと」を「ことば」としてこの世界にあらわすこと。口にすることが原義。「飯ふ（ものを食べる）」もまた口にすることで同根（『岩波古語辞典』）。

※タミル語＜cepp-u＞（c～なし、e～i、pp～f 対応）。

◆口にすることから熟して、声に出さずとも、ことをことばにすることをすべて「いう」という。ことを分節して切りとり、そのようにしてつかまれたことをあらわしてことばとすること。ことばはの形は、音声としての言葉、書き言葉を主要なものとして、多様である。基本は音声としての言葉である。その音声の記録の形態が多様である。言葉は言うという行為がなければ、現実には存在しえない。であるから、声に出す「いう」が言葉にすること一般を意味するようになった。

▼言葉として表現する。「のべる（述べる）」よりは一般的で用法は広く、「呼ぶ、名づける、称する、世間の人が口にする、うたう、言い寄る」などに展開する。◇『古事記』上・歌謡「泣かじとは汝（な）は伊布（イフ）とも」◇『万葉集』四三六四「家の妹がなるべきことを伊波（イハ）ず来ぬかも」◇『万葉集』三三七九「わが背子をあどかも伊波（イハ）む」◇『万葉集』八九七「重き馬荷に表荷（うはに）打つと伊布（イフ）ことの如」◇『古今集』仮名序「歌をいひてぞ、なぐさめける」◇『竹取物語』「其中になほいひけるは色好といはるる限五人」◇「本のことを英語で何というのか」

▼行為としての「言う」に重点がある場合はいわゆる自動詞になる。ただし、日本語の自動詞他動詞は言葉に内在的な構造によって定まるものではない。◇『蜻蛉物語』中「あやしき声するを、こはなにぞととひたれば、鹿のいふなりといふ」（日本語では動物の鳴き声、虫の鳴き声、ものの音などを「言葉」としてつかむ）◇「風で戸がガタガタいう」◇「遠慮なく言ってください」（「何か」

を言うことであるが、その何かが聞く側からはまだ明確になっていないから、「自動詞」のように対象を明確にせず用いられる）

▼（助詞「と」に付いて）「と」の受ける「こと」の内容を明示し、それに関して下に述べる場合に用いる。◇『万葉集』四三〇七「秋と伊閇（イヘ）ば心そ痛き」◇「神が存在するということを信じない」（この用例では「という」がなくても意味は通じる。「という」をおくことによって「こと」が明示され強調される。）

いき

いき（生、息）[iki]

○いき[iki]は「おき[oki]」の母音交換形。「おき」は「おく（起く[oku]）」の根拠である。ものがおきるのがいきのはたらき。ものがおきるのはそれが生きているからである。

※[oki]はタミル語〈ukkaram〉起源。（u〜o 対応）

◆[i]は飯（いひ）にあるように食べ物の意がある。タミル語が混成して熟成する中で、[o]かｒ[i]に交換した。また[k]は食うこと、[ik]を食物を食うこと。いきはいのちの根源。このように意味が深まった。

いのちの根源をいきという。これが「生き」と「息」に分かれた。「生きる」[ikiru]はいき[ik]がはたらく状態にいる[iru]ことである。いのちとは、ものとものことと、さらにものがことにしたがってはたらくいきが一つになる場である。いのちをいのちとするこの根元的な働きがいきである。

▼生きる。そのもののいのちが持続していること。◇『日本書紀』神代下「亦、汝霊（くしひ）に異（あやし）き威（かしこさ）有り、子等復た倫（ひと）に超（すぐ）れたる気（いき）有ることを明かさむと欲ふ」◇『万葉集』九九五「御民（みたみ）われいけるしるしあり」◇『万葉集』一七八五「死にも生（いき）も君がまにまと」◇『源氏物語』桐壺「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」◇『宇治拾遺物語』二「とく逃げのきて命いきよ」◇「百まで生きる」

▽生活をいとなむ。また、生命を託する。◇「筆一本でいきる」「美術にいきる」

▽生き生きと。有効である。◇「この法律はまだいきている」◇「この絵はいきている」

▼息。呼吸するものの生命の証。◇『日本書紀』雄略即位前「其のささげたる角、枯樹の枝に類（に）たり。（略）呼吸（いぶ）く気息（いき）朝霧に似たり」◇『万葉集』三五八〇「霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ」◇『万葉集』七九四「伊企（いき）だにも、いまだ休めず、年月も未だあらねば（山上憶良）」◇『風姿花伝』―三「立ち振舞ふ風情をも、人の目にたつやうに、いきいきとすべし」◇「息を吹きかける」「息を切らせる」「息をはずませる」

▼意気。あふれるばかりに満ちている気。いき盛んな状態。◇『万葉集』八五三序文「意気凌雲　風流絶世」◇『夜明け前』島崎藤村「あの抗争の意気をもって起こった峠の牛方仲間」◇『浮雲』二葉亭四迷「それよりか清元の事サ、どうも意気でいいワ」

▽粋。風貌がさっぱりして、洗練された色氣があること。近世後期の文化爛熟期に発展した美意識。

※この「意気」と「粋」の二語は現代では音の高低の場所が異なり（高高と底高）区別される。◇『淨瑠璃・神霊矢口渡』一「弓張りの目元の月や花の顔、恋の台（うてな）が寄かけて、いきとはでとの討手の大将」

いきおい

いきおい（勢い）[ikioi] ← [ikihohi]

○「いき」があたりを「おおう（覆う）」さま。

◆「もの」の発する「いき（生き）[生命力・活力]」が辺りを覆っていく、そのありさま。

※勢いあることは生命力の盛んなことであり、生産の盛んなことであり、価値であった。勢いのあることが徳であり、社会的な支配力であった。稲の生長する勢いに価値を見いだす考え方である。

▼いのちあふれる様。◇『日本書紀』「是に生磐宿ネ軍を進めて逆（さか）撃つ。胆気（イキホヒ）益壮にして、向かふ所皆破る」◇『日本書紀』神代上「伊弉諾尊、功（こと）既に至りぬ。徳（イキホヒ）亦大（をほ）いなり」◇『伊勢物語』四〇「人の子なれば、まだ心いきおひなかりければ、とどむるいきおひなし」◇『源氏物語』帚木「上手はいと（筆の）いきほひことに、わろ者は及ばぬところ多かめる」

▼力や動きが盛んである。◇『源氏物語』東屋「なほなほしき（平凡な）あたりとも言わず、いきほひにひかされて、よき若人ども集ひ◇火（雨・風）の勢い。◇勢いよく燃える。◇すごい勢いで走る。◇日の出の勢い。

▼ものがすすんでゆく動き、その様子。情勢。なりゆき。◇『源氏物語』少女「おほかた世揺りて、ところせき御いそぎのいきほひなり」◇みんな逃げ出しかねない勢い。◇勢いに乗ずる。◇酔った勢いで言う。◇酒の勢いで思わぬ口論になった。◇提案した者が、勢いその計画の責任者となった。

いく・ゆく

いく・ゆく（行く、往く、逝く）[iku]・[yuku]

○心[kokoro]のはたらきをもって、今いるところ[tokoro]から、或る方[kata]へ動いてうつる。「さる（去る）」が人の意に関わりなくうつることをいうのに対し、「いく・ゆく」は、うつるものに意志がある。

※「いく」と「ゆく」は母音交替した同じ言葉。上代は「ゆく」が圧倒的に多い。「いく」はタミル語＜eku＞（行く、通る、歩く）起源。

▼目的をもって、出かける。移動する。通り過ぎる。目的地に進む。

◇『古事記』歌謡九〇「家にも由加め国をも偲はめ」◇『万葉集』八九〇「出でて由伎（ユキ）し日を数へつつ」◇『万葉集』三四九六「心うつくしいで吾（あれ）は伊可（イカ）な」◇『万葉集』四三七四「天地の神を祈りて征箭貫き筑紫の島をさして伊久（イク）われは」◇『蜻蛉日記』上「まだ暗きよりいけば」◇『蜻蛉日記』中「ゆきかふ舟ども、帆をひきあげつついく」◇『古事記』中・歌謡「蒜摘みに我が由久（ユク）道の」◇『万葉集』七九五「家に由伎（ユキ）ていかにか吾（あ）がせむ」◇「コンサートに行く」「旅行に行く」◇「道行く人々」◇『古事記』中・歌謡「海処（うみが）由気（ユケ）ば腰泥（なづ）む」◇『源氏物語』空蟬「小君、かしこにいきたれば」

▽水が流れうつる。風が吹き通る。◇『日本書紀』清寧二年・歌謡「稲むしろ川そひやなぎ水愈凱（ユケ）ば靡き起き立ち」◇『万葉集』四〇一一「由久川の清き瀬ごとに簿さし」◇『万葉集』二四五九「わが背子が浜行く風のいや急（はや）に急事なさばいや逢はざらむ」◇『方丈記』「ゆく河の流れは絶えずして」

▽道が通る。◇『万葉集』二三四「三笠山野辺ゆ遊久（ユク）道」
▽年月が過ぎ去る。また、年をとる。ある年齢に達する。◇『万葉集』二二四三「秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くともわれ忘れめや」◇「行く年を惜しむ」◇『東大寺諷誦文平安初期点』「歳去（ユケ）ば形も衰ぬ」
▽亡くなり、また嫁いだりして、いなくなる。◇『万葉集』三七八九「あしひきの山縵の児今日ゆくとわれに告げせば還り来ましを」◇『古今集』八六一「つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを」◇『大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点』九「已に遊（ユケ）る魂上帝に招かれ」◇『大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点』九「姉一人有り。嬴州の張民に適（ユケ）り」
▼あることがなる。何かがとどく。◇『源氏物語』賢木「わりなき御心まどひどもに、なかなかこともゆかぬにや」◇「手紙（連絡）が行く」◇「損（得）がいく」◇「満足（納得）がいく」◇「うまく（簡単に）いく」「そうはいかないよ」◇「二進（にっち）も三進（さっち）もゆかない」◇『愚管抄』三「万機の沙汰のゆかぬやうになるとき」
▽手段、方法についていう。◇「この手でいこう」「押しの一手でいく」
▽こころの意図が達せられ満足する。◇「心ゆくまで」◇『万葉集』四六六「花そ咲きたるそを見れど情（こころ）も行（ゆか）ず」◇『仮・昨日は今日の物語』上「色々案じても合点ゆかず」

いず（出ず）

いず（いづ）（出ず）[izu]
○うちからそとにうつる。
◆内にあるものが、外に動き、外において、見えるようになる。
※「いる（入る）」の対義語。また「あらわれる（現れる）」はうちそとに関係なく、出現すること。
▼でる（出る）。内の所、外から見えない所、私的な所などから、広々とした所、人目にたつ所、表だった所などに現われる。
▽内から外へ行く。出かける。◇『古事記』上・歌謡「ぬばたまの夜（よ）は伊伝（イデ）なむ」◇『万葉集』一〇七一「山の末（は）にいさよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜そ降（くた）ちける」
▽離れる。去る。離職、離縁、出家、卒業などする。◇『栄花物語』月の宴「その暁にいで給ひて、法師になり給ひにけり」
▼内に隠れていたものなどが外に現われる。
▽さえぎられたり、おおわれたりなどして隠れていたものが表に現われてくる。出現する。◇「いで湯」◇『万葉集』四三六〇「浜に伊泥（イデ）て海原見れば」◇『万葉集』三三六八「土肥の河内に伊豆流（イヅル）湯の」◇『古今集』八七七「おそくいづる月にもあるかな」
▽新しく生ずる。発生する。生まれる。また、ある土地から産出する。◇『伊勢物語』九六「身に瘡（かさ）も一つ二ついでたり」
▽表だった所に発表される。特に、出版される。◇「掲示に出ず」◇「新聞に出ず」
▽ある限界、標準などを越える。超越する。ぬきんでる。◇『宇治拾遺物語』一・六「生死のさかひをいでなんと」
（あることに）原因がある。もとづく。「その処置過激に出ず」
▼だす（出す）
▽内にあるものを外におき、見える、聞こえる（等）ようにする。◇『万葉集』四〇〇八「言に伊泥（イデ）て言はばゆゆしみ」
▽（動詞の連用形に付いて）その動詞の示す作用によって、表に現わす意。◇「言ひいず」、「染めいず」、「取りいず」、「召しい

ず」。◇「言い出す」、「取り出す」。

いつ

いつ（何時）[itu]

○あることが起こった、あるいは起こるときが、わからないこと。

◆そのときを問うときにも、わからないことを述べるときにも、用いる。

※[itu]の[i]は「いづく（何処）」、「いづれ（何れ）」、「いかに（如何に）」の[i]と同根。

※[i]は、タミル語＜e＞（疑問代名詞の疑問を表す語根）由来。

▼どの時。いずれの時。不定称。（未来および過去のことについて）◇「それはいつのことだったか」◇『万葉集』三七七〇「あぢま野に宿れる君が帰り来む時の迎えを伊都（イツ）とか待たむ」

▼あった時に関する疑問を表す。◇『万葉集』四四三六「伊都（イツ）来まさむと」

▼いつも。ふだん。◇「いつもどおり、六時に起きた。」◇『落窪物語』一「これはいつよりもよく縫はれよ。禄に衣着せ奉らん」

いのち

いのち（命）[inoti]

○いのち[inoti]は「い[i]」「の[no]」「ち[ti]」からなる。「い」は食べ物。「の[no]」の動作形は「ぬ[nu]」で大地（「な[na]」）からものを得ること。つまり「いぬ[inu]」は生きるうえでの糧を得ることであり、「いの[ino]」はその行為がなされる場であり、またその行為の主も表す。

このように[in]は「いね（稲）」、「いのち（命）」、「いのり（祈り）」などに共通の不変部。[ti]は手[te]の行為を起こさせる大元を示している。「霊（ち）」と書く。

◆ものが糧を得て生成発展することが、生きるということであり、このときそのもののことを「いきもの」という。いきることの根拠としてのはたらき、それがいのちである。

いのちはものの一つの存在形式。「もの」が「いき」により「いきもの」となる。そのことを「いのち」という。「もの」が「いき」を根幹にして「もの―こと―いき」の三位一体構造において存在するとき、この存在を「いのち」という。

※タミル語がはいる以前から食べ物としての「い[i]」ということばがあり、ここに[oki]から[iki]（息）に母音交換したタミル語が入って、熟成した。

またタミル語には＜uy-ir＞（生命）があり、[uyi]は日本語の音の中では[i]に収斂する。これがタミル語の[aci]（魂・心）と結びついて[i-noti]（生きるものの魂）と熟成した。

▼生きものを生きものたらしめる根源的な力。

◇『古事記』中・歌謡「伊能知（イノチ）の、全けむ人は…くまがしが葉をうずに挿せ」

▽寿命◇『万葉集』二四一六「ちはやぶる神の持たせるいのちをば誰がためにかも長く欲りせむ」

▽一生◇『伊勢物語』一一三「長からぬ命の程に忘るるはいかに短き心なるらむ」◇『雨月物語』貧福論「いのちのうちに富貴を得る事なし」

▽運命。天命。◇『古今集』九七「春ごとに花の盛りはありなめど相見んことはいのちなりけり」◇『新古今集』九八七「年たけて又こゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山」

▽死期◇『日蓮遺文』「これを申さば、必ず日蓮がいのちとなる

べしと存知せしかども」
▽唯一のたのみ。唯一のよりどころ。◇『後撰和歌集』一九三「夏の草葉に置く露をいのちとたのむ蝉のはかなさ」
▽（近世の用法）そのもの真髄。一番大切なもの。◇『黄表紙・江戸生艶気樺焼』上「刺青〈略〉をし、痛いのを堪へて、ここがいのちだと喜びけり」
▽相愛の男女が互いに二の腕へ「命」の一字、または「誰々命」と入れ墨すること。また、その文字。多く遊里に行なわれた。現代の若者もこれを真似て用いる。

いま

いま（今）[ima]
○食べ物「い（飯）[i]」を「む[mu]す（蒸す、結ぶ）」、つまり労働の結果得られた食べ物を食べる時、これが「いま」の意味である。働くことが食べるという今のときをもたらす。
◆「飯を食べる」から一般化され、「今」は何かのことがなされるときを意味する。ことがわられるとき。何かがなされるとき、その行為の続くときも意味する。「今」は時間の幅ではない。「こと」が顕現する間（ま）を指しめす。
▼まさに何かあることがなされるとき。まのあたり。現在。◇『古事記』上・歌謡「伊麻（イマ）こそは我鳥（わどり）にあらめ」◇『日本書紀』歌謡一四「いま助（す）けに来（こ）ね」◇『万葉集』四三三七「水鳥の発（たち）のいそぎに父母に物言わず来て已麻（いま）ぞ悔しき」◇『万葉集』三二八「青丹によし寧樂の都は咲く花の薫ふが如く今盛りなり」
▽昔に対し、現在を含む間。い―ま（間）。今の時代。現代。現今。こんにち。◇『古事記』中・歌謡「我が心しぞいや愚（をこ）にして伊麻（イマ）ぞ悔しき」◇『万葉集』六九九「後にも逢わむ、今ならずとも」◇『古今集』仮名序「いまの世の中」
▽古いものに対して新しいこと。また、そのもの。◇『万葉集』三三九九「信濃道は伊麻（イマ）の墾道（はりみち）刈株（かりばね）に足踏ましなむ履（くつ）はけわが背」
▽ごく近い過去に関して用い、互いに経験や知識で知っているものをさしていう。ちょっと前。いましがた。◇それは今聞いたばかりの話だ。今の話をもう一度すると。◇『平家物語』六「今さけぶものは何ものぞ。きっと見て参れ」
▽ごく近い未来に関して。すぐに。今すぐに。直ちに。◇『古事記』中・歌謡「鵜飼が伴伊麻（イマ）助（す）けに来ね」◇『古今集』六九一「今来んといひしばかりに長月の」◇いま助けに行く。

いる（居る）

いる（居る）[iru]
○あろうとして、そしてそこに「ある」こと。「いる[iru]」はそれ自体もっとも基本的な言葉である。さらに分解すれば「い[i]」が動いてこの世界に現れることであり、「る[ru]」はその状態を生み出す行為を意味する。
◆この世界のなかを移って現れること。自分の意志で動くものが、動いてきてある場所に「存在する」。動いてきて、そのうえで、動かずにあること。
「いる」はいることを見つけたとき、言葉となることである。なにかのものが「いる」と発見できるのは、それが移ってきてそこに存在するからである。「いる。いる」と発見できるのは、それが「存在する」からである。そこから、発見者の行為とは関係なく一般的に「いる」ことを表すようになった。

一般に植物は「ある」と言う。「いる」とは言わない。しかしある植物の生態を研究しているものは、「椿がいる」と言うことがある。そのものとしての植物が、人に存在を訴えるとき、人は「いる」ととらえる。また「咲いている」と言い「咲いてある」とは言わないように、ものとしての植物の心を感じとるときにも「いる」と言う。

◇『日本書紀』武烈即位前・歌謡「琴がみに来（き）謂屡（ヰル）影媛（かげひめ）」

▼「いる」は、本来は高さの低い状態になる、の意であり、「立つ」に対する語として具体的な「坐る」「住んでいる」などを表す言葉であった。近代になってこの言葉の抽象性が高くなり、現代日本語ではもっぱら「存在する」の意に用いるようになった。

◇『万葉集』四〇〇三「立ちて為（ヰ）て見れどもあやし」

◇なんだ、こんなところにいたのか。◇大勢の中には違った考えの人がいる。◇今日は一日家にいる。◇部屋にいるので用事があれば呼ぶように。◇トラはインドにいる。◇『古事記』中・歌謡「上枝（ほつえ）は鳥韋（ヰ）枯らし」

▽ここから、ある地位に着く、居場所をさだめる、なども表す。◇『落窪物語』四「御女（むすめ）の女御、后にゐ給ひぬ」◇『徒然草』一二三「第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり」

▽植物や無生物の場合に、本来動くものが動かないであること。◇『万葉集』三三五七「霞（かすみ）為流（ヰル）富士の山辺（び）に」◇『万葉集』三二〇三「渚（す）に居（ゐる）舟の漕ぎ出なば」◇『枕草子』一七八「池などある所も水草（みくさ）ゐ」

▽怒りがおさまる。気持がしずまる。◇『平家物語』九「梶原この詞に腹がゐて」◇『古今集遠鏡』三「夢に見たばかりでどうして心がゐやうぞ」

▼補助動詞になる。動作、作用、状態の継続、進行を表わす。◇じっと見て（聞いて）いる。◇もちろん知っていました。◇手をこまねいている。◇『徒然草』三二「物のかくれよりしばし見ゐたるに」◇見ず（聞かず）にいる。◇知らないでいました。

▼「いる」の類語に「おる」がある。「おる」は「いる」ものの意志、主体性を否定して、「ある」に近づけた語。他者に対して用いるときは軽蔑の意味がこもる。◇そこにおるように。◇ちょうど家におった。

いる（入る）

いる（入る、納る、要る）[iru]

○そとからうちへ、まるごとうつること。

◆内と外を分ける境をこえて、外から内に移ること。

※タミル語＜ cer-uku ＞由来。

※「いず（出ず）」の対義語。

▼外部から内部へ移る。入ること。

▽外から、ある物の中、ある場所の内へ移動する。また、移動して、その中にある。◇『日本書記』神代「伊弉諾尊、伊弉冉尊を追ひて、黄泉に入（い）りて、及（し）きて共に語る」◇『古事記』中・歌謡「人さはに来伊理（イリ）をり」◇『更級日記』「師走の二日京にいる」

▽見える所から、陰に移動する。その場から退く。奥へ引っ込む。特に、日、月が沈む。◇『万葉集』一七一二「天の原雲なき宵にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しくも」◇『古今集』一〇五九「よひのまにいでて入（いり）ぬるみか月の」◇『平家物語』一「瓶子のくびをとってぞ入（いり）にける」

▽器に収まる。◇『源氏物語』須磨「さるべき書なども、文集などいりたる箱」

▽特定の環境の中に移る。宮中、仏門、学校などにはいる。◇『源氏物語』葵「去年内裏にいり給ふべかりしを」◇『徒然草』五八「一度道に入（いり）て世をいとはん人」

▼ある限られた範囲内に取り込まれる。▽仲間になる。含まれる。また、書物に載る。◇『古今集』仮名序「万葉集にいらぬ古き歌」

▽知覚できる範囲にはいる。◇『万葉集』二九七七「心に入（いり）て恋しきものを」

▽ある状態、時期などに達する。◇「技神にいる」◇『蜻蛉物語』中「彼岸にいりぬれば」

▽こもる。◇『源氏物語』宿木「そなたざまには心もいらで」

▽内に向かってくぼむ。くぼみや裂け目ができる。◇『源氏物語』須磨「海づらはややいりて、あはれにすごげなる山中より」

▽付けられる。施される。◇「筋が入る」、「筋金入り」。

▽必要になる。入用である。◇『源氏物語』若菜上「かなぶみ見給ふるは、目のいとまいりて」

▼ある状態のうちになる。補助動詞。動詞の連用形につく。

▽すっかりそうなる、ほとんどそうなること。◇「死に入る」、「消え入る」、「絶え入る」、「寝入る」、「冷え入る」。

▽心のうちに入る。せつに、深くそうする意を表わす。◇「思い入る」、「念じ入る」、「泣き入る」、「恐れ入る」、「痛み入る」。

うち

うち（内）[uti]

○「う[u]」は、糧、食糧の意味である。

◇『日本書記』「保食神、此云宇気母知能加徴（うけもちのかみ）」とある「うけ」の「う」。◇『古事記』上「天の石屋戸に　気（ウケ）伏せて踏みとどろこし」にある「うけ」は「穀物を入れておく入れもの。祭儀ではこれを伏せてたたき、霊をよみがえらせる」ものを表す。このように、「う」はさずかった余剰物、保存される生産物、つまり一定の集団が残しておく食物を表す。「ち[ti]」は「作る」の「つ[tu]」から転じた。「うち[uti]」の古形は「うつ[utu]」である。

「うち」は協同して働き、保存した食物を共有する集団、つまりは協同体内部を意味する。「うち（内）」は「そと（外）」からは見えないものとして意識される。外から見えない「内」から、外に出て見えるようになるのが「出（い）でる」である。

※「うち」の意識は「言わないでもわかる世界」とされ、そこでは言挙げし、ことを割ることが「断る」こととされる世界であった。農耕の協働体が崩れつつあるなかで、内で言挙げする、あるいは言挙げして内を強める、という文化が生まれなければ日本語は衰退する。この定義集は、内の言挙げを支える言葉のための基礎作業である。

※タミル語＜utu＞起源。

◆いのちの働きがおよび、心がとどいているところ。心をあわせて働くもののあいだ。

※農耕とともにもたらされた言葉であるが、混成語として熟成した。

▼（空間的）空間的、平面的に、ある範囲や区画、限界などの中。囲みおおわれた内部。奥まったところ。外から見えない部分。◇『日本書紀』斉明四年一〇月・歌謡「おもいろき今城（いまき）の禹知（ウチ）は」◇『万葉集』三九五七「佐保の宇知は、忘らゆましじ」◇『古事記』上「是に出でむ所を知らざる間に鼠来て云ひけらく、内（うち）は富良富良（ほらほら）外は須夫須夫（すぶすぶ）」◇『宇津保』蔵開下「かかるほどに、うちよりかはらけ

出ださせ給ふとて」

▼（時間的）一定時間の間。▽一続きの時間。また、それに含まれるある時。◇『万葉集』四一七四、大伴家持「春の裏（うち）の楽しきを終えは梅の花手折りきつつ遊ぶにあるべし」◇『古今集』一「年の内に春は来にけり」

▽「うつ（現）」に同じ。現世という（限られた）時間。生きている間。現世。◇『万葉集』八九七、山上憶良「たまきはる内（うち）の限りは平らけく安くあらむを」

▽（多く用言の連体形を受け、「に」を伴って形式名詞のように用いる）ある状態、動作が継続している間に別のことが起こるのをいうのに用いる。◇『土佐日記』「くやしがるうちに」◇そんなことをしているうちに日が暮れる。

▼（量的に）限度の範囲。▽程度、分量などで、ある限度を越えていないこと。以下。以内。◇『宇津保物語』吹上上「年廿歳よりうちの人」

▽複数のものの中。ある種類に属する人。また、ものごと。◇「職員のうちこれができるのは数人しかいない」

▽多く「に」を伴って形式名詞として用いる。…という条件の範囲内にあるの意味から）

○その中でも特に。そればかりか。その上に。◇『落窪物語』一「さやうの事かけてもおぼしたたぬうちに」

○とはいうものの。にもかかわらず。◇『徒然草』一六六「下より消ゆること、雪のごとくなるうちに」

▽物事の経過する間の状況、環境などを示すのに用いる。終始そのようなさまであるあいだ。◇「暗黙のうちに了解しあった」

▼（こもっていて）見えないところ。▽私的世界◇『源氏物語』関屋「親しき家びとのうちには数へ給ひけり」

▽宮中。内裏。おおうち。◇『伊勢物語』六「太郎国経の大納言、まだ下らふにて内へまゐり給ふに」

▽天皇。みかど。◇『延喜十三年亭子院歌合』「左はうちの御歌なりけり」

▽表立たない、個人的なものごとをいう語。私的な事柄。身のまわり。◇『保元物語』下「八十一女御ありて、内、君を助け奉る」

▽家、家の建物、家庭。比喩的に、自分の属する所。◇『虎寛本狂言・右近左近』「こなたも内じゃと思召ては、又例の我儘が出ませう程に」◇「うちの社長」「うちのチーム」「身内」◇「内弁慶」◇『安愚樂鍋』仮名垣魯文「ここのうちの肉もずいぶんいいけれども」◇『家族会議』横光利一「上手にご機嫌とらんと、うちの大將に叱られますよって」◇『俳諧師』高浜虚子「御免下さいな、姉さんおうち?」

▽同じ家の中に住む配偶者。妻。内儀。家内。多く、妻自身が用いる。自分の夫。◇「うちの人」「うちの」◇『武田勝頼夫人願文署名』天正一〇年二月一九日「みなもとのかつ頼うち」◇『滑稽本浮世風呂』二「わたしらか内なんぞは出好での」◇『浮雲』二葉亭四迷「お前さんのお嫁の事に就いちゃあ些（ち）いと良人（うち）でも考えている事があるんだから」◇『多情多恨』尾崎紅葉「拙夫（うち）では大相善く肖（に）てゐる、それを貴方は全然（まるで）肖てゐないと仰有るが」

うつ（全）

うつ（全、空、虚）[utu]

○「う[u]」は糧、食糧の意味である。「つ[tu]」は、作ること、生み出すこと。そこから、命が生まれるところに展開した。「うつなる場」はそこから「何かが生成してくる場」であった。

この場は「うち（内）[uti]」なる場であり、新たな力の宿る創造の場としての「中空の場」である。これは、生命の宿るところとしての「子宮」、また殻のなかに実が詰まる「籾（もみ）」、また蝶になる前の「蛹（さなぎ）」、これらの事実から、創造の場がからっぽな場であるとの考え方が生まれてきた。

銅鐸や鈴のような、からっぽのものを振ることによって、生命力としての「たましい」が籠もると考えてきた。

『竹取物語』は、竹の中の「うつな場」に姫が生まれた。また『宇津保物語』の「うつ」も、漂流の先で琴の秘曲を習得した主人公の祖父俊蔭の娘が母になり、北山のほこら（木のうつな場）で息子に琴を教えるという導入ではじまっている。

この創造の場としての「うつ」から、そこに現れることとしての「うつ・し（現し、顕し）[utusi]」が派生した。この創造は世界の外から来て世界のなかに現れる、つまり何かが転じて生まれる、と考えられた。その意味から、そのものが別のところに「現れる」ことしての「うつ・し（写し，移し）」に展開した。

◆ものがこもり、いきを得て、新たなものになる中空の場。

▼うつせみ（漢字として「空蝉」を当てることは万葉集から例がある。）「み」は万葉仮名の甲類の文字で書かれているから「身（乙類）」ではなく、「現身」とすることはできない。「うつしおみ（現臣）」が「うつそみ」となり、さらに変化した語。

▽この世に生きている人。◇『万葉集』一五〇「空蝉（うつせみ）し神に堪（あ）へねば離れ居て朝嘆く君」

▽現世。人間世界。◇『万葉集』四一八五「宇都世美（ウツセミ）は恋を繁みと」

▽「虚蝉」「空蝉」などと表記したところから「うつ―せみ」と意識されて）「蝉のぬけがら」から「蝉」そのものの意味が派生した。◇『古今集』四四八「空蝉のからは木ごとにとどむれど」◇『後撰和歌集』一九五「うつせみの声きくからに物ぞ思ふ」

▽『源氏物語』における「空蝉」

○『源氏物語』第三帖の名。帚木の後半を受け、源氏一七歳の夏、三度目に空蝉に近づいたが、空蝉が薄衣をぬぎすべらしてのがれることを中心に描く。後から挿入された短編的性格の巻といわれる。

○源氏をめぐる女性の一人で、故衛門督の娘。伊予介の後妻。一度は源氏に身を許したが、不釣合の身を反省して、以後源氏を避け続ける。夫の死後尼となったが、源氏に二条院に迎えられる。

○謡曲。三番目物。宝生流。「源氏物語」による。旅僧が都の三条京極中川を訪れると、空蝉の亡霊が現われて光源氏との恋物語をし、僧の回向をうけて成仏する。番外曲。

▼名詞について言葉を派生させる。中があいて、まったくからっぽの状態という意味。◇（派生語）うつろ（虚ろ）、うつほ（空穂）、うつわ（器）

うつ（打つ）

うつ（打つ、撃つ、討つ、搏つ、撲つ、拍つ、伐つ）[utu]←[wutu]

○もののおもてを、棒などのものでたたく。

◆ものの表面を棒や拳でたたくこと。

※タミル語＜putai＞由来。

▼物に物を強く当てる。また、たたくような動作をする。強く刺激を与える。たたく。ぶつ。ぶつける。

▽鞭（むち）、杖、手などでたたく。◇『万葉集』三五三六「赤駒を宇知（ウチ）てさを引き心引き」

▽雨、風、波などが強くうちつける。◇「雨に打たれる」◇『古事記』下・歌謡「笹葉に宇都（ウツ）や霰（あられ）の」

▽火を出すために、火打ち石をたたく。『貫之集』八「をりをりにうちて焚（た）く火の」

▽楽器や手を鳴らす。◇「鐘（太鼓・柝）を打つ」◇「舌鼓を打つ」◇『源氏物語』玉鬘「この女の、手をうちて」◇『続日本後紀』承和九年八月甲戌「天には琵琶をそ打なる」

▽つやを出すために、砧（きぬた）で衣をたたく。また、柔らかくするために、藁（わら）などをたたく。◇『枕草子』二七八「葡萄染（えびぞめ）の織物の直衣、濃き綾（あや）のうちたる、紅梅の織物など」

▽球戯で、球をたたいて飛ばす。◇「打ったのはカーブ」

▽製品を作るために、材料を鍛えたりして手を加える。金属を鍛えて、刀剣などを作る。◇『日葡辞書』「カタナヲウツ」◇「面を打つ」

▽金属をたたいて延ばす。◇『太平記』一四「金銀にて打て著けたる月日の御紋」

▽田畑を掘り返す。耕す。◇『古事記』下・歌謡「木鍬（こくは）持ち宇知（ウチ）し大根（おほね）」

▽しるしを付ける。銘を刻む。◇「ふりがな（疑問符）を打つ」◇『徒然草』一六三「太衝（たいしょう）の太の字、点うつ、うたずといふ事」

▽（キーをたたくところから）電報を発信する。◇「祝電をうつ」

▽（鐘、太鼓をたたいたり、時計が打ったりして）時を知らせる。◇「十時を打つ」

▽心や感覚器官に強い刺激を与える。◇「心をうつ」◇「胸をうたれる」

▼たたいたり、はったりして、ある物を安定させる。また、ある状態に作りあげる。

▽くぎ、くいなどを、たたいて入れこむ。◇『古事記』下・歌謡「上つ瀬に斎杙（いくひ）を宇知（ウチ）」

▽しっかり付け加える。◇『万葉集』八九七「重き馬荷に上荷（うわに）打（うつ）といふことのごと」

▽桟敷（さじき）、梁（やな）などを構え作る。◇『万葉集』三八七「いにしへに梁打（うつ）人の無かりせば」

▽ひも、縄、むしろなどを編む。組む。＊日葡辞書「ムシロヲvt輹（ウツ）」◇『日葡辞書』「ヲヲvt輹（ウツ）」

▽罪人に縄をかけたり、枷（かせ）をはめたりする。◇「縄を打つ」

▽型に流し込んで固める。◇「コンクリートをうつ」

▼手や道具を用いて遠くへ飛ばす。投げる動作で、あることを行なう。▽投げる。放つ。発射する。また、当てて傷つける。◇「安打を打つ」◇『日葡辞書』「ツブテヲvt輹（ウツ）」

▽当てて傷つけて殺す。◇『宇津保物語』蔵開中「かうじを一つなげて、大将をうつ人あり」

▼武器などで、傷つけ倒す。たたいたり切ったりして傷つけ殺す。◇『古事記』中・歌謡「頭椎（くぶつつ）い石椎（いしつつ）いもち宇知（ウチ）てし止まむ」

▽攻める。攻め滅ぼす。◇「敵をうつ」

▽たたき切る。切りとる。◇『万葉集』三四七三「佐野山に宇都（ウツ）や斧音（をのと）の遠かども」

▼時機を失しないである事を行なう。すばやく動作する。▽碁（ご）、すごろくなどの遊戯をする。◇『古今集』九九一「まかり通ひつつ碁うちける人のもとに」◇『源氏物語』常夏「すぐろくをぞうち給ふ」

▽ばくち、遊びにふける。◇『徒然草』一二六「ばくちの負き

はまりて、残りなく打ち入れんとせんにあひては、うつべからず」
▽ある手段をとる。◇「逃げをうつ」◇「ストをうつ」◇「打つ手がない」
▽急激にひっくり返るような動作をする。◇「もんどりをうつ」◇「寝返りをうつ」
▼繰り返される動作、状態を示す。◇「脈（波）を打つ」◇「心臓（動悸）がうつ」◇「頭痛（頭）がうつ」

うつる

うつる（移る、映る、写る）[uturu]
○うつし（現し）、うつつ（現）、（移る、映る）などの「うつ」と同根である。「うつ」は現代日本語では「うつる」に残る。
「うつ［utu］（全、空、虚）」は、創造の場としての「うつ」であり、そこにおいて生みだされ、この世に存在するものをいう。
◆目に見えてこの世に存在するものが、別の所にそのままの形で再び現れること。「移る」は同じ種類の空間の別の所。「映る」、「写る」は別の種類の所。
▼移る、遷る▽所が変わる。◇『土左日記』「船より人の家にうつる」
▽官位、権限、職務、職場などが変わる。◇『首書源氏物語』若菜下「右大将の君、大納言になり給ひて、例の左に移り給ひぬ」
▽対象があるものから他のものにかわる。◇『古今集』一〇四「花みれば心さへにぞうつりける色には出でじ人もこそしれ」
▽色香が、他のものにつく。◇『後撰和歌集』六三二「色ならば移るばかりも染めてまし」
▽もののけが、祈祷によって「よりまし」に付く。◇『源氏物語』若菜下「物のけ、小さきわらはにうつりて」
▽伝染する、火事が飛び火するなど。◇『方丈記』「都の東南より火出できて〈略〉民部省などにまでうつりて」
▽時がたつ。◇『古今集』仮名序「たとひ時うつり、事さり、たのしびかなしびゆきかふとも」
▽状態が変わる。◇『仏足石歌』「これの世は宇都利（ウツリ）去るとも」◇『古今集』一一三「花の色はうつりにけりないたづらに」◇『万葉集』一五一六「秋山にもみつ木の葉の移去者（うつりなば）」
▽人が死ぬ。◇『撰集抄』四「うつりし人の後世を、こまごまと弔（とぶら）ひなんどする人だにも」
▼映る、写る◇『土左日記』「やなぎのかげの、川の底にうつれるを見て」
▽映像がスクリーンに現われる。▽人目にはっきりと見える。また、人の心にある印象を与える。◇「人目にどううつるか」
▽つり合い、色の配合などが、よく合う。しっくりする。

うつつ

うつつ（現）[ututu]
○言葉としては「うつし」が先である。
―【うつし（現し、顕し）】[utusi]
◆創造の場としての「うつ」において、目に見えるものとしてこの人間世界に存在するようになること。◇『日本書紀』神代「葦原の中つ国にあらゆる（いるすべての）現しき青人草（人民）
※この言葉は現代日本語ではほとんど用いられない。近世江戸時代においてすでに、創造の場としての「うつ（空、虚）」、そこに現れることとしての「うつし（現し、顕し）」は、すたれていた。

◆うつつ（「うつし（顕）」の「うつ」を重ねた「うつうつ」の約）人間世界に実際に存在していること。また、その存在しているもの。現実。夢・架空の物語・死・虚構のものなどに対して用いられる。◇『万葉集』三九七八「夢には見れど宇都追（ウツツ）にし直（ただ）にあらねば」◇『源氏物語』葵「うつつの我身ながら」◇『源氏物語』蛍「うつつの人もさぞあるべかめる」

▽目ざめていて、意識がはっきりしていること。正気である。◇『源氏物語』葵「うつつにも似ずたけく厳（いか）きひたぶる心いできて」

▽夢か現実かはっきりしないような状態。また、そのような状態にあるもの（古今集の時代から「夢うつつ」「夢かうつつか」などと多く使うようになり、この誤用が生まれた）。◇『太平記』二五「一同に皆入興（じゅきょう）して幻（ウツツ）の如に成にけり」◇『好色一代女』二「万事頼みあげるなどいへば、住持はや現（ウツツ）になって」◇『好色五人女』一「魂身のうちをはなれ清十郎が懐に入て我は現（ウツツ）が物いふごとく」◇『柳多留』二「うつつにも団扇のうごく蠅ぎらひ」

うむ

うむ（生む、産む）[umu]

○[u]は「うち（内）[uti]」、「うら（浦）[ura]」の[u]と同じく、働いて得られる糧を意味する。[mu]はそれをもたらすこと。

◆この世にそれまでなかったものが，人間の営みによって新たにもたらされること。それをもたらす働き。

▼子を産むこと◇『古事記』「国土を生み成さむと以為（オモ）ふ。生むこと如何に」◇『竹取物語』「そこらのつばくらめ、子うまざらむやは」◇『源氏物語』浮舟「少将のめこうむべきほど近くなりぬ」

▼今までなかったものをつくり出す。生ずる。◇『滑稽本浮世風呂』前「金が子を産（ウン）で家質が流込む」◇『浮雲』「凡そ失望は落胆を生み落胆は愚痴を生む」

うら

うら（裏、浦、心、占）[ura]

○うち（内）のところ。

「う[u]」は「うむ（生む）」の[u]、「うみ（海）」の[u]と同じく、大地の恵みとして得られ、保存しておく余剰の食物を意味する。ちなみに「うむ（生む）は[u]をもたらすこと。「うみ（海）」は[u]-[na]から転じた。[na]は大地。[u]を生む大地、の意。[ura]の[ra]は「くら（蔵）」の[ra]、「てら（寺）」の[ra]と同じく、「あらしめる場」ほどの意味。働いて得た大地の恵みとしての糧を蓄えておくところ。

※タミル語＜ul＞起源。

◆生産の場としての表で得られた剰余を裏に蓄える。大地の恵み、剰余農産物は、人の目からは見えないところに蓄えられた。このとき漢字「裏」をあてる。海の恵み、海産物は、海、湖などの湾曲して、陸地に入り込んだところに蓄えられた。ここから「浦」となる。おおやけの人格（体面）に対する内面のこころ。このとき「心」をあてる。また目に見えない神の意を一定の方式で見えるようにすることを「占う」という。

▼入り江。湾。海岸。海辺。浜辺。◇『万葉集』四〇八三「玉くしげいつしか明けむ布勢の海の宇良（うら）を行きつつ玉藻拾

（ひり）はむ」◇『新古今和歌集』三六三「み渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」

▼ある限られた範囲のうち。内部。うち。なか。◇『万葉集』三七五〇「天地のそこひの宇良（ウラ）に吾（あ）が如く君に恋ふらむ人は実（さね）あらじ」

▼ものの人の目にふれない部分。ものの内側や内面の部分。◇「葉（紙）の裏」「足の裏」◇「裏手」「裏通り」「裏地」◇「裏からも見てみる」◇『野分』夏目漱石「運命は大島の表と秩父の裏とを縫い合わせる」

▼あることの人の目にふれない部分。あることの内側や内面の部分。表だたないで、隠れているところ。◇「裏で操る」◇「事件の裏に女あり」◇「この決定には裏がある」

▽表面に現われた物事に対して、相反するような物事。◇「うらはら」「うらうえ」◇「うらをいう」◇「うらをかく」うらへ回る」

▽命題の仮定と結論とをともに否定して得られる命題。命題「Pであるならば Q である」に対して、命題「P でなければ Q でない」をもとの命題の裏命題という。

▼表―裏の対に対して、面―心（うら）の対であったと考えられる。同時に朝廷に献上された女が故郷の浦を懐かしみ思い出す心情の加わった。「裏」の意をくんで、中世以降「意識して隠すつもりはなくても、自ずと隠され表に出てこない奥底の心情」を意味するようになった。◇「うらがなし」◇「うらさびし」

おしえる

おしえる（教える）［osieru］←［wosifu］

◆いとおしむ相手に対して、自分が大切にしていることを伝えること。「おしえる」は語源的にも意味的にも「おしむ［osimu］」が前提である。相手を愛おしむことが「教える」ことのはじまりである。したがって、「教育」もまた愛おしむことが前提なのである。「おしむ」ものが「おしえる」から、相手は「おしえるもの」にひきつけられそのものを尊敬し「まなぶ」、つまり「まねぶ」ように促されるのである。ここに人間の教育の原点が要約されている。

▼自分のやり方に相手をひきつけ、あるいは説得し、そのようにさせる。行動や身の処し方などについて注意を与えて導く。さとす。「生き方を教える」◇『天理本金剛般若経集験記平安初期点』「一切の人を勧化（ヲシヘ）て此の経を読誦せしむ」◇『竹取物語』「すべきやうをしへさせ給ふ」◇『三宝絵中』「仏道を行なひて人をおしふ」

▼自分の知っていることを他の人に告げ知らせる。知識、技芸などを身につけるようにさせる。教授する。◇道を教える、数学（お茶）を教える。◇『源氏物語』手習「障子の掛け金のもとにあきたる穴ををしへて」◇『古今集』七六「花散らす風のやどりはたれか知る我にをしへよ行きてうらみむ」◇『石山寺本金剛般若経集験記平安初期点』「波若経の義を解り、有知を暁（ヲシヘ）喩さむことを望ひ」

▼そそのかす。おだてたりして、悪い事をするようにしむける。教唆する。◇『今昔物語』二・二九「賊人を教へて此の羅漢を殺しつ」

おしい

おしい（惜し、愛し）［osii］←［wosi］

○いまあるものが、なくなったり、いなくなったりするとき、もっとあってほしい、いてほしいと思うこころのさま。

◆自分が手に入れているもの（何らかの自分の領域に入っているもの）が大切で手放すことが出来ないこと、その感情。おしむのは、それを大切に思うからである。

▼なくなることが、もったいない、残念に思う。◇『万葉集』一六〇四「秋されば春日の山の黄葉見る奈良の都の荒るらしく惜しも」◇『栄華物語』三二「今年ぞ二十九にならせ給へば、まだいと盛りにをしき御程なり」

▼手放すのがつらい。いとしくて離れがたい。◇『万葉集』三九九〇「わが背子は玉にもがもな手に巻きて見つつ行かむを置きて行かば惜し」◇『源氏物語』澪標「かねてより隔てぬなかとならはねど別れはをしきものにぞありける」

―【おしむ】「おし」の動詞形。

▼捨てがたく思う。愛惜する。◇『万葉集』三八一三「わが命はおしくもあらず丹（に）つらふ君に寄りてそ長く欲（ほ）りする」◇『万葉集』四四〇八「今日だにも言問ひせむと乎之美（ヲシミ）つつ悲しび坐せば」

▼ある行為（手放す行為）をいやがる。◇金（労）を惜しむ。◇協力（賛辞）を惜しまない。◇『枕草子』八七「御仏供のおろしたべんと申すを、この御坊たちのをしみ給ふ」

▼いとしく思う。いつくしむ。大切なものに思う。大事にする。尊重する。名残つきない。◇寸暇を惜しむ。◇『万葉集』三九九〇「わが脊子は玉にもがもな手に巻きて見つつ行かむをおきて行かばをし」◇『宇治拾遺物語』二〇四「今よりは紅葉のもとにやどりせじおしむに旅の日かずへぬべし」◇『平家物語』五「恥をもおもひ、名をもおしむ程のものは」

おどろく

おどろく（驚く）［odoroku］

○おどろ［odoro］は、「おどろおどろしい」の「おどろ」と同根で、ものの有様に気づいたときの心の動きを表す。

◆はっと気がつく。にわかに気がつく。意外なことに気づいて心が動く。

※タミル語＜ un-ar ＞由来。眠りから覚める。意識が戻る。分離する。

▼尋常でないことや夢に、はっとして目が覚める。◇『万葉集』七四一「夢（いめ）の逢（あひ）は苦しかりけり覚（おどろき）てかき探れども手にも触れねば」◇『源氏物語』須磨「君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、『など、宮より召しあるには参りたまはぬ』とて、たどり歩くと見るに、おどろきて」

▼先触れによって今まで意識しなかったことを意識する。はっと気がつく。◇『古今集』一六九「あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」◇『源氏物語』橋姫「思ひがけぬほどなれば、おどろかざりける心おそさよ、と心もまどひて恥ぢおはさうず」

▼意外なことにあって、心が動く。心の平静を失う。びっくりする。◇『日本書紀』「其の美人（をとめ）の富登（ほと）を突きき。爾に其の美人驚きて、立ち走りいすすきき」◇『源氏物語』桐壺「相人おどろきてあまたたびかたぶきあやしぶ」◇『源氏物語』若菜下「今宵うけたまはる物の音などもの、みな等しく耳おどろきはべるは」

おもう

おもう（思う）[omou]

○ものにひきつけられ、心がそのものの上によることを「おもう（思う）[omou]」という。ものに思いをよせ、そのもののことを考える。思うとき、考え、ことが生まれる（うむ（生む）[umu]-[are]）。思うと考えるは二つではじめて、まことの心の働きとなる。

※タミル語＜ omp-u ＞（熟考する、心を集中する）由来。

◆思うことは創造の源である。その思う行為がなぜ生じるか。それは「ものが人を惹きつける」からである。ものが人を惹きつけとらえるとき、人はものを思う。惹きつけられているその人の心のあり方、つまり、惹きつけられた状態の人の意識とその内容を「思い」という。

思うは、具体的には、自己の内に、恋・思慕・恨み・感慨・望み・想像・執念・予想・心配などをじっと避けがたくもっていることになる。思うことは単にある感情などを持つということではない。「思うことが避けられない」、「思わずにはいられない」というところに「思う」ということばの意味がある。

「もの」と心はこのように互いに交感し響きあっている。これが「思う」がとらえる世界である。「思い」は「思う」の連用形の名詞化として「思う」という心の働き、また「思う」内容を表す。人の力ではどうしようもなくて「思わずにはいられない」ことが本質的な意味である。人の内部に生まれたその「思い」は、これをそのままじっと心中に置けば「思い」のままである。

ものにひきつけられ、心がそのものの上によることを「おもう（思う）」という。ものに思いをよせ、そのもののことを考える。思うとき、考え、ことが生まれる。思うと考えるは二つではじめて、まことの心の働きとなる。

※「思う」「不可避」である。そして思いが深ければ深いほど、そのもののことを掘りさげて考える。「考える」は人の意識的な能動的な働きであり、考える対象のことを分析しようとする。

「考え」はつねに方法と形式（いずれも「かた」）が問題になりそれが、「考え方、考え型」である。これに対して「思う」は方法や形式を選ぶ余地はない。「思い方」という言葉はない。

次の例では、「思う」は運命的であり他の選択肢に比べて今が重要であるときの決意の表現であり、「考える」はいくつもの対等な選択肢の中からひとつを選んでいることを表現している。◇私はいま山に登ろうと思う。／私はいま山に登ろうと考える。

▽「どうして、なぜ、いかに」等根拠を問う問いに対しては「…と考える」で答えなければ答えにならない。「思う」は理由を言挙げできなくともそれ以外にないというときに用いる。◇「彼は来ないと思う」◇「彼は来ないと考える」

▽逆に自分の心情を「考える」ということはできない。◇「実にすばらしいと思う」◇「うれしく思います」◇「私のことを思っているのなら、もっとしっかり考えてほしい。」これは思うことがただちに考えることではないが、しかしまた本当に思うのなら考えるはずだ、ということを意味している。また逆に、◇「君のことを考えているよ。」「思ってもいないくせに。」これは、思うことを欠いて考えても、その考えたことは「まこと（真言）」ではない。一方を欠いては真ではありえない、これが日本語のことわりであった。

※「思う」と「考える」に意味の重なりはない。「思う」と「考える」の二つがそろってはじめて「真（ま）」となる。この二つの間には「間」がなければならない。

ところが近代日本語では、これをそのまま繋いだ「思考」という言葉を作った。西洋では真は「一」であり、これに関する英語「think」一つである。この翻訳語として「思考」を作った。しか

しこれは、日本語の構造に根ざした言葉ではない。「思考」では、「思」と「考」に間がなく、その結果ここには真がない。

思うと考えるは言葉の構造上からも意味からも別個な言葉であり、その不即不離の関係の中にこそ、日本語で考えることの奥行きがある。ところが近代日本語は「思考」という詞を作った。「思う」と「考える」の違いは近代化にとって邪魔だと考えられ、その違いが塗りこめ隠されたのである。近代化が一巡し，西洋近代文明が現実に行き詰まった今、この違いを異ならせる（[koto]-[naru]）ことが必要である。

▼ひきつけるものが物ならば「執心」「哀惜」等の意味になる。◇「たれか故郷を思わざる」◇「国をおもう」◇「この山は本当に美しいと思った」◇「もの思いにふける」◇「逃がした魚のことを思うと悔しくて」

▼ひきつけるものが人ならば「恋」、「思慕」、「恨み」等の意味になる。◇「私には心に思う人がいる」◇「彼に思いを寄せる」◇「親を思う心にまさる親心」◇「あのときの思いを晴らす」◇「親の思い、子知らず」

▼ひきつけるものが何かの「こと」なら「感慨」、「執念」、「望み」、「想像」、「心配」、「予想」等、あらゆる内容をもつ。「思う」のが「こと」の場合、その「こと」はひとつの確定した事実として「思う」対象となり、その意味で「もの」化している。◇「明日は雨だと思う」◇「彼は来ないと思う」◇「自分が正しいと思う」◇「つらいと思ったことなどない」◇「この事態をどうするか思い悩む」

おもかげ

おもかげ（面影、俤）[omokage]

○「おも[omo]」については、「おもて」参照。話者が思いをかける場、ものや人を意味する。「かげ[kage]」については「かげ」参照。光によって現れる像。思いをよせることで心にうかぶかたち。

◆いま現実にあるわけではないが、思いの深さのゆえに、ありありと心に浮かんでくるもののかたちやすがた。人のことにも、ものや情景についても言う。

▼心にうかぶ、人の顔やその姿、もののありさま。目の前に実体のないものをさすことが多い。▽目の前にないものが、あるように心に浮かぶこと。その姿。記憶に残っている姿。◇『万葉集』四二二〇「延（は）ふ蔦の　別れにしより　沖つ波　撓（とを）む眉引（まよびき）　大船の　ゆくらゆくらに　不屈於毛可宜（オモカゲ）にもとな見えつつ」◇『源氏物語』若菜上「見しおもかげも、わすれがたくのみなむ、思ひ出でられける」▽あるものに似た姿。それらしい顔つき、様子。◇「どことなく父親のおもかげがある」

▼現にあるかのように思い浮かぶものの様子や情景。◇『万葉集』三九六「陸奥（みちのく）の真野の草原（かやはら）遠けども面影にして見ゆといふものを」◇『実隆公記』文明七年正月朔日「乱後今年始而有二公事一。再興之面影珍重珍重」

▼目の前にあるが、実体は別のものと考えるかたち。▽鏡に映る像◇『源氏物語』総角「常よりわがおもかげに恥づるころなれば、うとましと見たまひてむも、さすがに苦しきは、いかなるにか」

▽別の人を思い起こさせる容貌など。◇『平家物語』「青嵐夢を破て、その面影もみえざりけり」

おもて

おもて（表、面）[omote]

○「おも[omo]」は「うむ（生む）[umu]」から転じたことばである。「つくる（作る）[tukuru]」と「ところ（所）[tokoro]」の関係と同じく、ある営みがなされる場やそれを担う人を意味する。

「て[te]」もあることがなされる場を表し、あるときは方向であり、あるときは担い手である。「上手（場所）」、「やりて、シテ（担い手）」などの「て」に通じる。

[te]が担い手を意味するとき、つまり「生む」ことをになう人のときは「面」と表す。[te]が場所を意味するとき。つまり「生む」ことが起こる場所のときは「表」と表す。

◆生産にかかわることがおこなわれる場。またそれを担う人格。[te]が方向でもあることから、方面。正面に当たる方。ここから顔の正面も意味する。

▼顔の正面。顔面。顔だち。おも。◇面をあげる。◇『日本書紀』皇極三年六月・歌謡「小林（おばやし）に我を引き入れてせし人の於謀提（オモテ）も知らず家も知らずも」◇『万葉集』八〇四「紅の意母提（おもて）の上に何処（いづく）ゆか皺が来たり（山上憶良）」

▽顔むけができること。面目。体面。◇『源氏物語』賢木「いづこをおもてにかはまたも見え奉らむ」

▽顔をかたどったもの。仮面。面形（おもてがた）。めん。また、とくに能面をいう。

▼生産にかかわることがおこなわれる場。公の場。外に現れたところ。近世になるほど「外面、うわべ」といった意味が強まる。

▽物事の外側、前方、上部に現われた部分。相反する面をもった物事を目立つ方向から見て目につく部分。物事の表面、外面。うわべ。外見。見え。◇『土左日記』「うちつけに海は鏡のおもてのごとなりぬれば」◇『源氏物語』若紫「ただ、海のおもてを見渡したるほど南無、あやしくこと所に似ず」◇『行人』夏目漱石「少し滑稽を感じたが、表ではただ『成程』と肯がった」

▽家などの正面。また、店さき。家の前や外の方。戸外。屋外。◇表で遊ぶ。表が騒がしい。◇表座敷。◇『当世書生気質』坪内逍遙「下駄を穿きて、両人街頭（おもて）へ出る」◇『五重塔』幸田露伴「戸外（おもて）では無心の児童（こども）達が独楽戦（こまあて）の遊びに」

▽本来のこととして、はっきりと人前に示すに足ること。第一に重んずべきことや公式、正式のこと。

▽名詞に付いて複合語を作る。ある方向に向かっていること。ある側に面していること。◇『源氏物語』桐壺「南おもてにおろして」

か行

が〔辞〕

が[ga]

○「甲が乙」は、甲が乙という場のうちにあることを意味する。

※タミル語＜aka、akam＞由来。＜akam＞は、内部、心、胸、場所、農地の意味をもち、日本語の福島、茨城や千葉等の方言「あか」つまり農地、畑地に続いている。つまりあることの内、あることの場、などの意味をもつ。この基本は現代日本語にもそのまま引き継がれている。

◆乙という述部の範囲に甲があること。乙が既知であるときに甲がその属性をもつことを「甲が乙である」という。それに対し

て「甲は乙」は逆に甲が既知であるときその属性の一つに乙があることを示す。

▼甲，乙とも体言。

受ける体言が、下の体言に対して修飾限定の関係に立つことを示す。現代語では「の」が用いられることが多い。甲が人の場合、話者と乙を共有すると考えられるとき「が」を、客観的に述べるときは「の」を用いた。◇『古事記』上・歌謡「太刀が（賀）緒もいまだ解かずて」◇『今昔物語』三一・五「娘一人が方に十人づつなるべし」◇『枕草子』八「大進生昌が家に、宮の出でさせたまふに」◇『平家物語』二「おのが翅（つばさ）を結びつけたる玉章（たまづさ）を」◇「わし（おら）が所」◇「一万円がほど損した」

▽下の形式名詞（「から、ごと、むた、まにま、ため」等）の実質、内容を示す。◇『万葉集』一八〇七「遠き代に有りける事を昨日しも見けむ我（ガ）ごとも念ほゆるかも」◇「食わんがために働く」

▼甲が体言、乙が一定の叙述。体言のところは「何々なのが」と用いて一定のことを表すこともある。◇『古事記』上・歌謡「青山に 日賀（ガ）隠らば ぬばたまの 夜は出なむ」◇『源氏物語』夕顔「優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな」◇『今昔物語』三一・六「其れが極めて見ま欲しく思給へ候ひしかば」◇「食事が済んだら出かけよう」◇「故郷が恋しい」◇「酒が飲めないのはつまらない」◇「勉強するのが好きなんだ」

▽連体形で終止し、余情表現となる文の主語を示す。◇『源氏物語』若紫「雀の子をいぬきが逃しつる」

▽主として、新たな結論を提示したり、提示する事柄を強調したりする。◇『今昔物語』二二・七「年十三四許（ばかり）有る若き女の、薄色の衣一重・濃き袴着たるが、扇を指隠して」◇「雨が降ってきたので傘がいる」◇「君は良くても僕が許さない」

▼甲も乙も叙述。▽因果関係のない、単なる接続を示す。◇『平家物語』二「やうやう日暮れ、月さし出でて、塩のみちけるが、そこはかとなき藻くづ共のゆられよりけるなかに」◇『宇治拾遺物語』三・一五「長門前司といひける人の女二人有りけるが、姉は人の妻にてありける」◇「終わりましたが、帰っていいですか」

▽逆接の関係で接続する。「…けれども」「…のに」。◇『保元物語』下「御弟、天暦の御門にゆずり奉られしが、御後悔あって、かへりつかせ給はん由」◇「持っているが貸さない」

かお

かお（顔）[kao] ← [kafo]

○[kafo] は「買う」[kafu] などと [kaf] を共有する。また貝 [kafi] も同じ。つまり、交易に係わる一連のことばである。交易は協働体の間でなされた。括る [kukuru] の主体が心 [kokoro] であるように、「買う」[kafu] の主体が [kafo] である。つまり協働体で交易を代表するもの、これが「顔」である。次のような例にその跡がある。

◆成員としての人格。それを表すものとしての頭部の前面。それに対して、集団を代表しない個別の人格を表すときは「面（おもて）」という。

※タミル語＜ kavul ＞起源。

▼目、口、鼻などのある、頭部の前面。つら。おもて。容貌。表情◇かおかたち。かおだち。顔つき。顔いろ。◇『日本書紀』神代「良（やや）久しくして一（ひとり）の美人（おとめ）有り。容貌（かほ）世に絶（すぐ）れたり」◇『万葉集』三四一一「多胡（たご）の嶺に寄せ綱延（は）へて寄すれどもあにくやしづしその可抱（カホ）良きに」◇『竹取物語』「大臣これを見たまひて顔は

草の葉の色にて居給へり」◇『伊勢物語』九九「女のかほの下簾よりほのかに見えければ」

▼物の表面。また、一部分だけが外に見えているもの。◇顔を出す。◇『源氏物語』須磨「月のかほのみまもられ給ふ」

▼成員としての人。列座する予定の人。体面。◇顔役。顔がきく。◇かおぶれ。顔役。◇『竹沢先生というひと』長与善郎「自分の好きな二三の顔をそろえたその会によって」◇『二人女房』尾崎紅葉「それくらいの顔になれば、なまじ小官員よりどれほどよいか知れはしません」◇『こゝろ』夏目漱石「『御父さんの顔もあるんだから』と母が又付け加えた」

かがやく

かがやく（輝く）［kagayaku］

※世前期まで「かかやく」と清音で発語されていた。「ひかる（光る）」は、用例「螢が光る」光の強弱には関係ない。「てる（照る）」は一定のところが明るくなることで、「照る月」のように光が強くはないときにも用いる。

※「かげ」と語根［kag］を同じくする言葉で「かがよふ（耀ふ）」と、現代では混合されているが、別語。である。「かがよふ（耀ふ）」は「かげろう（陽炎）」と同じで、光の具合でちらちら、あるいはゆらゆらと見えることである。

◆まぶしいほどに光が放たれる様。その光がまぶしいほどに反射する。

▼まぶしいほど四方に光を発する。

▽きらきらと美しく光る。また、つややかな美しさを発する。◇『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』二「妙頗黎の網のごとくして暎（カカヤケ）る金の躯をば」◇『紫式部日記』寛弘五年九月十一日「少將の君は秋の草むら蝶・鳥などを白銀（しろかね）して作りかかやかしたり」

▽美しさ、はなやかさなどのために、まぶしく感じる。◇『源氏物語』若菜上「この御屏風の墨つきのかかやくさまは」◇『源氏物語』絵合「今めかしうをかしげに目もかかやくまで見ゆ」

▼（まぶしい意味から）照れる。恥ずかしくて顔をほてらせる。顔を赤くして恥ずかしがる。◇『源氏物語』夕顔「いかなる事とも、聞き知りたるさまならねば、なかなか恥ぢかかやかんよりは、罪許されてぞ見えける」◇『源氏物語』総角「見苦しげなる人人もかかやき隠れぬるほどに」

▼（希望などがあって）明るさがあふれる。（名誉や地位などを得て）はなばなしく感じられる。名声・威光を世に示す。（熱意・希望の気持ちを）目や顔にあふれさせる。◇『太平記』十九「其の名は永く止まりて武を九泉の先に耀（かかやか）す」◇『学問のすすめ』福沢諭吉「一時に其の名誉を四方に耀かしたることあり」◇『浮雲』二葉亭四迷「よし思ったところで、華やかな耀（かがや）いた未来の外は夢にも想像に浮かぶまい」◇『早稲田大学校歌』「現世を忘れぬ久遠の理想、かがやくわれらが行手を見よや」◇『妄想』森鴎外「これまでの洋行帰りは、希望に耀く顔をして」◇『故旧忘れ得べき』高見順「自分は輝けるマルクス主義者である」◇『破戒』島崎藤村「敬慕の表情を満面に輝かしながら」◇『天鵞絨』石川啄木「目を輝かして熱心に語った美しい顔が」◇「希望に輝く顔」。「いのち輝く」。

かく（掛く）

かく（掛く、懸く）［kaku］

○「かく」はもののおもてに、何かの意図のもとに、他のものをこすりつけ、食いこませたり削ったりすること。またその結果得られた状態。

◆この言葉は次のように分化した。この二語は現在では分化しているので、見出しを分ける。

物を他の物に食いこませたり、固定したりして、そこに重みのあるものをぶら下げること。その他動詞が「かく（掛く）」、現代では「かける（掛ける）」。自動詞が「かかる（掛かる）」。かけるところに何をかけるか、で多くの意味が派生した。それ以下で◆で示す。

先のとがった物で物の表面を削るようにこすること。またその類似の行為。このときは「かく（掻く）」を宛てる。土器に図形を入れるためにその表面を爪や道具でひっかいて食いこませること。そこから、筆で紙に墨を置き、その形で字を表すことへと展開した。このときは「かく（書く、描く）」を宛てる。

※タミル語＜kokki＞由来。

▲かける（掛ける、懸ける、架ける）：他動詞

◆ものにものをかける。

▼あるものを、他のもの、場所、人などにひっかけてさえとめる。▽つりさげる。◇「帽子を（帽子掛けに）かける」◇「軸をかける」◇『古事記』下・歌謡「斎杙（いくひ）には鏡を加気（カケ）」◇『源氏物語』宿木「この寝殿はまだあらはにて、簾もかけず」

▽竿秤（さおばかり）にぶら下げるところから、はかりにのせる。目方をはかる。◇「はかりにかける」◇『古今六帖』三四四一「かけつればちぢのこがねも数知りぬなぞわがこひのあふはかりなき」

▽鍵や錠、金具でとめる。◇「鍵をかける」◇『狭衣物語』二「夜居の僧参りて妻戸あららかにかけつる音すれば」◇『方丈記』「土居を組み、うちおほひを葺きて、継目ごとにかけがねをかけたり」

▽馬や牛を、車につなぐ。◇『蜻蛉日記』上「すこし引き出でて、牛かくるほどに見通せば、ありつるところに帰りて、見おこせて」◇『大鏡』四「輪つよき御車に、いちもちの御車牛かけて」

▽からだや物の端の部分を他の物の上にのせたり、側面にもたせたりする。つかむように触れること。◇「腰をかける」◇「肩に手をかける」◇『蜻蛉日記』下「すだれに手をかくれば」

▽高い所につるしたり、とりつけたりする。掲げる。また、掲げて人に見せる。◇「看板をかける」◇『枕草子』一六四「風はやきに帆かけたる舟」◇『平家物語』八「主従三人が頸をば、備中国鷺が森にぞかけたりける」

▽（鍋など上からつるしたところから）煮たきをするために、火の上に置く。◇「こんろに鍋をかける」

▼覆うように物事にかぶせる。また、他に支配的な影響を及ぼす。▽物の表面に覆いかぶせる。◇「土（砂）をかける」◇「塩をかける」◇『源氏物語』夕霧「草はの露をかごとにてなほぬれぎぬをかけむとや思ふ」◇『平家物語』大原御幸「御寝所とおぼしくて、竹の御さをに麻の御衣、紙の御衾なんどかけてられたり」

▽湯、水などを浴びせる。また、（自動詞のように用いて）雨や波が物の上にかかる。◇「醤油をかける」◇『枕草子』三〇六「船に浪のかけたるさまなど」◇『日葡辞書「ミヅヲ caqurru（カクル）」

▼事物を一方から他方へ渡す。また、作用を一方から他方へ向ける、または及ぼす。

▽（両端を支えて）間に渡す。糸、なわなどを張り渡す。橋、電線などを架設する。◇「橋をかける」「眼鏡をかける」◇『古今集』三〇三「山がはに風のかけたるしがらみは」

▽他の物の回りに巻きつける。◇『万葉集』九〇四「白たへのたすきを可気（カケ）」◇『平家物語』一二「頸に縄をかけてからめ」

◆ものにことをかける。

▼人に何かのことをかける。

▽神仏や人やものに、希望、生命などのことを託する。あてにしてまかせる。「願をかける」◇『東大寺諷誦文平安初期点』「渋き菓、苦き菜（くさびら）を採（つ）みて危命を係（カケ）」◇『平家物語』三「官加階にのぞみをかけ」

▽医者に診察や治療を頼む。◇「医者にかける」◇『滑・浮世風呂』二「功者な噂だからかけて見たが」

▽あることが人に及び、影響を与える。あるものに支配的な影響を及ぼす。◇「麻酔をかける」◇「催眠術をかける」◇『宇津保物語』俊蔭「いささかなる法をつくりかけつ」

▽情愛、恩恵などを他に及ぼす。また、目下の者に祝儀を与える。◇「情（哀れみ）をかける」◇『源氏物語』柏木「咎めきこえさせたまわむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」◇『落窪物語』一「我に露あはれをかけば」

▽好ましくないこと、負担となることなどを与える。◇「苦労（迷惑・損害）をかける」◇「税（負担）をかける」◇『源氏物語』蜻蛉「露のあだなをわれにかけめや」◇『日葡辞書』「ハヂヲcaqunu（カクル）」

▽（刀、きば、ひづめなどで）傷つけたり殺したりする。◇「子供を自らの手にかける」◇『平家物語』七「源氏の馬のひづめにかけじとて」

▼量に数をかける。

▽掛け算をする。◇「三に五を掛ける」

▽数量、力、重みなどをあわせ加える。◇「圧力をかける」◇『浄・冥途の飛脚』中「手金とては家屋敷家財かけて十五貫目」

▽費用、時間、人手などを集めて用いる。◇「時間と金をかけて作る」

▽（建物、船、山などに）火をつける。◇『平家物語』四「白河の在家に火をかけて焼きあげば」

▼ものに作用を及ぼす。

▽物の上に道具などを覆って作用を及ぼす。◇「かんな（雑巾）をかける」

▽ある作用を相手に向ける。心をそれに向ける。めざす。◇『万葉集』九九八「阿波の山懸（かけ）て漕ぐ舟」◇『源氏物語』賢木「月のすむ雲井をかけてしたふとも」◇「ことばをかける」◇「心をかける」◇「電話をかける」◇『古今集』二五四「思ひはかけじうつろふ物を」

▽とがった物や、囲み込むような物で捕えて、自由に動けないようにする。特に、獣、鳥、魚などを、わな、網、針などで捕える。◇「大物をかける」◇『石山寺本金剛般若経集験記平安初期点』「皆獄に繋（カケ）られて惶り懼く」◇『平家物語』一一「右衛門督を熊手にかけてひきあげ奉る」

▽仕組んだ計画にはめこむ。◇「策略（罠）にかける」◇「暗示にかける」◇『大乗掌珍論承和嘉祥点』「他を誣（かこ）ち罔（カケ）て言はく」◇『随・独寝』下「惣じて、女郎と女郎云合て文をとりやりして、客をかくる事あり」

▼他の物とつながりをもたせる。▽ことばに出して言う。ことばに表わして関連づける。◇『万葉集』三三六二（或本歌）「忘れゆく君が名可気（カケ）て吾をねし泣くる」◇『万葉集』三七八七「妹が名に懸けるたる桜花咲かば　常にや恋ひむいや毎年（としの）は）に」◇『方丈記』「ことばにかけて言ひ出づる人だになし」

▽関係づけて言う。かこつける。◇『古今集』仮名序「さざれ石にたとへ、筑波山にかけて君をねがひ」

▽他の物と比べる。◇『伊勢物語』二三「筒井つの井筒にかけ

しまろがたけ」

◆ことにものをかける。

▼何かのことに金などをかける。

▽勝負事などで、負けた者が勝った者に金品などを払うことを約束する。また、問題を解いた者、くじに当たった者、勝った者、ある要求をみたした者などに賞を出す。◇「賞金をかける」◇『宇津保物語』内侍督「なにをかくべからん。まさより、むすめ一人かけん」

▽代償あるいは保証としてさし出す。◇「命（首）をかけて誓う」◇『大和物語』八四「よろづのことをかけてちかひけれど」

▽一定期間の後に代金をもらう約束で、物を売る。◇『咄・醒睡笑』四「やがて返弁に及びなん、この度はかけられよ」

▽契約して金銭を払う。◇「保険をかける」

◆ことにことをかける。

▼ある場、ある物、人などのうちにあることをとり入れる。▽心や耳目にとめる。◇「心にかける」◇「歯牙にもかけない」◇『万葉集』四四八〇「かしこきや天（あめ）のみかどを可気（カケ）つれば」◇『平家物語』四「目にかけたる敵（かたき）を討たずして」

▽権威のあるものや、大切なものをひきあいに出して約束する。◇『源氏物語』玉鬘「松浦なる鏡の神をかけてちかはむ」

▽問題になるものとして裁判、会議などに持ち出す。また、材料を機械などで処理する。◇「裁判（会議）にかける」◇「ミシンにかける」

▽ある場所、時期から他の場所、時期までに及ぼす。また、ある時期の初めに至らせる。◇「春から夏にかけて咲く」◇「東山通から河原町通りにかけての丸太町通りの古本屋」◇『源氏物語』総角「来し方を思いいづるもはかなきを行く末かけてなにたのむらん」◇『古今集』五「梅が枝に来ゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪は降りつつ」

▽ひとりで二つ以上の働きや役目をする。兼ねる。◇『伊勢物語』六九「国の守（かみ）、いつきの宮のかみかけたる」

▽（「罫（け）かく」の形で）碁盤の目や行間の線などを引く。◇『源氏物語』鈴虫「けかけたる金の筋よりも、隅つきの上に輝くさまなども、いとめづらかなりける」

▽張りめぐらしたり、組み立てたりして作る。◇「巣をかける」◇「わなをかける」

▽芝居、演芸、見世物などを興行する。また、ある出し物を上演する。◇「舞台にかける」

▽機械、道具などにある働きをさせる。◇「レコードをかける」◇「エンジンをかける」

▽ある語句の働きを、他の語句に及ぼす。また、掛け詞を用いる。◇『古今集』四六八「『は』をはじめ、『る』をはてにて、『ながめ』をかけて時の歌よめ」

▽（多く「…にかけては」「…にかけると」の形で用いる）関する。関係のある事柄となる。◇「速さにかけては劣らない」◇『滑・浮世床』初「そこにかけちゃアしらくらなし」

▲（補助動詞）他の動詞の連用形に付けて補助的に用いる。▽上の動詞の表わす動作や作用を、ある物に向ける意を表わす。◇「話しかける」◇「吹きかける」◇『竹取物語』「家の人どもに物をだに言はんとて、言ひかくれども、こととともせず」

▽上の動詞の表わす動作や作用を、始めそうになる。また、始めてその途中である意を表わす。◇「書きかける」◇「読みかける」

▲かかる（掛かる、懸かる、架かる）…自動詞

◆ものにものがかかる。

▼ある場所、ある物、人などについて事物や人が支えとめられ

る。▽ある場所に物の一部がついて垂れさがる。◇「帽子（服）がかかっている」◇『源氏物語』藤裏葉「横たわれる松の、小高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならず、おもしろし」◇『古今集』七七三「今しはとわびにし物をささがにの衣にかかりわれをたのむる」

▽倒れないように物や人に支えられる。もたれる。すがる。よりかかる。◇『蜻蛉日記』上「心ちいと重くなりまさりて、車さしよせて乗らんとて、かきおこされて、人にかかりてものす」◇『源氏物語』行幸「御脇息にかかりて、弱げなれど」

▽世話になる。助けてくれるものとして頼みにする。たよる。◇「子にかかる」◇『大和物語』一四二「女親（めおや）はうせ給ひにけり。継母の手にかかりていますかりければ」

▽医者に診察、治療をしてもらう。◇『仮・竹斎』下「へたの医師にかかりつつ」

▽船がいかりをおろしてまたは岸につながれてとまる。停泊する。◇『今昔物語』二六・一〇「船〈略〉懸（かかり）たる方にも无（なき）澳（おき）に出にければ」

▽開かないように、鍵や錠でとめられる。◇「鍵がかかる」

▽（竿秤（さおばかり）にぶら下がるというところから）はかりにのせられる。また、物の重さがはかりの目盛りに現われる。「重過ぎてはかりにかからない」◇『日葡辞書』「ヒャクメ cacatta（カカッタ）」

▽鳥がとまる。◇『日葡辞書』「タカガキニ cacaru（カカル）」

▽高い所に掲げられる。日や月が空にあることにもいう。◇「月が空に懸かる」◇『大鏡』二「よろづのやしろに額のかかりたるに」

▽（鍋など上からつるしたところから）煮たきするために、火の上に置かれる。◇「鍋のかかったこんろ」

▼事物が他の物にかぶさる。また、ある影響が及ぶ。▽おおいかぶさる。また、おおうようになびく。◇「道に落葉がかかる」◇「ケチャップのかかったオムレツ」◇『万葉集』三三二五「つのさはふ石村（いはれ）の山に白たへに懸れる雲はわが大君かも」

▽雨、雪、涙などが落ちてきてあたる。また、水や泥がはねたりしてあたる。◇「つばきがかかる」◇『大和物語』一六八「蓑も何も涙のかかりたるところは」

▽神が乗り移る。憑（つ）く。◇『日本書紀』仲哀八年九月（熱田本訓）「特に神有（まし）て、皇后に託（カカリ）て誨（をしへ）まつりて曰く」

◆ものにことがかかる。

▼ある場所やある物、人などの範囲に事物がとり入れられる。また、それをめぐって論じたり争ったりするものとして持ち出される。

▽人の心や目などにとまる。◇「気（心）にかかる」◇『万葉集』八〇二「眼交（まなかひ）にもとな可可利（カカリ）て安眠（やすい）し寝（な）さぬ」

▽あるものの支配的な影響が及ぶ。◇「催眠術にかかる」

▽情愛、恩恵などが及ぶ。◇『風雅物語』一八一一「佐保川の深き恵みのかかりける世に」

◆ことにものがかかる。

▽とがったもの、巻きつくようなものなどにひっかかる。特に、獣、鳥、魚などが、わな、網、針などにとらえられる。◇「雑魚がかかる」◇『伊勢物語』六三「むばらからたちにかかりて、家に来てうちふせり」

▽仕組んだ計画にはまる。◇「策略（罠）にかかる」◇「暗示にかかる」

▽（「手にかかる」の形で）傷つけられたり、殺されたりする。◇『平家物語』一一「わが身は女なりとも、かたきの手にはかか

るまじ」

▽話題や議題として出される。◇『日葡辞書「ヒトノクチ、または、コトバニ cacaru（カカル）」

▽賞品、賞金などが出される。◇「賞金のかかったお尋ね者を捕える」

▽代償あるいは保証とする。◇「ことの成否に首（命）がかかる」

▽金銭を支払う契約がなされる。◇「死んだ男には多額の保険がかかっていた」

▽強制する力、重み、また色あいなどが加わる。◇「税金がかかる」◇「圧力（責任）がかかる」◇『俳・奥の細道「痩骨の肩にかかれる物先（まづ）くるしむ」

▽費用、時間、人手などが入用である。必要である。◇「時間と金がかかる仕事だ」◇『滑・浮世風呂』二「第一まア手がかからねへで、貧乏人には能（いい）利方だ」

▽好ましくないこと、病気、災害、刑罰、迷惑などが身に及ぶ。ふりかかる。◇「迷惑（損害）がかかる」「嫌疑がかかる」◇『大唐西域記巻十二平安中期点「我か子疾に嬰（カカレ）り」

◆ことにことがかかる。

▼ときやところが、及ぶ。◇『万葉集』八〇二「何処より　来りしものそ　眼交（まなかひ）に　もと懸り」◇『源氏物語』若菜下「よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりてかたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞしたまへる」◇『枕草子』二三「『これが末いかに』と問はせたまふに、すべて、よるひるに心かかりておぼゆるもあるが」

▽能楽で、謡曲が拍子に合わない部分から合う部分へ移る。拍子に乗る。現在では、主に謡（うたい）や囃子（はやし）が勢いづいて力を強めたり、テンポを速めたりするのにいう。◇『風姿花伝』一「此年の比よりは、はや、やうやう声も調子にかかり、能も心づく比なれば」

▽音曲と所作とがうまく合う。◇『難波土産』発端「惣して浄るりは人形にかかるを第一とすれば」

▲（補助動詞）しかける。◇「やっととりかかれる」◇『平家物語』四「平等院の問の内へひき退きて、敵おそいかかりければ」

かく（掻く）

かく（掻く、書く）[kaku]

○「かく」はもののおもてに、何かの意図のもとに、他のものをこすりつけ、食いこませたり削ったりすること。またその結果得られた状態。

◆この言葉は次のように分化した。

物を他の物に食いこませたり、固定したりして、そこに重みのあるものをぶら下げること。その他動詞が「かく（掛く）」、現代では「かける（掛ける）」。自動詞が「かかる（掛かる）」。そこからさらに多くの意味が派生した。

先のとがった物で物の表面を削るようにこすること。またその類似の行為。このときは「かく（掻く）」を宛てる。土器に図形を入れるためにその表面を爪や道具でひっかいて食いこませること。そこから、筆で紙に墨を置き、その形で字を表すことへと展開した。このときは「かく（書く、描く）」を宛てる。

※この二語は現在では分化しているので、見出しを分ける。

※タミル語＜ kokki ＞由来。

▼手、爪、またはそれに似た道具でものの表面をこすったりする。

▽爪を立てる。◇「かゆいのでおもわず掻いてしまった」◇『万葉集』九九三「月立ちてただ三日月の眉根掻（かき）気（け）長く恋

ひし君に逢へるかも」◇『万葉集』二五七五「めづらしき君を見むとこそ左手の弓執る方の眉根（まよね）掻きつれ」

▽腕や手首を上下、または左右に動かす。また、鳥が羽を上下に動かす。◇「水を掻いて泳ぐ」◇『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』二「其の身手を運（カキ）、足を動かし」

▽左右へ押し分ける。◇『万葉集』一五二〇「朝凪にい可伎（カキ）渡り　夕潮に　い漕ぎ渡り」

▽櫛（くし）で髪をすく。くしけずる。◇『万葉集』四一〇一「朝寝髪可伎（カキ）もけづらず」

▽琴の弦をこするようにしてひく。弾じる。◇『古事記』下・歌謡「琴に作り加岐（カキ）ひくや」

▽（爪を立てるようにして）物にとりつく。かじりつく。◇『古事記』下・歌謡「倉梯山を嶮（さが）しみと岩迦伎（カキ）かねて」

▽物をけずる。刃物を手前に動かして切り取る。◇「かつおぶしをかく」◇『平家物語』九「頸をかかんと甲（かぶと）をおしあふのけて」

▽熊手などで、集め寄せる。◇『俳・曠野』七「落ばかく身はつぶね共ならばやな」

▽箸などを手前に動かして食物を口に入れる。◇『平家物語』八「猫殿は小食におはしけるや。きこゆる猫おろしし給ひたり。かい給へ」

▽田畑などを耕やす。すきかえす。◇「代をかく」

▽粉などを水に入れてこねまぜる。◇「からし（粉）をかく」

▽払いのける。◇『玉葉』五八〇「頃もうし初かりがねの玉章にかきあへぬものは涙なりけり」

▽（かきよせるように）報酬として、または、賭け事で金を取る。◇『浄・冥途の飛脚』二「高駄賃かくからは」

▼形や音に現わす。▽（汗、いびきなどを）からだの外に出す。◇「彼は大きないびきをかく」◇『平家物語』五「高いびきをかいて臥したりけるが」

▽（恥や、できものなどを）身に受ける。◇「恥をかいた」◇『東大寺諷誦文平安初期点「疥（はたけ）掻（カキ）て目所も无く腫れ合ひて」◇『平家物語』四「おりのべを一きれもえぬ我らさへ薄恥をかく数に入るかな」

▽（顔つきなどに）ある様子を現わす。◇『浄・女殺油地獄』上「お慈悲お慈悲とほるづらかく」◇『雑俳・柳多留』四「小侍女郎の中でべそをかき」

▽ある事をしてやる。また、給金を与える。◇『浮・西鶴織留』五「こっちから賃かきて奉公いたすになりぬ」

▽絵や図をえがく。◇「図を正確に描こう」◇『古事記』中・歌謡「眉画（まよが）き濃（こ）に加岐（カキ）垂れ」

▽文字をしるす。また、文章に作る。著作する。◇『万葉集』二四三三「水の上に数書く如きわが命　妹に逢はむと祈誓（うけ）ひつるかも」◇『竹取物語』「うちなきてかくことばは」

かく（欠く）

かく（欠く、缺く、闕く）[kaku]

○あるべきものがなく、真でないこと。

◆本来備わっているべきものがない、またその状態にすること。「みつ（満つ）」の対義語。

▲他動詞▼物の一部分をこわす。また、一部分を削り減らす。◇「花瓶の口をかく」◇『万葉集』三二三六「千歳に　闕くる事無く万歳に　あり通はむと」

▽不足する。欠如する。「勇気（情熱）を欠く」◇『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』六「日と月と星宿と常の度において虧

（カク）こと無けむ」◇『大唐西域記長寛元年点』一「釈迦菩薩弱齢なっしとき恂（カイ）たまへる歯あり」

▽そろっているはずのもの、続くはずのものの一部を抜かす。◇『蜻蛉日記』上「四十九日のこと、たれもかくことなくて、家にてぞする」

▽ぬかしておろそかにする。◇「義理を欠いてしまった」◇『徒然草』一七五「おほやけ・わたくしの大事をかきて、わづらひとなる」

▲かける（欠ける・缺ける・闕ける）：自動詞

▼物の一部分がこわれる。一部が削られて取れる。

▽太陽や月の一部が見えなくなる。◇『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』八「日月も蝕（カケ）て光り無けむ」

▽度合、数量などが減って十分でなくなる。◇「目方が欠ける」◇「熱意（能力）に欠ける」◇『徒然草』一二二「文・武・医の道、誠にかけてはあるべからず」

▽条件を満たさない。◇「この仕事に適性を欠く」

▽そろっているはずのもの、続くはずのものの一部が抜ける。◇「五人兄弟の一人が欠けた」◇『徒然草』八二「章段のかけたる事」

かげ

かげ（影、陰）[kage]

○うつりかわる光が生みだす明るいところと暗いとこと。

※語根[kag-]は「かぎろい（陽炎）」、「かがよう（輝よう）」、「かがみ（鏡）」の語根と同源。「かかやく（輝く）」とは別。

◆刻々変化する光が生みだす明暗、それによって生じる様々の状態。光が生みだす輝かしいもの。また光を遮ることによる影。光があたらず暗いところ。

※「てる（照る）」は光が当たり続けること。また「ひかる（光る）」は他よりも際だって明るくなる力そのもの。

▼ひかり。「影」をあてる。▽日、月、星や、ともし火、電灯などの光。◇『万葉集』四四六九「渡る日の加気（カゲ）に競（きほ）ひて尋ねてな清きその道（仏道）また遇はむため」◇『源氏物語』夕顔「御灯明のかげほのかに透きて見ゆ」

▽光となる存在。威光をもつ人の姿。◇『古今集』一〇九五「つくばねのこのもかのもにかげ（陰）はあれど君がみかげにます影はなし」

▽光が当たって見えるものや人の姿。目に映ずる実際の物の姿や形。◇『万葉集』四〇五四「ほととぎすこよ鳴き渡れ灯火を月夜にそなへそのかげも見む」◇『万葉集』四一八一「さ夜ふけて暁月（あかときづき）に影見えて鳴くほととぎす」

▽鏡や水の面などに物の形や色が映って見えるもの。◇『万葉集』四〇五四「池水に可気（カゲ）さへ見えて咲きにほふ馬酔木（あしび）の花を」

▽心に思い浮かべた、目の前にいない人の姿。おもかげ。◇『万葉集』一四九「ひとはよし思い止まんと玉鬘影に見えつつ忘らえぬかも」◇『源氏物語』桐壺「母みやす所も、かげだにおぼえ給はぬを」

▽亡き人の霊。魂。◇『源氏物語』若菜上「亡き親のおもてを伏せ、かげをはづかしむるたぐひ」

▼ものが光をさえぎった結果、光と反対側にできる、その物体の黒い形。投影。影法師。「蔭」をあてることもある。◇『万葉集』一二五「橘の蔭ふむ路の八ちまたに物をそ思ふ妹に逢わずて」

▽それとなくそれにいつも付き添っているもの。◇『古今集』六一九「よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき」

▽やせ細った姿。やつれた姿。◇『古今集』五二八「恋すれば

わが身は影と成りにけりさりとて人にそわぬものゆゑ」

▽実体がなくて薄くぼんやりと見えるもの。◇『竹取物語』「このかぐや姫、きとかげになりぬ」

▼光、風、雨、人の視線などの当たらないところ。暗いところ。▽物にさえぎられて光線または風雨などの当たらないところ。◇「山の陰」「家の陰」◇『古事記』下・歌謡「金門（かなと）加宜（カゲ）」

▽物のうしろ。後方。◇「袖の陰」「屏風の陰」◇『源氏物語』夕霧「ゐざりいる人のかげにつきて入り給ひぬ」

▽人目につかない、隠れた場所。表立たない所。また、その人の居合わせない場所。◇「陰でうわさする」◇『更級日記』「父（てて）は〈略〉かげに隠れたらむやうにてゐたるを見るも、頼もしげなく」

▽人やもの恩恵。また、助力したり守ってくれたりする人。めぐみ。◇『源氏物語』若菜上「さるべき人に立ちおくれて、頼むかげどもに別れぬる後」

▽物事の裏面。◇「犯罪のかげに女あり」

▽（翳）表にはっきりとは現われないが、何か暗さを感じさせるような、人の性格や雰囲気。

◇「秘密のかげ」「かげのある人」

【熟語】（影）「かげが薄（うす）い」目立たない存在になっている。また、落ちぶれかけている。落ち目である。何となく元気がなく、衰えた様子である。死神にとりつかれたように見える。「かげが射（さ）す」（「かげ」は光の意）光が照らす。（「かげ」は姿の意）「…の影がさす」の形でその人の姿、影法師などがちらっと現われる。光が物にさえぎられて、その物の黒い形ができる。物事に、あるかすかなしるしが現われる。多く、不安、不吉の徴候にいう。「死（老い）の影がさす」「かげ靡（なび）く星（ほし）」（太政大臣、左大臣、右大臣を三台星に比し、これに転ずべき官であるところから）「ないだいじん（内大臣）」の異称。「かげの形に」物に必ず影が付き添うように、常に伴って離れない様子。「かげの如（ごと）く」やせ細ったさま。やつれた様子。◇『大和物語』一六八「その人にもあらず、かげのごとくになりて」　姿が薄くぼんやりとしているさま。◇『平家物語』七「影の如くなるもの御前に参じて」常にそばを離れることがないさま。◇『曾我物語』四「五郎も、かげのごとく、寸もはなれずして」「かげの内閣（ないかく）」（英 The Shadow Cabinet の訳語）イギリス野党の最高指導部のこと。一五人の議員で構成されており、各員の担当項目が決まっていて、政権を握れば直ちに内閣となりうる。「かげの病（やまい・びょう）」＝かげ（影）の煩（わずらい）「かげの煩（わずらい）」熱病の一種。高熱を発した病人の姿が二つに見え、どちらが本体でどちらが影かわからなくなるという。影の病。影。かげやまい。離魂病。「かげ踏（ふ）むばかり」影を踏みそうなほど。きわめて近いことのたとえ。◇『後撰和歌集』六八三「立寄らば影ふむ許（ばかり）近けれど」「かげを致（いた）す」かげ（陰）をする「かげを畏（おそ）れ迹（あと）を悪（にく）む」（自分の影と足跡から逃れようと走り続けて、遂に死んだという「荘子-漁父」に見える故事から）自分の影におびえる。自分の心の中で、勝手に苦悩をつくりあげ、心を平静にできないことのたとえ。「かげを落（お）とす」光を投げかける。光がさしている。◇「夕日が影を落としていた」光を受けた物が、その影法師を他の物の上に現わす。料理で、汁物などに醤油を少しさす。「かげを隠（かく）す」身をひそめる。姿を隠す。「かげを潜（ひそ）める」表立った所から姿を隠す。また、比喩的に、物事が表面から消える。「彼はすっかり影をひそめている」「思慮も分別も影をひそめてしまった」

【熟語】（陰、蔭）「かげで糸（いと）を引（ひ）く」操り人形つ

かいが陰で糸を操って人形を動かすように、人目につかない裏面にいて、物事を支配したり、他人を行動させたりする。「かげで舌を出す」その人のいない所で悪口を言ったり、笑ったりする。「かげに居て枝を折る」恩を仇（あだ）で返すことのたとえ。「かげに隠（かく）す」かばって世話をする。庇護する。◇『源氏物語』若菜上「かたがたにつけて御影にかくし給へる人」「かげになり日向（ひなた）になり」人に知られない面においても、表立った面においても。絶えずかばい守るような場合に用いることが多い。陰（いん）に陽に。「かげの朽木（くちき）」物陰にある朽木。人に認められないまま老いて朽ち果てるたとえ。「かげの声（こえ）」必要な人以外には聞こえないように知らせる声。ラジオ、テレビのクイズ番組などで、解答者にはわからないように、視聴者にだけ答を知らせる声。「かげの人（ひと）」表面に出ないでいる人、また裏であやつる実力者などをいう。「かげの舞（まい）」見る人のいない所で舞うこと。骨折りがいのないことのたとえ。「かげの灸（やいと）」紙にその人の姿を描いたり、その人の身長を記したりして、これに灸をすえて病気を直すこと。かげきゅう。「かげへ（に）回（まわ）る」その人に知られないような所に行って裏からこっそりと物事をさぐったり、あやつったりすることにいう場合が多い。表立った立場から、目立たない立場に移る。

かしこい

かしこい（畏い、賢い、恐い）[kasikoi] ← [kasikosi]

○もののちからが、おそれるほどにおおきいこと。

◆上代は、自然の霊力や神の力への畏敬の念を表す。中古以降、さらに、人や生きもの、また存在するものの力が畏敬するほどに優れていることをあらわす。さらにまた心の働きについても表し、このときは「賢い」をあてる。

※タミル語＜ketti＞由来。

▼おそるべき霊力、威力のあるさま。また、それに対して脅威を感ずる気持を表わす。◇「おそるべきだ」◇「おそろしい」◇『日本書紀』仁徳二二年正月・歌謡「さ夜床を並べむ君は介辞古耆（カシコキ）ろかも」◇『万葉集』四三二一「可之古伎（カシコキ）や命（みこと）かがふり」

▽おそれ敬う気持を表わす。もったいない。◇「おそれ多い」◇『万葉集』九二〇「天地の神をそ祈る恐（かしこく）あれども」

▽畏敬の意味は軽く、「恐縮ですが」の意の挨拶語として用いる。◇『源氏物語』花宴「かしこけれど、この御前にこそはかげにもかくさせ給はめ」

▽国柄、血筋、身分、人柄などがすぐれている。尊い。徳が高い。尊敬すべきだ。◇『竹取物語』「昔かしこき天竺の聖此の国にもて渡りて侍りける」

▼（賢）才能、知能、思慮、分別などの点ですぐれている。◇「この点彼は賢く行動した」◇『源氏物語』桐壺「弁もいと才かしこき博士にて」

▽物の品質、性能などがすぐれている。すばらしい。◇『竹取物語』「かしこき玉の枝をつくらせ給ひて」

▽人や事柄が尊重すべきほどに重要なこと。それを大切にし、慎重に思う気持を表わす。◇『枕草子』八七「こもり、いとかしこうまもりて、わらはべも寄せ侍らず」

▽抜け目がない。巧妙だ。◇『源氏物語』東屋「猶一わたりはつらしと思はれ、人には少しそしらるとも、ながらへて頼もしき事をこそと、いとまたくかしこき君にて思とりてければ」

かしら

かしら（頭）[kasira]

○全体の中でいちばん上の部分。

◆人間や動物の頭。ものの集まりで方向性があるとき、最上部や最先端。そして、集団の統率者や統領。

※タミル語＜katir（穀物の穂）＞由来。

▼人や動物の首から上の部分。また、それに類似するもの。▽人や動物の頭部。首部。あたま。こうべ。◇「頭、右（左）！」◇『万葉集』四三四六「父母が可之良（カシラ）かき撫で幸くあれていひし言葉（けとば）忘れかねつる」◇『源氏物語』葵「人間（ひとま）に、からうじてかしらもたげたまへるに、ひき結びたる文御枕のもとにあり」

▽動物の頭部。◇『枕草子』四一「かしらあかき雀。斑鳩の雄鳥。たくみ鳥」

▽髪の毛。頭髪。◇『古今集』一〇〇三「かしらはしろくなりぬとも」

▼集合体についていう。▽物の最も上の部分。また、最も先の部分。うえ。さき。◇『古今集』四三九「をみなえしといふいつもじを、くのかしらにおきてよめる」

▽人の集団の最上位にいて、それを統率する人。統領。頭目。◇『今昔物語』七・三〇「山竜見レバ、首（かしら）タル大官一人在（まし）マス、高キ床ニ坐セリ」

▼数詞で用いる。▽人や動物などを数えるのに用いる。◇『宇治拾遺物語』七・一「もし、この宣旨をそむきて、鹿の一頭（かしら）にてもころす者あらば、すみやかに死罪に行わるべし」

▽仏像などを数えるのに用いる。◇『宇治拾遺物語』九・五「『まさゆきが仏やつくりたる』と問へば〈略〉『五頭（かしら）つくり奉れり』といふ」

▽烏帽子（えぼし）を数えるのに用いる。◇『義経記』七「一挺の笈（おひ）には折らぬ烏帽子十頭（かしら）、直垂、大口などをぞ入れたりけり」

かぞえる

かぞえる（数える）[kazoeru]←[kazofu]

○「かず（数）[kazu]」と「あう（合ふ）[afu]」が複合して[ua]が[o]に転じた。言葉の構成からは「数」が先行する。しかし、人間の数をつかむ過程からは「数える」という行為が先行する。数えることと平行して「量を量る」という行為が形成された。

◆「数える」は「数を合わせる」、つまり一つ二つと数を合わせてゆく意味である。その意味するところを、『青空学園』―『数学対話』―「量と数」に述べられていることを再構成し、確認する。

人間が力をあわせて働きはじめたとき、言葉が獲得され、考えることがはじまり、それを土台として量の意識が形成される。あの山の麓まで行ったときとあの川辺まで行ったとき、体の疲れ方が違う。それは一体何が違うのだろうか。その違いをもたらす根拠として山の方が「遠い」、川の方が「近い」。さらに進んで疲れの違いをもたらす要因としての「遠さ」が認識されていく。量はまず比較にはじまる。

さらに「高い―低い：高さ」が知られ、どこかで「遠さ」と「高さ」に共通する「長さ」へ飛躍していったに違いない。ここに至るのに行ったどれだけの時間がかかったことだろうか。耕す土地の広さもまた、仕事の量として認識されていったのだろう。「広い―狭い：広さ」である。入れものに入る水の量から、容器の「大きい―小さい：大きさ」が知られ、この量がまた、岩の「大きさ」と

同じ量であることがどこかで認識されたのだ。「広い」という言葉はすでに万葉集に出てくる。「天地は比呂之（ヒロシ）といへど」（『万葉集』八九二）。それに対して量としての「大きい」は比較的新しい。室町時代以降よく使われるようになった。それだけ抽象的である。

このように人間は身体の感覚を基礎として比較を可能にする根拠として量をつかむ。より一般な量を抽象していった。それにしても「広い―狭い」の本質を「広さ」と言い、あまり「狭さ」とは言わない。「高さ」とは言うが「低さ」とは言わない。「短さ」、「小ささ」とも言わない。これは、はるかな昔から、人間が量の方向性と増大の方向を意識していたことを示している。

ただし、それを「量」一般として認識するのはまた別のことがらであり、長い年月を要した。結論的に言えば、量そのもののは近代においてはじめて認識された。それとともに量にもいろいろな種類のあることが改めて認識された。

もう一つ人間にとって大切な働きが「かぞえる」ということである。「かぞえる」という言葉は古い。「か」は「十日（とうか）」「二十日（はつか）」に今も生きている「か（日）[ka]」を「なす[su]」から[kazu]が形成され「数える」になることが関係ありそうである。つまり、「かぞえる」のはじまりは「日にち」を数えることと関係しているのではないだろうか。植物の生長を待ってその実を採集する文明では、日にちが過ぎていくことは大変重要なことであった。「出でて行きし日を可俗閇（カゾヘ）つつ」（『万葉集』八九〇）。「かぞえる」ことから「かず」が抽象され、自然数が獲得されるまでには長い月日が必要だった。このように日にちの運行の認識が数えることのはじめかも知れない。序数としての自然数である。

「多い」という言葉も古い。「恋しくの於保加流（オホカル）我は見つつ偲（しの）はむ」（『万葉集』四四七五）。「おおい」は「命長ければ、辱おほし」（『徒然草』）のように「何々が―多し」の形で用いられてきた。この例では「辱が大きい」のではなく「辱をかくことが多い」という意味である。このように「多い―少ない」は「はかる」ものではなく、回数や個数を「かぞえる」ものである。

序数から個数に対応する基数へは、どのような過程を経たのだろうか。長い長い時間が経過した。それを子供は成長の過程で反復する。3枚の皿に3個のみかんをひとつずつおいていけば、皿が余ったり、みかんが余ったりすることなくちょうど1枚の皿にみかんが1つずつおける。このような経験のなかから3枚の皿と3個のみかんは何かが「同じ」だ、と気づく。何が同じなのかと考えて「個数」が同じだ、と知っていく。「3枚の皿」と「3個のみかん」が同じ「3」であることが分かるとき人間は自然数「3」を知る。

序数から基数への過程は平行して深まった。「数える」という「数を合わす」行為のうちにすでに数がつけられたものを合わせてゆくという基数の考えがはじまっている。このような個数の発見は、実際はもっと生産に直結した場で起こったに違いない。毎朝放牧した羊と、夕べに帰ってきた羊が同じだけあるのかどうか、数そのものを知らない段階ではどのように判断するか。羊が小屋を出るたびに石をひとつ並べていく。帰ってきたときは、羊が小屋に入るたびに石をひとつ除く。こうしてちょうど最後の1頭が戻ったとき最後の石が除かれれば、増減がなかったことがわかる。石を並べることが長く続いた後、並べられた石の個数としての数を発見したのだ。

具体的なものを数えることが長く続き、そのうえに「数えているものは何なのか」を問い、はじめて「数」を見出す。この「数」と順序としての「数」が同じ言葉でなされうることの発見もまた、

長い時を要した。これが基数としての（自然）数である。
このようにして人間のものになった数が、親から子へと伝えられて、子供は数を身につける。大人からの伝達の作用によって、人類の長い歴史が凝縮されて、子供のなかで反復される。
※「数える」、「かず」はタミル語が入るよりもはるかに古い。おそらく、世界を分節してつかむ言葉の誕生し豊かになる過程と平行して，量と数の認識とその分節も深まった。、
◇『万葉集』八九〇「出でて行きし日を可俗閇（カゾへ）つつ」
▼一つ一つ並べあげる。列挙し数えあげる。◇「村の名士に数えられる」◇『源氏物語』夕顔「なにがし、これがしとかぞへしは」
▽ものの数に入れる。ある範囲内の一つとして数に入れる。数え入れる。◇『源氏物語』関屋「なほ親しき家の中にはかぞへ給ひけり」
▼あれこれとはかり考える。商量する。◇『源氏物語』胡蝶「こころざしのおもむきに随ひて、あはれをもわき給へ。労をもかぞへ給へ」
―【かず（数）】
▼一、二、三…など順序を示す呼び名。序数。ものの集まりの量を、もの一つを基準に量った数。基数。
▽いくつか◇「数ある中から君を選んだ」◇『栄花物語』鳥の舞「今我等かずの仏を見奉りつ。これおぼろけの縁にあらず」
▽ものとして認め基数に入れることが出来ると判断されること。
◇『源氏物語』須磨「たかき人は、われの何のかずにもおぼさじ」
◇「ものの数にも入らない」

かた（型）

かた（型）[kata] ← [koto]

○いくつかのものを分節してとらえ、そこに同じことを見出すとき、その内容をかた（型）と表す。同じとこと（言）としてとらえるちからは、人がこの世界からさち（幸）を受け取るその方法においてわかる。混沌とし茫漠とした状態のなかに何かのものが明確に分節され形成され、一定の共通性を見出すとき、その共通性をかた（型、[kata]）と表す。
※こと（[koto]）とかた（[kata]）はともにタミル語katan¿起源。
◆ことと同じく、原義は「義務、任務、約束である。ここから一定の形式をもちゆるがないものととらえられたことが「型、形、像」になった。
▼義務、任務、約束
▽借りた金が返せない場合の保証として相手に渡す約束をした物。抵当。担保。◇「カメラをかたに金を借りる」
古代は「こと」であった。
◇『万葉集』四一一六「つか（仕）ふるくに（国）の　とし（年）のうちの　ことかた（結）ね持ち」◇『万葉集』四一一六「あ（吾）がまつきみが　こと終わり　かへりまかりて」
▼（型）いくつかの形の共通性を取り出し示す。◇『宇治拾遺物語』四九八「したうづのかたをとりにおこせて侍りければ」◇「古い型を破る」◇「柔道の型」「血液型」「新しい型の自動車」
▼（形）分節されたものの具体的なありさま。◇『日本書紀』雄略四年八月・歌謡「汝（な）が柯徃（カタ）は置かむ蜻蛉島大和（あきづしまやまと）」◇『落窪物語』三「白銀を筆のかたに作りて」◇『古今集』二九三「御屏風に竜田川にもみぢながれたるかたをかけりけるを」◇『日本書紀』天武一〇年八月（北野本訓）「多禰嶋に使人等を遣して、多禰国の図（カタ）を貢る」◇『源氏物語』須磨「所せく集ひ馬・車の、かたもなくさびしきに」
▼（像、兆）動物の骨を焼いて占うときに現れるひび割れの

形。◇『万葉集』三四八八「告（の）らぬ妹が名可多（カタ）に出でむかも」

かた（方）

かた（方）［kata］

○場所を表す「か（［ka］）」に手を表す「た［ta］←［te］」が合わさり、「向かう手の方向」を意味する。「向こう」はまた「か（彼）」でもあるので、「か（彼）た（処）」でもある。

※「か（［ka］）」はタミル語＜kan＞起源。◇ありか。存在する場所◇住みか。住むところ。「た［ta］←［te］」もタミル語＜tol＞起源。

◆話者から見て明確に指示できる方角。話者のまわりを分けて、そのうちの一つを話者からの「向き」として示す。話者の位置は意識されない場合や、明確でない場合にも用いられる。しかし、明示されてなくても、つねに何か方角を定める座標が前提になっている。

▼もののある場を話者からの向きとして示す。◇『古事記』中・歌謡「はしけやし我家（わぎへ）の迦多（カタ）よ雲居立ち来（く）も」◇『竹取物語』「此の吹く風はよきかたの風なり」◇『枕草子』一六一「職の御曹司をかた悪しとて」◇『伊勢物語』一九「昔、をとこ、宮仕へしける女の方に」◇『土佐日記』「霜だにも置かぬかたぞと言ふなれど」◇東方、西方（相撲）◇『竹取物語』「唐の方にむかひて」◇『万葉集』三二九九（或本歌）「此の加多（カタ）に我は立ちて」◇『源氏物語』絵合「ひだりみぎとかた分たせ給ふ」◇「母方（かた）」◇「まかない方（がた）」「会計方（がた）」

▼方向から意味が展開して、「そのような」と抽象的な方向性で一定の限定をうける「こと」を表す。◇『枕草子』三三「烏帽子に物忌つけたるは〈略〉功徳のかたにはさはらずと見えんとにや」◇『更級日記』「宮仕への方にも立馴れ」◇『源氏物語』帚木「おのづから軽（かろ）きかたにぞおぼえ侍るかし」◇『枕草子』一一九「思ひかはしたる若き人の中の、せくかたありて心にもまかせぬ」◇『徒然草』七五「まぎるるかたなく」

▼することの方向性から、やり方（かた）。◇『竹取物語』「ある時はいはん方なくむくつけげなる物来て、食いかからんとしき」◇『宇津保物語』吹上上「ゆく春をとむべきかたもなかりけり」◇「考え方（かた）」「書き方（かた）」「作り方（かた）」

▼人を、その人がいる方向で指し示す。◇『源氏物語』葵「かくやむごとなき方も失せ給ひぬるを」◇「あの方」◇『浮雲』二葉亭四迷「あの丸髷に結った方（カタ）は」

▼時間的な方向の意から、頃。時節。◇「夕方（がた）」「朝方（がた）」「いずかた」「異方（ことかた）（別の所。別室、または別の家。また、別の人）」◇『枕草子』三〇一「いかにして過ぎにしかたを過ぐしけん」.

※「かた」が「かた（型）」と同根なのかは、不明。したがって「考え方」が同時に「考え（の）型」であるのかないのかについて、日本語が言葉としてどのように構造の中に組み込んでいるのかを、語源から判断することはできない。

西本願寺本万葉集では、「方」と「加多」「迦多」「可多」が併存。一方「形」と「迦多知」（794）も併存し、「方」と「形」に発音上の区別はない。「ひさかたの」も「久堅の」と「久方の」が併存し、「方」と「堅」にも区別がない。さらに「かたまく」に「方設而」（2133）と「片設而」（2,2163）まで併存している。西本願寺本万葉集の万葉仮名では「片」とも発音上の区別はない。

※現代日本語では、上に読み方をつけたように、「かた」と読むときと「がた」と読むときの区別が明確である。「売り方（がた）」

といえば相対して売買するときの売る方を表し、「売り方（かた）」といえば売る方法を表す。「売り」が意味の主要な面をなしているときは「方」は接尾語で濁り、「方」が意味の主要な面をなしているときは独立した意味のある名詞として濁らない。おおよそこのように言えるが、さらに研究が必要である。

かた（片）

かた（片）[kata]

〇二つで完全なもの（真）をなすとき、その一方を示す。かた（片）とかた（片）で真となる。

※蒙古語で「半分」を意味するkaltas、ツングース語のkaltaka、つまりアルタイ諸語のkalta（片）と同源（大野晋「日本語の起源」）。

◆ま（真）の対語。対のものの一方。いくつかそろって完全なものになると考えられるときの、それぞれのもの。接頭語として、名詞や動詞の上に付いて、片方の、かたよった、などの意を表わす。

▼名詞の上に付いて、一対になっているものの一方の意を表わす。「半分」◇「片恋」「片手」「片われ」「片時」

▽名詞の上に付いて、不完全な、整っていない、少しの、などの意味を表わす。「一部分」

◇「片山」「片岡」「片時」

▽名詞の上に付いて、一方にかたよること、の意を示す。

◇「片田舎」「片淵」

▽主として動詞の上に付いて、しきりに、ひたすら、の意を表わす。

◇「片待つ」「片泣く」

※なぜ動詞につくと「ひたすら」の意味になるのか。「片泣く」は、人の状態として、笑ったり、怒ったりと色々あってはじめてその人の心の全体になるのに対して、そのように他の心持ちなることなくもっぱら泣く状態ばかりになるから「片」であり、そのようにひとつの状態ばかりになるので「ひたすら」なのである。

かたい

かたい（堅い）[katasi]

〇ひとつのものとしてかたまりをなし、くずれないこと。

※タミル語＜kattu＞に由来。

◆ものの或ることが、なかなか変わらないこと。

▼（堅・硬・固）もののかたちが明確で変化することがない、というものの性質を示す。

◇『源氏物語』行幸「かたきいはほも」◇「かたい約束」「かたく信じる」◇『日本書紀』雄略一二年一〇月・歌謡「大君に柯墟倶（カクタ）仕へ奉（まつ）らむと」◇「そんなかたい事を言わなくてもいいではないか」◇「かたく口止めされる」◇『枕草子』八七「さはれ、さまでなくとも、いひそめてんことはとて、かたうあらがひつ」◇『古事記』下・歌謡「秀（ほだり）取り加多久（カタク）取らせ」

▼心が確定していて動揺しない、融通がきかない、などに意味が展開した。◇「口がかたい」◇「かたい顔つき」◇「かたい文字」◇「彼の力をもってすれば、合格はかたい」◇「かたい商売」

▼（難）　むずかしい。容易でない。困難だ。◇『万葉集』三四〇一「中麻奈（なかまな）に浮き居る船の漕ぎ出なば逢ふこと可多思（カタシ）」◇『古今集』四四三「ありとみてたのむぞかたき」◇『源氏物語』帚木「御覧じ所あらむこそかたく侍らめ」

かたる

かたる（語る、騙る）[kataru]

○[kataru]は[kata-ru]である。[kata]は「型」でありその内容としての「こと」[koto]である。[ru]はそれを共有する状態に置くこと。[kata]自体は協働体の営みをあらわし、[ru]はその営みの経過と、その結果として現在の状態になることを表す。

「かた」は「こと」に由来する。『名義抄』ではアクセントが異なるとしている。これは語源が同じであるが、時代の中で意味を分岐させようと言うときに起こる。

◆「もの」の「かた」を言葉にすること。「こと」に「する」から「かたる」である。

※タミル語＜katai＞由来。

※協働体が協同の営みによって今に至る歴史があり、歴史を歴史としてその成員が自覚するための行為を語るという。これを基層の意味としている。基層が、協働体の営みであるから、語られる「もの」は、語る人とそれを聞く人の間に共通して存在しているか、または共通に存在すべきもの、語られることによって現れるべきものとして、思われている。ものを共有しうるところ（場）においてはじめて語ることは成立する。「語る」内容はものに規定されていて、勝手に「語る」ことはもはや語るではない。

※「つげる」は知らせること。「いう」は口にすること。これらと「語る」の使い分けは明確である。「話す」はものを前提にしないで、「こと」をやりとりすること。

※「話す」は室町時代以降用いられる。歴史的には商業の発展に伴い、村のつながりを超えた交流が一般化することによって、「もの」の共有を前提にしないときに「話す」が用いられるようになる。そこからさらに「もの」に規定されないで自由に言うことも「話す」という。「話す」が成立してからは、「語る」がすでにある文や物語を型どおりに節をつけて言うことの意味を強くもつようになった。

「彼は自分の生い立ちを語る」と「彼は自分の生い立ちを話す」は意味が違う。「生い立ちを語る」のは同じ境遇にあるものの間で共感を前提にしているか、あるいは聞くものを共感の場に引き入れる意図があるとき。「生い立ちを話す」は経験を事実として言うことであって聞くものがどのように受けとるかは話す側の意図にない。

「もの語り」であって「もの話し」はない。「作り話」であって「作り語り」はない。「昔ばなし」であって「昔かたり」はない。

▼もののことを順序だてて話して聞かせる。ことばで述べて相手に伝える◇『万葉集』二三七「否と言へど語れ語れと宣らせこそ」◇『万葉集』二三〇「聞けば音（ね）のみし泣かゆ、語れば心ぞ痛き」◇『万葉集』四四五八「君に可多良（カタラ）むこと尽きめやも」◇『源氏物語』帚木「朝顔たてまつり給ひし歌などを少しほほゆがめてかたるも聞ゆ」◇『源氏物語』橋姫「昔ものがたりなどに語り伝へて」◇『平家物語』「見たりける夢のやうを始めより終わりまで委しう語り申しきが」◇彼の目が本心を語っている。（「彼の目が本心を話している。」とは言わない）

※語ることは人間の言葉に関わる行為のなかでもっとも基本的なものである。人は自分を語ることを積みあげて人間になる。幼児と母の語りから、青年期に自らを語り自立し、人づきあいのさまざまの関係において語り生活し、また何らかの物語のなかに自らを位置づけて生き甲斐を見いだし、そして年老いて来し方を語る。人間の生涯は語りとともにある。

—【語らう】「語り合う」から派生した。真実・真情をうち明けて語ること。人間は言葉をなかだちに互いに協同してはたらく生

命である。「こと」を語り力をあわせる、これが「語らう」の意味である。

語ることは、互いに語りあうことをとおして普遍性を実現する。まず物語の言葉と正面から向き合う。そして互いにことを割りあうことによってその物語のことをわる（理）。こうして物語の底にある共通の基層を掘り起こしてはじめて普遍に向う。◇『万葉集』七九四「二人並び居加多良比（カタラヒ）し心そむきて」◇『東大寺諷誦文平安初期点』「仏のみ聞き知りたまひて、倶に談（カタラヒ）給ひ」

※長い間自らが部落出身であることを隠し差別に自らをごまかしてきた高校生が、部落解放運動の高揚のなかで、はじめて自分の生い立ちを学校で語る。あるいは、日本名を使い朝鮮人であることを隠してきた在日朝鮮人生徒が、自分を語り本名を取り戻す。同じ立場のものがその語りのなかにある甘えを指摘し、話し合い、さらに深く自立する。このような営みは、近代の協同体のなかでくり返し行われてきた。何らかの語りと話し合いをとおした深い共感を制度化した協同体は力をもつ。中国人民解放軍が抗日戦争中制度化した、階級社会での自らの苦難の生涯を語り合う「訴苦運動」もその例である。

かなし

かなし（悲し，哀し，愛し）[kanasi]

○何かをなそうとして、それをしかねるとき、できないことによってかなしと思う。何かしてやりたい、しかしできない、かなしい。いなくなったときにどうしようもない、それほど愛しい。

◆しようとすることが先にあり、それができないときに起こる感情。どうしてもできず、それがいかんともすることができないと感じるときの、切ない心のありよう。することができず、しかもどうすることもできない葛藤にはげしく心が揺さぶられるさまを広く表現する。古くは悲哀にも愛憐にもいったが、現代ではもっぱら悲哀の感情に用いる。

あわれがものの方からの働きかけで起こる感情であるのに対し、かなしは行いができないことから起こる感情。

※タミル語に対応するものがなく、それよりも古い言葉である。

▼（愛）どうしようもなく切なく、いとしい。かわいくてならない。◇『万葉集』四一〇六「父母を見れば尊し、妻子（めこ）見れば可奈之久（カナシク）めぐし」◇『伊勢物語』八四「ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり」

▼（悲、哀）痛切である。なんとも切ない。

▽どうしようもなく切ない。死、別離など、願いにそむくことに直面して心が強くいたむ。なげかわしい。いたましい。◇『万葉集』七九三「世の中は空しきものと知る時しいよよますます加奈之可利（カナシカリ）けり」◇『源氏物語』桐壺「限りとて別るる道のかなしきにいかまほしきは命なりけり」◇『平家物語』六「かやうに人の願いも叶わず、民の果報もつたなき人間のさかひこそかなしけれ」◇「母の死ほど悲しいことはなかった」◇「悲しいかな、それだけの実力がない」

▽ものに強くひきつけられ、心にしみておもしろいと感ずる。しみじみと心を打たれる。◇『万葉集』四〇八九「百鳥（ももとり）の来居て鳴く声春されば聞きの可奈之（カナシ）も」◇『宇治拾遺物語』六・五「あはれに尊く、かなし、いみじと思ふことかぎりなし」◇「悲しい曲だ」

▽他から受けた仕打ちがひどく心にこたえるさま。残念だ。くやしい。しゃくだ。◇『無名抄』「入道がしかるべからん時取り出でんと思ひ給つる事を、かなしく先ぜられにけり」◇「彼までが

誤解していると思うと悲しい」

かみ

かみ（神）[kami]

○[ka-mu]の内容を名詞化する。集団としての[ka]を結ぶ[mu]（[mi]）もの。[ka]と[mu]をさらにもとに戻って分解すると、[ka]は「アリカ」や「スミカ」の「カ」と同じく人が働く根拠としての場であり、[mu]はそれを成り立たせている（結ぶ）もの、つまり協働を成り立たせているはたらきそのもの、これが「かみ」の基層の意味である。

言葉としての「カミ」は、タミル語＜koman＞に由来する。その意味は「大きな力をもつ恐ろしい存在」である。この言葉が、水田耕作技術とともに日本列島に伝わり、それが、縄文以来の言葉と混成し熟成する中で、意味が深められたと考えられる。

この言葉が多くの関連する言葉をともなって、水田耕作技術とともに日本列島に伝わった。大野晋『一語の辞典　神』には次のようにある。

カミ（神）に当たる単語が古代のタミル語の中から見出される。

もし、それがカミ一つだけの共通というのならば、偶然の一致かもしれないという懸念があるだろう。ところが、カミに関わる日本人の行動を表わす単語、マツル（祭る）・ハラフ（祓ふ）・コフ（乞ふ）・ノム（叩頭する）・ホク（祝く、ことほく、寿のホク）・ウヤ（教）・アガム（崇む）、あるいは死に関するイム（忌む）・ハカ（墓）など、これらの宗教用語がセットとなって、やはり平行的に共通する。また、豊作を祈願する年頭の行事の共通もある。またカミの類語と思われるヒ・ミ・チ・ムチなどについても共通する単語がある。

こうしてこれらの言葉、「神」とそれに関連する言葉がタミル語に由来することの根拠が示されてゆく。

このタミル由来の言葉「カミ」が、縄文語と混成し熟成するの中で「カ」と「ミ」よりなるものとされていったと考えられる。「カ」は「アリカ」や「スミカ」の「カ」と同じく人の生きる場である。「ミ」は「ム」の名詞化であり、「ム」はそれを成り立たせている（むすぶ）ものである。

よって「カミ」は人の生きる場を成り立たせているはたらきとなる。これが「カミ」の基層の意味である。

地鎮祭や氏神―氏子などにある考え方は、まさに場を結ぶものとしてのカミそのものである。

神のはたらきの内容をさらに掘り下げよう。

本居宣長の定義は次のようになる。

凡て迦微（かみ）とは、古の御典（みふみ）等にも見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其の祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云わず、鳥獣木草のたぐい海山など、其の余（ほか）何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏き物を迦微とはいうなり（『古事記伝』一の巻）

「すぐれたること」のある「かしこきもの」を「かみ」というのである。「かしこき」とは、もののちからが、おそれるほどにおおきいことを意味し、そのものへの畏敬の念を表す。

では「かしこきもの」の「もの」とは何か。世界のすべてはものである。ものほど深く大きいものはない。この世界はものから

できている。森羅万象、すべてはものである。これが世界である。ものは存在し、たがいに響きあっている。これが事実である。世界はそれしかない。そのなかで、人もまたものとして、ものと豊かに交流しあい、語らいあう。ものは、いわゆる物質と精神と二つに分ける考え方での物質とは、まったく異なる。このような二分法ではない。ものは実に広く深い。この深く広いものを日本語は「もの」という一つの言葉でとらえる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

ものは生きている。ものの生きた働きを「いき」という。そして、ものの生きる内容が「こと」なのである。ものはことにしたがい、ことを内容として生成変転する。ものが生成変転する中味がことである。人はものの意味を聞きとり「こと」としてつかむ。人が、ものを、相互に関連する意味あるもののあつまりとしてつかむとき、そのつかんだ内容を「こと」と言う。

また、そこからことによってものを定める。本居宣長は「すぐれたること」のある「もの」として神を定義した。「すぐれたること」の内容をいま少し深めよう。

世界はいきいきと輝き運動を続けている。人もまたこの世界のなかでいっとき輝きそして生を終えてものにかえる。そのいっときを「いのちある」ときという。いのちあるとき、それを生きるという。

人の生きる場を結ぶもの、つまり「もの、いき、こと」といういのちをなりたたせる働きそのもの、それが日本語の「神」である。この「いのちの不思議」に出会ったとき、それをなりたたせるものとしての神のはたらきを「すぐれたること」として、実感する。

神は「かしこき」もの、恐ろしいものである。雷（カミナリ）はまさに神の「鳴り」であり、「成り」であり、怒れる神であった。そしてこの神に、「はらへ」によって穢れをのぞくことを祈り、「まつり」によって豊穣を祈る。

人は心に願うことがかなうように神に祈る。心から祈るとき「すぐれたること」のある神は、その願いをかなえる。

▼人が、天地万物に内在しそれを差配していると考える存在。▽山などの自然にあるとされるかみ。◇『万葉集』五六一「思わぬを思ふといわば大野なる三笠の杜の神し知らさむ」◇『万葉集』三八八四「伊夜彦神のふもとに（神である弥彦山の麓に）今日らもか鹿の伏すらむ皮服（ころも）着て角附きながら」

▽ものにやどる魂としてのかみ。◇『日本書紀』上「次に風の神、名はしなつひこのかみ…を生み、次に木の神、なはくくのちのかみ…を生み」

▽人の力を超えたおそろしいものとしての、雷、猛獣、山。◇『万葉集』三六八二「天地（あめつち）の可未（カミ）を祈（こ）ひつつ我待たむ」◇『枕草子』九九「神いとおそろしう鳴りたれば」◇『万葉集』三四二一「伊香保嶺にかみな鳴りそね」◇『万葉集』三八八五「韓国（からくに）の虎といふ神を」

▽憑依するかみ。◇『万葉集』四〇六「丈夫（ますらを）に憑きたるかみそよくまつるべき」

▼日本国形成時に、天皇家の祖先とされた人格神。また其の国家の下で体系化された人格神。◇『日本書紀』神代「是に左の目を洗ひたまふ時になれる神の御名は天照大神」◇『古事記』上「高天（たかま）の原に成りませる神の名は」◇『万葉集』二四一「大君は神にしませば真木の立つ荒山中に海を成すかも」

から

から（柄、族、幹）[kara] [gara]

◆一つのたねから芽を出しいのちをつないだもの。

※タミル語＜kal＞起源。満州語、蒙古語の＜kala＞＜xara＞と同系といわれてきた。これらの語はすべてユーラシアの古い言葉であろうと考えられる。その意味は「大きな力をもつ恐ろしい存在」である。

この言葉が多くの関連する言葉をともなって、水田耕作技術とともに日本列島に伝わった。大野晋『一語の辞典　神』には次のようにある。

カミ（神）に当たる単語が古代のタミル語の中から見出される。

もし、それがカミ一つだけの共通というのならば、偶然の一致かもしれないという懸念があるだろう。ところが、カミに関わる日本人の行動を表わす単語、マツル（祭る）・ハラフ（祓ふ）・コフ（乞ふ）・ノム（叩頭する）・ホク（祝く、ことほく、寿のホク）・ウヤ（教）・アガム（崇む）、あるいは死に関するイム（忌む）・ハカ（墓）など、これらの宗教用語がセットとなって、やはり平行的に共通する。また、豊作を祈願する年頭の行事の共通もある。またカミの類語と思われるヒ・ミ・チ・ムチなどについても共通する単語がある。

こうしてこれらの言葉、「神」とそれに関連する言葉がタミル語に由来することの根拠が示されてゆく。

このタミル由来の言葉「カミ」が、縄文語と混成し熟成するの中で「カ」と「ミ」よりなるものとされていったと考えられる。「カ」は「アリカ」や「スミカ」の「カ」と同じく人の生きる場である。「ミ」は「ム」の名詞化であり、「ム」はそれを成り立たせている（むすぶ）ものである。

よって「カミ」は人の生きる場を成り立たせているはたらきとなる。これが「カミ」の基層の意味である。

地鎮祭や氏神―氏子などにある考え方は、まさに場を結ぶものとしてのカミそのものである。

神のはたらきの内容をさらに掘り下げよう。本居宣長の定義は次のようになる。

凡て迦微（かみ）とは、古の御典（みふみ）等にも見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其の祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云わず、鳥獣木草のたぐい海山など、其の余（ほか）何にまれ、尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏き物を迦微とはいうなり（『古事記伝』一の巻）

「すぐれたること」のある「かしこきもの」を「かみ」というのである。「かしこき」とは、もののちからが、おそれるほどにおおきいことを意味し、そのものへの畏敬の念を表す。

では「かしこきもの」の「もの」とは何か。世界のすべてはものである。ものほど深く大きいものはない。この世界はものからできている。森羅万象、すべてはものである。これが世界である。ものは存在し、たがいに響きあっている。これが事実である。世界はそれしかない。そのなかで、人もまたものとして、ものと豊かに交流しあい、語らいあう。ものは、いわゆる物質と精神と二つに分ける考え方での物質とは、まったく異なる。このような二分法ではない。ものは実に広く深い。この深く広いものを日本語は「もの」という一つの言葉でとらえる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

ものは生きている。ものの生きた働きを「いき」という。そして、ものの生きる内容が「こと」なのである。ものはことにしたがい、ことを内容として生成変転する。ものが生成変転する中味がことである。人はものの意味を聞きとり「こと」としてつかむ。

人が、ものを、相互に関連する意味あるもののあつまりとしてつかむとき、そのつかんだ内容を「こと」と言う。

また、そこからことによってものを定める。本居宣長は「すぐれたること」のある「もの」として神を定義した。「すぐれたること」の内容をいま少し深めよう。

世界はいきいきと輝き運動を続けている。人もまたこの世界のなかでいっとき輝きそして生を終えてものにかえる。そのいっときを「いのちある」ときという。いのちあるとき、それを生きるという。

人の生きる場を結ぶもの、つまり「もの、いき、こと」といういのちをなりたたせる働きそのもの、それが日本語の「神」である。この「いのちの不思議」に出会ったとき、それをなりたたせるものとしての神のはたらきを「すぐれたること」として、実感する。

神は「かしこき」もの、恐ろしいものである。雷（カミナリ）はまさに神の「鳴り」であり、「成り」であり、怒れる神であった。そしてこの神に、「はらへ」によって穢れをのぞくことを祈り、「まつり」によって豊穣を祈る。

人は心に願うことがかなうように神に祈る。心から祈るとき「すぐれたること」のある神は、その願いをかなえる。

人が生きることとは、ものに思いをかけ、そのもののことを考え、願いがかなうように神に祈り、人生を動かしていくことである。心から神に祈ること、これが「古代の人に見るようなあの素直な心」の基本の意味である。

▼同じ血のつながりを持つこと。血縁関係にあること。◇『宣命』二五「いや益す益すに朕が私の父母はらからに至まで在るべき状のまにまにと」

▽一家の親族。一族。同族。◇『日本書紀』雄略二一年三月（前田本訓）「百済の国属（ヤカラ）既に亡びて」◇「うから（親族）」「やから（族）」「はらから（同胞）」

▽仲間。てあい。連中。◇『宇津保物語』蔵開中「わが君をわびさせ奉る盗人のやからは」◇「不逞の輩」

▼その物に本来備わっている性質、性格。本性。◇『万葉集』三一五「み吉野の芳野の宮は山可良（カラ）し　貴かるらし川可良（カラ）し清（さや）けかるらし」◇「国柄（くにがら）」「神柄（かむから）」「山柄（やまから）」◇「人柄」「家柄」「続柄」「場所柄」「時節柄」

▽そのものの由来するところ。原因や理由。◇『万葉集』四〇六九「明日よりは継ぎて聞こえむほととぎす一夜の故（から）に恋いわたるかも」◇『万葉集』四三五八「わが母の袖持ち撫でてわが故（から）に泣きし心を忘らえぬかも」

▼芽を出しまっすぐに伸びたもの。▽草木の茎。◇『日本書紀』歌謡「なづきの　田の稲幹（がら）に　稲幹（がら）に　這ひ廻（もとほ）ろふところ葛」◇『万葉集』二七五九「わが屋戸の穂蓼古幹（ふるから）採（つ）み生し実になるまでに君をし待たなむ」

▽同じ種のものに備わること。ここからその人に本来そなわっている、また、その人の身なりや態度から感じられる品や性格。◇「がらの悪い男」◇「柄にもない」

▽布、織物などの模様をいう。◇「柄がはでだ」

▽道具の柄◇『万葉集』一四五五「たまきはる命に向かひ恋ひむゆは君がみ船の楫柄にもが」

▽体つき。◇「がらの大きい人」

から〔辞〕

から〔辞〕

○体言または体言に準ずるものを受ける。一つのたねから芽を出しいのちをつなぐことから、原因、理由や動作の中継ぎの意を表す。さらに時や所の出発点から、あることの成り立つ根拠も表すようになった。

◆こと甲のゆえにこと乙が起こる、成り立つ。

※タミル語＜kal＞由来。タミル語も関連する語群があり、それは「一つの源があり、そこから発する血の繋がり、水の流れ、道」という意味的連関をもつ（『古典基礎語辞典』）。

▼動作の経由地を示す。上代はこの用法のみである。◇『万葉集』一九四五「朝霧の八重山越えて霍公鳥（ほととぎす）卯の花辺柄（から）鳴きて越え来ぬ」

▽原因、理由の意味を表す。「…がもとで」「…のせいで」の意味。◇『万葉集』三七六一「世の中の常の道理（ことわり）かくさまになり来にけらしすゑし種子から」

▽動作の経由地。◇『万葉集』四〇二五「之乎路（しおじ）可良ただ越え来れば波久比（はくひ）の海朝凪ぎしたり船楫もがる」

▼動作の起点を示す。中古に現われ、現代に至る用法。上代は、この用法としてはもっぱら「より」の方を用いる。時間的起点を示す場合と、空間的起点を示す場合とがある。

◇『源氏物語』玉鬘「いとうつくしう、ただ今から気高くきよらなる御さまを、ことなるしつらひなき船にのせて漕ぎ出づるほどは」◇『新古今集』二「あすからはわかなつまむとしめしのにきのうふもけふも雪はふりつつ」◇『催馬楽』本滋き「本（もと）滋（しげ）き本滋き吉備の中山昔より昔加良（カラ）昔可良（カラ）昔より名の旧（ふ）りこぬは今の代のため今日の日のため」◇「東京から大阪まで」「窓から顔を出す」「朝から雨が降っている」

▽手段を示す。「…によって」「…で」の意を表わす。◇『落窪物語』一「かちからまかりていひ慰め侍らん」◇「不足分を貯金から補う」

▽体言または接続助詞「て」を受け、「…から後」「…以上」の意を表わす。近世以後の用法。◇「用を済ましてから行く」◇「学校まで一里からある」

▽体言を受け、「…からはじめて」「…をはじめとして」の意を表わす。「からして」の形で用いられることもある。◇「天才は顔から違う」

▼活用語の終止形を受け、原因・結果を順接の関係において接続する。近世以後の用法。◇「飯は食ったからいらない」◇「静かだから勉強がはかどる」

から（殻）

から（殻、骸、空、涸、枯、虚）[kara]

◆貝などの動物や、草木の実などの外部をおおっている固いもの。中身を取り去ったあとに残る固い皮。そこから、水分、生命が失われたもの。魂の抜けたものをいう。そのからに覆われた中空が、しかし新たな魂の籠もるところとなる。

※タミル語が入る以前からの古い言葉。

▼外部をおおっている固いもの。▽虫の抜け殻。◇『源氏物語』総角「かくながら、虫のからのやうにても見るわざならましかば、と思ひまどはる」◇『古今集』四四八「空蝉のからは木ごとにとどむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき」◇『古今集』八三一「空蝉はからを見つつもなぐさめつ」

▽魂の抜けたあとにのこるからだ。なきがら。◇『源氏物語』夕顔「なほ悲しさのやる方なく、ただ今のからを見では、またいつの世にかありし容貌をも見む、と思し念じて」◇『古今集』一一〇二「からは焔となりにしものを」

▽比喩的に用いて、自分の世界を守る外壁やその世界をいう。◇「からにとじこもる」「からを破る」◇『観智院本三宝絵』上「貝の柄を取て海の水を汲むと誓ふ心の実となるに」▽『徒然草』六九「豆のからを焚きて」

▼魂の抜けた状態。中味のなくなった状態。◇「コップがからになる」「石油がからになった」「頭がからだ」「家をからにする」

▼名詞に冠して用いる。◇『古事記』上「静山は枯れ山の如く泣き枯らし」◇「から身」「から手」「から脛(すね)」◇『源氏物語』夕顔「気色ある鳥のから声に鳴きたるも梟はこれにやとおぼゆ」◇「から元気」「から威張り」

かわ（川）

かわ（かは、川、河）[kawa]

◆水が低いところに集まり、陸地のくぼんだ所を帯状に流れるもの。またその流れが陸地をうがつ。川はみそぎの場であり、漁の場であり、農業用水を得るところでもあり、人の生活と深く関わってきた。

※タミル語＜kavar＞由来。

▼水がつねに帯状に流れるところ。▽神のものである所としての川。◇『万葉集』三八「川の神も　大御食（おほみけ）に　仕へ奉ると　上つ瀬に　鵜川を立ち　下つ瀬に　小網（さで）さし渡す」

▽みそぎの場として。◇『万葉集』六二六「君により言の繁きを故郷の明日香の川に潔身（みそぎ）しに行く」

▽地形としての川。◇『古事記』下・歌謡「泊杙（はつせ）の賀波（カハ）の」◇『万葉集』四〇〇「越の中　国内（くぬち）ことごと　山はしも　繁（しじ）にあれども　川はしも　多（さは）に行けども」◇『源氏物語』浮舟「明けたてば、かはの方を見やりつつ」

◇『万葉集』「宇治川は淀瀬なからし網代人舟よばふ声　をちこち聞こゆ」◇『源氏物語』橋姫「網代のけはひ近く、耳かしがましき　川のわたりにて」

かんがえ

かんがえ（考える）[kamugae] ← [kamugafu]

○「かむ [kamu]」は、「かみ（神）[kami]」を根拠に協同体を「結ぶ [musubu]」ことであり、[gafu] の [ga] は [muka] から転じ「向かう」の意味。つまり [kamugafu] は協同体を結ぶ場で「向かう」ことである。

「かみ（神）[kami]」の [ka] は「アリカ」や「スミカ」の「カ」と同じく人が働く根拠としての場と、それを成り立たせている（結ぶ）もの（[mu] → [mi]）、つまり協同体をまとめるはたらきそのもの、これが「かみ」の基層の意味である。

※「かむ [kamu]」はタミル語由来。二つ揃って真とする日本語のなかで、「考える」は「思う」を対の言葉として熟成した。

◆ものとものとをつきあわせ、もののことをわる（分析・判断する）こと。「考える」ことは次の三つの段階の総体である。

第一に、この世界のある範囲のものの集まりを一つの「こと」としてとらえる。

第二に、「こと」としてつかんだ中にあるものとものをつきあわせ、その関係を調べる。

第三に、「こと」の仕組み、つまりことの内部の構造を知る。「考える」の連用形の名詞化として「考え」は、考えた結果の内容を表す。

「考える」という行爲は、自己の内部でなされる自分自身との話しあいがその実体である。自己との内部対話、これが考えることである。

古形は「かむがふ」であり、「かむ」は、「かみ（神）」を根拠に協同体を「結ぶ」ことであり、「がふ」は「向かう」の意味。つまりは協同体を結ぶ場で「向かう」ことである。

その「かみ（神）」の「か」は「ありか」や「すみか」の「か」と同じく人が働く根拠としての場と、それを成り立たせている（結ぶ）もの、つまり協同体をまとめるはたらきそのもの、これが「かみ」の基層の意味である。

「思う」と「考える」は別の言葉であり、そのうえで、「思う」と「考える」の二つがそろってはじめて「真（ま）」となる。一方を欠いては真ではありえない。これが日本語のことわりである。こうして、二つ揃って真とする日本語のなかで、「考える」は「思う」を対の言葉として熟成した。

▼「かみ」においてものともを向かい合わせ対比して比較しその違いを調べること。

※古代中世では次の三つの意味で用いられた。

▽調べ吟味して罰を与える。◇『天武紀』下「かんがふべきはかんがへ、杖（ウ）つべきは杖たむ」。◇『拾遺雑』「かしら白き翁の侍りけるをめしかんがへむとし侍りける時」

▽占いの結果を判断する。◇『源氏物語』桐壺「宿曜（スクヨウ）のかしこき道の人にかんがへさせ給ふにも、只同じさまに申せば」

▽比べどちらにしようか判断しようとする。◇『法華義疏』長保点「文を推（オシハカ）り義を考（カムガ）ふれば」

▼もののことをつかもうとする。

※近代に入より一般的な意味に発展した。近代になって人は封建的な身分的束縛からは解放された。しかし近代社会で人が生きていくためには、人生の選択を自らの責任で行わねばならず、「考える」ことが求められるようになったからである。それが文学に現れたのが次の例である。

◇『二人女房』尾崎紅葉「男親の方はさほど不当な思想（カンガへ）を持たぬ」◇『運命論者』国木田独歩「聞いたら聞いたと言ふが可え。そんなら乃父（おれ）には考案（カンガへ）があるから」◇『それから』夏目漱石「代助は書斎に閉じこもって一日考（カンガ）へに沈んでいた。◇『浮雲』二葉亭四迷「あれをこうして是を斯うしてと、毎日毎日勘（カンガ）へてばっかゐたんだ。

きく

きく（聞く、聴く、訊く、利く、効く）[kiku]

〇心をものに向け（あるいは、心をものに向けさせるような何かが起こって）、その結果、ものからことを受けること。

◆何かに意識を傾け、そのものが発した「こと」を受けよう（聞き取ろう）とする行為である。「こと」が届けられるまで待ち、その意味を確認するという態度が根底にある。古くは獲物が来るのを聞き耳を立てて待つ、ということがあった。

さらに、心を向けたとき何かを受け取ることができ手応えがある、というところから、ものの働きがあらわれ現実のものとなること。この意味では「利く」や「効く」を宛てる。

※タミル語＜kel＞由来。この語は「聞く、聴く、学ぶ、受け入れる、尋ねる」から「（薬の）効能がある」までの意味があり、「きく」に対応している。

※聞き取ろうと待つところに「こと」が届けられることを「音づれ」という。ここから「待つところにやってくる」ことを「訪

れ」という。真理は聞こうとして待つものに「音づれ」る。
▼ものに意識を集め、そのもののことをつかむ。▽自然の音、物音、生き物の鳴き声、人の言葉などを耳に感じとる。◇静けさや時計の音を雨の日に聞く。◇川の流れが聞こえる。◇爆発音を聞いた。◇聞け、わだつみの声。◇『万葉集』四二〇九「鳴く声を聞かまく欲りと」
▽耳に感じとってその内容を知る。聞き取る。言伝え、うわさなどを耳にする（「聴く」をあてることもある）。◇音楽を聞く。ニュースを聞く。◇講演会を聞きにいく。◇人の話を聞きなさい。◇『古事記』下「そらみつ大和の国に雁（かり）卵産（こむ）といまだ岐加（キカ）ず」
▽人の言葉に従う。承知する。聞き入れる。◇いうことを聞く。◇そんな頼み聞けない。◇『伊勢物語』二三「親のあはすれども、きかでなんありける」
▽（答えを求めて）たずねる。考えていることや気持などを問う。（問いつめるときは「訊く」をあてる）◇道を聞く。◇都合を聞く。◇よくわからないので聞いてみる。◇『源氏物語』夕顔「若君の上をだにえきかず」
▽（「聞香」の訓読みからか）においをかぐ。（酒を）味わってみる。味を試して違いを知る。◇聞き酒
※日本語では虫の声、音楽、匂いも「こと」として聞く。
▼力、はたらきが十分発揮される。よく働く。すばやく活動する。◇冷たくて指先がきかない。◇『栄花物語』根合「あはれきき給へる口かな」
▽効能や働きが現われる。ききめがある。◇わさび（薬）がきく。◇釘がきく。◇『能因本枕』一六二「すぐろく打つに、敵の采ききたる」
▽物事に通じている。する事がじょうずである。◇彼は古美術に目がきく人だ。◇『花鏡』比判之事「能をば知れども、目のきかぬもあり」
▽することが可能である。◇歳をとって無理がきかない。◇『日葡辞書』「リョウガ qiqu（キク）j訳;よい漁猟をして獲物を取る」
▽ものを言って促す。「口をきく」の形で用いる。◇間にはいって口をきいてもらう
―【きこえる（聞こえる）】
■動詞「きく（聞）」に、自発・受身・自発の古い助動詞「ゆ」のついた「聞こゆ」に自然にそうなることを意味する「え」がついた。
▼もののことが聞こえる。▽自然に放たれた音や声が話者の耳に入る。◇蛙の鳴き声が聞こえた。◇『古事記』下・歌謡「鶴がねの岐許延（キコエ）むときは我が名問はさね」
▽わけがわかる。◇『源氏物語』末摘花「御歌もこれよりのはことわりきこえてしたたかにこそあれ」◇『徒然草』一七五「聞えぬ事ども言ひつつ、よろめきたる」
▽世に広く伝わる。評判される。◇彼の評判はこちらにも聞こえている。◇『日本書紀』雄略二三年・歌謡「道に闘（あ）ふや尾代（をしろ）の子母（あも）にこそ枳挙曳（キコエ）ずあらめ国には枳挙曳（キコエ）てな」◇『古今集』仮名序「ちかき世にその名きこえたる人は」

くに

くに（国）[kuni]
◆もとは神のすむ「あめ」に対し人の住む地上としての「くに」であったが、「あめ」が空間としての天を意味するようになるとそ

の対語は「つち」になる。そして「くに」は何らかのことで画された人の住む所を意味するようになる。

▼天（あめ）や海に対して、大地。土地。陸地。◇『日本書紀』神代上「次に国雅（わか）くし浮きし脂の如くして、くらげなすただよへる時」◇『日本書紀』神代上（水戸本訓）「故、六合（クニ）の内（うち）、常闇（とこやみ）にして」

▼画された人の住む所▽一つの区域をなした土地の称。◇『万葉集』八六五「君をまつ松浦の浦の少女らは常世の久爾（クニ）の海人（あま）少女かも」

▽国家。国土。地球上の各政府の統治権下にある土地。また、特に日本国をいう。◇『日本書紀』歌謡「大和は国のまほろば　たたなずく青垣　山こもれる　大和しうるはし」◇『日本書紀』仁徳五〇年三月五日・歌謡「汝こそは区珥（クニ）の長人」

▽日本の行政上の一区画をなした土地の称。◇『古事記』上・歌謡「八島久爾（やしまクニ）」

▽生国。郷里。故郷。◇「国元」◇「国にいる父母」◇『古事記』下・歌謡「くろざやのまさづ子吾妹（こわぎも）玖邇（クニ）へ下らす」

▽為政者の位。また、天皇の政務。◇「国譲り」◇「国とる」◇「国去る」

▽国府。また、国司による政治。◇『竹取物語』「国に告げたれども国の司、参で訪（とぶら）ふ」

▽任国。領国。知行所。◇『宇津保物語』藤原の君「くに一を賜はらんと申す」

け

け（食、笥、日、褻）[ke]

○「け [ke]」のうち [k] は日常の衣食住に関わることを意味する。「くう（食う）」「くらす（暮らす）」「かて（糧）」の [k] である。

[e] は何らかの行為と因果関係があること示すことが多く、それに対して [i] は動きを意味する。よって「き（来）[ki]」は獲物が動いてくることであり、また田の神が来て穀物がなることである。その行為の結果として糧ができる、つまり「け（食）」である。それを入れ置く容器が「け（笥）」である。ちなみに「けもの（獣）」は [ke-mono] であって食糧の意味である。「け（食）」を「くう（食う）[ku-u]」営みのくりかえしが「け（日）」である。よって「け（日）」は二日以上の日の意味で、「日々」つまり日常ということ。「ふつか（二日）」などの「か」、「こよみ（日読）」の「こ」と同源である。

さらに神の祭や公の政など儀式や祝いごとを晴（はれ）というのに対して日常的な私ごとを「け（褻）」という。「晴れと褻」と対比するとき、正式でないこと。よそいきでないこと。また、そのような状態の時や所。ふだん。常（つね）などをいみする。

※万葉仮名で「け [e]」の音は甲乙二種ある。漢字〈食、笥、日、褻〉を当てる「け」はすべて同じ音で乙類である。一方、「異（け）」は上代仮名遣いでは甲類であって、「日（け）」とは音が異なり別語である。

「う [u]」が余剰の食糧を意味するのに対し、「け [ke]」は日々食べる食料を意味し、それに関連する言葉を生んだ。

◆糧を蓄えそれを食う日々の営み。

▼け（食）◇『万葉集』三八「やすみしし、吾が大王、神ながら、神さびせすと、芳野川、たぎつ河内に、高殿を、高しりまして、上り立ち、国見を為せば、たたなはる、青垣山、山神の、奉る御調と、春べば、花かざし持ち、秋立てば、黄葉かざせり（一云、

黄葉かざし）、逝き副ふ、川の神も、大御食に、仕へまつると、上つ瀬に、鵜川を立ち、下つ瀬に、小網さし渡す、山川も、依りて奉れる、神の御代かも」

▼け（笥）◇『万葉集』一四二「家にあれば笥（け）に盛る飯（いひ）を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」（有間皇子）

▼け（日）◇『古事記』下・歌謡「君が行き気（ケ）長くなりぬ」◇『万葉集』三七七「青山の嶺の白雲朝に食（け）に常に見れども」

▼け（褻）◇『平中物語』三四「上にもけにも心にまかせてまじり歩く人なれば」

こころ

こころ（心）[kokoro]

○くくる（括る）[kukuru] はたらきのもとになるのがこころ（心）[kokoro] である。もとになるのは、ものであることも、ことであることもある。くくるとは，「くる」のくりかえしである。くる [kuru] は「やりくり」に残るように、食べもの [ke] をまとめることであり、そこから生きるために手をつくすことである。それはまた言いかえれば、人の体をくくり一つにまとめて生きるためにはたらかせるものが心である。

つくる（作る）[tukuru] 場がところ（所）[tokoro] となるように、くくる場としてのこころでもある。くるむ [kurumu] ものがころも（衣）[koromo] であるように、こころはくくるはたらきを成りたたせるものでもある。

くくるはたらきは、「ものに思いをよせ、そのもののことを考え、そしてそのものをくくる」というみちで、なされる。それをふまえて人は生きる。これがこころはのはたらきのそのものである。このはたらきをなすものをこころとしてつかむ。

※タミル語に＜k-ol＞があり、（つかむ、得る、内に含む、かき集める、考える）などの意味をもつ。これが [kukuru] につながり、そのはたらきをする [kokoro] となった。

◆心とは、人の内にあって、その人の感情や思ったり考えたりすること、またその下で行動し、活動しすること、つまりあらゆる生命としての営みを統括している働きであり、またその内容そのものである。心は人が生きるうえでなくてはならないことをおこなうものであり、またそれがおこなわれる場でもある。これより展開して、人間がこの世界で生きていくにあたってのはたらきをつかさどるものを指し示す。機能的にとらえられることもあれば、実体的にとらえられることもある。おもいがものによってひきおこされ人の内にこもるのに対して、こころは外に向かって働きかけていこうとする。

たま（魂）のもとにこころがあり、ことのもとにことば（詞）がある。魂が心においてことを詞にするのである。これが人が生きる形である。人間が生きるうえでやり繰ることはまことに多方面にわたり、この世の営みそのものである。そのゆえにやり繰るもととしてのこころの意味もまた多義にわたる。さらにまた心は仏教思想、中国諸思想、そして近代思想のもとでさまざまに意味を広げた。それは意味が変わったということではなく、人の営みのつかみ方の幅が広がることに応じて意味の幅もまた広がったのである。しかしそれでも、括るはたらきをつかさどる人のうちのはたらきとしての「こころ」の基本構造は変わっていない。

◇それにしても人間とは不思議なものである。この不思議を神を仮においてそこに帰するのではなく、不思議のままとらえようとするところにこころということば（詞）がある。

こころは今日では情的な面から用いられることの多い詞となっている。しかし、本来はくくるはたらき、括弧にくくるはたらきであり、ことをわったなかに抽象を通して新たな概念を生みだすはたらきであった。ことわりを実行する機能としてのこころを、もういちどつかみなおしたい。

▼心臓そのものを指す用例が伝えられている。◇記紀歌謡「大猪子（おほゐこ）が腹にある肝向ふ心」

▽いわゆる精根、気力の意味もこの体の機能としての心である。◇『万葉集』四二一六「よのなかのつねなきことはしるらむを、こころつくすな（情盡莫）ますらをにして」

▼こころをことを内包する実体としてとらえる。◇『古事記』下・歌謡「大君の許許呂（ココロ）をゆらみ」◇『万葉集』三四六三「ま遠くの野にも逢はなむ己許呂（ココロ）なく里のみ中に逢へる背なかも」◇『古今集』仮名序「やまと歌は、人のこころを種として、よろづのことの葉とぞなれりける」

◇『古今集』四二「人はいさ心もしらずふるさとは」◇『伊勢物語』二「その人、かたちよりは心なんまさりたりける」◇『新古今集』三六二「心なき身にもあはれは知られけり」◇「暖かい心。心が騒ぐ。心を鬼にして叱る。心が動く◇「心ここにあらず」

▽「こころを場としてとらえる」◇『源氏物語』夕顔「我がいとよく思ひ寄りぬべかりし事を、譲り聞えて、心広さよ」◇「心にしまっておく」◇「そんな狭い心でどうするか」

▼何か目的を持ってしようとする「こころ」。思いやりをいうことも、外に隠した本心をいうこともある。◇『万葉集』五三八「心あるごとな思ひ吾が背子」◇『古今集』三八七「命だに心にかなふ物ならば」◇『土左日記』「この来たる人々ぞ、こころあるやうには言はれほのめく」◇「二心」「下心」「水くさい心」「異（こと）心」「あだし心」◇「気心が知れない」◇「旅心が騒ぐ」「絵心がある」◇「心構え」「心づもり」

◇「『○○とかけて××と解く。その心は』『□□』」「○○」がどのようなくくりで「××」といえるのか、その根拠が「□□」である。くくった内容を「心」といっている。

▼内面の傾向としての「こころ」。気分、感情、誠意、機嫌、等。◇『万葉集』三三一四「そこ思ふに心し痛し」◇『古今集』五三「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」◇「心がふさぐ」

▼ことわりする「こころ」。知的なはたらき。◇『枕草子』八三「よも起きさせ給はじとてふし侍りにきと語る。心もなの事や、と聞く程に」◇「心当たりがない」◇「その心は」

▼比喩的に「もの」の「こころ」をさす。◇『源氏物語』絵合「四方（よも）の海の深き心を見しに」◇『古今集』仮名序「古へのことをも、歌のこころをも知れる人」◇『古今集』仮名序「言の心わきがたかりけらし」

こと

こと（言、事）[koto]

○「もの[mono]」の「かた[kata]」を「こと[koto]」という。世界としての「まな」は「もの」からなる。「まな」を「つくる」その「かた[kata]」が「こと」である。ひとはそれを「こと」としてとら、言葉をつける。

ものの集まりが一つの型として括られるとき、その括られたまとまりをひとは「こと」としてつかむ。《無秩序であった》もののなかにことわりを見出し、一つの「かた（型）[kata]」にとらえるとき、そのかたを分節した言葉を「こと」という。これが「こ

と」の原義である。「くち（口）[kuti]」の古形「くつ [kutu]」のかたる内容が「こと」である。

「くつ」は「くつわ（轡）〔くつ（口）わ（輪）〕の意」に残っている。ことばになることによって、無秩序なものがまとまり「こと [koto]」が成立する。沖縄語では「くち」は言葉の意味である。「うちなあぐち（沖縄語）」。

※タミル語＜ katan ＞起源。定めや義務という意味である。それが熟成した。

◆「こと」は日本語でもっとも基本になる言葉で、その意味は深く大きい。人にとってこの世は、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それを人は「こと」のはたらきとしてつかむ。「こと」は、人が自らの諸活動と自らが生きる場所に生起する内容をつかもうとするとき、のべられる言葉である。

「もの」の世界に意味を見いだし、これを一つの「こと」としてつかむ。このとき、「こと」として「つかむ」「私」が確立する。また、「こととしてつかむ」ときに、意味を成立させる「とき」が生まれる。「時」の成立である。「こと」としてつかまれた内容は、人には「時間的に経過する一連の出来事」として意識される。そのように統括してつかむ作用が人間の認知行為である。

「こと」そのものは言葉にならない。山の光景にわれを忘れ、職人が制作に没頭し全精神を傾けて仕事に打ち込んでいるとき、人は「こと」のうちにある。そしてわれにかえり反省が生まれる。そのとき、体験したことを言葉にする。直接の出会いから「こと」を経て、概念の把握へ転化する。事実としての存在が本質としての存在に転化する。

つまり「こと」は、「こと（の）は（端、葉）」としての「言葉」に現実化する。「は」は言葉を意味するタミル語 vay に由来する。「こと」それ自体は、「言葉」ではない。「言葉」は「こと」の現実の形であって「こと」そのものではない。「こと」は「言葉」が成立する土台であり、「言葉」につかまれる以前の本質を指し示す（指し示そうとする）言葉である。「くち」の古形「くつ」のかたる内容が「こと」である。

「もの」に対して「こと」は生きた動きである。「こと」が成立している「とき」から、我にかえって人は「こと」が成立する前提として「もの」の存在に気づく。人間にとって「もの」は「とき」を超え「こと」によらず存在する。だから「ことのかたりごと」（古事記「八千矛神の歌」「天語歌《あまがたりうた》の結び）は一回的な歴史的な事件についての語りを言う。

第一、ものの集まりに意味を見いだし一つの「こと」としてつかむ力が人にはある。その力が人を人間に定めている。人が、「もの」を相互に関連する意味あるもののあつまりとしてつかむとき、そのつかんだ内容を「こと」と言う。話者と世界の関わりを、話者が統一してつかんだとき、それが「こと」である。人にとってこの世界は、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それを人は「こと」としてつかむ。

第二、山の光景にわれを忘れ、職人が制作に没頭し、全精神を傾けて仕事に打ち込んでいるとき、人は「こと」のうちにある。そしてわれにかえり反省が生まれる。そのとき体験した「こと」を言葉にする。こととしてつかむ行為は、ものの生きた事実から、名づけられた言葉への転化であり、ものとの直接の出会いから、人間の考え方、つまり概念としての把握へ転化する。これが経験である。事実としての存在が本質としての存在に転化する。「こと（の）は（端、葉）」としての「言葉」に現実化する。

第三、ことそのものは言葉にならない。ことそのものは、有為転変する世界をこととしてつかむ行為の土台であり、その前提である。人はこれを神としてとらえてきた。「みこと（御言）」は神の

言葉であった。今われわれはこれを「こと」そのものでつかむ。ことは直接に知るものであり、名づけるものではない。「こと」が、ものからものへ、あるいはものから人へとどけられ、新しいものが「なる」。

▼「こと」は漢語の影響を受けて「言」と「事」に分化して用いられるようになる。日本語の根底には「事」は「言」を与えられてはじめて「事」として存在するという考え方がある。したがってこの分化が意識されても、意味は相互に転化しうる。

次の例は、「言」と「事」への分化以前の「こと」である。この「こと」は現代日本語では、他の語句を受けて、これを名詞化し、その語句の表わす行為や事態を体言化する形式名詞としての用法のなかに生きている。ある内容を「こと」としてまとめる働きをするのが、本来の「こと」の基本である。

◇『万葉集』巻二十・四四五八「にほ鳥の息長川は絶えぬとも君に語らん言尽きめやも」◇『それから』夏目漱石「親爺から説法されるたんびに、代助は返事に窮するから好加減な事を云う習慣になっている」◇『それから』夏目漱石「左様な事を仰る」◇『嵯峨本方丈記』「淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久敷くとどまる事なし」◇「彼が知っていることがわかった」

※最後の例では「彼が知っているということ（事）がわかる」という意味の場合と「彼が知っている内容がわかる」という意味の場合がある。これを区別するため、「の」で行為そのものを指示する用法が発達した。「彼が知っているのがわかる」といえば、「彼が知っているということ（事）がわかる」の意味に確定される。「彼が話すことを聞く」といえば話の内容を聞き取ることを意味し、「彼が話すのが聞こえる」といえば彼の「声」という「もの」を認識することを意味する。

▼いのちの持続がことである、そこから生命を表す。◇「ことの切れる」◇『源氏物語』幻「いみじきことの閉ぢめを見つるに」

※この用例は、「こと」の持続が、いのちそのものであることを端的に示している。それはどういうことか。「こと」としてつかむことはいのちの働きそのものであり、またつかまれる内容はこの世界の息吹そのものである。「こと」はこのような人の営みが成立する土台としてのいのちそのものをも指し示す。

▼言葉を表す。古代は多くの用例があるが、近代になると「こと」は「事」の意味を主に表し、言葉を表すときは、「言葉」「言語」を用いるようになる。

※「こと」がなることによって、他と区別される。ここから「異なる（こと―なる）」が成立した。また「断る（こと―わる）」も、明確にいうことで、相手の要求と異なることを対置する意である。

◇『日本書紀』皇極三年・歌謡「はろばろに渠騰（コト）そ聞こゆる島の藪原（やぶはら）」◇『万葉集』一七七四「たらちねの母の命（みこと）の言あらば」◇『万葉集』三〇七八「波の共（むた）靡く玉藻の片思ひに我が思ふ人の言の繁けく」◇『土佐日記』「唐（もろこし）とこの国とはこと異なるものなれど」◇『土佐日記』「この歌は常にせぬ人のことなり」

▼事実を表す。古くから「事」をあてて用いられてきた。中世以降この意味で用いられることがほとんどになる。◇『万葉集』四〇九四「善（よ）き事をはじめ給ひて」◇『源氏物語』薄雲「ことのたがひ目ありて」◇『宇治拾遺』一・五「すこしも事と思ひたるけしきもせず」◇『徒然草』一二二「次には手書く事、むねとする事はなくともこれを習ふべし」◇『蜻蛉日記』中「明くれば起き、暮るれば臥すをことにてあるぞ」

◆「もの」と「こと」

日本語では「もの」と「こと」は厳格に区別され、言葉の構造の骨格を形づくる。最も基本的な構造日本語が「こと」と「もの」

である。次の例で「もの」と「こと」を入れ替えると明らかに意味をなさない。◇「まあ、人のいることいること」◇「出がけに不意の客がきたものですから」◇「人生はむなしいもの」◇「なんとばかげたことをしでかしたものだ」◇「教えてくれないんだもの」◇「きれいな花だこと」

「もの」と「こと」は取り違えることなく使われる。意味をいちいち判断して使うのではなく、発話者の意図と言葉が一体になっているから「もの」「こと」は正しく使われる。日本語の構造と言葉の意識が一体になっている。「もの」の一連の世界を一つの「こと」としてつかむのは人の認知作用の根幹である。日本語に「こと」という言葉が生まれたのは、考えてみれば不思議である。言葉というもののはたらきそのものを言葉にした言葉が「こと」である。

「こと」は事実の発見の意識を表現し、「もの」は個人の力の及ばないものの存在を表現している。「もの」が世界を「見る」ことによって切りとられるのに対して、「こと」は世界に耳を傾け「きく（聞く、聴く）」ことによって言葉としてつかまれる。

「もの」が対象であるか、「こと」が対象であるかは、ほぼ動詞の意味によって定まっている。◇「見たいものがある」「差し上げたいものがあります」◇「聞きたいことがある」「話したいことがある」「悲しいことがあった」

しかし◇「書きたいことがある」◇「書きたいものがある」

同じ「書く」であるが、「書きたいこと」は筆者の内面を表現しようとすることを意味し、「書きたいもの」では報道など客観的事実を書きあらわして伝えようとすることを意味する。

ことば

ことば（言葉、詞、辞）[kotoba] ← [kotofa]

○こと（言）のは（端）をことばという。「こと」は「こと―の―は」として現実の存在となるとき「ことば」となるのであり、「ことば」を意味あるものとするその本質、内容を示す。

◆「こと」を分節して切りとり、そのようにしてつかまれた「こと」をあらわして現実のものとしたしたのが「ことば」である。言いかえれば、「こと」の現実のあり方（現実態）が「ことば」である。現実のものとするする行為が「いう（言う）」である。言葉は言うという行為がなければ、現実には存在しえない。

「ことば」は本来は「こと端（バ）」であり、「は」はタミル語[vay]の「言葉」そのものである。それが熟成して「軒端」が軒の端とさらに軒に近い空間を意味するように、「こと」と現実とが触れあう領域での「こと」の顕れを意味した。同時に「ことば」は「ことの端」や「ことの葉」、つまり「こと」が言われたり書かれたりしたものとして「ことの現実態」をあらわしてきた。

「現実態」として、人々が感情、意志、考えなどを伝え合うために用いる音声、また、それを文字に表わしたもの、を示す。その表現行為にも表現内容も用いる。

言葉は、通じるか通じないかで同じ言葉であるか異なる言葉であるか、判別される。同じ言葉ととらえるとき、たとの区別で「日本語」「フランス語」のように識別する。このように識別しうる根拠としての、ひとまとまりの言葉を「言語」という。

人は、言葉において人間である。人をして人間とする言葉、それがその人の固有の言葉である。言葉は、ともに伝わることを以て言葉でもある。ゆえに言葉は一定の広がりをもつ。そのことにおいて一つの言葉が成立する。青空学園の言葉を日本語という。昔

からの日本語、本来の日本語があるか否かは問わない。一方、言葉は言葉である以上、一つの構造をもつ。その構造はその言葉で世界をとらえ、思いをよせて考える枠組みを定める。

言葉は日々に新たに豊かになる。人間が生きるということは、その経験によって言葉の意味を定め直し、枠組みを更新し、豊かにすることである。言葉を定義するというのは、人生の経験として学んだ言葉の意味や意義を、辞書を通して古人の用法と照らしあわせたうえで、もういちど自分の言葉で書き直すことである。

▼表現行為◇『万葉集』七七四「百千（ももち）たび恋ふといふとも諸弟（もろと）らが練（ねり）の言羽（ことば）は我は頼まじ」◇『伊勢物語』一〇七「されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばも言ひ知らず」

▼表現内容◇『土左日記』「『黒鳥のもとに白き波寄す』とぞいふ。このことば、何とにはなけれども物言ふやうにぞ聞こえたる」◇『源氏物語』手習「いとをかしう、今の世に聞こえぬことばこそは弾（ひ）き給けれ」◇『竹取物語』「うち泣きて書くことばは」◇『小説神髄』坪内逍遙「形容（おもひいれ）をもて演じがたく、台辞（コトバ）をもてうつしがたき」

▼用語◇『源氏物語』玉鬘「よろづの草子・歌枕、よく案内（あない）知り、見つくして、そのうちのこと葉を取り出づるに」◇『小説神髄』坪内逍遙「詩歌伝奇に鄙野（ひや）なる言詞（コトバ）を用ふるを悪（にく）むが如くに」

ことわり

ことわり（理、断り）[kotowari]

○こと（言）をわる（割る）ことにより明らかとなること。こと―を―わって人が知った―そのもののこと。ことをわって開かれたより深いこと。

◆こと（言）をわる（割る）ことにより明らかとなること。ことをわって人が知ったそのもののこと。ことをわって開かれたより深いこと。これがことわりである。

「こと」は、生々流転する世界を一つのまとまりで切り取りつかむ作用によって得られる内容そのものであり、したがって「ことわり」は、つかんだ「ものの道理」、ものに内在する道理を意味する。ものは人の意のままにはならない存在であるがゆえに、ことわりは人の力では支配し動かすことのできない条理、すじ道、も意味する。

ことを割ることは人間が生きてゆくことそのものである。生きてゆくことはいずれにせよ一つ一つの困難と向きあっていくことである。「もの」としてとらえられた人生の厳格さを聴きとり、それを自己の生き方に表す、それが「ことを割る」ことである。人生とはことわりの人生だということもまた、人生の厳格さである。

世界はいきいきと輝き運動を続けている。人間もまたこの世界のなかでいっとき輝きそして生を終えてものにかえる。そのいっときを「いのちある」ときという。いのちあるとき、それを生きるという。人が生きる内実は、「こと」の内に入って「こと」をつかみ、人生を動かしていくことである。この営みを「ことをわる」という。人生とは「ことをわる」営みそのものである。里はことをわるところであり、ことわりの智恵をつたえるところでもある。

「ことわり」は「ことわるまでもないことだが」のような用法を仲立ちにして、拒絶するという意味まで拡がった。家や村やなどの内で「こと」を荒立てることは、日常生活の流れを断ちきることであった。それがつまり「ことをわる」ことであり、日常生活を「断る」ことであった。協働の場の慣習的な任務に異議を唱えることが「ことわり」であり、したがって日常生活を「断つ」こ

とを意味する漢字が当てられた。

人のいのちのいとなみそれ自身が「ことわり」であり、さらにそのうえでの「語らい」である。人が生きるということは何かしら「こと」を荒立てることなのである。

▼もの（物）のことを明らかにする。筋道を見出したり、筋道をつけたりすること。◇『源氏物語』浮舟「それもさるべきにこそはとことわらるるを」◇『徒然草』「（関東の人は）にぎはいゆたかなれば人にはたのまるるぞかしとことわられ給ひしを」

▽道理があるとする◇『源氏物語』竹河「（先に女御になって）久しくなり給へる御方にのみ（人々は）ことわりて」

▽判断をする◇『枕草子』八三「まづこれはいかに。とくことわれ」

▼「こと―を―わって人が知った―その中味」から、そのものに内在する条理◇『日本書紀』敏達元年六月（前田本訓）「有司（つかさ）、礼（コトハリ）を以て収め葬る」◇『万葉集』六〇五「天地の神しことわり無くこそは」◇『万葉集』八〇〇「妻子（めこ）見ればめぐし愛（うつく）し世の中はかくぞ許等和理（コトワリ）」◇『源氏物語』須磨「おぼし歎きたるさまもいとことはりなり」

▽判断の内容◇『源氏物語』須磨「泣く泣く申し給ひても、そのことはりをあらはにうけ給はり給はねば」

▽説明の内容◇『源氏物語』帚木「（雨の夜の品定めの場で）中将は此のことはり聞きはてむと」◇『源氏物語』宿木「いみじうことはりして聞ゆとも、いと著（しる）かるべきわざぞ」

▽あらかじめ了解を得るために説明する◇『栄花物語』駒競の行幸「年頃の風病、ことはり申して、まかりさりぬべかめりと申し給ふ」

▼断ること。

「ことわり」は「ことわるまでもないことだが」のような用法を仲立ちにして、最後は拒絶するという意味まで拡がった。家や村やなどの内で「こと」を荒立てることは、日常生活において当然のように流れている毎日の時間を断ちきることであった。それがつまり「ことを割る」ことであり、日常生活を「断る」ことであった。協働の場の慣習的な任務に異議を唱えることが「ことわり」であり、したがって日常生活を「断つ」ことを意味する漢字が当てられた。

しかし実は人のいのちのいとなみそれ自身が「ことわり」であり、さらにそのうえでの「語らい」であると考える。人が生きるということは何かしら「こと」を荒立てることなのである。この現実を覆い隠すことはできない。

◇「お断りします」

※英語「inte-llect」の意味は「わり＝inte，こと＝llect」つまり日本語の順では「こと―わり」であり、それはまたギリシア語の「dia-logos」する働きでもある。「dia」は割ることであり、「logos」はまさに日本語の「こと」に対応している。「logos」は言葉を意味するとともに問題になっていることの真相を意味する。それが指示する内容が「こと」である。「dia-logos」は「対話」と訳されるが、その言葉の構造はこれまた「ことわり」と同じである。

「ことをわる」とは、ことを間にして互いに「語りあう」ことでもある。ことに導かれて心のなかで語りあう、それが「考える」ということである。ここには、人間の心の普遍がある。

そして、「理（ことわり）の学」が philosophy の本来の意味である。中江兆民は，philosophy を「理学」と訳した。philosophy を日本語のなかでとらえ、訳そうとする意思が働いていた。福沢諭吉もまた言葉を『易経』から直接にとって「窮理」と訳している。「ことわりを窮明する学」としての「理学」こそ、philosophy の訳として日本語にうらづけられたものであった。

「ことわりの学」としてphilosophyをとらえるなら、少なくとも江戸末から明治期に出会った西洋を、主体的に、言葉の内部からとらえることができる。このように、日本語によって裏付けられた言葉を訳語にあてることが、兆民や諭吉によっていったんはなされた。

しかし、明治政府は「理学」を捨て「哲学」を採用した。「当時フィロソフィーを哲学と定めた西周が、明治十年東京大学創設と同時に文学部に哲学の科目を設くるに及んで此言葉を採用せしめたことから確定語のようになった」（小川甫文「近代日本の哲学思潮」、理想社版『哲学講座』第三巻）。

「哲学」は、近代の中国西学がphilosophyの訳語として転用した「希哲学」を西周が採用し、さらにそれから西が造語したものである。そして「理学」は自然科学と数学の総称になったが、これは日本語の中からその意味が定まる用法ではなかった。philosophyを日本語で受けとめた「ことわりの学」としての「理学」か、漢字造語の根なし草言葉「哲学」か、ここに近代日本の分岐点が象徴されている。

われわれはいま、「ことわりの学」としてphilosophyをとらえ直すべき地点に立っている。

※「ことわり」は源氏物語で多用される。源氏物語は、はじめて日本語で深く人間を表現した。その表現された内容こそが「ことわり」であり、また、人が生きる場のあり方も「ことわり」としてとらる。「ことわり」は源氏物語を貫く基本的な考え方である。

七、八世紀は中国語の取り入れが全盛であった。しかし日本語の深部では固有の言葉がゆっくりと育っていた。万葉集にすでにその現れがある。大きく開花するまでにはさらに二百年を要した。九世紀末になって遣唐使が廃止、さらに百年たって源氏物語が現れた。源氏物語によって初めて日本語は深く人間を表現した。その表現された内容こそが「ことわり」である。混成語の熟成にはそれだけの時を要した。

こもる

こもる（籠もる）［komoru］

○殻（から）［kara］で囲まれた空（から）［kara］に入り、外との接触を断って、魂を受け新しい力を得ること。

◆殻に入って、新たな魂を受けること。籠もる場としての「中空の場」は、生命の宿るところとしての子宮、米が籠もる殻、サナギが籠もる繭、セミが籠もる殻、新芽が籠もるつぼみ、これらから新たな力の宿る創造の場と考えられてきた。

◇冬ごもり。冬籠もりは、春に新しい命が芽吹くためになくてはならないことであり、また冬に籠もるからこそ、春芽吹くと考えられてきた。冬籠もりは新しい命を受け取るうえで、なくてはならないことであった。

◇『万葉集』一六「冬ごもり　春さり来れば　鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りでも取らず　草深み　取りても見ず」◇『万葉集』一三三六「冬ごもり春の大野を焼く人は焼き足らぬかもわが心焼く」

「冬ごもり」は「春」にかかる枕詞。その意は「冬に籠もったから、春が来る」ということである。『ひらがなでよめばわかる日本語』（中西進）では〈ここの「こもる」とは「隠れてしまう」という意味。「冬隠り」とは冬が隠れてしまうことで、英語でいえば、まさに〝Winter is over〟です。〉とある。しかし単に時間の経過としての「冬隠り」ということでよいのであろうか。

◇身ごもる。◇『日本書紀』歌謡「畳なづく青垣山こもれる大和しうるはし」◇『万葉集』四〇六七「二上の山に許母礼（コモレ）

るほととぎす」◇『万葉集』二七〇〇「玉かぎる石垣淵の隠（こもり）には」◇『蜻蛉日記』中「ながき精進もはじめたる人、山寺にこもれり」

さ行

さいわい

さいわい（幸い）[saiwai]

○「さきはひ[sakihafi]」の変化。さく（咲く）[saku]、さかゆ（栄ゆ）[sakayu]、さかる（盛る）[sakaru]と[sak]が同根である。

◆生長のはたらきが頂点に達し、内から外に形を開くこと。「はひ」は「にぎはひ」と同じく状態を表す。いのちのはたらきが盛んな様。

◇『万葉集』八九四「そらみつ大和の国は皇神（すめかみ）の厳しき国、言霊のさきはふ国と」

▼神仏など他が与えてくれたと考えられる、自分にとって非常に望ましく、またしあわせに感じられる状態。運のよいこと。吉事にあうこと。また、そのさま。幸福。しあわせ。◇御笑納下されば幸いです。◇『伊勢物語』一〇七「身さいはひあらば、この雨は降らじ」◇『太平記』二「今こそ待処の幸（サイハイ）よと思ひて」

▽運よく。折よく。さいわいにして。好機として。◇『竹取物語』「さいはひに神の助けあらば」◇そうしていただければ幸いです。

※「さいわい」はもとは植物の繁茂が人にもたらす幸せをいうのに対し、「さち」はもとは狩猟の獲物が豊富さが人にもたらす幸せをいう。

弥生系の言葉「さいわい」と縄文系の言葉「さち」とがある。これが混成し、「幸い」は一定の場で人が耕し、ものが成り、そこから糧としての「さち」を得ることの幸せをいう。

さき

さき（先、前、崎）[saki]

○[su]と[aki]に由来するのではないかと考えられる。[aki]は実りそのものであり、その実りをまさにもたらす（[su]）ということが基層の意味である。つまり、[sak]は力が充満しいままさにはじけ出ようとする、という意味を根底にもつ。

◆生長のはたらきが頂点に達し、内から外に形を開くこと。したがって空間的にも時間的にも、話者の立っている地点から続いているところにある線（点）、またはその点の方向を指し示す。

「さく（咲く、裂く、割く）」と同根。はじけ出ようとする「ところ」「とき」を指す。

▼「先、前」。「ところを指す」話者が立っている地点の何らかの性質が続いている限界の地点を指すことが原義で、さらにその方向も示す。◇『今昔物語』二八・三三「錐の崎の様なる亀の歯共」◇『源氏物語』蓬生「御さきの露を、馬の鞭して払ひつつ、入れたてまつる」◇『太平記』九「宗秋こそ先（まづ）自害して。冥途の御先（さき）をも仕らんと存候つるに」◇『太平記』一〇「夜昼八十余箇度の戦に毎度先（さき）を懸（かけ）、囲（かこみ）を破て」

▽「ときを指す（「前」を当てることもある。）」話者が現在と考えるところから何らかの性質が続いている限界の時点を指すことが原義で、さらにその方向も示す。過去についても将来についても用いる。◇『万葉集』三七九五「恥を忍び恥を黙（もだ）して事も無く物言はぬ先に我は寄りなむ」◇『源氏物語』総角「さき

の春も、花見に訪ね参り来しこれかれ」◇『源氏物語』夕顔「さきの世の契しらるる身のうさに行末かねて頼みがたさよ」◇先の大戦◇この先何があるかわからない。

▼「崎」。陸地が海や湖などの中へつきでた所。山や丘が平地につきだした所。◇『古事記』上・歌謡「かき廻（み）る磯の佐吉（サキ）落ちず」◇『万葉集』四四〇八「丘の佐伎（サキ）」

※「は（端）」も、本体があってその本体の境を示すが、言葉の意味する運動の方向は「さき（先）」とは逆に、本体の内部へ向かう。価値が本体の側におかれている。「軒端、のき・は」「言葉、こと・は」

さく

さく（咲く、裂く、割く）[saku]

○「さく（咲く）」は[sak]と[u]からなり、[sak]は「栄ゆ[sak-ayu]」や「盛る[sak-aru]」の[sak]と同根。内にこもった命の力の活動が頂きに達し、勢いよく外に向かって開くこと。

◆力が充満しいままさにはじけ出ようとする、という意味が根底にある。[sak]はさらに、[su]と[aki]に由来するのではないかと考えられる。[aki]は実りそのものであり、その実りをまさにもたらす（[su]）ということが基層の意味である。つまり、力が充満しいままさにはじけ出ようとする、という意味が根底にある。

※タミル語＜akai＞に起源（なし～s対応）。タミル語では「栄える、芽を吹く、燃える、起きる」の意。

※『古典基礎語辞典』では「サク（裂く）は『名義抄』によるアクセントが違うので別語。」とある。今日でも、関西地方では「咲く」は「――」であり、「裂く」は「／／」とそれぞれ高低をかえている。しかし、タミル語では「サク（裂く）」もまたタミル語＜akai＞に起源（なし～s対応）であり、タミル語では「破れる、裂く」の意とされる。

また籠もった力が殻を打ち破り咲くのであるから、「咲く」に「裂く」の意がある。『名義抄』が成立した十一～十二世紀には、この二つを区別しようとして、アクセントが変わってきていた。したがって、もとは同語であったが、後にアクセントを区別したと考えられる。

▼「咲く」。◇『日本書紀』大化五年三月・歌謡「もとごとに花は左該（サケ）ども」◇『万葉集』四三一四「時ごとに咲かむ花をし見つつ偲はむ」◇『万葉集』三九〇四「咲きの盛りは惜しきものなり」

▽波頭が白く立つという比喩も古くからある。◇『万葉集』三五五一「あぢかまの潟に咲く波平瀬にも紐解くものかかなしを置きて」

▼「裂く」。◇『塗籠本伊勢物語』三八「うへのきぬの肩を張りさきてけり」◇『私聚百因縁集』六・五「此れは太子の為母后の胸を却（サク）」

▽目尻などを裂いて入墨をする。◇『古事記』中・歌謡「胡恠子（あめ）鶺鴒（つつ）千鳥ま鵐（しとと）何ど佐祁（サケ）る利目（とめ）」

▽人と人との仲を隔てる。◇「夫婦の間を裂く」◇『頼政集』下「夢にも中をさくと思はん」

▼「割く」。一部を分けて他にあてる。◇「時間を割く」◇『日本書紀』継体六年一二月（前田本訓）「抑由有り。縦（も）し削（サイ）て他に賜はば、本の区域に違ひなむ」

さす

さす（射す、差す、指す、刺す、挿す、注す、点す、鎖す、閉す、止す）

○ものをまっすぐにすすませる。ものがまっすぐにすすむ。

◆先のとがったものを、一つの目標に向けて、突き進める。もののいのちが発揮され、一つの方向に向かって突き進んでゆく。

※タミル語＜catu＞由来。

▼空間的にまっすぐに伸びる動きを示す。▽指や物でその方を示すために、その方向へ指や物を伸ばす。◇「先生に指される」◇「差しつ差されつ」◇『万葉集』四二二〇「太夫（ますらお）の引のまにまに　しな離（ざか）る　越路をさして　延ぶ鳥の　別れにしより」◇『今昔物語』一六・一七「彼（かし）こに有りと倉の方に指を差（さし）ぬ」

▽碁で石を置く。将棋などで駒を動かす。◇『源氏物語』空蝉「碁打ち果てて、けちさすわたり、心とげに見えて」

▽かさなどを持って、それで身をおおう。かざす。◇「傘をさす」◇『竹取物語』「羅蓋さしたり」

▽指名する。ある役目に定めて派遣する。◇『源氏物語』藤裏葉「わざと使さされたりけるを、はやうものし給へ」

▽目あてとしてその方へ向ける。目ざす。◇『土佐日記』「大津より浦戸をさしてこぎいづ」

▼棒状のものをまっすぐに突き込む。▽虫が刺す。◇『徒然草』「くちばみにさされたる人、かの草を揉みて付けぬれば、即ち癒ゆとなん」◇「棹さす」◇「瓶に花をさす」

▼ものを設置したり、こしらえたりする。◇『万葉集』四〇一三「二上の彼面此面（をてもこのも）に網さして吾が待つ鷹を夢に告げつも」

▽庵（いおり）、またはその一部を造る。◇『方丈記』「東に三尺余のひさしをさして」

▽帯、紐などを結ぶ。◇『曾我物語』五「首に綱をさし、土の籠にぞこめられける」

▼異質なものを加える。▽入れ混ぜる。◇『万葉集』三一〇一「紫は灰指すものそ　海石榴市（つばいち）の」

▽火をともす。◇『竹取物語』「まづ紙燭（しそく）さして来。この貝、顔見ん」

▼他動詞にそれぞれ対応する。

▽光が照ってはいり込む。また、光が照って物に当たる。◇「前途に光明が射す」◇『枕草子』二四〇「日いとうららかにさしたる田舎の館など」

▽草木が伸びる。◇『源氏物語』若菜上「若葉さす野辺の小松をひきつれて」

▽勢いよく立ちのぼる。潮がみちてくる。熱、色などが表に出てくる。◇『海道記』「塩のさす時は上さまに水の流るればさか川と云」◇『荘子抄』七「熱気がさすほどに」

▽ねむけ、いやけなどが知らないうちにはいりこむ。ひし「厭気（眠気）がさす」◇『滑稽本七偏人』三「些と甘（うめ）へ事が有らうとすると、直に魔のさすと言なア世の中の当然だから」

さと

さと（里）[sato]

○接頭語の「さ」とところを表す「と」よりなる。「さ」は「さつき（皐月）」、「さおとめ（早乙女）」、「さなえ（早苗）」、「さみだれ（五月雨）」の「さ」であり、みずみずしいいのちの満ちていることを表す。「と」は「やまと（山の霊威があらわれるところ）」、

「みなと（水の霊威があらわれるところ）」のように用いる。「さと」はいのちの霊威があらわれるところをいう。

※「さ［sa］」はタミル語＜ay＞由来。美しさ、こまやかさ、小ささ、柔らかさを意味する。

◆いのちの霊威があらわれるところをいう。つまり、人が生まれ育ち、生活し、いのちをつなぐところの意である。後にそこを出た者は、育った里を、心の拠り所として「ふるさと（古里、故郷）」という。「こと―わり」の意味は、「こと」の意味を考えたうえで後で定義する。ここでは、里につたえられそこに住むものの生き方、その形そしてその仕組みを表すものとする。

里のことわりを慈しみ、それを今に生かす。この心が世の在り方を変えてゆく力であり、この心を欠くならば、何ごとをなさんとしてもそれは根なし草である。

▼人が育ち生活するところ。▽「の（野）」や「やま（山）」に対して、生活するところ。◇『万葉集』三四六三「ま遠くの野にも逢はむ心なく里の真中（みなか）に逢へる背なかも」◇『万葉集』三七八二「ほととぎす我が住む佐刀（サト）に来鳴きとよもす」◇『源氏物語』夕霧「早うより御祈祷（いのり）の師にて、物の怪など払ひ棄てける律師、山籠りして里に出でじと誓ひたる」

▽生まれ育ったところ。◇『万葉集』一七四〇「住吉に帰り来りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて」◇『古今集』二四八「さとあれて人は古りにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる」◇『新古今集』四七八「里はあれて月やあらぬとうらみても」

▽旅に出たときの、後に残したわが家。◇『万葉集』三一三四「里離れ遠くあらなくに草枕旅人し思へばなほ恋ひにけり」

▽宮廷を「内（うち）」というのに対して、それ以外の場所をいう。特に宮仕えする人が自分の住家また実家をいう。自宅。生家。◇『伊勢物語』六五「この女、思ひわびてさとへ行く」

▼家々のあるところ。▽集落。◇『古今集』九三「春の色のいたりいたらぬさとはあらじ　さけるさかざる花の見ゆらむ」

▽（都に対して）田舎（いなか）。田園地帯。在所。◇『俳・鹿島紀行』「かりかけし田づらのつるや里の秋」

▽妻、養子、奉公人などの実家。親もと。今日では、ふつう、妻の実家をいう。◇『浮・好色一代男』五「今日御隙を下され、里へ帰る御名残に」◇『滑・浮世床』初「女房の里」

▽養育料を出して、子どもを他人に預けること。また、その預け先。◇『浄・夕霧阿波鳴渡』上「あければ七つ、元の遣手玉が才覚でさとに遣ったとやら」

▽（「おさとが知れる」の形で用いて）素姓。おいたち。育ち。◇『洒・廻覧奇談深淵情』「もらってくれろのなんのといふ様な客ならお里のしれた男だが」

▼距離の単位。距離をあらわす「里（り）」を訓読した語。◇『古今六帖』五「はるばると千さとの程をへだててては」

しま

しま（島）［sima］

○しま［sima］は住むからくる。「住む」［sumu］は「住まい」［sumai］にあるように［suma］の転化。住ま［suma］に対し［sima］は住む状態の土台、場所。［suma］は間をなすことが原義か。

※朝鮮語＜syem＞と同根。

◆住む場所。

▼周囲を水で囲まれた陸地。◇『古事記』歌謡「うち廻（み）る斯麻（しま）の埼々　かき廻る磯の埼落ちず」◇『万葉集』二二〇「をちこちの嶋は多けど名ぐはし狭埼（さみね）の嶋の」柿本人麻呂

◇『万葉集』三五九三「大伴の御津に船乗り漕ぎ出ては、いずれの思麻（しま）に廬（いほり）せむわれ」

▽洲◇『万葉集』三二三二「島伝い見れども飽かずみ吉野の滝もとどろに落つる白波」

▼集落、村落の意。（近世になって多用）。ある一区画をなした土地。勢力範囲にある限られた地帯。界隈。◇『浮き世草子・好色二代男』「此嶋ははじめての祝儀とて、先（ま）ず嚊（かか）が手元へ弐両なげれば」◇『浮き世草子・日本永代蔵』「他に頼む嶋もなく、爰（ここ）にかかり舟」

しめす

しめす（示す）［simesu］

○見える（［mesu］は見えること）ようにする（［si］）すること、。

▼物を実際に出して見せる。あらわす。◇『日本書紀』欽明二年「任那と新羅と策を席（しきひ）の際に運（はこ）むて、蜂蛇（はちをろち）の恠（しるまし。奇怪な徴候。不吉な前兆）を現（しめす）」◇『万葉集』三七六五「まそ鏡かけて偲（しぬ）へとまつり出す、形見のものを人に之売須（シメス）な」◇次の事実が成り立つことを示せ。

▼感情、意志などを外に表して見せる。はっきりと知らせる。さして教える。指示する。◇『万葉集』七二五「にほ鳥の潜（かづ）く池水、心あらば君に吾が恋ふる心示左（しめサ）ね」◇『源氏物語』明石「雨風やまばこの浦に寄せよと、かねてしめすことの侍りしかば」

しる

しる（領る、知る、識る）［siru］

○ものを手に入れ手に入れることによってもののことがわかること。「きく」はものを手に入れることなく心をむけてもののことを受けること。それに対して、「知る」はもともと「自分のものにして意のままに支配できるようになる」という「しる（領る）」である。

※タミル語＜teri＞に起源（t〜s、e〜i対応）。

◆自分の心で対象をつかみ、わがものにして、そのもののことが分かること。「手に入れる、ものにする、ものをすっかり自分のものにする」が含意されている。

※名詞の「しるし（徴、験、証、印）」、また形容詞の「しる・し（著し）」と同根である。

▼（知）ものの発生や存在を認める。他との区別、対処すべき方法などをわきまえる。もののこと（意味、内容、本質、情趣など）を理解する。◇『枕草子』八六「聞きゐたりけるをしらで、人の上いひたる」◇『土左日記』「ただ月を見てぞ、にしひんがしをばしりける」◇ものの哀れを知らぬ人。◇『万葉集』七九三「世の中は空（むな）しきものと志流（シル）時しいよよますます悲しかりけり」

▽実際に行ってみたり、見聞したりする。経験する。◇彼はまだ酒の味を知らない。◇日本人が原爆を知ったのは、広島が被爆したときにはじまる。◇男を知る、女を知る。◇『竹取物語』「ある時には、風につけてしらぬ国に吹よせられて」

▽面識がある。◇知らない人にはついて行くな。◇『平家物語』一〇「高野にとしごろしり給へる聖あり」

▽（その後のことを知る、から）関知する。かかわりあう。下

に打消の語を伴う場合が多い。◇どうなっても後は知らないよ。
▼（領）ある範囲の土地などを治める。統治する。土地などを領有する。また、品物や建物などを管理する。◇『源氏物語』桐壺「遂に世中をしり給べき右のおとどの御いきほひは」◇『伊勢物語』六六「むかし、男、津の国にしる所ありけるに」
―しれる（知れる）「知る」の受身・使役形で、「他人の知るところとなる」の意を、消極的には受身として、積極的には使役として表現したもの）知られる。また、知らせる。◇人知れず悩む。◇『万葉集』一四四六「己（おの）があたりを人に令知（しれ）つつ」◇『古今集』六三二「人しれぬわが通ひ路の関守は」
▽「し・れた」で「わかりきった。いうまでもない」を意味する。◇知れた事よ。◇もうけは知れたものだ。

しるす

しるす（記す、徴す、標す）[sirusu]
○「しる（知る）[siru]」ようにすること。占有した（領る）ことをはっきりさせるために、何らかの形で表すこと。
◆紛れることなくわかるように、形にすること。はっきりさせる、きわだたせる。「しるし（標し）[sirusi]」はその形。
▼前兆を示す。◇『万葉集』三九二五「新しき年のはじめに豊の年思流須（シルス）とならし雪の降れるは」
▼霊験を表す。◇『今昔物語』一一・二九「此寺、供養のノ後、彼ノ御指のの験シ給ふとて」
▼目じるしをつける。◇『枕草子』二四四「立ちながら横ざまに投げ入れて、返りて流れんかたを末としるして遣せ」
▼書きつける。◇『万葉集』四三六六「常陸さし行かむ雁もが吾が恋を記し（志留志）て付けて妹に知らせむ」◇『大慈恩寺三蔵法師伝院政期点』「之を聖典に験（シルス）に」
▼それと認識する。◇『古今集』一〇〇三「つもれるとしをしるせば　いつつのむつ（三〇）に　なりにけり」

すむ

すむ（住む、棲む）[sumu]
◆内と定めた所で生活すること。「くらす」は一日を単位として時を過ごすことであり、一日一日を過ごすための営みも意味するのに対し、「すむ」はここと定めた所で長く安定していること。
▼生活の居所ときめて、その場所に停まる。そこに居ついて暮らす。▽鳥獣虫魚など動物が巣をつくって、そこにいる。巣を営む。◇『万葉集』三五四七「あぢの須牟（スム）須沙の入江の」◇『万葉集』四五〇五「磯の浦に常喚び来棲む鴛鴦（おしどり）の惜しき吾が身は君がまにまに」
▽人が定めた所で生活する。◇『万葉集』三七八二「雨隠（あまごもり）物思ふ時にほととぎす我が住む里に来鳴響（とよ）もす」◇『万葉集』四一二一「君が姿を見ず久に鄙にし須米（スメ）ば」
▽妻問い婚で男が女のもとに夫として通って行って泊まる。◇『竹取物語』「世の人々、『あべの大臣、火鼠の皮袋もていまして、かぐや姫にすみ給ふとな』」◇『伊勢物語』九四「いかがありけむ、そのをとこすまずなりにけり」

する

する[suru]←[su]←[siu]
○あることがなるように、心しておこなうこと。行為に関わる「こと」を、実際におこなう。もののある「こと」がなるようにお

こなう。ここから熟成して「もの」のある属性が具体的に現れること。

◆これはもっとも基本的な言葉の一つである。「する」という行為は自ずとなることではなく、心があることをしようとしてするのである。心がことをつかみ、人をしてその行為をするようにさせ、「する」が成立する。

ではなぜ「音がする」と「旅をする」が同じ「する」なのか。これは混成語としての熟成の結果である。「旅をする」は「旅」という行為を表すことを実際に実行することを意味する。「音がする」は、「もの」のいろいろな属性のうち「音」という属性が現れる（一般的に「なる」）ことを意味する。もののある属性が現れ現実になることが基本である。

この基本が二つに分化した。「音をする」「旅がする」とは言わない。「もの」そのものが属性を表すときは「[属性]がする」といい、話者が意志を持ってことを行うときは「何々をする」という。

※タミル語＜ cey ＞に起源（e〜i 対応）。

▼あることが実現するように意志をもってことを行う。▽ある動作や行為を行う◇『古事記』下・歌謡「弾く琴にまひ須流（スル）女常世にもかも」◇『万葉集』二「登り立ち国見をすれば」◇『万葉集』三六二七「舟泊めて浮き寝をしつつ」◇『万葉集』一七九「佐田の丘辺に侍宿しに行く」◇『万葉集』一九三七「ほととぎす妻恋ひすらし」◇『源氏物語』桐壺「御方々の御とのゐなども、たえてし給はず」◇「旅をする」「野球をする」

▽ある状態を実現する。◇「子どもを歌手にする」「値を高くする」◇『万葉集』八一七「青柳はかづらに須（ス）べく成りにけらずや」◇『大鏡』五「男ならば、大臣の子とせよ」◇「彼は会社の重役をしている」「いすを踏み台にする」◇『浮雲』二葉亭四迷「見て見ぬ風をしてゐるらしい」

【―むとす】いままさに…をしようとする。現代語でこの的確な言い方は廃れた。◇『竹取物語』「鬼のようなる物出きてころさんとしき」

▼ものの動きやけはいが現れる。◇『万葉集』三六二四「沖への方に楫（かぢ）の音須（ス）なり」◇『古今集』一三九「昔の人の袖の香ぞする」

▽ものの動きやけはいが心の中に現れる◇『源氏物語』夕顔「あながちにたけたちき心地ぞする」◇「そんな気がする」

▽現れた状態を示す。◇『源氏物語』桐壺「見てはうちゑまれぬべきさまのし給へれば」◇『行人』夏目漱石「とうとう根気負がして黙って仕舞った」

▽もののけはいが現れている（あるいは現れていない）状態が続くことから時間の経過を表す。同じく価値の持続から（金額などを表す語のあとに付けて）…の金額である。◇「もう一週間もすればできるのだが」◇「しばらくするとまた立ち止まった」◇「いくらした？」「千円もする本だった」

▼他の語についてその動作を実際にすることを表す。本来「くしゃみする」のように動作を表す語につく。安易に動詞化ができるので乱用される。

▽本来の用法◇「値する」「噂する」「いたずらする」◇「がっかりする」◇「研究する、「報告する」◇「お誘いする」◇「甘んずる」「重んずる」◇「害する」「信ずる」（「信じる」と熟している）。◇「れっき（歴）とした家柄の人」

▽乱用例◇「哲学する」、「科学する」、「思考する」、「止揚する」。

※これらは近代になって西洋語の翻訳のために作られた言葉である。「思考する」は「denken」の、「止揚する」は「aufheben」の翻訳語である。

「哲学」、「科学」、「思考」そのもの意味が明確でなくても、作る

ことができる。そのため、「哲学する」ことがどのような営為であるのか、その言葉の意味が明確でないままに流通した。意味を置いたまま、このような言葉を操ることが、官僚、体制政治家、知識人の業となった。

かつてドイツに留学した日本人の部屋の掃除に来たメードが、窓をあけるときに「aufheben」と言った。「aufheben」はヘーゲル哲学の基礎概念で「止揚する」と訳している。それで「ドイツではメードまでこんな哲学語を使うのか」と感心したという話がある。しかしこれは逆で「aufheben」は誰もが使う日常語なのだ。それを抽象して基幹の言葉に育てたのがヘーゲルなのだ。

ドイツに学ぶのなら、何よりこのような日常語と哲学語の関係をこそ学ぶべきであった。だが、近代日本は、西洋の知の肝心なところは学ばず、結果のみを漢字語に翻訳して移入した。ここに近代日本語の基本問題がある。として作られた。

「する」をつけることで、動詞を作ることができることは、混成語である日本語が身につけた造語法である。さらに、漢字語によって熟語を作ることも、できる。しかし、この二つの方法が組み合わさると、意味が日本語の構造に根ざしたものであるか否かを吟味することなく、造語できる。大急ぎで近代化しなければならなかった日本語にとって、それはいささか安易な方法であった。このようにして作られた膨大な近代漢字語は熟成するのかどうか、それはまだ分からないままである。

さち

さち（矢、幸）[sati] ← [satu]

○鏃（やじり）の矢の意。その矢は糧をもたらす。[satu] から [sati] に音が変わるとともに、幸福の意味をもつようになった。

◆「咲き」「幸ひ [sakihahi]」は植物の繁茂のよってもたらされる糧と幸福であるのに対し、「さち」は狩猟によってもたらされるものとこと。日本列島弧で農耕がはじまる前からの古い言葉。矢という道具のもつ獲物を捕る威力、霊力も意味する。

※朝鮮語＜ sal ＞（矢）由来。

▼狩りや漁の道具。弓矢や釣針。また道具のもつ威力。◇『古事記』上「火遠理命、其の兄火照命に、『各佐知（サチ）を相易へて用ゐむ』と謂ひて、三度乞ひたまへども、許さざりき」◇『日本書紀』神代一〇「兄火闌降命（ほのすそりのみこと）、自らに海幸有（ま）します」

▽漁や狩の物の多いこと。また、その獲物。◇『日本書紀』神代「海に入（のぞ）みて魚を釣る。倶に幸を得ず」◇海の幸、山の幸

▼幸福をいう。◇『常陸風土記』多珂郡「同（とも）に祥福[俗語に佐知（サチ）と云ふ]を争へり」◇「幸あれと祈る」

た行

た

た（田）[ta]

○もっとも基本的な生成の場としての「たんぼ」。

※タミル語＜ tamp-al ＞が「田んぼ [tamb-o]」になり、また、タミル語の語根 [tamp-] から末尾の [mp] が脱落して [ta] となる（大野『日本語の起源』）。

「田んぼ」は泥田、水田を指す。紀元前九～十世紀の頃、タミル人が日本列島にもちこんだ技術である。稲作そのものは縄文時代から行われていた。タミル人がもちこんだのは技術としての水田耕作である。栽培されたいなそのものは在来種であったかも知

れない。また、「た（田）」は「はたけ」をふくめる広い意味でも用いる。

◆稲がなる場。人はこの場を耕す。

◇『古事記』中・歌謡「なづきの多（タ）の稲幹（いながら）に、稲幹に匍ひ廻ろふ　野老蔓（ところづら）」◇『万葉集』二・八八「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつ辺の方に我が恋ひ止まむ〈磐姫皇后〉」◇『源氏物語』若菜上「この家をば寺になし、あたりの田などのようの物は、みな、その寺のことにしおきて」

※混成語として熟成し、「た（田）から」得られるものを「たから（宝）」という。ここから［tak］は「たかい（高い）」、「たかい（貴い）」などとともに、「得難い立派な」を意味するようになる。金銀・珠玉などの貴重な品。大切な財物。宝物を意味する。

◇『万葉集』八〇三「銀（しろかね）も金（くがね）も玉も何せむにまされる多可良（タカラ）子にしかめやも」◇『竹取物語』「宝と見えうるはしき事ならぶべき物なし」◇『竹取物語』「左大臣あべのむらじはたからゆたかに家ひろき人にておはしける」◇『小説神髄』坪内逍遙「たれかあまたの貨（たから）をすて演劇（しばゐ）観むと望むべきや」

※「田」とは何か。「た」は「たから（宝）」、「たかい（高い）」、「たかい（貴い）」などとともに、

たがやす

たがやす（耕す）［tagayasu］←［takaesu］

○「た（田）」をかえす，つまり耕作すること。

◆「もの」のできる「場」である「田」を「返す」ことによって、ものがなるようにすること。「たかへす」が古形、「田を返す」から来る。

▼作物を作るために田畑を掘り起こし、すき返して土を柔らかにする。◇『今昔物語』「桑田といふは、たかへしおわりて未だ下ろさざる（種をまかない）をいふなり◇新撰字鏡「冀 耕也 田加戸須」◇『お伽草子』二十四孝「かれが孝行を感じて、大象が来って、田をたがやし」

※　「たがやす（耕す）」は、「もの」のできる「場」である「田」を「返す」ことによって、ものがなるようにすることである。「たかへす」が古形、「田を返す」から来る。作物を作るために田畑を掘り起こし、すき返して土を柔らかにする。

人の営みとは、場を耕すことによってものが成るようにすることである。人は「もの」を直接には作らない。「田」を返すことによって豊に「なる」ようにする。「耕す・人」と「場の・田」とそして「そこになる・もの」の三者の相互関係が労働、ひいては人間の営みの基本的な型である。民とは「耕す人」である。それは、言葉を通した協働によってなされてきた。

どのような場で、どのように耕し、何が成るのか、この内容が「文化」である。

たから

たから（宝）［takara］

■［tak］は「たから（宝）」、「たかい（高い）」、「たかい（貴い）」などとともに、［tak］を共通にする。［tak］は「得難い立派な」を意味した。

□タミル語takaramに起源。

▼金銀・珠玉などの貴重な品。大切な財物。宝物。◇『万葉集』八〇三「銀（しろかね）も金（くがね）も玉も何せむにまされる多可良（タカラ）子にしかめやも」◇『竹取物語』「宝と見えうる

はしき事ならぶべき物なし」◇『竹取物語』「左大臣あべのむらじはたからゆたかに家ひろき人にておはしける」◇『小説神髄』坪内逍遙「たれかあまたの貨（たから）をすて演劇（しばゐ）観むと望むべきや」

たくみ

たくみ（工、巧、匠）[takumi]

○「た [ta]」は「て（手）」である。「たくみ」は「たくむ（工）[takumu]」の名詞。[takumu] とは [ta]（手）と「組む [kumu]」の複合。「組む [kumu]」は、[k]（食）を [umu]（生む）こと。「たくむ」を可能にする根拠としての「たくみ」である。

◆うまく仕上げるために、さまざまの工夫をめぐらし、技を発揮することができること。そのゆえに、「たくむ」つまり、工夫をめぐらし、計画することができる。

▼人についていう。（工、匠）こころをわざをもって表そうとする人のこと。

▽手先の仕事で物を作り出すことを業とする人。細工師。工匠。職人。特に木材で物を作る職人。◇こだくみ（木工）、かなだくみ（金工）、大工（だいく）。◇『日本書紀』歌謡「大君に　堅く　仕へ奉らむと　我が命も　長くもがと言ひし工匠（たくみ）はや　あたら工匠（たくみ）はや」◇『源氏物語』宿木「その匠も絵師も、いかでか心にはかなふべきわざならむ」

▽わざにたけた人。達人。◇『徒然草』一九三「よろずの道のたくみ、我が道を人の知らざるを見て、おのれのすぐれたりと思わん事」

▼ことについていう。（工、巧）

▽もっぱら行う仕事。いろいろ思いめぐらして、見つけ出したよい方法。工夫。趣向。手段。◇『風姿花伝』「極めたる才学の力なれども、ただ、たくみによりて、よき能にはなるものなり」◇『散木奇歌集』恋上「明くれは物思ふ事をたくみにて」◇『太平記』三「城中工を替へて防ぎける間」

▽はかりごと。たくらみ。計略。策謀。◇『伽草子』熊野の本地「さてもこの事かなはむ事の無念さよとて、又いろいろのたくみどもせられけり」

▽美しくしつらうこと。また、美しくしつらえるもの。◇『俳諧・曾良随行日記』俳諧書留「美景たくみを尽す」◇『小説神髄』坪内逍遙「世の美術家といはるる輩は、彫刻家にまれ画工にまれ、まず其工（たくみ）をなすにあたりて」◇『落梅集』島崎藤村「消えはてにけり吾が恋は芸術（たくみ）諸共消えにけり」◇『塔影』川井酔茗「芸術（たくみ）の花に咲きちらふ時の力の遠きかな」

▼〔形動〕（巧）てぎわよくすぐれているさま。じょうずであるさま。巧妙。器用。◇官憲の追及をたくみにかわす。◇『日本書紀』神代上「天鈿女（あまのうすめの）命、即ち、手に茅纏（ちまき）のほこを持ちて、天石窟戸（あまのいはやと）の前に立たして、巧に俳優（わざをき）す」◇『古今集』仮名序「ふんやのやすひでは、ことばたくみにて、そのさま身におはず」

―【たくむ】◇『今昔物語』一二ノ一九「昼夜に妻子眷属を養ふはかりごとをたくむ」◇『御伽草子』あきみち「さても不思議なる所多くありけることかな、たくみもたくみてこしらへける事よ」

たつ（立つ）

たつ（立つ・起つ・建つ）[tatu]

○「たて（縦）」にする。縦になる。

◆大地に伏せていたものが、天に向かう方向に起きる。伏せているものが立つことから、盛んになる、盛んにする。

▼物や人が、たてにまっすぐな状態になる。また、ある位置や地位を占める。▽人が足をのばし大地に垂直の姿勢でいる。◇「足が立たない」◇『日本書紀』欽明二三年・歌謡「韓国の城（き）の上に往致（タチ）て」◇『源氏物語』松風「『……あはれ』とうちながめてたちたまふ姿にほひ、世に知られずとのみ思ひきこゆ」

▽ある位置を占める。ある立場に身を置く。◇「優位に立つ」◇「苦境に立つ」◇「人の上に立つ」◇『古今序』「人まろは　あかひとがかみにたたむことかたく　あか人は人まろがしもにたたむこと　かたくなむありける」◇『大和物語』五「后にたち給ふ日になりにければ」

▽植物がまっすぐに生えている。◇『古事記』中・歌謡「渡瀬に多弖（タテ）る梓弖まゆみ」◇『万葉集』四五「隠口の泊瀬の山は　真木立つ　荒山道の」◇『古今集』四二「そこにたてりける梅の花を」

▽山や建物がそびえている。建物の場合「建」をあてることが多い。◇『蜻蛉物語』中「暑ければ　しばし戸をおし開けて見渡せば、堂いとたかくてたてり」

▽とげ、矢など細長いものがささる。「とげが立つ」◇『平家物語』一「神輿にたつ所の箭をば、神人をして是をぬかせらるる」

▼起きあがる、わき上がる。行動する。◇「敢然として立つべき時期」

▽退出する。出発する。◇『万葉集』三九九九「都方（みやこへ）に多都（タツ）日近づく」

▽横になったり、すわったりしていた人が身を起こす。◇『伊勢物語』四「去年を恋ひて行きて、たちて見ゐて見見れど、去年に似るべくもあらず」

▽鳥、虫などが飛びあがる。◇『万葉集』三三九六「小筑波の繁き木の間よ多都（タツ）鳥の目ゆか汝を見むさ寝ざらなくに」◇『新古今集』三六二「こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮」

▼作用、状態などが目立ってあらわれる。

▽雲、霧、煙などが現れ出る。◇『万葉集』四八「東の野に炎の立つ見えてかえり見すれば月傾きぬ」◇『万葉集』三五一五「嶺（ね）に多都（タツ）雲を見つつしのはせ」

▽季節がはじまる。新しい時節が来る。◇『万葉集』一五五五「秋立ちて幾日もあらばこの寝ぬる朝明の風は手本寒し」◇『古今集』一「春たちける日よめる」

▽風、波などが起こり動く。◇『万葉集』三六七〇「韓亭能許（のこ）の浦波多多（タタ）ぬ日はあれども家に恋ひぬ日は無し」

▽月、虹などが高く現れる。◇『万葉集』三四一四「伊香保ろの八尺（やさか）のゐでに多都（タツ）虹（のじ）の」

音や声が高くひびく。◇『万葉集』四四六〇「音しば多知（タチ）ぬ」

▽人に知れわたる。評判になる。◇「うわさが立つ」◇『伊勢物語』一七「あだなりと名にこそたてれ」

▽目に見えるようにはっきり示される。◇「潔白のあかしが立つ」◇『徒然草』九「女は髪のめでたからんこそ、人の目たつべかめれ」

▽催される。◇「場が立つ」◇「市（いち）が立つ」◇『万葉集』三九九一「宇奈比川清き瀬ごとに鵜川多知（タチ）」

▽水が十分に熱せられて湯気やあわが生じる。たぎる。湯や風呂がわく。◇「風呂が立つ」◇『名語記』四「あつき湯のたつ、如何。これも立也。たちあかる也」

▽（興奮して気持が）高まる。激する。◇「気が立っている」◇

『虎寛本狂言・右近左近』「何とはらの立（たつ）事ではないか」
▽ある気持や状態が生じる。すぐれた性能が発揮される。やってゆく。◇「損が立つ」◇「弁が立つ」◇「筆が立つ」◇「役に立つ」◇「くらしが立つ」◇「方法が立つ」◇『徒然草』二三九「よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたたず」◇『平家物語』九「さ様にうちとけさせ給ては、なんの用にかたたせ給ふべき」
▼他動詞で。
▽人に知られるようにする。評判を広める。◇『古今集』二二九「あやなくあだの名をやたちなん」
▽気持を興奮させる。『大鏡』三「馬の上にて、ない腹をたちて」
▽使用に間に合わせる。『仮・昨日は今日の物語』下「我らもおにやけを御用にたち申べし」

たつ（断つ）

たつ（絶つ・断つ・截つ・裁つ）[tatu]
○つづくものを切る。
◆長く続く物を途中で切り離す。自動詞は「たえる（絶える）」。
※タミル語＜tati＞由来。
▽物を切り離す。つながっているものを断ち切る。切断する。◇『万葉集』四四二九「厩なる縄多都（タツ）駒の後（おく）るがへ妹が言ひしを置きてかなしも」
▽つながりを切って関係をなくする。縁を切る。交際をやめる。◇『源氏物語』手習「流転三界中などいふにも、たち果ててしものをと思ひ出づるも、さすがなりけり」
▽それまで続けていたことをやめる。また、特定のものを飲食することをやめる。◇「酒を断つ」◇『竹取物語』「五こくをたちて千余日に力をつくしたる事すくなからず」
▽終わらせる。滅ぼす。◇「命を断つ」◇『万葉集』四四六五「おぼろかに心思ひて虚言（むなこと）も祖（おや）の名多都（タツ）な」
▽さえぎってじゃまをする。隔てる。◇『徒然草』六「此所を切れ、彼所をたて。子孫あらせじと思ふなり」
▽衣服にするために布を切る。◇『古今集』三七五「唐衣たつ日はきかじ」

たね

たね（種）[tane]
○「たね（種）[tane]」は、「た（田）[ta]」と大地の「な[na]」から構成された「タナ」の転じた言葉。
◆植物が芽を出す根拠となるもの。実の中にある。ここから人によんで血筋や血統，さらにまた原因や根拠などまで意味するようになる。
▼果実のなかにあって草木の発芽のもとになるもの。種子（しゅし）。◇『万葉集』二九九九「水を多み、あげ（高田のこと）に種まき」
▽動物の発生するもととなるもの。精子など、生殖のもとになるもの。
▽血統。血すじ。また、それを伝えるものとしての子。子孫。系統。◇『源氏物語』常夏「かかりける種ながら、あやしき小家に生い出でけること」◇『大鏡』一「いひもていけば、おなじたね、ひとつすぢにぞおはしあれど」
▼物事の発生するもと。根源。原因。◇それが私の悩み（なげき）のたねだ。◇『源氏物語』東屋「物思ふたねをやいとど蒔か

せて見侍らむ」

▼物をつくる材料。料理の材料。汁の実。物事のよりどころとするもの。準拠する基（もとい）となるもの。◇小説（話）のたねをさがしている。◇この技が飯のたね。

たま

たま（魂、霊、魄）[tama]

○「たま [tama]」は [ta] と [ma] からなる。[ta] は「たなごころ（掌）」と同じく「て（手）[te]」のはたらきを表す。[ma] は「むすぶ（結ぶ）」行為の根拠を意味する。つまり、「たま」は「はたらいて実を結ぶ」ことが実現する根拠を指示した。

◆いのちの本質、生命力の源泉。「たま（玉）」と同語源。「たま（玉）」は「たま（魂）」の憑代（よりしろ）と考えられた。

「はたらいて実を結ぶ」ことを「する [su]」ものが「たましい（魂）[tamasi]」であり、稲の穀霊が原義である。また「はたらいて実を結ぶ」ものを分かつことが「たまわる（賜る）」になる。

※折口信夫は言う。

昔の人が考えている たま は、威力のある魂が物の中に内在してゐて、それを發揮して人の體に入れる、さうするとはじめて靈力を發揮するといふ考え方、魂が動物の體を通してくることも、また物質の中に這入つて、人間に發揮させることもある。（『古代人の信仰』昭和十七年二―五月『惟神道』第二巻第二―四號）

たま の方は、これが分化して、かみ と もの になったらしい。（『原始信仰』昭和六年九月『郷土科學講座1』）

古代人の「たま」は折口信夫がいう以上に「労働とその結果」に深く関わる言葉である。

▼人を見守り助ける人の魂。◇「みたま（御霊）」「おおみたま（大御霊）」◇「たまじわう（霊）」「たままつる（霊祭）」◇『万葉集』四〇九四「吾が主のみ魂賜ひて春さらば奈良の都に召上（めさ）げたまはね」

▼体内から抜けだして動く（遊離）霊◇「にぎたま（和魂）」「ことだま（言霊）」「ひとだま（人魂）」◇『万葉集』三〇〇〇「魂合はば相寝むものを小山田の鹿田（ししだ）禁（も）るごと母し守（も）るごと」◇『万葉集』三二七六「天地に思ひ足らはし玉相者（たまあはば）君来ますやと」◇『古今集』四四八「空蝉のからは木ごとにとどむれどたまのゆくへをみぬぞかなしき」

つき

つき（月）[tuki] ← [tuki]

○地球にいちばん近い星で、地球のただ一つの衛星としての月、新月から新月の前日までの間。

※タミル語＜ tink-al ＞起源。

▼天体の月◇『万葉集』八「熟田津に船乗りせむと月待てば、潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」◇『万葉集』四四二「この照る月は満ちかけしかる」◇『万葉集』一〇七四「春日山おして照らせるこの月は妹が庭にも清かりけり」◇『源氏物語』明石「月入れたる槙の戸口」

▼時間の単位、暦の月◇『記歌謡』二八「あらたまの　年が来（き）経（ふ）れば　あらたまの　月は来経（へ）ゆく」◇『万葉集』六九八「吾は恋ひまさる月二日二異二（つきニひニけニ）」◇『万葉集』九三一「いやしくしくに月二異二（つきニけニ）日に日に見とも」◇『万葉集』一二九四「朝づく日向ひの山に月立（つきた）てり見ゆ遠妻を待ちたる人し見つつ偲ばむ」◇『万葉集』三

一三一「月易（つきか）へて君をば見むと思へかも」◇『万葉集』三九八三「あしひきの山も近きを霍公鳥（ほととぎす）都奇多都（ツキタツ）までになにか来鳴かぬ」◇『万葉集』四二四四「我が思へる児らに恋ふべき月待ちて家には行かむ」

つげる

つげる（告げる）[tugeru]

○「こと」を継ぐこと。つまり、言葉によって相手に何かのことを伝え、「知っている」ということがつながるようにすること。

◆「つぐ(継)[tugu]」と同源。単に「言う」のとは違い、ことをつないでいくことが意味として含まれる。

▼人から人へ言葉によって伝え知らす。◇別れを告げる。◇『万葉集』三九一八「橘のにほへる園に霍公鳥（ほととぎす）鳴くと人告ぐ網ささましを」

▼日常の人間生活より高いところ、深いところなど、日常意識にないところから、なにかの事実や予告が知らされる。◇時計は三時を告げた。◇『万葉集』四〇一一「ちはやぶる　神の社に　照る鏡　倭文（しつ）に取り添へ　乞ひ祈（の）みて　吾が待つ時に　少女（おとめ）らが　夢に告ぐらく　汝が恋ふる　その禿つ鷹は」◇『万葉集』四〇一三「吾が待つ鷹を夢に都気（ツゲ）つも」

▽多くの人に知らせる。◇『今昔物語』一二・三二「聖人達を集めて、告て云く」

▽告げる主体を一般化して(ある事柄が)ある状態になったことを示す。◇一段落を告げる、風雲急を告げる

つくる

つくる［tukuru］

○［tu］は「て（手）[te]」の働き、[ku]は「食う」こと、[ru]はそれを実現すること。これによって、あるものがなるように、その土台に対して必要な条件を整えること。あるものや「土台」が文中で明示されなくて作ること自体が目的のようになっていても、常にそこでは、何のために作るのかが、意識されている。

[tukuru]はたらきの根拠が「ところ（所）[tokoro]」である。

※「手（て）」[te]←[ta]はタミル語＜tol＞起源。「つくる」はこの語を起源に、弥生期に熟成。

◆人が自然から生きる糧を得るのは、「よくつくる」ことによって「よくなる」からであり、「つくる」は人と自然との関わりの基本を表わす。

▼田を耕す。◇『古事記』下・歌謡「あしひきの、山田を豆久里（ツクリ）」◇『万葉集』一〇・二二一九「あしひきの山田佃（つくる）子ひでずとも縄だにはへよ守（も）ると知るがね」◇「米作りは田を作ることにはじまる」

▽栽培する。◇『延喜式』祝詞‐竜田風神祭「天の下の公民の作り作る物は、五（いつくさ）の穀（たなつもの）を始めて、草の片葉に至るまで」

▽材料から別の新しいものを生み出す◇『古事記』上・歌謡「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣都久流（ツクル）その八重垣を」

▽加工する。◇『源氏物語』浮船「この籠（こ）は、金（かね）をつくりて」◇『今昔物語』二・二六「魚を置きて作らむとす」◇酒造り

▽文字に書き記す。◇小説を作る。書類を作る。◇『源氏物語』須磨「よもすがらまどろまず文（ふみ）つくりあかし給ふ」◇短

歌（俳句）を作る。◇『宇津保物語』楼上下「時につけつつつくりあつめ給へる詩」

▼何かがなるように何々をつくる。◇ひとづくり、まちづくり、金をつくる、子をつくる。

▼「荒れ地を耕す」ことがつくるの原義であるが、ここから展開して、「自然なままではないようにする」意が生まれた。◇「作り事」「つくり笑顔」

―つくり「つくる」の連用形名詞化。作られたものそのものを指す（刺身を「つくり」という類）とともに、「つくれらたものの様」を表す。◇しっかりしたつくりの家。

※「かまえ」が表面であるのに対して、「つくり」は内部を示す。「かまえ（構）」と「つくり（造）」をあわせて「構造」である。

つち

つち（土）[tuti]

○[tu]は「て（手）[te]」の行為、[ti]は[tu]を可能にするものなので、[tu]のくりかえしとしての[tutu]を可能にするものとしての「土」「大地」が基層の意味である。[tutu]は「…しつつ」などにあるように行為の継続を意味する。

◆人が働くところとしての「土」。記紀神話では「天（あめ）」に対して「国（くに）」が対の言葉として用いられる。◇『日本書紀』推古八年二月「天に神まします。土に天皇有します」

その後、時代が下がり万葉集のころには「天土（あめつち）」と熟した言葉もある。さらに、中古以降、「土」は支配に組み込まれた民のことを、支配するものとしての天との対に用いられるようになった。また、土は醜いものとされ、「土を塗ったようだ」とも用いられた。さらに、平安期になると清涼殿に上がることを認められていない、いわゆる「地下」を「土」というようにもなる。

▼大地。地面。地上。◇『万葉集』八〇〇「天（あめ）へ行かば汝がまにまに、土（つち）ならば　大君います」◇『竹取物語』「大空より人、雲に乗りて下り来て、つちより五尺ばかり上りたる程に、立ち列ねたり」◇『堤中納言物語』よしなしごと「てんぢくの山、にはとりのみねのいはやにまれ、こもり侍らむ。それもなほつち近し」

▽泥、土壌。◇『枕草子』二三六「屐子（けいし）のつややかなるが歯につちおほくつきたるをはきて」◇『宇津保物語』藤原の君「つちをまろがしてこれを仏といはば、御みあかしたてまつり」

▼醜いことのたとえ。◇『源氏物語』蜻蛉「ここら、よき人を、見あつむれど、（女一宮に）似るべくもあらざりけり、と（薫は）おぼゆ。御前なる人は、まことにつちなどの心地ぞするを」

て

て（手）[te]←[te]

◆人の体の一部。肩から別れた部分全体も言い、手首から先を言うこともある。ものを作り道具を使う人のもっとも基本的な営みをになう器官。またものを指し示すはたらきもする。同様の役割をする動物の器官。あるいはものの形状や機能が人間の手と同様なとき、それも手という。さらにこれが一般化され、方法、やり方、方向も意味する。

※古形「た」はタミル語＜toi＞由来。

▼体の一部としての手。◇『日本書紀』継体七年九月・歌謡「妹が堤（テ）を我に枕（ま）かしめ」◇『竹取物語』「からうじて思ひ

起して、弓矢をとり立てんとすれども、手に力もなくなりて、萎えかかりたり」◇『源氏物語』夕顔「手をたたき給へば」

▽形態や機能が手に類似しているもの。◇「朝顔の手」◇「取手（とって）」「引手」「釣手」「急須（きゅうす）の手」「手のついた鍋」◇『枕草子』四九「南遣戸のそばの、几帳のてのさし出でたるにさはりて」

▽動く状態になったものの先の部分。「火の手」

▼さまざまな行為をすることを、手を動かすことに代表あるいは象徴して用いる。▽作業すること。◇『万葉集』八八六「うち日さす　宮へ上るとたらちしや　母が手離れ　常知らぬ　国の奥処（おくか）を百重（ももへ）山　越えて過ぎ行き　いつしかも」◇「手を出す」「手につかない」「手にかける」「手をとめる」▽作業する労力。◇「手を貸す」「手がすく」「手が足らぬ」「手がやける（かかる）」▽作業する能力。◇「手に負えぬ」「手にあまる」▽人との関係。◇「手をつける」「手を切る」

▼もつこと。所有すること。▽もつ者をさしていう。◇「手に入れる」「手に渡る」「手に落ちる」▽勝負事で、使える可能な方法。◇「手が悪い」「手が見える」◇『膝栗毛』四「サアしまった。時にお手はなんじゃいな」▽部将の配下、軍勢をいう。◇「手の者」◇『平家物語』四「故左馬頭義朝が手に候ひて」

▼ことなす方法やわざを言う。▽武芸などのわざ、術など。◇「相撲の手」◇『源氏物語』帚木「たなばたのてにもおとるまじく」▽書の術。書風。書かれた文字。筆跡。◇「女性の手」◇『枕草子』二三「てのあしさよさ、歌のをりにあはざらんも知らじ」▽琴、笛、鼓など、音曲のわざ。調子、譜。◇「三味線の手」◇『宇津保物語』俊蔭「ただ琴をのみひく、j略;ひとつの手のこさず習ひとりつ」▽能楽、舞踊などでの、きまった舞い方。舞の型。『風姿花伝』一「舞をも手を定めて、大事にして稽古すべし」▽ことなすための手段。てだて。方法。◇『源氏物語』竹河「あはれとて手をゆるせかし生死（いきしに）を君にまかする我が身とならば」◇「その手に乗るな」

▼ある方面，方向、種類。◇「山の手」「上手」◇「このての品物」

▼接頭または接尾のについて「手」にかかわる意を添える。▽機械ではなく人手をかけて作ったもの。◇「手織」「手料理」「手製」「手加減」「手打ち」「手造り」▽持ち運び、取り扱いに適する小型のものであることを表す。◇「手箱」「手文庫」「手斧」「手帳」▽その方向、方面にあることを示す。◇「左手」「行手（ゆくて）」「上（かみ）手」「下（しも）手」「裏手」▽ある基準に関して、それと同じ種類に属していることを表す。品種、品質。◇「おくて」「高麗手（こうらいで）」「厚手」「薄手」「古手」▽動作の主を表す。◇「射手」「嫁のもらい手」「やり手」▽形容詞、形容動詞について、作業の内容、難易などを表す。◇「手痛い」「手ごわい」「手厚い」「手短」「手広い」▽「手の」「手による動作である」などの意味を強調する。◇「たなごころ」「手折（たお）る」「手向（たむけ）る」

【熟語】「手が上が（あが）る」技量が上達する。腕前があがる。「手が空（あ・す）く」仕事が一段落してひまになる。「手が要（い）る」人手を要する。「手が掛（か）かる」手数がいる。世話がやける。「手が利（き）く」わざが巧みである。器用である。「手が切れる」関係がなくなる。「手がこむ」細工・技巧などが緻密である。「手が下（さ）がる」腕前がにぶる。「手が付（つ）かない」他の事が気になってその事に集中できない。「手が付けられない」処置のしようがない。「手が出（で）ない」施す手立てがない。「手が届（とど）く」できることの内にある。「手がない」働き手がない。どうしようもない。「手が入（はい・い）る」他人の作業が加わる。「手が離（はな）れる」一段落してしなくてもよくなる。幼児が成

長して身の回りの世話が楽になる。「手が早（はや）い」処理が敏速である。すぐ、なぐるなどの暴力をふるう。「手が塞（ふさ）がる」作業中で他のことができない。「手が見（み）える」相手の方法が見える。「手が焼（や）ける」世話がかかる。「手が良（よ）い」うまい方法であること。「手が悪（わる）い」やり方がよくない。たちが悪い。「手取り足取り」行き届いた世話をするさま。丁寧に教える様子。「手に汗を握る」緊張したり興奮している様子。「手に余（あま）る」自分の力では及ばない。「手に入（い）る」自分のものとなる。「手に負えない」自分の力ではどうにもならない。「手に落（お）ちる」その所有となる。その支配下にはいる。「手に掛（か）かる」処分される。「手に掛（か）ける」自分で行う。心のままに行う。自分の手で殺す。「手に付（つ）かない」他に心が奪われて、身がはいらない。「手に乗（の）る」術中に陥る。欺かれる。「手の物（もの）」自由にできること。熟練して得意とするわざ。「手の者（もの）」配下のもの。てした。「手八丁（はっちょう）口八丁」手先も口先も達者であること。「手も足も＝出ない［＝出せない］」方法がない。「手もなく」たやすく。「手を打（う）つ」必要な手段を講じる。一策を用いる。「手を打っておく」「手を貸（か）す」手助けをする。助力する。「手を借（か）りる」手伝ってもらう。助力してもらう。「手を染（そ）める」しはじめる。事業などに関係する。「相場に手を染める」「手を尽（つ）くす」あらゆる手段・方法をつくす。「手を焼（や）く」もてあます。「手を煩（わずら）わす」人に世話をかける。やっかいをかける。

と〔辞〕

と〔辞〕[to]

○外にあることや、ものの話題を持ちだす。

※タミル語＜otu＞由来。

◆話者が、話者と聞き手の外にあることを、話題として取り立てて指示する。目的をもって意図して話題とする。内にあってすでによく知ってることは「このように」と持ちだす。

※「友と会う」と「友に会う」。「春となる」と「春になる」。それぞれ、「と」は「他でもない」の意まで含む目的性がある。それに対して「に」は一つに状況の実現として他動的であり、その実現を喜ぶことを含意する場合が多い。

〔格助〕▼「言う」「思う」「聞く」「知る」「見る」などの内容にあたることを引用する。あるいは「と言っている」のように、引用部分を略する用法もある。◇『古事記』下・歌謡「宮人の足結の小鈴落ちにき登（ト）宮人響（とよ）む里人もゆめ」◇『万葉集』九六「み薦刈る信濃の真弓わが引かば貴人（うまひと）さびていないと言わむかも」◇『源氏物語』夕顔「『口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ』と、のたまへば、この押し上げたる門に入りて折る」◇「彼は元気でいるときいた」

▼体言、または、体言と同資格の語句を承け、それが同種の語句に対して並立関係にあることを示す。◇『万葉集』八二六「うちなびく春の柳等（ト）我がやどの梅の花等（ト）をいかにか別かむ」◇『徒然草』六六「柴の枝、梅の枝、つぼみたるとちりたるとにつく」◇「赤と青で塗り分ける」

▼連用関係を表すもの。共同の相手を表す。…とともに。◇『古事記』下・歌謡「倉梯山は嶮しけど妹登（ト）登れば嶮しくもあらず」◇『源氏物語』若紫「人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただ西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ、尼なりけり」◇「彼らとともに力をあわす」

▼体言を承けてその状態を表し、動作を修飾する。体言を承けた場合、比喩的修飾となることがある。◇『万葉集』二〇四「神

ながら神等（ト）いませば」◇『万葉集』一八三五「今更に雪降らめやもあぎろひの燃ゆる春べと◇『万葉集』三〇八六「なかなかに人跡（ト）あらずは桑子にもならましものを」◇『源氏物語』紅葉賀「こまこまとかたらひ聞え給へば」◇『今昔物語』-二五・一「相馬の郡の大井の津を京の大津とす」◇「今日からここを居場所としよう」

▼例える内容を示し、比喩や比較の基準を表す。◇『伊勢物語』一二四「我とひとしき人しなければ」◇『源氏物語』玉鬘「『かたちなどはかのむかしの夕顔とおとらじや』などとのたまへば」

〔接続〕▼（自立語化したもの）前の事柄に引き続いて、後の事柄が生じることを示す。すると。◇『平家物語』一〇「王命といひ、武命といひ、君につかへ、世に従ふ法のがれがたくして」◇『竹取物語』「いまはむかし、たけとりの翁といふもの有けり」◇『古今集』四九「ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはざらなん」◇『蜻蛉物語』中「ながされたまひて三日といふに」◇「今日という今日」◇「店という店には客があふれている」◇「お前という男は」

とき

とき（時）[toki]

○[toki]は「つき（月）[tuki]」の古形「つく[tuku]」に由来か。「つく[tuku]」はタミル語＜tinkal＞に由来。

月の満ち欠けと運行から、それを成立させる根拠としての「時」が分節され[tu]が[to]となる。また[i]には移り変わりの意があり、それによって[toki]という言葉が成立した。

さらに、「つく[tuku]」は「つくる（作る）[tukuru]」の行為を表す[ru]がのぞかれた部分で、「作る」つまり田を作る作業を成立させる月の運行とも意味を重ね熟成した。

◆人は、働く場で生成躍動するものの集まりを一つの意味のある「こと」としてつかむ。「こと」は生きた動きであり、「動き」は「とき」を成立させる。「こと」として「つかむ」ことが、つかむ「私」の確立であり、つかむ対象と「私」の共存する枠組みとしての「とき」の成立である。

たとえば、ある人とその人のいる場所が意味あることとしてつかまれるとき、「その人がそこにいるとき」が成立する。

あることが起こった「とき」別のことも起こったなら「とき」が「同じ」であると考えられる。また二つのことの一方が起こって「から」他方が起ったなら「あとさき」が考えられ、「もの」の持続と「こと」の推移としての時間が認識される。「こと」と「とき」が人間の認知を支える根幹であり、その根幹において「ことば」が生まれる。

※「とき（時）」は「解く」の連用形「解き」と同じ語源。「解く」は「堅く凍りついたものをゆるめる」ことが基本の意味。冬の氷が「解け」春の訪れを知ることで、時の推移を実感したことが、「とき」の根底にある。「解ける」とき、それは新たな命の躍動であり、こもっていたものが解き放たれるときであり、輝くときである。そのときにいちばん「とき」を感じる。

▼ことばとしての「とき」は、「こと」のなかの個々のことが起こる位置関係を全体のなかで指示することが基本である。◇初めて出会った時◇『蜻蛉日記』中「念数するほどに、時は、山寺、わざの貝、四つふくほどになりにたり」

▼そこから抽象されていろんなことが順次起こる場の形のひとつとしての「時」になる。◇時がたつ（流れる・移る）◇『万葉集』二六一二「わが背子にわが恋ふらくは止むときもなし」◇『万葉集』三三五五「木のくれのとき移りなば逢はずかもあらむ」◇

『万葉集』三六八八「等伎（トキ）も過ぎ月も経ぬれば」

▼時節。季節。時候。時代。年代。世。◇『万葉集』三九四七「雁が来鳴かむとき近きかも」◇『万葉集』一四三九「ときは今春になりぬと」◇『万葉集』四四八五「ときに花いやめずらしも」◇『徒然草』二二六「後鳥羽院の御時」◇時は春◇『万葉集』一五二〇「天地の分かれしときゆ」◇『源氏物語』桐壺「いづれの御ときにか」

▼さらに協同して労働することをとおして共通の「時間」を客観的に定めるようになる。その制度的な時法（単位と尺度）によって示される一昼夜のうちの一時点。

◇『万葉集』二六四一「時守の打ち鳴す鼓数（[yo]）みみればときにはなりぬ逢わなくもあやし」◇時を告げる鐘の音を聞く。◇『土左日記』「いぬのときにかどです」◇『太平記』七「時（トキ）打つ鼓の声を聞けば」

▼（「秋」とも書く）ふさわしい時期。時宜。ちょうどその時。また、そうしなくてはならない時期、時間。◇『万葉集』三六七九「大船に真梶しじぬきとき待つと吾は思へど月は経につつ」◇『万葉集』一八五五「桜花ときは過ぎねど」◇国家危急の秋◇『十六夜日記』「ふるあめも時さだまれば」◇時の人◇『栄花物語』月の宴「時あるも時なきも、御心ざしの程こよなけれど」

ところ

ところ（所、処）[tokoro]

○「つくる（作る）[tukuru]」行為を成立させる根拠としての場。このよう対応はいくつか見られる。◇作る[tukuru]—所[tokoro]◇括る[kukuru]—心[kokoro]◇くるむ[kurumu]—衣[koromo]

◆「働くことを成立させる場所として限定された域」を意味する。「ところ」は大きくさまざまに展開する言葉であるが、この根本の意味は一貫している。具体的な場合も、抽象的にある話題の中に占める一定のことを表す場合も、時間的な場合もある。つねに人の行為を可能にする場という意味を基層に持つ。

一定の権威ある行為の根拠として、他よりも高く平らになった区域、さらに転じて周囲よりも際立っている区域を表す。

▼区域として限定された「もの」。あるものが存在したり、何らかのことをおこなう具体的なものや空間内一定の位置、領域をいう。

▽部分。小高い区域。◇『古事記』上「吾が身は成り成りて成り合わざる処一処あり」◇『万葉集』四二八八「宮の内に千鳥鳴くらし居む等己呂（トコロ）無み」◇『竹取物語』「いざかぐや姫、きたなき所にいかでか久しくおはせん」◇『徒然草』「あやまちはやすき所に成りて」◇『風流仏』幸田露伴「其れは額に黒痣（ほくろ）ありてそのところに白毫を付けなばと考えし」

▽空間的、地理的な区域、場所◇所変われば品変わる。抽象的にも具体的にも用いる。◇月世界はどんなところか。◇見えないところで悪事を働く。◇どんなにすばらしいところかと思った。◇『和解』志賀直哉「母はまた叔父の所へ行って」◇『杜子春』芥川龍之介「今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当たる所を夜中に掘ってみるがよい」

▽住んでいる場所。住所、居所。また、そのあたり一帯。現在では「所番地」の意でも用いられる。◇所と名を聞く。◇わたしのところへきませんか◇『山家集』下「山深み榾（ほた）伐るなりと聞こえつつところにぎはふ斧の音かな」▽その者の所有している区域。領地、荘園などをさしていう。◇『今鏡』六「親の譲りたるところをとり給ひけるを」

▽都を離れたいなか、在所のあたり。地方。いなか。また、「所

の…」の形で、その地方に所属する意を表す。◇所の酒◇『増鏡』一一「心ちよげに、所につけては又なく見えたり」

▽「くろうどどころ（蔵人所）」の略。→所の衆。

▽「むしゃどころ（武者所）」の略。◇『平家物語』四「あれは先年ところにありし時も」

▼区域として限定された「こと」。抽象的な事柄について、その全体の中での位置関係などを示す。

▽（連体修飾語による限定を受けて）そういう箇所、その点などとさしていう。◇『源氏物語』帚木「直しひきつくろふべき所なく、心にかなふ様にもやと」◇この文章は終わりのところが不明瞭だ。◇『大和古寺風物誌』亀井勝一郎「奈良近郊でも私の特に好ましく感じたところは、薬師寺付近の春であった」◇私の言いたいところはここだ。この話のおもしろいところは本当にあったように感じることだ。何ら得るところがない。

▽（多く「所を得る」などの形で）位置や地位をいう。

▽（連体修飾語を受けて時間的な位置、または時の段階を表す）その折、その場合などとさしていう場合にもその時を漠然と限定してさす場合にも用いる。◇『枕草子』二五「待つ人ある所に、夜すこしふけて忍びやかに門（かど）たたけば」◇出かけようとしているところに電話が鳴った。◇門を出たところで彼に会った。（このばあい地点を意味するとも時を意味するとも、とれる。）◇今のところ足りている。今日のところはこれで帰る。◇もう少しで間に合う所だったのに残念。

▽（人を表す語を含む連体修飾語を受けて）その人、その人の家、またはその人に関することを遠まわしに表現する。◇『源氏物語』帚木「式部が所にぞ気色（けしき）ある事はあらむ」

▽数量を表す修飾語を受けて、その程度の数量である意を示す。その下に助詞を伴わないで、連用修飾に用いられることも多い。◇一〇円がところを五円でいい。三日がところ五日にしよう。これくらいのところかな。

▽連体修飾句を受けて、その語句の表す事柄の意に用いる。…ということ。この用法は次の「語の限定」でもある。この用法もまた古代中国語「所」の訓読みに由来するのかどうかは不明。◇『源氏物語』若紫「おぼされん所をも憚らずうちいで侍りぬる」◇『今昔物語』一六・二八「見ればもの食う所有りとも見えず」◇今はそれどころではない。◇聞くところによれば、近く転勤されるとか。

▼語の限定

もともとは古代中国語「所」の訓読みに由来する。「ところ」に意味が通じるので古くからこの用法があった。用言の叙述を受け、「ところの」の形で体言へ続ける。「所」が古代中国語で受身の意で用いられるのを直訳した表現として使用され、近代ではヨーロッパ語の関係代名詞の翻訳語としても使われて、多用されるようになった。◇『竹取物語』「たてこめたる所の戸」◇私の知るところではない。◇派手な色を用いているところがこの特徴だ。

▽（「…をしたとき」の意から変化して、接続助詞のように用いる）上の句の叙述を受けて、下の述語に続ける。候文などで多く用いられた。◇『御堂関白記』長和五年一二月二八日「園池下薬殿薬生男為人被害、経通朝臣仰、見侍之処、已死去者」

▽漢文読み下し文◇原典『十八史略』「襄公為弟無知所弑、無知亦爲人所殺」読み下し「襄公は弟の無知の弑する所となり、無知もまた人の殺すところとなる」

▽ここから西洋文の関係代名詞の訳語に用いた。◇私が知っているところの病院◇法の及ぶところの範囲

▽面積をあらわす「町」の古訓の一つ。『日本書紀』安閑元年閏一二月（寛文版訓）「元合（おほすへ）て肆拾町（よそトコロ）を

奉献る」

とし

【とし（年・歳）】[tosi]

■[tosi]の[to]は「田[ta]の本質、田の意義」であり、「とみ（富）」「とよ（豊）」の[to]などが同根の「みのり」を意味する。[si]は行為の[su]によってもたらされるものであり、「とし」は元来、穀物を意味した。穀物の一回実る期間が一年に相当するところから「年」を意味するようになった。

▼五穀、特に稲。また、その耕作、収穫、作柄など。◇『万葉集』四一二四「わが欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙げせずとも登思（トシ）は栄えむ」◇『新勅撰』冬・四一〇「あらはれてとしあるみ世のしるしにや」

▼時間の単位、暦の年◇『古事記』中・歌謡「あらたまの登斯（トシ）が来経（きふ）れば、あらたまの月は来経（へ）ゆく」◇『万葉集』八三〇「万世に得之（トシ）は来経（きふ）とも梅の花絶ゆる事無く咲き渡るべし」◇『源氏物語』桐壺「この御子三つになり給年、御袴着のこと略、いみじうさせ給ふ」◇『古今和歌集』一「年の内に春はきにけり」

▼年齢◇『古事記』中「凡そ此の神倭伊波礼毘古天皇の御年、壱佰参拾漆歳」◇『浮雲』「芳紀（トシ）も若くって且つ婦人の身でゐながら稽古してお出なさる」◇『硝子戸の中』「母はこんな年齢（トシ）」をして懐妊するのは面目ない云ったとかいふ」

とる

とる（取る・執る・採る・捕る・撮る）[toru]

○ものにむかい、そのものを手にいれ、思いのままにする。

◆「手（た）」の母音交替形「手（と）」の動詞化。ものをしっかり手に握り、身から離れないようにしっかり持つ。そして、それを意のままにする。

※タミル語＜toi＞由来。

▼手に持つ。つかむ。つかんで使う。◇『日本書紀』皇極三年六月・歌謡「我が手を騰羅（トラ）め」◇『万葉集』三九六一「楫（かぢ）登流（トル）間なく思ほえし君」◇『伊勢物語』六三「道にて馬の口をとりて」◇『平家物語』八「女房達、袴のそばをとり」

▽苗を植える。◇『古今集』一七二「昨日こそさなへとりしか」

▽手を引く。また、指導する。◇『蜻蛉物語』上「手をとりてみちびく」

▼手元に引きよせ、自分のものにする。逃げないようにしっかり押さえる。つかまえる。◇「蝉を捕る」◇『古事記』下・歌謡「鶺鴒（ささき）登良（トラ）さね」

▼あることをしっかりおこなう。◇「事務を執る」◇「志を固く執る」

▼自分の物になるように、また、自分の物として持てるようにする。農作物・草木・魚介類などを収穫、採集する。自分の思い通りに支配、領有する。◇『日本書紀』応神一三年三月・歌謡「花橘下枝らは人皆等利（トリ）」◇『大鏡』五「天下とる相おはします」

▽報酬として得る。◇「給料をとる」◇『竹取物語』「給はせたる物各分けつつとる」

▽人について言う。（嫁・むこ・養子などを）迎え入れる。◇「むこ（嫁）をとる」◇「主をとる」◇「弟子をとる」◇「客をとる」◇『宇津保物語』国譲下「ちひさかりけるを、とりて養はせ給ける」◇『源氏物語』紅葉賀「舞の師どもなど、世になべてならぬをとりつつ」

▽和歌などの一部を引き受けてよむ。◇「本歌を取る」◇『源氏物語』早蕨「はかなきことをも本末をとりていひかはし」

▽食べ物、読み物などを注文してとり寄せる。◇「蕎麦をとる」◇「雑誌をとる」

▽ある成績や資格などを得る。◇「学位を取る」

▽費やす。積み重ねる。◇「時間をとる」◇「手間をとる」◇「年とる」◇「明かりをとる」

▼それまであった所から引き離す。ついているものを除き去る。◇「垢をとる」◇『浮・好色貝合』下「先、衣とらっしゃれ」◇「命（首）を取る」◇『万葉集』九七二「言挙げせず取（とり）て来ぬべき男とそ思ふ」◇『大和物語』一二六「物の具もみなとられはてて」◇『平中物語』一「つかさとらせ給へば」

▼身に負う。評判、恥辱、失敗などを我身に受ける。◇「不覚をとる」◇『古今集』六二八「なき名とりては苦しかりけり」◇「労をとる」◇「責任をとる」◇『源氏物語』東屋「大臣にならむ贖労（ぞくらう）をとらむなどぞ」

▼ある形をつくり出す。◇「型を取る」◇「メモをとる」◇「きげんをとる」◇『伊勢物語』四三「この女、けしきをとりて」◇「寸法をとる」◇『蜻蛉物語』上「かずにしとらば尽きぬべし」

▽ことを解釈する。あることをおこなう。◇「人の話を悪くとる」◇「自由行動をとる」◇「攻勢をとる」◇『源氏物語』若菜上「身にとりては事にもあるまじく」◇『平家物語』四「凡人の家にとらば公文所ていのところ也」

な行

なる

なる（生る、成る）［naru］

○たま（魂）がこもり、そのはたらきで新たにものが現れること。米がなるように、自然の力と人の働きによって、それまではなかったものが現れること。

◆生命力がこもることによってはじめて「なる」。だから「なる」は価値あることとしてとらえられる。「なる」は日本語の中で熟成する過程で、「な」（大地）に「ある」（生まれる）としてとらえられ、人が耕し自然に人の手を加えることで、大地が恵みをもたらす、これが「なる」であると定義されていった。

※タミル語＜naru＞起源。

▼ものがなる。◇『日本書紀』推古二一年一二月・歌謡「親無しに汝（なれ）奈理（ナリ）けめや」◇『蜻蛉日記』上「花さき、実なるまで」

▼ものになる◇「戦火で灰になる」◇「委員になる」◇『万葉集』八一九「斯くしあらば梅の花にも奈良（ナラ）ましものを」◇『更級日記』「今は武蔵の国になりぬ」◇「夕方になる」◇「髪がしろくなった」◇「彼はきっとものになる」

▼ことがなる。◇「功成り名遂ぐ」◇『方丈記』「新都はいまだならず」◇「なせば（ことが）なる」◇『万葉集』「たらちねの母に障（さや）らばいたづらに汝（いまし）もわれも事なるべしや」

▼ことになる。◇「彼の手になる絵だ」◇「なんとかなるさ」◇『竹取物語』「思ふことならで、世中に生きて何かせん」

—【ならない】

◆ものはなることに価値がある。ものがなるようにしなければならず（強制）、ものがなるのが妨げられるからしてはならない（禁

止）のである。

▽「ねばならない、してはならない、してはいけない」のは「ねば（ものが）ならない、しては（ものが）ならない、しては（ものがならないので）いけない」からである。

▽「案じられてならない、いやでならない、いとしくてならない」の意味は「案じられて（ものが）ならない、いやで（ものが）ならない、いとしくて（ものが）ならない」である。

▽「風邪を引くといけない、強くなくてはいけない、＝行けない」、「いけない」、「すまない」も同様である。「いく」「すむ」がいずれも「もの」が現れることによって安定した状態になることを意味していて、それが実現しないということ述べる。

―【なす】［nasu］

▼なるようにすること。現代語では「なす」を用いるよりは直接「する」で表す。◇『竹取物語』「おのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」◇「なせば成る」◇『落窪物語』四「越前守、今年なん代りければ、国の事いとよくなしたりければ」◇『万葉集』九二八「もののふの八十伴（やそとも）の男は廬（いほり）して都成（なし）たり旅にはあれども」◇『源氏物語』手習「立とまりて火をあかくなして見れば」

に〔辞〕

に〔辞〕［ni］

○体言、または体言相等の語につき、用言に繋ぐ。するところを示す。格助詞。また、文につき次の文の、順接での根拠、逆接での反例などを示す。接助詞。

◆動作などの目的の場や、また陳述の根拠としての理由などを示す。

※タミル語＜in＞由来。

▼〔格助詞〕用言で表される動作などのなされる場を示す。▽場所を明確に指定する。◇『古事記』中・歌謡「相摸（さがむ）の小野邇（ニ）燃ゆる火の」◇『万葉集』一〇三「わが里に大雪降れり大原の古りにし里に落（ふ）らまくわ後」◇「故郷の小学校に集う」

※「川に遊ぶ」と「川で遊ぶ」はどのように違うのか。◇「川に遊ぶ」…川「に（という場所で）」遊ぶ。◇「川で遊ぶ」…「川（という場所）」で遊ぶ。このように「場所」の意味を「に」が担うのか、それとも「川」自体に場所の意を込めるのかが、違うのではないか。

▽時を指定する。◇『万葉集』三七八四「心なき鳥にそありける霍公鳥　物思ふ時に鳴くべきものか」◇『万葉集』四九七「古（いにしへ）爾（ニ）ありけむ人も」◇「こんな時間にようこそ」

▽動作や感情、作用（受身・使役・比較等）の目標や対象を示す。◇『古事記』中・歌謡「尾張邇（ニ）直（ただ）に向へる」◇『万葉集』三六七一「ぬばたまの夜渡る月にあらませば　家なる妹に逢ひて来ましお」◇『枕草子』二七「人にあなづらるるもの。築土（ついぢ）のくずれ。あまり心よしと人にしられぬる人」◇「山に登る」

▽目的を示す。◇『古事記』上・歌謡「八雲たつ出雲八重垣妻ごみ爾（ニ）八重垣作るその八重垣を」◇『源氏物語』椎本「向かひの山にも時々御念仏に籠もりたまひしゆゑこそ、人も参り通りしか」

▽動作の原因、理由、機縁等を示す。◇『万葉集』四六六「そこ思ふ爾（ニ）胸こそ痛き言ひもえず」◇『源氏物語』帚木「つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに」

▽資格や地位を表す。◇『万葉集』三六七六「天飛ぶや雁を使爾（ニ）得てしかも」◇『源氏物語』帚木「下　にはべりしとき」

▽「思う」「聞く」「知る」「見る」等の感覚動詞の内容を示す。◇『万葉集』三五九六「吾妹子が形見爾（ニ）見むを」◇『源氏物語』桐壺「ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、うちうちに思ひたまふるさまを奏したまへ」

▽中古からの用法。他者や自分を主語として特立指示することを避ける用法。◇『源氏物語』桐壺「弘徽殿には久しく上の御局にも、参（ま）う上り給はず」

▽下の動詞を補足的に強調しまた状態を修飾する用法。◇『竹取物語』「立て籠めたるところの戸、すなわち、ただ開きに開きぬ」◇『古事記』下「足母阿賀迦邇（あしもあがかニ）嫉妬（ねた）みたまひき」◇『源氏物語』胡蝶「なでしこの細長に、此の頃の花のいろなる御小うちき」

▼〔接助詞〕述語用言の連体形をうけ、句文と句文とを接続し、並列や、後者の根拠などを示す。

▽並列・添加・継起等の関係を表す。◇『土佐日記』「かくうたふに、ふなやかたの塵も散り」

▽順接条件を表す。◇『竹取物語』「此事をなげくに、鬚も白く、腰もかがまり、目もただれにけり」◇『伊勢物語』六二「涙のこぼるるに、目も見えず、物もいはれず」

▽逆接条件を表す。◇『古今集』八八四「あかなくにまだきも月のかくるるか」◇『宇治拾遺物語』「かくいうほどに、風もふかぬに、このゆく舟の、こなたへより来」◇「こんなに思っているのに、どうしてもっと真剣に考えてくれないのか」

ね

ね（根）[ne]

○根は大地（「な[na]」）にあって、「成る」ことをささえる。

◆ここから起源や由来、根拠を意味するようになる。

▼植物の基本的な器官の一つ。植物体の支持、および水と栄養分の吸収を主な機能とする。◇『古事記』歌謡「巻向の日代の宮は…竹の泥（ね）の泥（ね）足る宮、木の泥（ね）の泥（ね）蔓ふ宮」◇『万葉集』四一五九「磯の上の都万麻（とまま）を見れば根を延へて年深からし神さびにけり」

▼物の基礎となり、それを形づくる根本となる部分。ねもと。つけね。◇『日本書紀』神代「譬えば海（うな）の上に浮かべる雪の根、かかること無きが猶し」◇『万葉集』三六八八「大和をも遠くさかりて岩が禰（ね）の荒き島根に宿りする君」◇「彼の思想は根なし草だ」

▽裏面にかくされた本性。また、その結果を誘引した原因。◇「根のない噂」◇「問題の根を断つ」紛争の根は深い」◇「彼は根は善人なのだ」◇「まだ根にもっている」◇『源氏物語』紅梅「同じ花の名なれど、梅は生い出でけむねこそ哀れなれ」◇『徒然草』「愛着の道、その根深く、源とほし」◇『流行感冒』志賀直哉「後まで両方の家に思わぬ不快な根を残し兼ねなかったのである」◇『土』長塚節「根が丈夫なのでお品は仕事が苦しいと思ったことはなかった」◇『続末枯』久保田万太郎「根をあらへば、もとは、四日市のさる塩物問屋の若旦那だった」

の〔辞〕

の〔辞〕[no]

○体言または体言に準ずるものを受け続く体言を限定する。
※タミル語＜in＞由来か。
▼〔格助〕下の実質名詞を種々の関係において限定・修飾する。
▽場所や時、方位を表す。◇『古事記』上・歌謡「山処（やまと）能（ノ）一本薄（ひともとすすき）」◇『万葉集』二二「河上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常処女にて」◇『源氏物語』若紫「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ」◇「京都の南東の宇治」
▽行為者、生産者、所有者を示す。◇『万葉集』一四七「天の原振り放（さ）け見れば大君の御寿（みいのち）は長く天足らしたり」◇『蜻蛉日記』下「三月一五日に院の小弓はじまりて」◇「山田の書いた本だ。」
▽活用語の連体形、または連体格を示す格助詞「が」を受けて形式名詞として用いられ、「もの」「こと」の意を表す。◇『源氏物語』常夏「このごろ世にあらむことの、少しめづらしく、ねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせ給へ」◇『曾丹集』「人妻と我がのと二つ思ふには馴れこし袖はあはれまされり」◇「定義集を作るのに忙しい」
▽下の形式名詞の実質・内容を示すもの。◇『万葉集』三六六一「風能（ノ）むた寄せ来る波に」◇『源氏物語』桐壺「右大弁の子のやうに思はせて」
▼主格を示す助詞。▽言い切りにならない句の主語を示す。◇『万葉集』一七三「高光る吾が日の皇子乃（ノ）いましせば」◇『源氏物語』夕顔「御けしきのいみじきを見たてまつれば」
▽連体形で終わる詠嘆文や疑問・反語・推量文の中の主語を示す。◇『万葉集』一七「しばしばも見さけむ山を心なく雲乃（ノ）隠さふべしや」◇『枕草子』一「むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」◇「飛行機雲の長いこと」
▼他の格助詞の用法に通ずるといわれるもの。「を」「に」「と」に通う「の」といわれる。◇『万葉集』四一九「岩戸割る手力もがも手弱き女にしあればすべ乃（ノ）知らなく」◇『土左日記』「きのふの同じところなり」

の（野）

の（野）［no］
○「な（地）」［na］は大地を意味する。「の」はこの大地において，人が何かをなすところとである。
◆生きてゆく本拠としての「さと」に対し，それを囲んで広がる「の（野）」では，草を刈ったり、柴を得たり、野の道を行き交ったり、時には狩りをする所である。また「やま」はさらに遠くにあり、通常は人が立ち入らないところである。
▼里と山の間に広がる所。◇『万葉集』四七「ま草刈る荒野にはあれども黄葉（もみぢば）の過ぎにし君が形見とそ来し」◇『万葉集』八三七「春の努（ノ）に鳴くや鶯」◇『万葉集』一三三六「冬こもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも我が心焼く」
▽動植物を表す名詞の上に付いて、そのものが野生であること、山野で自然に生長したものであることを表す。◇「のうさぎ」、「のがも」、「のいちご」、「のばら」。

のぶ

のぶ（伸ぶ、延ぶ、述ぶ）［nobu］
○言葉をつらねて話すことで心が解きひろがること。そこから、ま（間）があき、広く、ゆっくりとなること。
※タミル語＜nuval＞由来。

◆曲がったり巻いたりしているもの広げ、あるいは固まっているもの引っ張って、間を空け、広く、また長くすること。

※古語ではいわゆる自動詞も他動詞も「のぶ」であった。現代日本語では「のびる、のばす、のべる」と送り方での区別がある。

▼空間について。※「伸びる（伸ばす）」は「曲がったり巻いたりしているものが（を）広く長くなる（する）こと」、「延びる（延ばす）」は「固まっているものが（を）広がる（広げる）こと」と、漢字によって使い分け区別する。

▽広く、長くなる。曲がっていたものがまっすぐになる。◇『源氏物語』総角「例の見たてまつる皺のぶる心地して」◇『天理本金剛般若経集験記平安初期点』「手を曳（ノヘ）て挽（ひ）き起すに」◇「膠（にかわ）をのべる」▽たたんでいたものをひろげる。◇『法華義疏長保四年点』二「之を舒（ノフル）ときは則、長さ五尺なり」◇『太平記』一五「三密瑜伽の道場を構へ、一代説教の法席を展（ノベ）給ひけり」◇『平家物語』宇治川先陣「腹帯ののびてみえそうぞ。締め給へ」◇「床を延べる」▽背が高くなる。▽逃げて遠くへ行く。◇『平治物語』「この雪にいかでのび給ふべき」◇「逃げのびる」

▼時間について。▽寿命がのびる。◇『源氏物語』野分「限りあらむ命のほども、いますこしは必ずのびなむかし」◇『枕草子』四〇「よはひをのぶる歯固めの具」▽延期になる。◇『源氏物語』梅枝「御参りのびぬるを、宮にも心もとながらせたまへば」◇『源氏物語』蜻蛉「日をのべてもさる事はする物を」

▼心について▽「息をのべる」の用法で、ほっとする。◇『徒然草』「しのこしたるをさて打ち置きたるは、面白く、いきのぶるわざなり」▽「心をのべる」の用法で、のびのびとさせる。くつろがせる。◇『万葉集』一八八二「春の野に心伸べむと思うどち来し今日の日は暮れずもあらぬか」◇『源氏物語』総角「三月の十日ほどなれば、空もうららかにて、人の心ものび、おもしろきをりなるに」◇『源氏物語』総角「げに、ふるごとぞ、人の心をのぶるたよりなりけるを」

▼言葉について。▽言葉をつなぎならべて詳しく言う。◇『栄花物語』二六「歌は心をのぶといひて、をかしきにも、めでたきにも、あはれなるにも、さまざまの人のまづ詠み給ものなめれば」◇「意見（祝辞）を述べる」◇『落窪物語』三「さればいとことわりなり。のべ聞えさすべき事も侍らず」（言い訳する）

のり

のり（法・則・典・範・程・度）[nori]

○動詞「のる（宣）」は、人の前では言うべきでないことを、神や特定の人の前で明かして言う、の意。その連用形名詞であり、言うべきでないそのこと。神や為政者の言ったこととして、掟や規準の意味。

※中古以降はもっぱら佛教用語として、仏の教えを意味する。

※タミル語＜ neri ＞由来。

▼法律。掟。従い守るべきよりどころ。のっとるべきこと。▽上位の者からの命令。おきて。法令。規則。◇『日本書紀』推古「故、今（こ）の時に当たりて、僧尼、未だ法律（のり）を習はぬを以て、たやすく悪逆なることを犯す」

▽下位の者がつき従うべき模範。手本。◇『万葉集』三八〇九「商返し領らすとの御法あらばこそわが下衣返し賜（たば）らめ」

▼規準。規矩。はかるときのよりどころ。測定のもととなるもの。やりかた。方法。方式。型。◇『日本書紀』神代「其の宮を造る制（のり）は、柱は高く大し。板は広く厚くせむ」◇『日本書紀』垂仁「今より以後、是の土物を以て生人（いきたるひと）の

更易へて、陵墓に樹てて、後葉（のちのよ）の法則（のり）とせむ」◇「みちのり」◇「内のり」、「外のり」。

▼仏法。仏道。仏の教え。◇『仏足石歌』「人の身は得がたくあれば法の為の」

は行

は〔辞〕

は［wa］←［fa］

○「甲は乙」は、甲が、その固有な性質（の一つ）として，乙をもっていることを示す。

※タミル語＜ vay ＞由来。普遍的な命題の題目、を示す。

◆「甲は乙」は甲が既知であって、それを話者が話しの主題として持ちだし、それが乙という内容をもっていることを示す。いくつもの内容のうちその一つとして確かにもっている，という意味。「甲が乙」は逆に乙が既知であり、甲がその既知なる性質をもつことを述べる。

◇「私は山田です」私の存在は既知であり，その名字が不明なときに、それを名のる。◇「私が山田です」山田という名字のものがいることは既知であるが，誰であるかがわからないとき、「誰」を示す。

▼甲が体言。乙は甲を主題とする述部である。▽叙述の題目を提示する。◇『万葉集』二「国原は（波）煙立ち立つ」◇『万葉集』四四二五「防人に行くは（波）誰が背と問ふ人を」◇『古事記』上・歌謡「青山に鵺（ぬえ）は（波）鳴きぬ」

▽いくつかある中からとくに取り立てて一つを示す。◇『源氏物語』桐壺「ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かしたまふ」◇「私はこのように考えます」◇「このことはそのように言えるが、他のことは言えない」

▽対比すべき事柄を言外におくことにより強める。◇『万葉集』八二一「飲みての後は（波）散りぬともよし」

▽複合動詞の中間に入り、あるいは活用語の連用形・副詞などを受けて強調し、打消または逆接の表現に続く。◇『万葉集』一八〇七「髪だにも掻き者は梳（けづ）らず」

▽形容詞および打消の助動詞「ず」の連用形を受け、仮定条件を表す。◇『万葉集』四〇三九「布勢の浦を見ずは（波）上（のぼ）らじ年は経ぬとも」

▽連体修飾の文節を受け、対比的に被修飾語との関係を強める。◇『方丈記』「一条よりは南、九条より北」

▽地名に関して、それを含むさらに広い地域を先に提示する特殊な用法。◇「東京は神田の生まれ」

はかる

はかる（計る、量る、測る、図る、諮る、議る、謀る）［hakaru］←［fakaru］

○はか（計、量、果）はここまでと目当てするはたらきの大きさ。それが出来たかどうかをはかる。

※タミル語＜ vakai ＞（分割する、計量する）由来。「はか」は＜ paku ＞（割り当てる、分配する）由来。

◆今日はこれだけの田の草を刈ろうというように、広さなどをもとにここまでという目当て（はか）をつけ、それが出来たのかどうかを見定めること、これが「はかる」の原義である。「ここまで」という見当をどのようにつけるのか。そこには量の概念が芽

生えている。そして労働の大小を生じさせるその量を見定めることから「量をはかる」になる。さらに、はかったことにもとづいてことを起こそうとすること、また見当をつけることと意味がひろがった。水田耕作にともなう言葉。語根［faka］を同じくする言葉は、「はか」「はかなし」「はかばかし」である。

▼単位量に分け確認する。秤、枡（ます）、ものさし、時計などの計器で測定する。◇『日本書紀』雄略「国の危殆（あやう）きこと、卵（かひご）を累ぬるに過ぎたり。命の脩（なが）さ短さ、太（はなはだ）計らざる所なり」◇『今昔物語』一・二三「この甲の直（あたひ）を量るに、金の銭十億也」◇『東大寺諷誦文平安初期点』「丈尺を以て計（ハカリ）しかども」◇『正法眼蔵』「菩提薩タ（土ヘン＋垂）四摂法」「心の大小ははかるべからず、物の大小もはかるべからざれども」

▼考えて実行する。▽物事の情況を考えて処置する。画策する。企てる。◇「自殺をはかる」◇「便宜を計る」◇『平家物語』二「これらが内々はかりし事のもれにけるよ」

▽相談する。協議する。自分の意見を人にただす。◇会議にはかる。◇『日本霊異記』上・三五（興福寺本訓釈）「時に市人評（ハカリ）て曰はく」

▽思いめぐらす。考慮する。分別する。◇『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』九「自ら忖（ハカル）に、衆の病を救療するに堪能しぬべしと」◇『枕草子』一六一「あにはかりきや、太政官の地の今やかうの庭とならむことを」

▽おしはかる。推察する。予想する。想像する。◇「相手の心中をはかる」◇『土左日記』「日もえはからぬかたゐなりけり」

▽うかがいみる。見はからう。配慮する。◇『打聞集』竜樹菩薩隠形事「其後に人まをはかりて」◇『徒然草』一五五「病をうけ、子をうみ、死ぬることのみ、機嫌をはからず」

▽欺く。だます。たばかる。◇「まんまと計られた」◇『源氏物語』夕顔「げにいづれか狐なるらんな、ただはかられ給へかし」◇『源氏物語』螢「すずろごとに心を移し、はかられ給ひて」

―【はかばかし】「はか」を重ねて形容詞化した言葉。見当どおりにできること。▽物事が順調に進行するさま。うまくいくさま。思わしい状態に事が運ぶさま。順調である。◇『宇津保物語』俊蔭「一手つかうまつりしを、そもそもはかばかしうや侍りけん」◇『源氏物語』末摘花「かようの御歩きには、随身がらこそはかばかしきこともあるべけれ」▽頼もしい。有能である。役にたつ。◇『源氏物語』若紫「いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ」◇『源氏物語』桐壺「取り立てて、はかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ拠りどころなく心細げなり」◇『落窪物語』一「はかばかしき人もなく」▽際立っているさま。はっきりしている。明確である。◇『枕草子』三〇一「木どもなどのはかばかしからぬなかに」◇『宇津保物語』俊蔭「はかばかしくも身の上をえ知り侍らず」▽表向きであるさま。正式だ。本格的だ。◇『源氏物語』若菜上「うるはしだちて、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目もおよばぬ心地するを」

―【はかなし】目当てや目標としての「はか」がない。はたらきがいのないこと。また「はか」を定めがたいことから、頼りない、とりたてて重要でないことなど。▽思い通りにいかないさま。順調でないさま。期待はずれだ。◇『竹取物語』「御輿を寄せ給ふに、此かぐや姫きと影に成ぬ。はかなく口惜しと思して」▽頼りない。心細い。◇「はかない望みを抱く」◇『古今集』五二二「行く水に数かくよりもはかなきは」▽あっけないさま。◇『源氏物語』宿木「はかなく暮ぬれば、その夜はとまり給ぬ」▽無常であるさま。◇『和泉式部日記』「夢よりもはかなき世のなかを嘆きわびつつ」◇『源氏物語』夕顔「人のはかなきさまになりにたるを」

▽表立たないさま。しのびやかだ。◇『源氏物語』常夏「さるべき折々に、はかなくうち忍び」▽表向きでないさま。かりそめのさま。何げない。◇『蜻蛉日記』上「はかなき祓へなれば」▽粗末なさま◇『枕草子』二二八「いとはかなき家に泊りたりしに」▽幼稚なさま。あどけない。◇『源氏物語』若紫「いとはかなう物し給ふこそ、あはれにうしろめたけれ」▽浅はかなさま。たわいない。◇『源氏物語』少女「はかなき親に、かしこき子のまさるためしは、いと難きことになむはべれば」

はじめる

はじめ（始める）[hajimeru] ← [fa] - [simeru]

○「は（端）をしめる（占める）」の複合から連音が濁り「はじめる」になった。「をふ（終わる）」の対義語。

◆ものやことの端を占め、そこから次々とその区域を持続的に拡大すること。場所や区画から、さらに時間についても、また何かの現象についても、用いる。

▼もののはじまり。▽新しく事を起こす。あらたにやり出す。開始する。発足させる。創始する。◇新生活を始める。◇『万葉集』四〇九四「わご大君の　諸人を誘ひ給ひ　善き事を　始め（波自米）給ひて」

▽端から広がる。◇『万葉集』二二一一「妹が紐解くと結びて立田山今こそ黄葉はじめてありけれ」

▼ことのはじまり。▽最初とする。事が起こるもととする。起因とする。◇『万葉集』五二「やすみしし　わご大王高照らす日の皇子　荒栲（あらたへ）の　藤井が原に　大御門　始め給ひて」◇『平家物語』二「みだりがはしきうったへ仕る事、今にはじめずと申しながら」

▽いくつかのうち、主たるものとする。第一のものとする。いくつかのものを列挙する場合にいう。◇『竹取物語』「親をはじめて、何とも知らず」

▽動詞の連用形に付けて、その動作をやりだすことを表す。…し出す。◇書きはじめる。作りはじめる。「泣きはじめる」など。

—【はじめ（初め、初め）】「はじめる」の連用止め名詞。

▼展開していったその端。両端としては「終わり」「あと」に対し、また「なか」にも対応する。

▽物事の起こり。原初。物事の生成の発動、また、その時期。発生。◇『御巫本日本紀私記』—神代上「開闢之初安女津知乃比良久留波志女（あめつちのひらくるハシメ）」

▽新しく事を起こすこと。また、その位置、時期。開始。切り出し。端緒。◇『伊勢物語』七八「宮づかへのはじめに」

▽時間的推移における最も早い時期。初期。初頭。◇年のはじめに決意を新たにする。◇『万葉集』四一三七「正月たつ春の波自米（ハジメ）に」

▽最初。先。以前。◇はじめが肝心。◇『伊勢物語』二三「はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて」

▽物事の起こるみなもと。おおもと。本源。根源。本主。◇『御巫本日本紀私記』神代上「有一雌元之処比止津乃三乃波志女乃止古呂安利（ひとつのみのハシメのところあり）」

▽物事の序列の第一。いくつか列挙するうちの、第一に主だったもの。◇イギリス、フランスをはじめとする西洋諸国◇『源氏物語』帚木「あまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく。これをはじめの難とすべし」

▽ひと続きのものの最初の部分。表現の首部。書き出し。緒言。前口上。前半。最初の部分。◇『平家物語』八「既に十番競馬はじまる。はじめ四番、一宮惟喬親王かたせ給ふ」

はたけ

はたけ（畑，畠）[fatake]

○[fata]は[fat]-[a]で「生まれる」「生じる」の意味か。青森県などでは「はだ（はた）」で母親のことをいう。[ke]は食物のこと。食物が生じる場。

□タミル語＜ patukar ＞に由来。穀物が生じる場。

◆穀物の生じる場。本来「た（田）」[ta]↑[tambo]が泥田を意味するのに対して、「はた」はより一般的に穀物の生じる場所をいった。その後，「た（田）」が「はたけ」をふくめて耕す場を意味し，「はたけ」が水田ではない乾いた農耕地を意味するようになった。

※焼き畑を「畑」，乾いた耕地を「畠」と書くようになる。これらはいずれも日本で造られた字である。

▼野菜、また穀類をつくる耕地。水田に対して、水を引き入れない耕地をいう。◇『万葉集』四一二二「雨降らず日の重なれば植ゑし田も蒔きし畑（波多氣）も朝ごとに凋み枯れ行く」

▼ある特定の分野や領域。◇『夜明け前』島崎藤村「景蔵はもともと関学の畠の人であるが」◇「彼は法律畑出身の人だ」

はたらく

はたらく（働く）　[hataraku]

○人間が人間としての動きをすること。人が動くことから意味が展開し、人として意味のある動きをすること一般を意味する。

※「働」という字は中国語の中になく、日本語の中で作られた字である。日本語ではそれだけ「はたらく」が一つの言葉として強く意識される。

▼人について。▽からだを動かす。動作する。動く。◇『今昔物語』「俄かに弓に箭を番ひて、本の男に差し充て強く引きて、『おのれ働きかば射殺してむ』といえば」◇『宇津保物語』国譲中「生きてはたらき給ふ仏」

▽心が動く。精神などがよく活動する。機転がきく。心などがゆれ動く。動揺する。◇気が働く。◇『平家物語』一〇「心もはたらき候ぬべし」◇『古今著聞集』「さるにつけても、いよいよ心の働くこと静めがたけれども」

▽努力して事をする。精出して仕事をする。労働する。特に、戦場で活躍する。また、出撃する。◇家族のために働く。◇『方丈記』「つねにはたらくは、養性なるべし」◇『上杉家文書』「てき地へはたらき引取候時」◇「気が働く」

▼ものについて。▽他にある力を及ぼす。作用する。◇磁力が働く。◇『不思議な鏡』森鴎外「そのうち水平に働（はた）らいていた磁石力が」◇『彼岸過迄』夏目漱石「何うかなるだらうといふ料簡が暗に働（はた）らいて」◇『働くものから見るものへ』（論文名）西田幾多郎

▼用言や助動詞の語形が変化する。活用する。▽（悪事などを）する。行う。◇不貞（盗み）を働く。◇『浮雲』二葉亭四迷「この女丈夫に取入って卑屈を働く」◇『坊ちゃん』夏目漱石「君がもし茲で乱暴を働いてくれると」

はつ

はつ（初）[hatu]←[fatu]

○[fat]は「は（端，刃、葉）」、[u]は何かがなされること。もののはじめの部分が現れる意味。

※［fatu］はタミル語＜pat-u＞に起源。存在するようになる。現れる。起こる。心に浮かぶ。花が咲く。

◆生の循環で新たな段階になること。季節が変わるとき。あることの一定の周期のそれらしい徴候がみえはじめるはじめの部分。接頭語として用いる。

※類語

【にひ（新）】「まだ誰も手をつけていない」、あるいは「…したばかり」の神聖な新穀が原義。◇「新草」、「新嘗」、「新膚」。

【うひ（初）】「生まれて初めて」の意。人の身にはじめてのこと。◇「初産」、「初陣」、「初孫」。◇『古今集』四三六「我はけさうひにぞ見つる花の色を」

▼はじめてであること。最初。◇おはつにお目にかかります。◇世界でも初の試み。◇「初物」「初風」「初雁」「初霜」「初春」「初草」「初声」「初節供」◇『万葉集』四三〇六「初秋風涼しき夕べ解かむとそ結びし妹に逢はむため」◇『万葉集』四四九三「始春（はつはる）の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらく玉の緒」

▼年や月の初め。年のはじめにとれるもの。「初夢」「初午」「初雪」◇『万葉集』三四六八「山鳥の尾ろの初麻に鏡懸け唱ふべみこそ汝は寄そりけめ」

▼はじめてのこと。「初軍」「初槍」

▼「はつはつ（端端）」◇『万葉集』二四一一「白たへの袖をはつはつ見しからにかかる恋をもわれはするなり」

はなす

【はなす（離す、放す、話す）】［hanasu］←［fanasu］

■［fa］は「はし（端）」や言の葉の「は」［fa］と同じく「端」であり「言葉」である。［nasu］は「なす」。ここから、端に置くことを意味する。

◆隙間なく置かれていたものの一方を、離しておくこと。見たり聞いたりしたことを言葉にする。

言挙げすることを、あらたまって考えることから、「話す」は古代に用例が少ない。

▼隙間なくくっついている状態のものを解いて分ける。◇『万葉集』三四二〇「上つ毛野佐野の舟橋取り波奈之（ハナシ）親は放（さく）れど我は放（さか）るがへ」

▽人や物などを、一定の場所や位置などから遠ざける。解放する。◇この手紙を肌身離さず持っている。◇犬を放してやる。◇『平家物語』六「桂の鵜飼いが鵜に餌にせんとて、亀を取って殺さんとしけるを、着給へる小袖を脱ぎ、亀に換へ、はなされたりしが」

▼ことばで伝える。口に出して述べる。いう。◇人前で話すのが苦手だ。

はらう

はらう（祓う、払う、掃う）←［farafu］

○［far］と［u］。すっかり何かうなくすること。［fa］は「は（端）」であり、［far］は「はるか（遙か）」、「はら（原）」の語根と同根。

※　祓う　タミル語＜par-ave＞由来。払う　タミル語＜par-iyam＞由来。

◆有害なもの、無益なもの、汚れなどを離し、すっかり除くすこと。代金などを払うの意は近世。

▼有害・無益・不用のものを取り除く、除去する。放逐する。目前の人を引き下がらせる。◇松の小枝をはらう。◇『万葉集』一九八四「この頃の恋の繁けく夏草の刈り掃（はらへ）ども生ひし

く如し」◇『万葉集』三四八九「梓弓欲良（よら）の山辺の繁げかくに妹ろを立ててさ寝処波良布（ハラフ）も」◇『源氏物語』末摘花「橘の木のうづもれたる、御随身召してはらはせ給ふ◇『日本書紀』神代「遂に神逐（かむやらひ）の理を以て逐此」◇『落窪物語』二「帯刀さきに立ちて、道なる人々はらふ」

▼罪やけがれを除き去る。神に祈って、災い、罪、けがれを除き清める。◇『日本書紀』神代「其の穢悪（けからはしきもの）を濯（すす）き除（はらは）むと欲（を）ほし」◇『源氏物語』夕霧「はやうより御祈りの師に、物の怪など、はらひ捨てける律師」◇『日本書紀』神代「筑紫の日向の小戸（をと）の橘の檍原（あはきはら）に往きて祓（みそ）き除（はらへ）たまふ」◇『日本霊異記』「卜者を喚び集へて、祓（はら）へ祈（の）み祷（いの）れども、亦彌増（いやまし）に病む」

▼人に売り渡す。売りはらう。処分する。金銭を渡す。代金を支払う。心をむける。◇古くなったので売り払った。虎明本狂言・合柿「うぢがきが大なりが致てござるに依て略;在所にてはらふ事がならぬ程に」◇賃金を払う。◇敬意をはらう。

はる（晴る）

はる（晴る、霽る）[haru] ← [faru]

○「は（端）」[h] つまり外の世界から「あ」[a] らわれ「る」[ru] こと。五十音図で [a] 段がこの世界の外からきて現れることで、[ru] はそれを実現すること。

※語根 [far] は「はるか（遙か）」、「はらう（払う）」、「はる（墾る）」、「はる（春）」、「はら（原）」などの語根 [far] と同源。「ふさがっていたものが無くなり現れる」の意味を共有する。

「はる（張る）」「はれる（腫れる）」の語根 [far] とも同じである。が、名義抄の時代になると、これをアクセントで区別し、別語とされるようになった。

※タミル語＜ para ＞由来。水・空・気・香り・雲・流行病・光などが拡散すること。

◆ふさいでいたものが無くなり、開け放たれて広々となったところに、かくれていた本来あるべきものが現れること。雲や霧などふさがっていたものが消え、空が広々と現れる。

▼雲や霧が消えてなくなる。また雨や雪があがる。◇晴のち曇◇『万葉集』一五六九「雨晴れて清く照りたるこの月夜またさらにして雲な棚引き」◇『万葉集』二二二七「思はぬに時雨の雨は降りたれど天雲霽れて月夜さやけし」

▽物思いや悩みが解消すること。◇『古今集』三八六「秋霧のともにたちいでてわかれなばはれぬ思ひに恋や渡らむ」◇『古今集』九三五「晴れずのみ思い尽きせぬ世の中の憂さ」◇『海道記』「雲に舞鶴の声、晴の空をしる」

▽疑いが無くなること◇彼の容疑は晴れた。

【はれ（晴）】

※晴れた状態を表す名詞。

▼晴れたところ。日の当たるところ。日なた。◇『今昔物語』一〇・一〇「晴に出でて蔭を離れむと走る時には」

▽さえぎるものがなく広々とした所。また、晴れやかな所。人なか。公衆の面前。まばゆいばかりであること。晴れがましいこと。◇晴れの場所。晴れと着飾る。◇晴れの着物。晴れ着。（また、それを着た姿、様子）晴れ姿。◇『源氏物語』須磨「居給へるさま、さるはれにいでて、いふよしなく見え給ふ」◇『栄花物語』もとのしづく「かかりけるはれのことに、さるべき用意あるべかりけるものを」

▼「け（褻）」の対語。日常と違うあらたまった場所や状態。正式の場所。公の席。よそいきなこと。◇『源平盛衰記』四〇「一門の月卿雲客、今日を晴れときらめきて」◇晴れ舞台。

※日常の生活が「け（褻）」。そのなかに、外からの來訪があってもてなすのが「はれ」。祭りは神を迎えてのもてなし。

【はればれしい（晴れ晴れしい）】はれた様子。すっかり晴れるさまを表す語。心のわだかまりがとれてさっぱりするさまを表す語。中世以降は「晴れ晴れ」と副詞で使うことが多い。

◇『日葡辞書』「テンキガ farebareto（ハレバレト）ナッタ」◇はれやかに。晴れ晴れした顔だなあ。◇『枕草子』二九二「今朝まではればれしかりつる空ともおぼえず」◇『源氏物語』藤裏葉「おもひ屈しつる命も、のべまほしう、はればれしきにつけて」◇『狭衣物語』三「例ならず、はればれしき御しつらひに」◇『源氏物語』椎本「御心もて、はれはれしく、もて出でさせ給はばこそ、罪も侍らめ」◇『狭衣物語』一「小さき御几帳も押し遣られて、いとはればれしければ」◇『源氏物語』東屋「こぼちし寝殿、こたみは、いと、はればれしう造りなしたり」

はる（墾る）

はる（墾る）[haru] ← [faru]

○「はる（晴る）」と語根 [far] が同じ。

※語根 [far] は「はるか（遙か）」、「はらう（払う）」、「はる（墾る）」、「はる（春）」「はら（原）」などの語根 [far] と同源。「ふさがっていたものが無くなり現れる」の意味を共有する。

※タミル語＜ pari ＞由来。むしる、刈る、ねじって摘みとる，雑草を除く。

◆土地をふさぐ木々や草を除き、耕すべき所をひらくこと。

▼田・畠・道路・池などを造るために、山野をきり拓くこと。新しく土地を開く。開墾する。

◇『日本書紀』北野本古訓「国国の堤築くべき所。田墾（はる）べき間（ところ）は、均しく給ひて造らしめよ」◇『万葉集』三四四七「草陰の安努（あの，地名）な行かむと墾り（波里）し道阿努は行かずて荒草立ちぬ」

はる（春）

はる（春）[haru] ← [faru]

○ふゆにこもり、それがあけていのちあふれる新たな営みの季節となること。

※語根 [far] は「はるか（遙か）」、「はらう（払う）」、「はる（墾る）」、「はる（晴る）」「はら（原）」などの語根 [far] と同源。

※名義抄の時代になると、「はる（張る）」とはアクセントが異なるが、「はる（張る）」には芽を出すこと、萌え出るの意味があり、語根 [far] は同じである。

◆冬が明けて訪れる季節。はなやかで盛んなとき、その状態。

▼新暦では三、四、五月、旧暦では立春から立夏までの一、二、三月をいい、気象学的には春分から夏至までをいう。（旧暦では立春と新年がほぼ同じであるところから）特に、新年。正月。

▼若くて勢いの盛んな時。得意の時。最盛期。◇「わが世の春」

【熟語】

「春かたまけて」春が近づいて。また、春になるのを待ち受けて。＊万葉 - 八三八「鶯鳴くも「波流加多麻気弖（ハルカタマケテ）」「春さる」（「さる」は移動する、近づくなどの意）春になる。春がやってくる。《季・春》「春立（た）つ」春になる。春の季節にはいる。《季・春》「春の限（かぎ）り」春の終わり。春のはて。

《季・春》「春の心（こころ）」春を人に見立てて、その春が持つ心をいう。また、春の季節の人の心。春の頃の、のどかな人の心。恋する心。春情。「春の事（こと）」正月の準備。春仕度（じたく）。「春の衣（ころも）」春に着る衣服。はるぎ。また、春霞を衣に見立ててもいう。「春の杯（さかずき）」春のころ酒を飲む杯。また、三月上巳（じょうし）の曲水の宴で水に浮かべる酒杯。「春の除目（じもく）」春に地方官を任命する儀式。⇔県召（あがためし）の除目。「春の調（しら）べ」春に適した楽の調子。双調（そうじょう）。「春の使（つかい）」春が来るのを告げる使い。鶯（うぐいす）をいう。「春の戸（と）」春をとじ込めている戸。「春の隣（となり）」春に近いこと。冬から春に移ろうとする、変わりめの時期。年の暮。「春の鳥（とり）」鶯（うぐいす）の異称。《季・春》「春の情（なさけ）」春のおもむき。春の風情。春の色。「春の七草（ななくさ）」正月七日に摘んで、七草がゆに入れる七種の若菜。芹（せり）、薺（なずな）、御形（ごぎょう）、　（はこべ）、仏座（ほとけのざ）、菘（すずな）、蘿蔔（すずしろ）の称。⇔秋の七草。「春の錦（にしき）」春、百花が美しく咲いているさまを錦に見立てていう語。春向きのはなやかな錦衣。「春の花（はな）」春の時節に咲く花。《季・春》はかない物事のたとえ。「春の光（ひかり）」春の陽光。また、春の景色。春光。温和なさま、恵み深いさまをいう語。「春の港（みなと）」春の行きつくところを、船が泊まる港にたとえていう。春の止まり。春の果て。《季・春》「春の深山（みやま）」春のころの深山。和歌で「春の宮」にかけていうことが多い。「春の目覚（めざ）め」青春期に達して、性の欲望の起こること。「春の雪（ゆき）」春に降る雪。散る花に見立てたり、とけやすいもののたとえに用いたりする。《季・春》「春の夜（よ）」春の短い夜。《季・春》「春の夜の夢」春の夜に見る夢。短くはかないことのたとえ。

はる（張る）

はる（張る）[haru] ← [faru]

○端から端までたるみやゆるみのなようにのばし拡げる。

※タミル語＜paru＞由来。

◆芽が膨らんだり強く盛んになるときのように、たるみやゆるみ皺がなく、いきいきとしているさま。その状態にすること。そのような時節こそ「はる（春）」である。

▼たるみのないように引きのばし広げる。▽布、網などを、たるみのないようにのばし広げる。◇『万葉集』一一八二「海人小舟帆かも張れる見るまでに鞆の浦廻に波立てる見ゆ」◇『源氏物語』須磨「海の面は衾をはりたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく」

▽糸、紐、綱などを、一方からもう一方へ延ばして渡す。◇『万葉集』二八九「天の原ふりさけ見れば白真弓張（はり）て懸けたり夜路は吉けむ」▽液体を一面に満たす。「桶に水を張る」

▼声や気持などをゆるみのないようにする。▽気持をゆるみなく保つ。緊張させる。◇『源氏物語』真木柱「いとさがなげに睨みて、はりゐたれば、わづらはしくて」◇「外聞に無用の気をはる」▽肘、肩、胸などをぐっと延ばしたり広げたりする。◇『天草本伊曾保物語』「ヒヂヲ fatte（ハッテ）」▽（頭や顔を）たたく。なぐる。特に、平手で横ざまに打つ。◇『平家物語』四「仲綱め打て、はれなんどの給ひ」▽（多く「ハル」と書く）謡曲、義太夫などで、声を強く出す。節を、上音にうたいあげる。◇『申楽談儀』「『君をいはひて』『はひて』と張るべからず」▽威勢などを見せる。盛んであるようなさまを人に示す。◇「みえを張る」▽自分の意見や気持を押し通す。主張する。◇「意地を張る」▽取引市場で、思惑売買をする。

▼設備する。また、ある位置をとって構える。▽広げるように作り設ける。「宴を張る」◇『古事記』中・歌謡「嶋羂（しぎわな）波留（ハル）」▽（将棋の駒を）ある場所に打つ。▽博打（ばくち）で、金銭などを賭（か）ける。また、ある箇所、ある物に賭ける。◇「さあはったはった」▽何をするかと見守る。また、捕えようとして、来そうな所を見張る。特に、色恋の相手としてねらう。◇『源氏物語』真木柱「いとさがなげにこにらみてはり居たれば」▽娼妓が客をひくために店先に並ぶ。▽ある地位にしっかりと身を置く。◇「横綱を張る」

▼張る状態になる（自動詞）▽草木の芽がふくらむ。◇『万葉集』三四四三「うらも無くわが行く道に青柳の波里（ハリ）て立てればもの思ひ出つも」▽腹、乳などがふくらむ。▽筋肉が、固くなったりはれたりする。◇「肩が張る」▽たるみなくひき渡される。◇「糸が張る」▽つき出てかどができる。かくばる。◇「顎骨が張る」▽一面におおうように広がる。また、長くのびひろがる。◇「根が張る」◇「氷がはる」▽強く盛んになる。目立って現われる。◇「欲が張る」▽気持が引き締まる。◇「気がはる」▽他に負けまいとして対抗する。競争する。張り合う。

はるか

はるか（遥か）［haruka］←［faruka］

○「か［ka］」は「住みか」、「ありか」と同じく，状態や場所を意味する。おおっていたものがなくなり広々とはれた状態。

※語根［far］は「はる（晴る）」「はら（原）」などの語根［far］と同源。

※タミル語＜para＞由来。

◆あいだに遮るものがまったく無く、そのままずっとかなたの果てまで見通せること。またその様。空間的にも、時間的にも用いる。

▼空間について。◇『古今集』一四二「おとは山けさこえくれば郭公こずゑはるかに今ぞなくなる」◇『伊勢物語』一〇二「京にもあらず、はるかなる山里に住みけり」◇『滑稽本・浮世風呂』三「はるか見ゆるが津の島灘よ」

▼時間について。◇『枕草子』一〇七「ゆくすゑはるかなるもの、…産まれたるちごの大人になるほど」

▼心理的にも用いる。この場合は基本的に心が隔たっていることを表す。

心理的にいちじるしく隔たっているさま。差違のはなはだしいさま。近づきがたく隔たっているさま。奥行のあるさま。深遠。縁遠いさま。また、あえて遠ざけるさま。自分に関係のないものと思うさま。程度がはなはだしいさま。

▽及びもつかないかけはなれた存在であるさま。◇『大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点』「況や仏教の幽（ハルカニ）微（くは）しきをば」◇『源氏物語』明石「世にはかかる人もおはしけりと見たてまつりて，身のほど知られて、いとはるかにぞ思えきこえる」◇『今昔物語』四・二「味はひ遥に変じて悪（あしき）也」◇『講談・風流志道軒伝四「其大さ五岳にもはるかまさり」』

▽気持ちが向かないさま。◇『源氏物語』桐壺「大床子の御膳（もの）などは、いとはるかに思し召したれば」

▽よそよそしいさま。◇『源氏物語』蛍「いとはるかにもてなし給ふうれ（愁）はしさをいみじく恨み聞こえたまふ」

ひ（日）

ひ（日）[hi] ← [fi]

○太陽そのもの。また、太陽の光によって明るい間。

※[firu]（昼）はタミル語＜ vel ＞に起源。

◆太陽。太陽があがっている間。

※「ひ（日）」、「ひ（霊）」の [i] と「ひ（火）」の [i] は古代にあってはいわゆる甲類、「ひ（火）」は乙類で音が異なる。「ひ（火）」は「ひ（日）」を根拠とするがしかし同じことではないとしてとらえられていた。日が地上に降り、明るく照らす「ひ（火）」となるととらえていた。

▼太陽。◇『古事記』上・歌謡「青山に比（ヒ）が隠らばぬばたまの夜は出でなむ」◇日に焼ける、日があたる。◇『万葉集』一九九五「六月の地さへ割けて照る日にも」

▽太陽が東に出てから西に沈むまでの間。ひるま。ひる。日中。◇日が長くなる。◇『古事記』中・歌謡「夜には九夜比（ヒ）には十日を」◇『万葉集』一九九五「夜はも夜のことごと、昼はも日のことごと」

▽時間の単位としての一日◇日に何度も思い出す◇雨の日のこと。◇『土左日記』「日しきりにとかくしつつ、ののしるうちに夜ふけぬ」

▽時の流れの中にある時点、時期を、単位としての一日になぞらえていう。時。折。一時期。時代。◇若き日の彼女◇『万葉集』二四三「白雲も三船の山に絶ゆる日（ひ）あらめや」◇『万葉集』九七三「帰りこむ日相飲まん酒（き）そ」

▽一定の日。日限。また、日時。日数。ひかず。◇日を限る。◇『竹取物語』「日を定て、御かりに出たまうて」◇日が経つ、日を重ねる◇『万葉集』四一二二「雨零らず日の重なれば」

ひ（霊）

ひ（霊）[fi]

○この世に生をもたらす神秘的で根源的な力。ものにやどりものを生みだし、ありとしあらゆるものを生成する不思議の力。

※タミル語＜ pe ＞に起源。

◆いのちの根源的なちから。いのちの根拠。

※元来「ひ（日）」とは別の言葉であった。しかし古事記の時代、すでに「ひ（霊）」を「日」で表しており、早い時期から「ひ（霊）」は太陽の生命力、太陽神の信仰の根源と考えられてきた。

◇『日本書紀』神代「皇産霊、これをば美武須毘（みむすひ）という」◇『古事記』上「八十禍津日神、次に大禍津日神」

ひ（火）

ひ（火）[fi] ← [fo]

○古形は「ほ」。ものが燃え赤く熱した炎。

※[i] は日（日）の [i] とは別語。しかしまた、一方が他方の根拠ととらえられる関係にあり、太陽（日）が地上の火の根拠と考えられていた。

▼ものが燃え、また燃やすもの。◇『古事記』中・歌謡「さねさし相模の小野に燃ゆる肥（ヒ）の火中（ほなか）に立ちて問ひし君はも」◇『万葉集』三七二四「君が行く道の長路（ながて）を繰りたたね焼きほろぼさむ天の火もがも」◇『枕草子』一「いと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし」◇『今昔物語』二九・一二「近き所に火の出来たりければ」

▽明かり。ともしび。のろし。◇『万葉集』三六六九「旅にあれど夜は火（ひ）ともし居るわれを」◇『平家物語』二「天下に兵

革おこる時、所々に火をあげ」◇『伊勢物語』三九「この蛍のともす火にや（女の顔が）見ゆらむ」

▽比喩して、はげしく起こりたつ感情。おこりたかぶる気持。◇全員火となって戦うぞ。◇『万葉集』四〇一一「言ふすべのたどきを知らに、心には火さへ燃えつつ思ひ恋ひ」

ひと

ひと（人）[hito] ← [fito]

○「ひと [hito]」の「ひ [fi]」は「ひ（霊）[fi]」の [fi] とおなじ。「と [to]」は「と（処）」、つまり「そと（外）[soto]」の [to] と同じく場所を意味する。「ひと」はいのちの根拠である「ひ（霊）」がとどまるところ。これが日本語が人間をつかんだ原初の形である。

◆　この世界を生成するいのちの根拠がこの世界に現れるあり方。それが人である。近代にいたり，労働し言語をもつ生命として人が「人間」として再発見された。そして今日、近代の人間そのものが問われている。

人が生きてはたらくことは、ものとひととのことわりあいそのものであり、世界との語らいである。人がこの世界で一定のあいだ生きること自体、ことわりである。いのちあるものとしての人は世界からものを受けとり生きる。それがはたらくということである。直接のもののやりとり、つまり直接生産のはたらきこそ、いのちの根元的なはたらきであり、その場でこそもっともいのちが響きあい輝く。人と人はことをわりあい力をあわせてはたらく。つまり、人は語らい協同してはたらく、つまり協働することで人になる。

▼動物に対するものとしての人。◇『古事記』「一つ松比登（ヒト）にありせば太刀佩けましを衣きせましを」◇『万葉集』八九二「わくらばに人とはあるを、人並みに吾も作るを」◇『紫式部日記』「人はなほこころばへこそかたきものなめれなど」◇『枕草子』「鸚鵡（あうむ）いとあはれなり、人のいふらんことをまねぶらんよ」

▼一人前の人格をもつものとしての「ひと」。▽具体的な人を表す場合。◇『其面影』二葉亭四迷「人に由って大違ひ！　全然別の人のやうに成るンですもの」◇『徒然草』八十「人ごとに我身にうとき事をのみぞ好める」

▽抽象的に人というもの一般を表す場合。◇人の意見をしっかりと聞け。◇『万葉集』八九二「あれをおきて人はあらじと誇ろへど」◇『源氏物語』夕顔「下が下と、人の思すてしすまひなれど」◇『徒然草』一四二「いかがして人を恵むべきとならば」◇「人となり」◇「人にすぐれた腕前」◇『ある日の対話』島崎藤村「あんな美しいものを作曲するには、人を得なくては」

▽人間の品格。人柄。人品など人としての内容そのものを意味する。◇『源氏物語』帚木「人もたちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく」◇「人がよい」「人が悪い」「人でなし」◇『枕草子』一一九「烏帽子のさまなどぞ、少し人わろき」◇『枕草子』二八「おほかた、人の家のをとこ主ならでは」◇『多情多恨』尾崎紅葉「君は然云ふ不実な人物（ヒト）とは思はんだった」

▼人を一般的に示す。漠然と示す◇『伊勢物語』四八「うまのはなむけせんとて人を待ちけるに」◇『古今集』四〇七「わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人にはつげよあまの釣舟」◇『万葉集』五六二「暇なく人の眉根を徒に掻かしめつつも逢はぬ妹かも」◇『源氏物語』薄雲「いたづらなる野辺の虫をも棲ませて、人に御覧ぜさせむと思ひたまふるを」◇「うちの人」、「人を使う」◇

『平凡』二葉亭四迷「人を入れて別話を持出したから」

※　「ひと」は資源ではない。

※「いのち」は近代資本主義のなかで再発見される。ものを生産し価値を生み出す労働の源泉としての「いのち」である。資本家の側からいえば「殺さず、生かさず」の内容としての「いのち」である。そして「ひと」もまた再発見される。それが、生産活動と資源としての「ひと」である。

今日、日本では「人的資源」という言葉が用いられる。中央教育審議会は一九七〇年代「人的資源の開発」を言いはじめ、それが今日に続いている。「人的資源」とは生産活動に必要な労働力ということである。人を人として育てる教育から、人を資源として使えるようにする教育への転換がはかられてきた。教育を生産活動の一部とする考え方が表面化する。

もとより近代の学校制度は，産業技術を習得した人の育成を目的にしている。その時代の文明とそれを支える技術を習得することは必要である。人が何らかの生産につながることは、人の存在条件そのものである。だから仕事を求める人すべてに仕事を保障する。それは人の尊厳を尊重するということだ。

「人的資源」という考え方がいきわたることで、この関係は逆転させられ、正面から人間は「資源」であるという主張が行われはじめた。

しかし、人間は資源ではない。人そのものとして、まじめに働き、ものを大切にし、隣人同僚、生きとし生きるもの、たがいに助けあって生きてゆく。それが里のことわりの教える人のあり方である。経済は人間にとって目的ではない。あくまで方法である。

現実にも、経済を第一とする世のあり方に対し、協働の力で人を第一とする世を求める動きは、ますます深く広がっている。経済原理から人間原理へ、世界はいま大きな転換期の黎明期にある。

ひらく

【ひらく(開く)】[hiraku]←[firaku]

■「ひろ(広)あく(明)」が語源。

▼合わせ目を広げてものの中を明るくすること。

▽閉じふさがったものを押し広げる。まとまっているものをほぐして広げる。◇あけひろげる。開放する。戸をあける。窓を開く。◇『万葉集』一六七「天の原岩戸をひらき」◇『万葉集』四四六五「ひさかたの天の戸比良伎(ヒラキ)」

▽閉ざされた場所、建物などを人がはいれる状態にする。◇広く門戸を開く。◇開かれた世界。

▽(「心を開く」「胸襟を開く」などの形で)自分の殻を解き放って、隠すところなくする。

▽(「愁眉を開く」の形で)悲しみや心配がなくなる。

▽(「披」「展」とも)たたんであるもの、くっついているものなどを広げる。◇包みを開く。

▽文書、書籍などを見るために広げる。◇『淨瑠璃』吉野忠信-二「判官文をひらいて御覧ずるに」

○魚の腹または背を切って広げる。

▽「割る」「砕く」などの意で用いる忌み詞。◇鏡開き。

▽数学で、開平・開立をする。累乗根を求める。一般に、n乗根を求めることをn乗に開くといい、平方根を求めることを平方に開く、立方根を求めることを立方に開くという。

▼物事を新たに興す。創設する。また、物事を良い方に展開させる。

▽(「拓」とも)未開拓の場所、土地などに手を加えて整える。◇荒地を拓く。◇『大唐西域記』巻十二(平安中期点)「谷を奠(ヒライ)て或は堂宇を建たり」

▽新しい流儀、学説などをたてる。◇一派を開く。
▽事柄を開始する。
▽事業、商売、会合などを始める。起こす。◇『滑稽本』浮世風呂‐前「天明（よあけ）ていまだ店を開（ヒラ）かず」
▽もよおす。開催する。◇祝宴を開く。◇『海に生くる人々』（葉山嘉樹）「戦争はすぐ開かれるか、後で開かれるか」
▽繁栄、幸福、幸運などを求めて、その状態になるようにする。◇『大鏡』六「門をひらき、栄花をひらかせ給へば」
▼（「啓」とも）事柄を明らかにする。解き明かす。疑念などを晴らす。弁明する。◇『守護国界主陀羅尼経』平安中期点三「斉しく疑ひを啓（ヒラカ）しめたまふ」
▽無知蒙昧（もうまい）を教えただす。◇蒙を啓く。
▽真理、道理などを明らかにする。また、その奥義や悟りの域に到達する。◇悟りを開く。◇『太平記』一「玄を談し理を折（ヒラク）」
▼ものが合わせ目を広げて明るみに出ること。
▽閉じふさがったものが広がりあく。◇『松浦宮』二四「ひらけるかどよりうちいる道もさりあへず」
▽花などがほころびる。開花する。◇蕾が開く。◇『浮世草子』好色一代女一「開（ヒラ）ける梅暦に春を覚え」
▽物事が良い方向にゆく。繁栄したり幸運な状態になったりする。◇『浄瑠璃・源頼家源実朝鎌倉三代記』七「開（ヒラ）く御運が定ならば」
▽（敵の攻撃などに対して）身を引いて構える。また、身をかわす。◇『太平記』三二「件の鉞（まさかり）を以て開き略思様に打ける処を」
▽宴会、会合などが終わって帰る。また、解散する。◇お開きにする。◇『洒落本』色深娑睡夢下「目出たふ笑ふて皈（ヒラキ）やせふ」
▽ものとものの間に隔たりができる。まる距離が隔たる。◇一〇メートル開いてゴールした。
▽差がつく。格が違う。◇得点は大きく開いた。
▽値段に違いが出る。値が離れる。

ふゆ（冬）

ふゆ（冬）［huyu］←［fuyu］
〇ふゆはうちにこもり、いのちをこめ、はるにそなえる季節である。
◆「ふゆ」は、生命が内にこもり、新たな「ちから」を得て、「はる」に開花するために、なくてはならない時期。語源的には諸説があるが、「ふゆ」は「殖（ふ）ゆ［fuyu］」と同じ言葉で、「fuyu」は［faya］［fae］、つまり「はえる（生える）」に由来する、と考えられる。新たな生命力がふえる時期である。
四季の一つ。旧暦では一〇月から一二月、新暦では一二月から翌年の二月までをいう。天文学的には冬至から春分まで、二十四節気では立冬から立春までをいう。四季のうちで最も寒い。
◇『万葉集』四四八八「み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし」◇『源氏物語』夕顔「今日ぞ冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて」

ふる（振）

ふる（震る、振る）［huru］←［furu］

○大地や海は震えることで大きな力、霊力を発現するように、祭具の鈴、袖、領巾（ひれ）等をふることで、そのものの力を発現させることが出来る。

◆ものをゆり動かしていのちを目ざめさせること。物（もの）が命（いのち）の力（ちから）で生き生きと小きざみに動くこと。

▼生き生きと動く。◇『日本書紀』推古「地（ない）動（ふり）て舎屋（やかず）悉くに破（こぼ）たれぬ」◇『万葉集』二七三六「風をいたみ甚（いた）ふる波の間無くわがおもふ君は相思ふらむか」

▼ものをゆり動かしていのちを目ざめさせること。◇『日本書紀』天武十四年「是の日天皇のおほみ為に招魂（みたまふり）しき」◇『万葉集』四七八「ますらをの心ふりおこし剣太刀腰にとりはき」

▽遷座する。神霊をうつす。◇『大鏡』五「大和国三笠山にふり奉りて、春日明神と名づけ奉りて」

▽みこしを勢いよくかつぎ動かす。神輿・神宝などを荒々しくかつぐ。◇『平家』二「今度神輿内裏へ振たてまつる衆徒の張本をめされけり」

▼ものの一端を動かし、動きを他の一端に及ぼす。◇『日本書紀』欽明二三年七月・歌謡「領巾（ひれ）甫羅（フラ）す見ゆ」

▽全体を、ゆり動かす。前後または左右に動かす。まき散らす。配り当てる。◇「首を縦に振る、手を振る。◇『蜻蛉物語』中「あなかまと、ただ手をかき、面をふり」◇さいころを振る、塩をふる。◇役を振る。◇ルビを振る。

▽嫌って相手にしないようにする。すげなくする。特に男女の間で、冷淡にする。失う。捨てる。◇振られる。◇『枕草子』八六「いかで、さつれなくうちふりてありしならん」◇社長の椅子を棒に振る。

―【ふり（振・風）[huri]】「ふる」の不変部分［hur］に［i］がついて、行為の様子を意味する。

▼動きの様子、人のふるまい。挙動。しぐさ。身ぶり。また、様子。姿。風（ふう）。なりふり。それらしくよそおった様子。◇人のふり見て我がふり直せ。◇『後鳥羽院御口伝』「大僧正は、おほやう西行がふりなり」◇知らないふりをする。

―【ふるえる（震える）】「ふる（震る）」の口語。◇ガラス窓がふるえる。◇『めぐりあひ』二葉亭四迷訳 ¿「落ちた木枝にかき乱されて水の波動（フルヘ）るやうに」◇怒りにふるえる。◇『人情本・春色梅児誉美』「ぶるぶると、ふるへる娘の手をとれば」

ほ（穂）

ほ（穂、秀）[ho] ← [fo]

○稲の花序。

※タミル語＜ pu ＞に起源。

◆形または質において、他から抜きん出て優れており、人の目に立つもの。

▼高くひいでているもの。形が他のものに比べて高くとび出していて目につくようなものをいうことも、質がすぐれたものをいうこともある。◇「岩ほ」「垣ほ」「ほ倉」「ほつ枝」◇「ほつ鷹」「ほつ手」「ほつ真国」◇穂高連峰、高千穂峰◇『古事記』中・歌謡「国の富（ホ）も見ゆ」◇『万葉集』三五五〇「おして否（いな）と稲は舂（つ）かねど波のほのいたぶらしもよ昨夜（きそ）独り寝て」◇『万葉集』四〇一一「汝が恋ふるその秀つ鷹は」

▽はっきり目立つさま。◇『万葉集』七九「栲（たえ）のほに夜の霜降り」◇『万葉集』三二六「見渡せば明石の浦に燭（とも）

す火のほにそ出でぬる妹に恋ふらく」◇『源氏物語』宿木「ほにいでぬもの思ふらししのすすき」

▼イネ科植物の穂。稲穂◇『万葉集』八八「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いづへの方にわが恋ひ止まむ」◇『枕草子』二二七「ほにいでたる田を、人いとおほく見さわぐは、稲かるなりけり」

▽槍・筆などとがっているものの先の部分。尖端。

ほど

ほど（程）[hodo] ← [fodo] ← [foto]

○するとき（時）の範囲。するところ（所）の範囲。

◆（上代は「ほと」）何ごとかをなすときに、そのことの段階を、ある幅を持った範囲として示す語。さらに、何ごとかの範囲を示す用法に広がった。

※何らかの動作や展開など動きのあることについての範囲。「ころ（頃）」は単にあるときの前後の範囲を示す。

※タミル語＜ potu ＞由来。

▼時間的な程度を表す。▽動作がなされる間にすぎて行く時間。◇『万葉集』四三一三「青波に袖さへぬれて漕ぐ舟のかし振る保刀（ホト）にさ夜ふけなむか」

▽ある期間。時分。ころ。◇『万葉集』一七四〇「家ゆ出でて三歳（みとせ）の間に　垣も無く　家滅せめやと　この箱を開きてば」◇『竹取物語』「月の程に成りぬれば、猶、時々はうちなげきなどす」◇『竹取物語』「長き契りのなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍る也」◇『伊勢物語』六〇「宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自」◇『伊勢物語』一二〇「昔、をとこ、〈略〉人の御もとに忍びてもの聞えて、のちほどへて」

▼空間的な程度を表す。▽大体の距離。道のり。◇『古今集』三七二「わかれてはほどをへだつとおもへばや」

▽いたる所。途中。◇『源氏物語』松風「人に見咎められじの心もあれば、道のほども軽らかに（質素な装いに）しなしたり」

▽ある空間に展開している有様、状態。◇『源氏物語』幻「梅の花の、わづかにけしきばみはじめて、雪にもてはやされたるほど、をかしきを」

▼人のことについての程度を表す。▽社会的、または個人的な関係の程度。身分。分際。間柄。◇「身の程知らず」◇『土佐日記』「このことば、なにとはなけれども、ものいふやうにぞきこえたる。ひとのほどにあはねば、とがむるなり」

▽年齢。成長の度合。▽「年の程は四十くらい」◇『源氏物語』絵合「ほどよりは、いみじうされ、おとなび給へり」

▽言動、性格、心情などの程度、段階。◇『山家集』下「思ひあまり言ひ出でてこそ池水の深き心のほどは知られめ」

▽有様、様子、調子など、人のことについての程度、段階。◇「御都合の程お知らせ下さい」◇「実力の程は疑問だ」◇『源氏物語』乙女「暗（くら）ければこまかには見えねど、ほどの、いとよく思ひいでらるるさまに」

▼〔副助〕（助詞化したもの）名詞、または活用語の連体形を受ける。▽おおよその範囲、程度を表す。くらい。◇「駅まで一キロほどある」◇「その場にいられないほど恥ずかしい」◇『徒然草』三一「この雪いかが見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人」

ま行

ま（真）

ま（真）［ma］

○揃っていて完全であること。最も価値あるものであること。熟成して別の詞「片（カタ）」の対語となった。それぞれの「片（カタ）」がそろって「ま（真）」である。二つが揃う場としての「ところ」において魂（たま）が生き、命が発動する。

※タミル語〈may〉に起源。タミル語では「真理、実在、魂、意識」の意。

◆ま（真）は「二つで完全」を意味していた。この「二つ」は一と一とが両側から寄てきてつくりあげる合一としての「二」である。二つそろってま（真）であるがその「ま（真）」を構成するひとつひとつが「ま」の対語としての「片」である。「真」はその内側に二つの片方を含んでいる。接頭語であらゆる種類の語の上につき、真実である、欠けるところがない、正確であるなどの意味を表す。また、ほめことばとしても用いる。「そろう」ことは「そろい踏み、一対」などのように価値あることとされる。西洋の一般的な考え方では、完全は「一」である。日本語においては、二つが揃うことで完全であるとする。

▼揃っている、本格的である、まじめであるなどの意を添える。◇ま心、ま人間、ま袖、ま旅、ま弓、ま木、ま熊野。

※「ま心」とは、別な「ま心」があるということではなく、その人の心の全体をそのものや相手にかけている状態を意味する。

◇「まに受ける」◇『万葉集』四三九八「ま袖持ち涙をのごひ」◇『万葉集』五三二「うち日さす宮に行く子をま悲しみ留むれば苦し」◇『万葉集』四三八八「旅と言（へ）どま旅になりぬ」◇『万葉集』四五六七「置きて行かば妹はま悲し」◇『古今集』七一三「誰（た）がまことをか我はたのまむ」◇『源氏物語』若菜下「女御のおほんためのまごころなるあまりぞかし」

▽純粋にそれだけで、まじりもののない、全くその状態であるなどの意を添える。◇「ま白」「ま青」「ま新しい」「ま水」「ま潮」「ま四角」◇「ま東」「ま向い」「ま上」

※「ま白」というのは、白の属性がこの上なく完全にそろった白、ということである。◇『万葉集』五二「とこしへにあらめ御井（みゐ）のま清水」◇『万葉集』三一八「ま白にそ富士の高嶺に雪はふりける」

▽動植物の名に付けて、その種の中での標準的なものであることを意味する。◇「ま竹」「まいわし」「ま鴨」

▽価値があるの意を込めて、ほめことばとして用いる。◇「ま玉」「ま杭（ぐい）」「ま麻（そ）」「ま葛（くず）」◇『万葉集』四三四二「真木柱ほめて造れる殿のごと」◇『万葉集』九七「信濃のま弓引かずして」

▽正確である。◇『万葉集』一三九三「ま直（なお）にしあらば何かなげかむ」

▽二つそろっている。◇『万葉集』三六二七「大船にま梶繁（しじ）ぬき」◇『万葉集』四一八七「ま櫂かけい漕ぎめぐれば」

ま（間）

ま（間）［ma］

○同じもの一と一の二つによって定義される場、それが「ま」である。一対になった同質のものとものの「隔たり」そのものを意味する。したがって同じものが動いてできる始めと終わりの場を「ま」という。

◆「ま（間）」は同質なものの隔たりである。これに対して、「あいだ」は一定の関係にある二つのものが作り出す隔たりである。◇「長い間（あいだ）ご無沙汰していました」◇「間（ま）を見計らって話しかける」

※「ま（間）」はたいへん古いことばであり、二つのものにはさまれた空間、場に意味を見出すことは、じつに長い時をへて形成されたと考えられる。

▼おなじものとものとの「間」は基本的にいわゆる空間的な「間」である。◇『万葉集』一一九四「海人（あま）のともし火浪の間（ま）ゆ見ゆ」◇『宇津保物語』吹上上「ま一つに臼四つ立てたり」

▽建物の柱と柱の間、この間隔に面した建物の部分を含めてもいうようになった。部屋などの一区切り。古代の家屋は、部屋としての独立した構造を持たないことが多いので、几帳、障子、襖などで区切られた一区画をさしていう。部屋がそれぞれ独立して作られるようになると、主として部屋をさしていう。◇居間、床の間。

▼何かのことがすぐに起こるまでの時間、あるいはまだ起こらない限られた時間もいう。◇「開演まで間がある」◇『万葉集』八〇四「いつの麻（マ）か霜の降りけむ」◇「鬼のいぬ間の洗濯」◇『万葉集』七〇九「月待ちていませ我が夫子（せこ）その間（ま）にも見む」◇「間（ま）無し」◇「間をうかがう」

▽邦楽・舞踊・演劇で、音と音、動作と動作の間の休止の時間的長短をいう。転じて、拍節・リズム・テンポと同意に用いる。間は空虚なのではなく、長短に関わらず次の出現をはらむな準備であり、関係が象徴的に表される時である。◇「間のとり方」「間合い」

▼単位としての間（ま）。柱と柱の間を単位として数える時に用いる。実際の長さは一定しないが、六尺から一〇尺ぐらいをさす。室町時代には七尺ないし六・五尺であった。さらに、建物や部屋の広さをいうのに用いる。一間は、一間に一間の広さをいい、五間といえば二間に二間半の広さをいう。また、部屋の数を数えるのに用いる。「三間の家」

まこと

まこと［makoto］

○「ま（真）［ma］」な「こと［koto］」。

◆「思っていること」がそのまま現れることが「ま（真）―こと」である。つまり、内心と実際の行為との間にうそや偽りがないこと、これが根本義である。現代では漢字として「誠」を当てるが、その意味は「ま・こと（真・言、真・事）」である。

▼真実。本当。◇『万葉集』三三八四東歌　「葛飾の真間の手児奈を麻許登（マコト）かもわれに寄すとふ真間の手児奈を」

▼ここから内面が豊かにあってしかもそれが外にあふれ出ていることも表すようになる。誠実。◇『古今集』七一三「いつはりと思ふものから今さらにたが　まことをか　我はたのまむ」◇誠をつくす

▼表現の真実味。作者の純粋で純朴な真情。◇『古今集』仮名序「僧正遍昭は、歌のさまはえたれども、まことすくなし」（いろいろ表現はするが、いったい自分の中味は何があるのか、ということと、たとえあっても表現されていない、ということと両方の意味）

▼〔副〕間違いなくその状態であることを強調する感嘆詞。じつに。本当に。実際。◇『万葉集』四三四八「母を別れて麻許等（マコト）われ旅のかりほに安く寝むかも」

まつる

まつる　[maturu]

○身を清め、酒食を供え、神の来臨を待ち、幸いを願う。

◆神仏・祖霊等に奉仕して慰撫・鎮魂したり感謝・祈願するための儀式。神をまつり、神の言葉（みこと　御言）をきき、それをおこなうことかが、政治であるとされた所から、「まつりごと」に「政」をあて、政治の意味へと展開した。

※タミル語＜ mat-u（動詞）、mat-ai（名詞）＞由来。

※「まつ（待つ）」と「まつる」は、平安時代の『名義抄』ではアクセントが違う。しかし、この時代には別の言葉とされ、アクセントで区別していたとしても、同根でないとは言えず、タミル語が熟成する過程で、「まつ」と根が同じとされた時間があったのではないか。

▼神にものを供え、願いがかなうように祈る。神に歌や踊りを奉納し、慰める。◇『万葉集』三二二七「夢に見せこそ　剣刀（つるぎたち）斎（いは）い祭れる　神にし坐（ま）せば」◇『古事記』中・歌謡「少名御神の|略|麻都理（マツリ）来（こ）し御酒ぞ」◇『万葉集』一三七七「木綿（ゆふ）懸けて祭（まつる）三諸の神さびて」

▼尊敬する人にさし上げる。「奉」をあてる。◇『万葉集』三八八〇「高杯（たかつき）に盛り　机に立てて　母に祭りや　愛づ児の刀自　父に祭りや　愛づ児の刀自」

▼記念・祝賀・宣伝などのために行う集団的行事。◇「港まつり」◇「大東京まつり」

【まつり】◇『万葉集』一七五一「名に負へる杜に　風祭せな」

【まつりごと】◇『綾部本初期古訓』「徳（いきほい）を布（し）き恵みを施して、政令（まつりごと）流（し）き行はる」◇『宇津保物語』国譲下「左大臣のおとど世中をまつりごち」

まなぶ

まなぶ（学ぶ）[manabu] ← [manebu]

○「まねぶ [manebu]」と同根。「まね（真似）[mane]」、「まねび（学び）」、などいずれも「な（名）[na]」を「ま（真）」、つまりその通りにすることが原義。

◆興味や関心のあることを真似て再現する。「名」は単なる「名前」ではなく、そのものの本質、である。信頼し尊敬する相手のすべてを、自らその通りにできるようにしようとすること。

※「ならう」は、繰り返し練習することで身につける、の意味。「真似」の動詞化で「まねぶ」の交替形。「まねぶ」が平安女流文学に多いのに対し、「まなぶ」は漢文訓読体や男性語として用いられることが多かった。活用は、上代から平安初期ごろまで上二段活用、その後、四段活用も行われたといわれるが、訓点関係では、後まで上二段活用が見られる。

「おしえる」は、教える側が相手をいとおしみ、自らが身につけていることを相手に渡そうとすることである。それに対して「まなぶ」は学ぶ相手を尊敬するがゆえに相手をまねようとするのである。実際の人と人の信頼と愛情が教え学ぶことの土台である。この言葉にはそのような意味が込められている。

▼まなぶ▽教えられたとおりにまねて修得すること。◇『名語記』五「人のしわざをまなぶる、まね」◇『観智院本三宝絵』下「文をまなふるに、さとりあらたに」

▽ここから学問すること、教訓を学ぶことに展開した。◇先人の失敗に学ぶ。◇『今昔物語』二・二五「仏道に入りて法を学びよ」◇『徒然草』八五「驥をまなぶは驥のたぐひ、舜をまなぶは

舜の徒也」◇『源氏物語』橋姫「年ごろまなびしり給へる事どもの深き心」

▼まねぶ▽興味や関心のあること、他の者の言ったことやその口調をそっくりまねて再現する。見たり聞いたりしたことを、そっくり人に語り伝える。◇『霊異記』上・一九（興福寺本訓釈）「音（こゑ）を訛（よこなま）りて效（マネビ）読む」◇『落窪物語』二「かかる事なまねび給ひそ。かたはなり」

▽学問や技芸などを、手本をまね、教えを受けて身につける。◇『東大寺諷誦文平安初期点』「善を見ては殷を学（マネば）むと念ひ」◇『源氏物語』乙女「ふみのざえをまねぶにも」◇『梁塵秘抄』二「戯れ遊びの中にしも、尖（さき）らにまねびん人をして」

み（身）

み（身）［mi］

○ものとことのともにある人ととらえた人間の全体。

◆命あるからだと、それにまつわるすべてのことを、ひとつにとらえた、人そのもの。生命、境遇など、世の中であり方のすべてをいう。

※「からだ」はものとしての肉体。生命の有無にかかわらない。

▼身体。肉体。▽人間、または他の動物のからだ。◇『万葉集』二六一九「朝影にわが身は成りぬ韓衣　裾の合はずて久しくなれば」◇『竹取物語』「おのが身はこの国の人にもあらず」

▽胴体◇『風土記』備前「寝たる蛇あり、身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の岸に臥せりき」

▽骨、皮に対して、人間や鳥、獣、魚、貝などの肉をいう。◇「白身」◇『万葉集』二七九七「住之江の浜に寄るとふうつせ貝実（貝の身とまことの実をかける）なき言以ちわれ恋ひめやも」

▼容器、外殻、外観などに対してなかみをなすもの。内容。実質。⇒実（み）▽刀剣の鞘（さや）の中におさまっている部分。刀身。◇「抜き身」

▽蓋（ふた）なる容器の物をいれる側。◇「蓋と身」◇『古今集』仮名序「文屋の康秀は、言葉はたくみにて、そのさま身におはず」

▼世にある人間。▽その人自身の有様、または位置。その人の立場。身の上。身のさま。◇「相手の身になって考える」◇「身に覚えのない罪」◇『万葉集』四五〇五「磯の浦に常に喚び来棲む鴛鴦（おしどり）の惜しき吾が身は君がまにまに」◇『伊勢物語』八四「身はいやしながら、母なん宮なりける」◇『太平記』二〇「朕不肖の身を以て、天下の太平を求む」◇『徒然草』一〇六「かくの如くの優婆夷などの身にて」

▽命あるからだ。生命。◇『源氏物語』浮舟「なほ、わがみを失ひてばや」◇『源氏物語』御法「残り少なしと、身をおぼしたる御心のうちには」

▼代名詞として。▽自称。中世、近世において男子がやや優越感をもって、自分をさしていう語。◇『虎明本狂言』末広がり「すゑひろがりは身が蔵にはないか」

▽対称。接頭語「お」「おん」を伴って、相手をさしていう語。◇「おんみ」

み（実）

み（実）

○実質のあるもの。

◆植物の果実。

※「み（身）」と同源との説もある。

▼果実。穀物の穂。◇『万葉集』三三六四東歌「足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを（成就したのに）逢わなくもあやし」
▼歌論、芸論で「花」と対比して用いられる。◇『役者論語』「所作事（舞踊）は狂言（歌舞伎）の花なり。地（セリフ劇）は狂言の実なり」
▼汁のなかに入れるもの。◇「汁の実」

みる

みる（見る、看る、視る、観る、診る）[miru]
○そのものとして定まる空間（[ma]）に「いる[iru]」ことを認識すること。「いる[iru]」ことそのものは見られてはじめて成立する。
※タミル語＜miri＞に起源。
◆目をむけて見ることによって世界を分節してつかみ、「もの」としてとらえ、ものが存在することを確認する。「聞く」のが「こと」であるのに対し、「見る」のはまず「もの」として存在を確認することであり、そのうえでそのもののことを考えることまで意味するように発展する。
※何かを認知するのは、対象を対象として確定することと、確定したものをつかむことの両方で成立する。「みる」はこの意味での認知することそのものである。
▼目にとめる。目でものの存在を知る。◇「見るも無残な敗北」◇『古事記』中・歌謡「かもがと我が美（ミ）し子ら」◇『万葉集』二〇「あかねさす紫野行きしめ野行き野守は見ずや君が袖振る」。
▽ながめる。望む。◇『古事記』下・歌謡「潮瀬の波折（なをり）を美礼（ミレ）ば」◇『万葉集』四七四「昔こそよそにも見しか吾が妹子が」
▼見て判断する。◇顔色をみる。足もとをみる。◇『万葉集』八三九「降る雪と人の美流（ミル）まで梅の花散る」。
▽占う。予知する。◇手相をみる◇『源氏』桐壺「そなたにてみれば、乱れうれふる事やあらむ」。
▽わかる。◇『弥勒上生経賛平安初期点』「聴といふは理を察（ミル）ぞ」
▽よく注意して調べる。観察する。◇「患者を診る」「味をみる」◇『竹取物語』「つばくらめをあまた殺してみるだにも腹になき物也」
▽人の気持や意志をためす。◇『平家物語』五「御辺の心をみんとて申などおもひ給か」
▼（ものの存在を確認せざるを得なくなるところから）何かのことに遭う。経験する。ある物事を身に受ける。◇馬鹿をみる。泣きをみる。◇『竹取物語』「かかるわびしき目を見ず」。
▽人と顔をあわせる。◇『万葉集』四一一六「月かさね美（ミ）ぬ日さまねみ」
▽男女の交わりをする。また、夫婦として暮らす。◇『竹取物語』「此女見では世にあるまじき心ちのしければ」。
▽世話をする。面倒をみる。◇両親（孫）をみる◇『落窪物語』四「北の方をこそはみ奉り仕うまつらめ」
▼補助動詞。経験することからどうしについてその動作を経験することを意味する。
▽（動詞の連用形、または、それに助詞「て」を添えた形に付いて）意図して…する。◇『三四郎』夏目漱石「一回りしようじゃないかと女を誘ってみた」◇食べてみる◇書き心地を調べるのに字を書いてみる◇『土左日記』「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり」
▽「…なら…」という条件を表すときは意図していなくても用

いる。◇目が覚めてみるといい天気だった。◇咲いてみると思ったほどきれいでもなかった。◇帰ってみればこの有様だ。

―【みえる（見える）】「みる（見）」の自発・受身・可能を表す。

▽目にはいる。目にうつる。◇『古事記』中・歌謡「百千足る家庭（やには）も美由（ミユ）国の秀（ほ）も美由（ミユ）」◇『古今集』一六九「秋来ぬと目にはさやかに見えねども」

▽他から見られる。他に見せる。◇『竹取物語』「おはしましぬと人には見え給ひて、三日ばかりありて漕ぎかへり給ぬ」

▽よく見ることがある。見なれる。見つかる。◇『竹取物語』「此国に見えぬ玉の枝なり」

▽現れる。人が来る。また、手紙が来る。◇お客様が見えました◇『蜻蛉物語』中「日暮るるほどに、文みえたり」

▽…と思われる。そう感じられる。◇とても小学生には見えない◇一杯飲んでいると見えて◇『竹取物語』「人の物ともせぬ所にまどひありけども、何のしるしあるべくも見えず」

▽文字に書かれる。書物に載る。◇聖書に見える言葉◇『平家物語』一「梅檀は二葉よりかうばしとこそみえたれ」

むすぶ

むすぶ（結ぶ）［musubu］

○端と端をからませつなぐこと．

※タミル語＜muti＞由来。結ぶ。完全になる。なしとげられる。

◆分かれているものをつなぐこと。

※語源的に「むす（生す）」との関連は確定できないが、「むす（生す）」―「ひ（霊）」と意味が関連して、「むすぶ」ことで新たな魂を込めるとの意味に深まった。

▼紐のようなものの端と端をからみとめてつなぐ。▽紐や糸をつなぐ。かたくゆわえる。◇『万葉集』七四二「一重のみ妹がむすばむ帯をすら三重むすぶべくわが身はなりぬ」◇『万葉集』四三三四「児らが牟須敝（ムスベ）る紐解くなゆめ」

▽松の枝、草などの端をゆわえ合わす。魂を結び込めて生命の安全、多幸などを祈る。◇『万葉集』一四三「磐代のきしの松が枝むすびけむ人は帰りてまた見けむかも」◇『万葉集』四五〇一「松のさ枝をわれは牟須婆（ムスバ）な」

▽手紙などをたたんで結び文にする。◇『源氏物語』胡蝶「唐のはなだの紙のいとなつかしうしみふかうにほへるを、いとほそく小さくむすびたるあり」

▼手の指をからませたりして形を作る。

▽両手のひらを一つに組み合わせる。特に、その手で水をすくうのをいう。◇『万葉集』一一四二「命をし幸くよけむと石走る垂水の水をむすびて飲みつ」

▽仏教や陰陽道で手指でさまざまな形をつくる。「印を結ぶ」の形で用いられる。◇『古今著聞集』二・四九「定印を結て、居ながら終にけり」

▽両手で飯をおさえて、握り飯をつくる。◇おむすび◇『雑俳』軽口頓作「むすばるる・下卑で申さばにぎりめし」

▽指を折っててのひらを閉じる。また、そのようにして手と手をつなぐ。◇「むすんでひらいて」

▼交わりを緊密にする。堅く結束する。▽男女が再び会うまでの契りとして、相手の衣の紐や下紐をしっかりつなぐ。◇『万葉集』三七一七「旅にても喪なく早来とわぎもこ（吾妹子）がむすびしひもはなれにけるかも」

▽ものともの間に関係をつける。◇「縁を結ぶ」「契りを結ぶ」

▽同じ志の人が結束する。集結する。◇「条約を結ぶ」◇「同

盟を結ぶ」◇『万葉集』三七九七「死にも生きも同じ心と結（むすび）てし友やたがはむ我れもよりなむ」◇『平家物語』七「義仲行家以下党を結て数あり」

▽開いている口を合わせる。口などをしっかりと閉じる。◇「口を結んで語らない」

▽場所と場所を直接つなぐ。◇「東京と京都を結ぶ道路」

▽まとめて形にする。また、完成させたり、約束をつけたりする。

▼ある情況や感情を形づくる。夢として形づくる。◇『源氏物語』明石「草の枕は夢もむすばず」

▼花を結実させる。実らせる。◇「実を結ぶ」◇『大鏡』一「枝もしげりて、このみをもむすべや」

▼庵室などを作る。かまえる。◇『今鏡』四「草庵ひとつむすびて取らせられなんや」

▼しめくくりをつけて終わりとする。結末をつける。◇「文を結ぶ」◇『申楽談儀』序「皆面白しと見て、帯を解ける斗を似せて、むすび納むることを知らず」

▼（文法の係り結びで）上にある係助詞に呼応させた語形で文を終わらせる。

▼まとまって形を成す。固まる。露、霧や氷などが凝固、凝結する。むすぼおる。◇「露を結ぶ」◇『万葉集』一一一三「この小川霧そ結（むすべ）る」

むら

むら（村）[mura]

○「むら（群）」と同根。「さと」がいのちが籠りまた現われるところであるのに対して、「むら」は「群れ」て力をあわせて働くところを意味する。

◆協力しあい力をあわせて働くところ。村は住宅や田畑を含む。

▼人家のむらがっている区域。地形・水系などによって人の居住に適し、生活圏を形成している地域。またその集団。◇『大鏡』「又里の刀禰、村の行事いできて、火祭りやなにやと煩しくせめしこと、いまはきこえず」◇「村はずれ」

▽日本の自民党の派閥を「村」という。「里」とは言わない。◇「村八分」

も〔辞〕

も[mo]

○「甲も乙」は、甲が、甲の他のものと同様に、その固有な性質（の一つ）として，乙をもっていることを示す。「他の者と同様に」を強調することもある。

※タミル語＜ umy ＞由来。これ一つとは確定できない、の意。

◆「甲も乙」は甲が既知であってしかも他のものと同じく、それが乙という内容をもっていることを示す。「他にもある」ことを強調する。「甲は乙」は甲が既知であって、それを話者が話しの主題として持ちだし、他とは異なって，それこそが乙という内容をもっていることを示す。他の者と同じであるということは、他と区別できないということであり、不確実であることを示す。不確実であるがゆえに、それは、推量、未定、願望、（特定することの）否定の意味を有する。

▼甲が体言で並列、列挙、不確実、非限定などを叙述する。

▽甲を不確実、非限定、仮定、未定のものとして提示し、何においてそうであるのかを叙述する。◇『源氏物語』桐壺「頬つきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、とひて見えたまふも、似げ

なからずなむ」◇『源氏物語』桐壺「人のそしりをもえはばからせ給はず」

▽これもあれもとと不確実なものを列挙、並列する意を表す。◇『古事記』上・歌謡「太刀が緒も（母）いまだ解かずて襲（おすひ）をも（母）いまだ解かねば」◇『枕草子』一四一「この草子を、人の見るべきものと思はざりしかば、あやしきことも、にくき事も、ただおもふことを書かむと思ひしなり」◇『宇治拾遺物語』一〇九「このことを聞たる人々、わらふもあり、にくむも有けるに、『よき日取りて、仏供養し奉らん』とて」

▽一つを挙げて、該当する他の類例を暗示する意を表す。また、他の同種のものを類推させる意を表す。◇『万葉集』八「熟田津（にきたつ）に船乗りせむと月待てば潮も（毛）かなひぬ今は漕ぎ出でな」◇『古今集』二四「ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」

▽一つの事柄の上に、同種の事柄をもう一つ加えるという添加の意を表す。◇『源氏物語』末摘花「絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。我も描き添へたまふ」◇『宇治拾遺物語』一四「源大納言定房といひける人のもとに、小藤太と云侍ありけり。やがて女にあひ具してぞありける。むすめも女にて仕れけり」

▽少なくとも，という願望を表す。◇『万葉集』一〇七七「ぬばたまの夜渡る月をとどめむに西の山辺に関も（毛）あらぬかも」◇『徒然草』一三七「椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ」

▼感動、詠嘆を表す。

▽副詞または形容詞の連用形に付き、感動・詠嘆の意を表す。◇『万葉集』二四八「隼の薩摩の迫門（せと）を雲居なす遠くも（毛）われは今日見つるかも」◇『源氏物語』帚木「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る」

▽主題を詠嘆的に提示する。◇『源氏物語』桐壺「草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり」

願望の対象を感動的に提示する。◇『万葉集』八〇六「竜の馬母（モ）今も得てしか」◇『徒然草』一三七「心あらむ友もがな」◇「その夜もふけた頃」

▽間投助詞に上接して軽い詠嘆を表す。◇『万葉集』一「籠も（毛）よ　み籠持ち　ふくしも（毛）よ　みぶくし持ち」

▽形容詞の連用形・副詞・数詞・接続助詞「て」などを受け、また複合動詞の中間に介入して詠嘆的強調を表す。◇『古事記』下・歌謡「梯立の倉梯山は嶮しけど妹と登れば嶮しくも（母）あらず」◇『源氏物語』乙女「いとおよずけてもうらみ侍るなりな」◇「引きもきらぬ参拝者」◇「十年も前のこと」

▽文末用法。文末の終止形（文中に係助詞があるときはそれに応ずる活用形）およびク語法を受けて詠嘆を表す。◇『古事記』中・歌謡「はしけやし　我家（わぎへ）の方よ　雲居立ち来も（母）」

▼活用語の連体形を受け、また「ても」の形で確定の逆態接続を表現する。◇『源氏物語』橋姫「心ひとつにいとど物思はしさ添ひて内裏へ参らむと思しつるも出で立たれず」

もうす

もうす（申す）［mousu］→［mawosu］

○力あるものに、実情を打ち明け，何かを頼むこと。

※上代は「まをす」。上代末ごろから、それの変化した「まうす」の形が現れた。

◆「言う」には本来言うことによって相手を支配しようとする意志が含まれている。したがって目上の者に「言う」のは礼を欠くとして、「言う」の謙譲語として言う相手を敬う意味を込めた「申す」が発達した。

さらにその意味を明確にするため「申し上げる」が発達した。ただ、現代では、謙譲の意味を持たず政治的な関係だけを反映する「報告する」などがよく使われるようになっている。

▼相手が、話者に対し支配力を持つが話者の側の実状を知らぬ場合に、実状をうちあけ報告する意味が強く、政治的立場をふまえて公式に言上する場合や改まって報告する場合に多く用いられた。◇『古事記』下・歌謡「山城の筒木の宮に物麻袁須（マヲス）」◇『万葉集』四二五六「古へに君の三代経て仕へけり吾が大主（おほぬし）は七世申（まをさ）ね」

▽神仏や朝廷など支配者に対し、何かのことを願っていることを知らす。申しあげる。所望申しあげる。◇『万葉集』四三七二「もろもろは幸（さけ）くと麻乎須（マヲス）帰り来までに」◇『平家集』九「いけずきを申さばやとは思へども」

▽話者が特定されず「世間で…と申しあげる」。◇『竹取物語』「又こと所にかぐや姫と申人ぞおはしますらん」

もと

もと（本、元、基、下、許、素）［moto］

○もののあるところ。

◆草や木の、大地に接してそれを支えるところ。ここから、ものがある根拠を意味する。人の根拠地、本拠、居所。ことの根拠、根本、原因。いまあるものの本来の在り方。さらに時間へと用法が拡大し、本来、以前、昔の意味に広がった。「すえ（末）」、「さき（先）」の対義語。

※タミル語＜mut al＞由来。

▼支えるところ。▽草木の根。株。ねもと。立っているものの下部。◇『日本書紀』大化五年三月・歌謡「模騰（モト）毎（ごと）に花は咲けども」◇『万葉集』四〇〇六「かき数ふ　二上山に神さびて　立てる栂の木　幹（もと）も枝も　同じ常磐（ときわ）に」◇『竹取物語』「もと光る竹なん一すぢありける」◇『伊勢物語』八二「その院の桜ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて」▽垣根や階段、柱、几帳などが地面や床に接するところ。◇『万葉集』二三一六「奈良山の峰なほ霧（きら）ふうべしこそ籬（まがき）の下の雪は消（け）ずけれ▽山のふもとや岩の下。◇『古事記』下・歌謡「葉広（はびろ）熊白檮（くまかし）母登（モト）にはい組竹生ひ」▽人の居所◇『竹取物語』「わうけいとふ人のもとに文を書きて」▽すぐそば。物の下。また、そのものの近く。◇「白日のもとにさらす」◇『万葉集』三八一七「かるうすは田廬（たぶせ）の毛等（モト）に　わが背子はにふぶに咲（え）みて立ちてます見ゆ」

▽語素として◇「国もと」「そこもと」「足もと」「手もと」「ねもと」「ひざもと」「枕もと」

▼ものの根拠。▽根元。根本。素地。みなもと。◇「口は禍いの元」◇「元をただせば」◇「…を元に推論する」◇『源氏物語』帚木「もとのしなたかく生まれながら」▽本来あるもの。◇『竹取物語』「かぐや姫もとのかたちに成りぬ」▽ここに至る以前。◇『古今集』七四七「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」▽原因。たね。◇「風邪がもとで寝込む」◇『夜の寝覚』二「こがす歎きのもととなりにけるも、かなしく思しつづくるに」▽利を生むもの。資本。資金。もとで。元金。原価。◇

「もとをとる」◇「もとも子もない」◇『日本霊異記』下・四「銭一倍にして、僅に本（もと）の銭を償ひ、未だ利の銭を償はず」

もとめる

もとめる［motomeru］←［motomu］

○思うものを手に入れよう［eru］と、もと（本・元）［moto］をめざして進むこと。

▼本（もと）になるものを得ようとして、それが得られる場所をさがす。尋ねさがす。尋ねさぐる。◇『万葉集』一一一〇「斎種（ゆたね）蒔く新墾の小田を求めむと足結出で濡れぬこの川の瀬に」◇『万葉集』四〇一四「さ山田の翁（をぢ）が其の日に母等米（モトメ）逢はずけむ」

▼ほしいと願う。請う。のぞむ。◇「助けを求める」◇『徒然草』二一七「利をもとめん人は」

▼欲しいものを探して手に入れる。また、自分のものにしようとさがす。◇「幸福を求める」◇『万葉集』八〇八「竜の馬を吾は求めむあおによし奈良の京に来む人の為に」◇『落窪物語』二「縄もとめ来て結ひなどして」

▼大切な人に会いたいと思い探す。◇『万葉集』二〇八「秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも」

もの

もの（物、者）［mono］

○宇宙空間としての「ま（間）［ma］」と大地としての「な（地）［na］」、つまり［mana］、これが世界である。この「まな」は「もの［mono］」からなる。「もの」があることで「まな」がある。

「もの」は「ところ［tokoro］」《場》としての「まな」を「つくる［tukuru］」。「ひと［hito］」は「もの」の「こと」を「かたる」が、「もの」そのものを変えることはできない。

ものは、ひとのちからでかえられない定めであり、きまりの根拠である。

※タミル語＜man＞に起源。タミル語は世の定めや決まりという意味である。それが縄文語と混成するなかで熟成した。

◆　宇宙空間としての「ま（間）」と、大地としての「な（地）」、つまり「まな」、これが世界である。この「まな」は「もの」からなる。「もの」があることで「まな」がある。

「ひと」は「もの」の「こと」を「かたる」が、「もの」そのものを変えることはできない。ものは、ひとのちからでかえられない定めであり、きまりの根拠である。

「もの」は変えることのできない定めであり、人の世の定めまですべてをつつむ。定め、きまりの意味のタミル語が、熟成し、意味が深まり、定めやきまりの根拠として、人が見ることができるすべてのものを「もの」という。さらに思いをかけるすべてのものを「もの」という。見たり思ったりするその視線にあるものが、「もの」である。

「もの」を「もの」としてとらえるのは、「見る」働き、あるいは「思う」働きである。そして見たもののことを言葉で切り取る、つまり考える。逆にこの認知作用が成立するものすべてが「もの」である。これが第一義である。

諸々のことが生起する土台にある「もの」は、人の力の外にあり人が変えることはできない。ここから既定の事実、避けがたいさだめ、さまざまの規範などを表す。しかしまた「もの」は人に対して無関係に存在するのではなく、逆に人との関係においてつかまれ、人をひきつけるとともに、ひきつけてはなさない力のあ

る存在である。これが第二義である。

「もの」は、物と心を切り離す二元論の「物」とは異なり、「思い」と切り離されない。「もの」はそのものへの「思い」を引き起こし、見る者のいのちに関わる力あるものとしてとらえられる。つまり「もの」は人に働きかける。もの自体が人が恐怖し畏怖する対象となる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

第一、「もの」は確かにある。見たり思ったりすることができるものが「もの」である。すべてものは人と係わり、人と係わる一切がものである。ものとは思いをよせる方にあるすべてのものをいう。「もの」を「もの」としてとらえるのは、まず「見る」働き、あるいは「思う」働きである。そして見たものを言葉に切り取り名づける。逆にこの認知の営みが成立するすべてのものが「もの」である。思うことによってものとして切り取られ名づけられてものが成立する。これがものである。

第二、ものはそれ自体で存在している。人がものに思いをかけ、もののことを考えるのはなぜ可能か。それはそこに、ものが確かにに存在しているからである。それがものである。そのものは、諸々のことが生起する土台にあり、人の力の外にあり、存在をなくすることはできない。ものはもの自身の力で動いている。であるがゆえに、人がものを思うのは、実はものにひきつけられてはじめて起こる。ものは人間をつかむ。ひきつけてはなさない力のある存在である。

第三、人もものである。人もまたもののちからで生きる。ものを思い、もののことを考え、ことの内容を聞きとる。それはものが人にはたらきかけることであり、人はものからのはたらきかけを受け、人生を変え、そしてものを動かす。人あってのもの、ものあっての人である。ものは人と無縁に存在するのではない。切実な働きかけと真剣な受けとめ、そして決断、こうして、人は無限に向上する。これが人生である。

※「もの」に対して「こと」は生きた動きである。「こと」が成立している「とき」から我にかえって人は「こと」が成立する前提として「もの」の存在に気づく。人間にとって「もの」は「とき」を超え「こと」によらず存在する。

▼何らかのものを表す。個体として分節して認識されるすべての存在をいう。ものと判定するのは認識であり、人間がものとして認識するのである。しかしそれが可能である根拠は人間の力を越えている。

◇「ものがなくなる、他人のもの」◇「ものに襲われる心地がした」◇「かれはほんとうにものの上手だ」◇「君はものを知らない」◇「かれはものをあまり言わない」◇『万葉集』八九二「いとのきて短きものの端切ると言へるが如く」◇『万葉集』二一八一「雁が音の寒き朝明の露ならし春日の山を黄葉（もみ）たすものは」◇『万葉集』三七六五「まそ鏡かけて偲へとまつり出す形見の物を人に示すな」

▼力を越えた存在。人がどうすることもできない不変・不動の原理や存在。

◇『万葉集』七九三「世の中は空しきものと知る時しいよゝますます悲しかりけり」◇『万葉集』三五七九「大船に妹乗るにあらませば羽ぐくみ持ちて行かましものを」◇『万葉集』四一〇九「紅は移ろふものそ椽（つるはみ）の馴れにし衣になほ若かめやも」

▽相撲の「物言いがつく」は、「異議を唱えることであり」、相撲の原理に照らして勝敗の判断に異議あるときになされる。「ある立場の人がお互いの関係のあり方として当然言わなければならない」言葉、原則的・原理的な言葉である。

▼詞の機能として、「言う」や「思う」の前に置かれることによっ

て、明確には言えないが意識の対象となる存在を指し示す。この「もの」がおかれることで「言う」や「思う」が概念としての「言う」や「思う」ではなく、具体的で現実的な行動であることが意味される。

◇『万葉集』巻十四・三五二八「水鳥の立たむ装ひに妹のらに物言はず来にて思ひかねつも」◇『万葉集』巻十六・三八五三「石麿に我物申す夏やせに良しといふものぞ鰻（むなぎ）とりめせ」◇『万葉集』巻三・三四一「賢しみと物いふよりは酒飲みて酔泣（ゑひなき）するしまさりたるらし」

▼人を表す。この場合人をものに見下す気持ちがこもっている。◇「あんな者のいうことなど信用できない」

▼構造のなかで用いられる。◇出がけに不意の客がきたものですから。女ですもの。いじめるんだもの。（これらが他律的な表現を取りながら、実際には強い断定の表現ととなるのは、人の力を越えた「もの」の働きとしてそうであること述べることによってである）。◇（接頭語の「もの」）ものおそろし、ものおもしろし、ものがなし。◇『万葉集』巻十・二一三七「朝（つと）に行く雁の鳴く音は我が如くもの思へかも声の悲しき」◇『万葉集』巻十五・三七八一「旅にしてもの思ふ時に霍公鳥（ほととぎす）もとな忽鳴きそ我が恋増さる」◇『源氏物語』明石「三昧堂ちかく、鐘の声、松風にひゞきあひて、物悲しう」

※「もの悲し」と「悲し」の違いこれは単に程度の違いということではない。『源氏物語』須磨「はつかりは恋しき人のつらなれや旅のそらとぶこゑのかなしき」（「悲し」は何が悲しいのかはっきりとしているときにそのものの属性として述べる。「もの悲し」はそのものによって引き起こされた自己の「思い」を述べる）

―【もの知り】「もの」の「ことわり」を知りうる人のことである。おおくのもののことを知っているだけではなく、「もの」の意味、本質、内容、つまりことわりをつかんでいてはじめて「もの知り」なのである。

◇竜田風神祭祝詞「百の物知人等の卜事に出でむ神の御心は」◇（現代沖縄）「ムヌシリ、ムンシル（もの知り）」は巫覡を指す◇（岩手・宮崎）祈祷師、占い師を「モノシリ」。

―【ものがたり】「もの―かた―る」で、「かた」つまり「形」がさだまり「型」に定式化されたことを述べる「語り」に、「もの」が接頭語としてつくことで、「世の原理・法則を知らしめるためにのべる」ことを意味する。「ことのかたりごと」（古事記「八千矛神の歌」「天語歌《あまがたりうた》の結び）は一回的な歴史的な事件についての語りを言う。また沖縄語「むんがたい」で昔話を言うが、これは「物語」そのものである。

◇『源氏物語』蛍「（ものがたりとは）神世より世にある事を記しおきけるなり。日本記などはたゞかたそばぞかし」

や行

やま

やま（山）[yama]

◆平地より著しく高くなってそびえている地形。火山作用、侵食作用、造山作用によって地表にいちじるしく突起した部分。また、それの多く集まっているところ。

生きてゆく本拠としての「さと」，それを囲んで広がる「の（野）」に対し、「やま」はさらに遠くにあり、通常は人が立ち入らないところである。

山は神が降りてくるところであり、人を葬る所であり、異境との境であった。

「おか（丘．岡）」は「野」にあって「はら（原）」より少し高くなっているところである。

▼地形としての山。▽里や野に対していう。◇『古事記』中・歌謡「平群の夜麻（ヤマ）の熊白檮（くまかし）が葉を」◇『万葉集』三二四〇「わが過ぎ行けば　いや遠に　さと離（さか）り来ぬ　いや高に　山も越え来ぬ」

▽神の降りるところ。◇『万葉集』三二二七「葦原の瑞穂の国に　手向けすと　天降りましけむ　五百万（いほよろず）　千万神の　神代より　言ひ継ぐ来る　神名火（かむなび）の　三諸の山は」

▽死者を葬るところ。◇『万葉集』二一二「引き手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし」

▽異境との境。◇『日本書紀』歌謡「嶮（さが）しき山も　我妹子（わぎもこ）と　二人越ゆれば」

▽伐採地としての山林。種々の産物を得たり、狩猟したりするための山林。◇『万葉集』七七九「板葺の黒木の屋根は山（やま）近し」

▼比喩としての用法。▽墓地が、多く山中、山麓に営まれたところから墓場や墳墓、また山陵。◇『源氏物語』須磨「御山に参り侍るを。御言伝やと聞え給ふに」

▽土を盛り、石を積んでつくったもの。築山。◇『源氏物語』桐壺「もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを」

▽高く盛りあがった状態、またはその物を地形としての山になぞらえていう語。◇「瓦礫の山」◇「借金の山」◇『蜻蛉日記』上「山とつもれるしきたへの枕の塵も」

▽仏道修行の所としての山。特に比叡山をいう。◇『伊勢物語』「尼になりて、山に入りてぞありける」◇『栄華物語』「かの花山院は去年の冬、山にて御受戒させ給いて」◇「山を降りる」比叡山を降りて仏道修行し街に入り仏法を広めること。鎌倉仏教は山を降りた法然、親鸞、道元らによってひらかれた。

▽継続または連続している物事が頂点に達したのを、地形の山頂にたとえていう。◇「物語のやまはここだ」▽事の成りゆきにおいて、もっとも重大なところ。事の成否がきまるところ。◇山場◇「今日明日が山だ」

▽病気のもっとも危険な段階。▽「熱も山を越す」

▽せいいっぱいのところ。◇「これが関の山だ」

▽祭礼に出る山車（だし）で、山の形に作った飾り物。京都の祇園祭では、鉾（ほこ）よりもおおむね小型で、真木（しんぎ）を立てず、構造の簡単なものをいう。◇山鉾

▽鉱脈を探し当てることが、投機的な仕事であるところからから転じ、思いがけない幸運をあてにすることや、万一の幸運をねらって事を行うこと。◇「山が中る（外れる）」

▽確かな根拠がなく、偶然の的中をあてにしてする予想。◇「山を掛ける（張る）」◇「山勘」

▽山、特に山林や鉱山を数えるのに用いる。盛り分けたものを数えるのに用いる。◇「一山百円」

よ

よ（代、世、節、齢）[yo]

◆一つのいのちが生まれて更新されるまでの間。「よ」は「豊かさの根源としての力、生命力」を意味するとともに、「更新される生命」の一区切りを意味し、その単位としての時間の基礎となっている。

▼（節）竹などの節と節との間の中空の部分。漢字「節」を当てるが、「よ」は節と節の間を指す。「中空」は「うつろ」であり、

「うつろ」は生命を生み出す場であった。『竹取物語』で竹の節と節との間に姫がいたのは、この意味。◇『竹取物語』「此の子を見つけて後に竹とるに、節をへだてて〈よ〉ごとに黄金ある竹を見つけること重なりぬ」

▼（代）人間の生まれて死ぬまでの間。◇『古事記』上・歌謡「沖つ鳥鴨著（ど）く島に我が率寝し妹は忘れじ余（ヨ）のことごとに」◇『万葉集』三四四八「花散らふこの向つ峰（を）の乎那の峰のひじに付くまで君が与（ヨ）もがも」◇『万葉集』巻九・一八〇九「親族（やかち）どち い行き集ひ永き代に 標しにせんと 遠き代に語り継がんと」◇『万葉集』巻十八・四〇九四「天皇の神の命（みこと）の御代かさね」

▼（世）一定の人間組織が続く間。

▽ある特定の者、また系統によって支配・統治が続く期間。◇明治の世、源氏の世、武家の世。◇『古今集』仮名序「かの御時よりこの方、年はももとせあまり、世はとつぎになんなりにける」◇『奥の細道』「草の戸も住替る代ぞひなの家」

▽仏説にいう過去（前世）・現在（現世）・未来（来世）の各々。また、仏法が行われる正法（しょうぼう）・像法（ぞうぼう）・末法（まっぽう）の三時期の各々。仏教思想と在来の思想とが混淆して生まれた用法。◇あの世に旅立つ。◇さきの世。◇『万葉集』三四八「この代（よ）にし楽しくあらば来む生（よ）には虫に鳥にも吾れはなりなむ」◇『源氏物語』薄雲「世はつきぬにやあらん、物心ぼそく、例ならぬ心ちなんするを」

▽人間の構成する社会。また、その中での人間関係。よのなか。◇『万葉集』四六五「うつせみの代（よ）は常なしと知るものを」◇『万葉集』巻十八・四一二四「世をしのぶ◇わが欲りし雨は降りきぬかくしあらば言挙げせずとも稔は栄えむ」◇『古今集』九五六「世を捨てて山に入る人」◇『竹取物語』「国王の迎せごとを、まさに世に住み給はん人の、承り給はでありなむや」◇歌は世につれ、世は歌につれ。◇『源氏物語』総角「頼みなき御身どもにて、いかにもいかにも世になびき給へらむを」◇『紫式部日記』「物づつみをし、いとよをはぢらひ、余り見苦しきまで児めい給へり」◇わが世の春。◇『伊勢物語』八七「わが世をばけふかあすかと待つかひの」◇『万葉集』巻四・七四六「生ける世に吾はいまだ見ず言絶えてかくおもしろく縫える袋は」

よむ

よむ（読む、詠む）[yomu]

○一つずつ順に数えあげるること。

◆一定の時間的な間隔をもって起こる事象を順に漏らさずに確認してゆくこと。ここから五音七音にしたがって声に出して一首にまとまること。さらに字を順に読みその意味をつかむこと。「よむ」の原義のなかに「かみの言葉を読みとる」意味があり、そこから事象の隠された意味をつかむことに展開した。眼前の事物・行為を見て、その将来を推察したり、隠された意味などを察知したりすること。

▼一定の時間的な間隔をもって起こる事象を順に漏らさずに確認してゆくこと。▽一定の時間的な間隔をもって起こる事象の回数を数えること。◇『万葉集』三九八二「春花の移ろふまでに相見ねば月日余美（ヨミ）つつ妹待つらむそ」◇『万葉集』四〇七二「ぬばたまの夜渡る月を幾夜経（ふ）とよみつつ妹は我待つらむそ」◇『万葉集』二六四一「時守の打ちなす鼓よみ見れば時にはなりぬ逢はなくもあやし」◇『万葉集』一三八七「伏超ゆ行かましものを守らふに打ち濡らさえぬ波読まずして」

▽一つ一つ音節を数えながら歌をつくり出すこと。◇『竹取物語』「本草につけて御歌をよみてつかはす」◇『源氏物語』桐壺「伊勢・貫之によませ給へる、やまとことの葉を」

▽一字ずつ声を出して唱えていく。◇『日本書紀』応神記「時に菟道雅郎子、その表を読み、怒りて」◇『源氏物語』東屋「絵などを取り出でさせて、右近に言葉読ませけて見給ふ」◇『蜻蛉物語』中「夜のふけにしかば、経などよませてなん、とまりにし」

▽（「訓」とも書く）字音語を訓（くん）で表す。漢字を訓読する。◇『平家物語』七「春の日とかいてかすがとよめば、法相擁護の春日大明神」

▼一つずつ順に起こることの意味を考え理解することから、事象の内部にあることをつかむ。◇「グラフを読む」◇『蜻蛉物語』上「このごろよむとてもてありく書とりわすれて」◇『少年』谷崎潤一郎「相手の顔を読むやうにぼんやり立った儘であったが」◇「資本論を読む」（アルチュセール他）。アルチュセールは、マルクスの『資本論』では、実際には近代思想の基本的な枠組みをこえた新しい知の枠組によって資本主義の批判がなされているが、それはそれとしては明示されていない、したがって『資本論』から新しい知の枠組みを明示的に取り出さなければならない、と考えた。このように文書に明示的には書かれていないが含意されていることを、取り出すことを「文書を読む」という。文書の著者が意識的に含意していたことを読みとるという意味のこともあれば、意図とは独立にその文書の果たす役割としての含意を読むことを意味することもある。

※「聞く」も「読む」も、もののことを把握することであるが、「聞く」は聞く側の解釈を差し挟むことなく、ものそのものが発することをそのままにつかもうとすることであり、「読む」はものの現れた形を考え、そのものの内部に分け入って、つかもうとする。したがって、まずことを「聞き」とりそしてそのことを「読み」解く。正確に聞かなければ読みは意味がなくなる。

より〔辞〕

より〔辞〕[yori]

○はじまるところを示す。

◆体言または体言に準ずる連用形を受け、そこからはじまることを示す。

▼動作・作用の起点を示す。ものとしての時間的・空間的起点を示す場合と、こととしての起点、原因などを示す。

▽時間。はじまるとき。◇『古事記』下・歌謡「明日用理（ヨリ）はみ山隠りて見えずかもあらむ」◇『万葉集』八九四「神代より　言ひ伝って来らく」

▽動作の行われる場所・経由地を示す。◇『万葉集』四〇六一「堀江欲里（ヨリ）水脈（みを）引きしつつ御船さす」

▽動作や作用の手段・方法を示す。◇『万葉集』三三一四「山城道を他夫（ひとづま）の馬従（より）ゆくに己夫（おのづま）し歩（かち）従（より）ゆけば」

▽原因、理由を示す。◇『万葉集』八七一「領布（ひれ）振りしより負へる山の名」

▽比較の基準を示す。◇『万葉集』三七三七「ひと余里（ヨリ）は妹そも悪しき」

▽事柄や範囲を限定する意を示す。下に打消・反語表現を伴って用いる。◇『古今集』二〇五「ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかに問ふ人もなし」◇『古今集』六七〇「枕より又しる人もなき恋を」

ら行

る〔辞〕

る［ru］

○「ある」（有る、在る、生る）［aru］と基本的に同じ意味を加える。動詞の未然形で［a］で終わるものにつくと［a―aru］となる。ここで母音が続くことを裂け、［ru］のみが残ることで、〔辞〕としての「る［ru］」が用いられるようになった。また他の母音で終わるものにつくとやはり母音が続くこととなり、［r］をはさんで「raru］〔辞〕としての「らる［raru］」が用いられるようになった。

◆人の手を離れたところで、動詞の動作・作用・状態が「なる」こと。ちなみに人の手によって「なる」ようにしむけることを「する」という。「る」と「す」、「らる」と「さす」は対照して用いられる。同様にして動詞の動作・作用・状態が「なる」ことから、「できる」という可能の意味に展開する。また、同様にして自身のうえに何ごとかが起こることから受け身の意味となる。さらにまた、同様にして何ごとかがなされるところから、それをなす人への尊敬の意も生まれた。

▼自発を表す。人の手を離れたところで意図することなく、動詞の動作・作用・状態が起こること。◇「放って置いたのが悔やまれる」◇『万葉集』三三七二「相模路の陶綾（よろき）の浜の真砂（まなご）なす児らは愛（かな）しく思はるる（流留）かも」◇『源氏物語』夢浮橋「親のおはすらむやうはほのかにもえ聞かずかしと、なかなかこれ（浮舟の弟のこと）をみるにいと悲しくて、ほろほろと泣かれぬ」◇『平家物語』灌頂・大原御幸「遠山にかかる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞおしまるる」

▼可能を表す。することができる。古代は、否定の表現を伴って不可能の意を表すのに用いられるのが普通であったが、中世末以降、打消を伴わないで可能の意を表すようになる。◇「行こうと思えばいつでも行ける」◇『万葉集』四三二二「影（かご）さへ見えて世に忘られ（礼）ず」◇『枕草子』一八八「病は。胸。もののけ。あしのけ。はては、ただそこはかとなくて物食われぬ心地」◇『源氏物語』玉鬘「歩むともなく、とかくつくろひたれど、足の裏動かれずわびしければ、せん方なくて休みたまふ」

▼受身を表す。他から何らかのことをされる。それとともに迷惑や恩恵をこうむっている気持を、あわせて表現することが多い。◇「車にひかれる」◇「親に死なれる」◇『万葉集』八九四「唐（もろこし）の遠き境につかはされ（礼）」◇『枕草子』九九「元輔が後といはるる君しもや今宵の歌にはづれてをる」

▼尊敬を表わす。他人の動作を表す語に付いて、敬意を示す。◇「いつ行かれますか」◇『源氏物語』東屋「右近が言ひつる気色も、いとおしなべての今参りにはあらざめり、と心得がたく思ぼされて、と言ひかく言ひ恨みたまふ」

わ行

わける

わける（分ける、別ける）［wakeru］←［waku］

○わり（割り）［waru］、そしておく（置く）［oku］こと。

◆ひとつのものを、いくつかのものに割って離すこと。

※タミル語＜vaku＞、＜paku＞に起源。

▼ひとつのものに筋目を入れて二つまたはそれ以上に離すこと。

▽一つのもの、一面にあるものに力を加えて、左右に押し開く。

◇草むらを分けて登っていった。

▽別々に区切って分割する。◇『蜻蛉日記』上「宮の御桟敷の、ひとつづきにて、二間ありけるをわけて」◇『源氏物語』御法「後の世には同しはちすの座をもわけんと契かはしきこえて」◇『門』夏目漱石「髪の毛を長くして真ん中から分ける癖があった」

▽すき間を作る。◇『万葉集』四二九七「をみなえし秋萩しのぎさを鹿の露和気（ワケ）鳴かむ高円の野そ」（大伴家持）◇『古今集』四七八「かすが野の雪まをわけて生いいでくる草のはつかに見えし君はも」

▽いくつかに割って配る。分配する。◇みんなでお菓子を分けなさい。◇『東大寺諷誦文平安初期点』「飢（やわ）しと申せば分（ワケ）て給ひし母氏は」

▽分け持つ。手分けをする。所属、役割などを別にする。◇『源氏物語』若菜上「御かたがたもさるべき事どもわけつつ、のぞみつかうまつり給ふ」

▽判断して見わける。判断して区別する。◇『太平記』九「何れを二王、何れを孫三郎とも分（ワケ）兼たり」

▽争いごとなどの仲裁や、是非のさばきを行う。◇『狂言記・内沙汰』「こんどの公事日に、両人ともに、参りませい。そのおりにわけてとらせう」

▽争っているものを、勝負がつかないとして、やめさせる。◇引き分ける。勝負を分ける。

―【わく】「わける」の古形。四段活用「わく」は精神的な働きとして、区別する、判別するの意。下二段活用「わく」、下一段活用「わける」は、押し分ける、かき分けるの意が主。

▼区別する。判断する。

▽対象・時期・場所などの違いによって扱いをかえる。差別する。◇『万葉集』四〇〇三「天そそり高き立山 冬夏と和久（ワク）こともなく白たへに雪は降り置きて」（大伴池主）◇『正法眼蔵』辦道話「理鈍をわかず」

▽違いを識別する。物事を判断する。判別する。◇『万葉集』八二六「うちなびく春の柳とわが宿の梅の花とをいかにか和可（ワカ）む」◇『古今集』序「ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、すなほにして、事の心わきがたかりし」

―【わけ（分、訳）】

▼分割・分配すること。

▽分けること。分配。◇『良寛歌』「自今以後納所（なっしょ）は君にまかすべし 二合三合はわけのよろしき」

▽食い余りの食物。食い残し。また、供物のおさがり。『史記抄』一一「なんぼ我にくいさいたる桃のわけをくれた」

▽芸娼妓などが、そのかせぎ高を抱え主と半々に分けること。また、その芸娼妓。『浮・好色一代女』六「分（ワケ）とは其花代宿とふたつに分るなるべし」

▽花代が五分（一匁の半分）の端女郎の称。そろり。北むき。分女郎。

▽勘定。支払い。『浮・好色二代男』二「当座払に万（よろづ）ケ様の分（ワケ）ぞかし」

▽村中の小区分。

▽相撲で、勝負が決まらず引き分けること。

▼（「訳」と書くことが多い）物事を判断すること。また、その判断した内容。

▽物事の違いなどを判別すること。区別。違い。◇『中華若木詩抄』中「乱世にならでは、君子小人のわけは、見へぬぞ」

▽事柄やことばなどの意味・内容。◇君が何を言っているのか訳が分からない。◇『虎清本狂言・泣尼』「だんぎせっぽうのわけをしらぬほどに」◇『開化の話し』辻弘想「我思ふ所をもて、自由の義（ワケ）を解かば、気随気儘謂にはあらず」

▽物事の道理。すじみち。◇『浄・用明天皇職人鑑』二「添ひ通さいではわけ立ず」◇『当世書生気質』坪内逍遙「ああいふ奴が本校に居っては、到底（つまり）本校の体面を汚す道理（ワケ）ぢゃ」

▽事情や理由。原因やいきさつ。◇それとこれとはわけが違う。わけもなく泣く。わけを説明する。

▽特に、情事やそのいきさつ。また、色の道に通じていること。◇『浮・好色一代男』六「太鞁女郎にも大形成（おほかたなる）わけは見ゆるし」

―【わかる（分かる、解る、判る）】[wakaru]

▼一つのものが別々になる。また、区分される。混沌としたなかからあるもの、または何かのことが明確になること。混沌としたなかに、あることもの、または何かのことを知ること。

▽わかれる。◇『世間胸算用』四「面屋（おもや）よりわかりて、隠居付の女十一人」

▽物事の意味、内容、事情、区別などが了解される。◇わたしには彼の考えがわからない。彼は英語がわかる。音樂がわかる人だ。◇『日葡辞書』「リガ vacaru（ワカル）、または、vacaranu（ワカラヌ）」

▽立場、気持、事情などを察してさばけた気持を持つ。世情、人情に通じる。◇話がわかる人に出会った。あの人は本当に物のわかった人だ。◇『洒落本』古契三娼「品川でまつざか屋の野風といった女郎しゅが、わかったものさ」◇『其面影』二葉亭四迷「世間は皆貴方の様に然う分暁（ワカ）った人ばかりでも有りませんからねえ」

▽事実などがはっきりする。判明する。知れる。◇すぐに嘘だとわかることを言うな。真相がわからない。明日のことはどうなるかわからない。◇よくわかった、私に任せなさい。◇この問題の意味がわかった。◇『西洋道中膝栗毛』仮名垣魯文「跡でわかるから騒がなくっても能（いい）と云ったら」◇『当世書生気質』坪内逍遙「外には難解点（ワカランとこ）はありゃせんか」◇『千鳥』鈴木三重吉「藤さんのだという事は問わずとも別っている」

わざ

わざ（業、技）[waza]

○ものの隠された意味が、そのいのちの発現として、生き生きと顕れ動くその動きのこと。

◆「わざわい」の「ワザ」と同じ。この「わざ」は神意がその事に顕れていることをいう。このように、「わざ」は人が内部に啓示を受けて、それを様々の方法で表そうとすること。

▼深い意味や、重大な意図をもつ行為や行事。▽行為。◇『続日本紀』天平神護二年一〇月二〇日・宣命「朕（あ）が敬まひ報いまつる和佐（ワサ）としてなも此の位冠を授けまつらくと勅りたまふ」◇『万葉集』七二一「あしひきの山にしをれば風流（みやび）なみわがする事（和射　わざ）をとがめたまふな」

▽行事。◇『万葉集』一七五九「人妻に吾（あ）も交わらむ、吾が妻に人も言問へ、此の山をうしはく神の昔より禁（いさ）めぬ業そ　今日のみは　めぐしもな見そ　言も咎むな」

▼仏事法会。神事。◇『古今集』五五六「しもついづもでらに人のわざしける日」◇『源氏物語』葵「はかなう過ぎゆけば、御わざのいそぎなどさせたまふも、思しかけざりし事なれば、尽きせずいみじうなむ」

▼仕事。つとめ。職業。◇『古本説話集』五〇「大木ども、ただこの牛一つして、運ぶわざをなんしける」

▼でき事。事柄。物事の深い事情や状態、次第などを問題にしていう。◇容易なわざではない。◇『源氏物語』夕顔「鍵を置き

まどはし侍りて、いとふびんなるわざなりや」◇『源氏物語』夕顔「ものめやかなる大人をかく思ふも、げにをこがましく、うしろめたきわざなりや」

▼技芸。技術。手段。腕前。◇わざを磨く。◇『平家物語』九「風をふせぐたよりもなく、雨をもらさぬわざもなし」◇『東西南北』与謝野鉄幹「立ち舞ふ伎（わざ）に怜悧（かしこ）ければ」

わる

わる（割る）［waru］

○ものに力を加え深いひびやすじを入れ、そこからものの内がみえるようにすること。内に入り込み難いものに力を集めて分け入り、内に込りこんでを調べること。ものがなぜそうなるのか、そのことを考え、わけを明らかにすること。

※タミル語＜ pari ＞に起源（p〜w 対応）。

◆「わる」は混成過程で熟成し、人間の「考え、分析し、判断する」働きを意味する言葉となった。もっとも基本的な言葉の一つである。ものに思いをかけそのもののことを割る、これが人間が考えるということである。

▼ものを割る。

▽力を加えて、ものを分け離す。くだいたり、裂いたりする。◇「彼は竹を割ったような気性の人だ」◇『万葉集』四一九「石戸わる手力もがも手弱き女にしあればすべの知らなく」◇『大智度論』天安二年点「骨を破（ワリ）て髄を出す」◇『源氏物語』蜻蛉「氷（ひ）召して人人に割らせ給ふ」

▽左右に押し分ける。また、列などの間に分け入って進行をさまたげる。◇「列に割って入るな」◇『平家物語』九「熊谷おや子は、中をわられじと立ならんで」

▽一定の基準に従っていくつかの部分に区分けをする。区分する。いくつかに分割してくばる。割り当てる。◇『宇津保物語』藤原の君「女房の曹司には、廊のめぐりにしたるをなん、わりつつたまへりける」◇『方丈記』「所の有様を見るに、その地、程せばくして条理を割るに足らず」◇『青年』森鴎外「縦にペエヂを二つに割って印刷して、插画がしてある」

▽とりこわす。破壊する。◇「城を割る」日葡辞書「シロヲ varu（ワル）」

▽ある液体の中に、他の液体をまぜる。多く、まぜて薄めるのをいう。◇「酒を水で割る」◇『赤痢』石川啄木「葡萄酒の幾滴かを勿体らしく御供水に割って、持たして帰す」

▽（「新鉢（あらばち）を割る」から）処女を破る。

▼ことを割る。

▽理によって物事を分析する。ことをわけて説明する。細かくわけを言い聞かせる。◇『淨瑠璃』冥途の飛脚‐中「エエ性根のすはらぬきちがひ者と、わっつくだいつしかれ共」

▽人の間柄を裂く。◇「ふたりの仲を割る」

▽割算を行う。除する。◇「十を三で割ると一余る」

▽すっかりうち明けていう。◇「腹を割って話す」

▽ある数量以下になる。切る。◇「株価は一万二千円台を割った」、「入場者が百人を割る」

▽土俵など、あるきまった範囲の外に出る。◇「あっけなく土俵を割った」

―【わり（割）】「割る」の連用止め名詞。

▼割ること。また、割ったもの。

▽物と物との比率。ある数量の、他の数量に対する比。割合。◇「割りと簡単だ」、「見かけの割りに難しい」

▽歩合算で一〇分の一のこと。分の一〇倍、厘の一〇〇倍。◇

「一割引いておくよ」◇『門』夏目漱石「かう云ひ機会に買っておくと、幾割か値安に買へる便宜を説いた」

▽他と比べてみたときの、損得のぐあい。◇「割りが悪い」、「割りが合う」、「割りに合う」、「割りを食う」

▽（「理（ことわり）」から）物事がそうなる道理。わけ。また、ぐあい。

▽ある人や物事の性格、状態などから当然推量される程度。◇『浮雲』二葉亭四迷「宿料も廉、その割には坐舗も清潔」◇『抗夫』夏目漱石「年の若い割には自分の立場をよく弁別（わきまへ）て居た」

―【わり（割）なし】「割り無い」で、物事をうまく打開しようにも、道筋がつかず、どうにもならない状態である。「ことわり（理）が無い」の意ともいわれるが、「ことわり」として熟す以前に「割り」自体に筋道を立てて考え、判断するの意味があり、それができないことをいう。

▼道筋がつかず、どうにもならない。

▽道理に外れている。分別がない。理性でどうにもならない。◇『古今集』六八五「心をぞわりなき物と思ぬるみる物からや恋しかるべき」◇『源氏物語』桐壺「これもわりなき心の闇になん」

▽無理である。強引である。むりやりである。◇『宇津保物語』祭の使「折しもこそあれ、わりなき召しかな」◇『源氏物語』宿木「何かは、隔て顔にもあらむ。わりなき事一つにつけて、恨みらるるほかには、いかでこの人の御心に違はじ」

▽どうしようもなくつらい。たえがたく苦しい。こらえきれないほどである。どうにもやるせない。◇『源氏物語』空蝉「をとひより腹をやみて、いとわりなければ」

▽やりようがない。どうしようもない。仕方がない。やむを得ない。余儀ない。是非もない。◇『源氏物語』総角「わりなき、事のしげさを打ち捨ててまで給ふ」

▽どうしていいかわからない。途方にくれる。困ったことである。◇『後撰和歌集』六三〇「男侍る女を、いとせちにいはせ侍りけるを、女いとわりなしといはせければ」

▽やっとのことである。かろうじてである。◇『今昔物語』二九・三七「然（さ）て許こそ命は助からめと思得て、破无くして此（か）く隠れて命を存する事は有難し」

▽程度が分別を越えている。どうしようもないほどである。はなはだしい。ひととおりでない。◇『源氏物語』夕顔「物怖ぢをなんわりなくせさせ給ふ本性にて」◇『伊勢物語』六五「猶わりなく恋しうのみおぼえければ」

▽言いようがないほど美しい。非常に感動的である。◇『山家集下「岩に堰（せ）く閼伽（あか）井の水のわりなきは心澄めとも宿る月哉」

▽格別すぐれている。殊勝である。◇『平家物語』一〇「みめかたち心ざま、いうにわりなきもので候とて」

▽一通りでなく親しい。分別を越えて親密である。切っても切れない。◇『伽草子・福富草紙』「鬼うば憎けれど、さすがわりなき中なれば」

―【われる（割れる）】かたいものに深いひび・すじが入り、そこがはっきりとした切れ目になって、もとの形に戻らないようになること。

▼ものが割れる。

▽力が加えられて物がいくつかに分かれ離れる。破れたり砕けたりする。◇ガラスが割れる。◇『東大寺諷誦文平安初期点』「法を聞きつる以後は佛（かひ）破（ワレ）て出ぬるが如し」

▽物がいくつかの部分に分かれる。区分、分割される。◇票が割れる。

▼ことが割れる。
▽あれやこれやと思って、心が乱れる。◇『古今集』一〇五九「われて物思ふころにもある哉」
▽人の間柄が不和になる。別れて対立する。◇日葡辞書「クニガ varuru（ワルル）」
▽秘密などがすっかり現れる。また、犯人がわかる。ばれる。◇「身元が割れる」◇『浄瑠璃』狩剣本地―三「破れかぶれ、奥様に知らせ、いっそわれて出よふか」

を〔辞〕

を〔辞〕［wo］
○することを指し示す。
◆活用語の連体形または体言を目的語として指示する。
※「否も諾（を）も」のような感動詞「を」から転じたとされる。鎌倉時代以後は文語化し、和歌以外にはほとんど見られなくなる。現代語では格助詞。
▼文末にあって活用語の連体形または体言を受け、詠嘆をこめて確認する。◇『古事記』上・歌謡「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣袁（ヲ）」◇『万葉集』二〇六四「古に織りてし機をこの夕　衣に縫ひて君待つわれを」（私であるなあ。）
▽意志・希望・命令の文中にあって連用の文節を受け、指示強調する。◇『万葉集』三四九「今（こ）の世なる間は楽（たのしく）乎（ヲ）あらな」
▽情意の対象を詠嘆的に指示する。◇『万葉集』二一「紫草（むらさき）のにほへる妹乎（ヲ）憎くあらば」
▽「…を…み」の形で対象を提示する。…が…なので。◇『古事記』下・歌謡「梯立の 倉梯山袁（ヲ）嶮しみと岩懸きかねて 我が手取らすも」
▼感動の対象を提示する間投助詞「を」の用法から発展した。体言またはそれに準ずる語に付く。
▽目的格を指示する。◇「仕事をする」◇「そんなことを言われても困る」◇『古事記』上・歌謡「太刀が緒も いまだ解かずて襲（おすひ）遠（ヲ）も いまだ解かねば」◇『源氏物語』玉鬘「幼き心地に母君を忘れず、をりをりに、『母の御もとへ行くか』と問ひたまふにつけて」
▽動作の成立する時や場所、起点を表す。経過を示す。◇「京都を過ぎた」◇『古事記』中・歌謡「新治 筑波袁（ヲ）過ぎて」
▽動作の対象を表す。…に。◇『古事記』下・歌謡「大坂に 遇ふや嬢子（をとめ）袁（ヲ）道問へば　直ちには告（の）らず」
下の動詞と同意の体言を受けて一種の慣用句を作る。◇『万葉集』三四一四「伊香保ろの八尺（やさか）の堰塞（ゐで）に立つ虹（のじ）の顕ろまでもさ寝乎（ヲ）さ寝てば」
▼活用語の連体形を受ける格助詞「を」から派生した。活用語の連体形を受けて句と句を接続する。逆接、順接、また因果関係のない場合もある。◇『源氏物語』桐壺「おのづからかろき方にも見えしを、この御子生まれ給ひて後はいと心ことにおもほしおきてたれば」◇『万葉集』五八二「丈夫（ますらを）もかく恋ひけるを　手弱女の恋ふる情（こころ）に比（たぐ）ひあらめやも」

関連図書

[1] 『日本国語大辞典』(初版『全二十巻』　小学館、1972〜1976

[2] 『国語大辞典』　小学館、1981

[3] 大野晋　他『岩波古語辞典』(補訂版)　岩波書店、1990

[4] 大野晋編『古典基礎語辞典』　角川書店、2011

[5] 大野晋『日本語の起源』〔岩波新書 289〕、1957

[6] 大野晋『日本語の起源新版』〔岩波新書 340〕、1994

[7] 大野晋『日本語をさかのぼる』〔岩波新書 c92〕、1974

[8] 大野晋『日本語練習帳』〔岩波新書 596〕、1999

[9] 大野晋『日本語の教室』〔岩波新書 800〕、2002

[10] 大野晋『日本語の形成』岩波書店、2000

[11] 大野晋『一語の辞典　神』三省堂、1997

[12] 時枝誠記『國語学原論』岩波書店、1941

[13] 時枝誠記『國語学原論続編』岩波書店、1955

[14] 時枝誠記『國語学史』岩波書店、1940

[15] 時枝誠記『日本文法口語編〔岩波全書〕』、1950

[16] 時枝誠記『現代国語教育論集成『編集委員会編』明治図書、1989

[17] 柳父章『翻訳語成立事情〔岩波新書 189〕』、1982

[18] 柳父章『翻訳語を読む』丸山学芸図書、1998

[19] 柳父章『近代日本語の思想』法政大学出版局、2004

[20] 三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、1960

[21] 三浦つとむ『日本語はどういう言語か』季節社、1971

[22] 村山七郎『大林太良『日本語の起源』弘文堂、1973

[23] 吉田金彦『古代日本語をさぐる〔角川選書 102〕』、1979

[24] 井上ひさし『私家版日本語文法』新潮社、1981

[25] 荒木博之『やまとことばの人類学』〔朝日選書 293〕、1983

[26] 森本哲郎『ニホン語　表と裏』〔新潮文庫 360〕、1988

[27] イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店、1996

[28] 井上ひさし『ニホン語日記』〔文春文庫 450〕』、1996

[29] 長戸宏『大和言葉を忘れた日本人』明石書店、2002

[30] 金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社選書 230、2002

[31] 中西進『ひらがなでよめばわかる日本語』〔新潮文庫〕、2003

[32] 木村紀子『古層日本語の融合構造』平凡社、2003

[33] 田中孝顕『日本語の真実』幻冬舎、2006

[34] 金容雲『日本語の正体』三五館、2009

[35] やまとことば『〔ことば読本〕』河出書房新社、1989

[36] 液状化する日本語『現代思想』、1998
[37] 日本語論『環』、2001
[38] 日本語は亡びるのか？『ユリイカ』、2009
[39] 折口信夫『古代研究（國文学編）』（全集第一巻）
[40] 折口信夫『古代研究（民俗学編一）』（全集第二巻）
[41] 折口信夫『古代研究（民俗学編二）』（全集第三巻）
[42] 折口信夫『古語復活論』（「アララギ」第十巻第二号）、大正六年二月
[43] 折口信夫『古代人の思考の基礎』（初出「民俗学　第一巻五・六号『第二巻第二号」）1929（昭和四）年十一、十二月、1930（昭和五）年二月。全集第三巻『古代研究』所収。
[44] 折口信夫『女帝考』（『思索』第三號、昭和二十一年十月）。全集第二十巻『神道・国学論』所収。
[45] 折口信夫『即位御前記』『史學』第十九巻第一號、昭和十五年八月。
[46] 折口信夫『宮廷生活の幻想―天子即神論是非―』『日本歴史』第二巻第三號、昭和二十二年。
[47] 折口信夫『み雪ふる秋』『短歌公論』第二巻第六・七號、昭和十三年六・七月。
[48] 折口信夫『古代人の信仰』『惟神道』第二巻第二～四號、昭和十七年二―五月。
[49] 折口信夫『原始信仰』『郷土科學講座1』、昭和六年九月。
[50] 折口信夫『死者の書』